
蓮田市

新井堀の内遺跡

総合交付金（改築）工事（蓮田杉戸線）

埋蔵文化財発掘調査報告

2020

埼玉県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第3号埋蔵銭



2 第1号埋蔵銭・第3号埋蔵銭

巻頭図版 2



1 第3号埋蔵銭（上から）



2 第3号埋蔵銭（斜めから）



3 第3号埋蔵銭（斜めから拡大）



1 第3号埋蔵銭石蓋（上 表面・下 裏面）

卷頭図版 4



1 第3号埋蔵木簡

序

埼玉県では、埼玉県5か年計画において、「希望、活躍、うるおいの埼玉」という指針を掲げ、東北道、圏央道などの道路網、新幹線などの鉄道網などの充実した交通網を生かした社会基盤の整備を行っています。国道、県道の整備は、人やモノの流れが一層活性化し、産業、物流、防災など様々な面での優位性の向上を目指すものです。国指定史跡の黒浜貝塚をはじめ多くの遺跡で知られる蓮田市内に計画された県道蓮田杉戸線（黒浜バイパス）の整備事業もその一環です。事業地内には、古くから中世の館跡とされている新井堀の内遺跡が存在しており、道路整備に伴う事前調査として、埼玉県杉戸県土整備事務所の委託を受け、当事業団が発掘調査を実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代前期・中期の住居跡や、中世の館の掘立柱建物、堀や井戸、地下式坑などが発見されました。中でも大甕に収められていた大量の埋蔵銭はおよそ26万枚と推定され、一つの甕から発見された銭の量としては国内でも最大級で、大きな注目を集めました。加えて、甕にのせられていた綠泥片岩製の丸い蓋や、4行の文字が書かれた「木簡」は、全国でも大変珍しい発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部文化資源課をはじめ、埼玉県杉戸県土整備事務所、蓮田市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

令和2年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 藤 田 栄 二

例 言

- 1 本書は埼玉県蓮田市黒浜に所在する新井堀の内遺跡第1次調査の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

新井堀の内遺跡（No82-127）
蓮田市黒浜1177番地他
平成29年9月7日付教生文第2-30号
- 3 発掘調査は、総合交付金（改築）工事（蓮田杉戸線）に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。新井堀の内遺跡の調査は、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（当時）が調整し、埼玉県の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査（平成29年度）
「総合交付金（改築）工事（蓮田杉戸線・埋蔵文化財発掘調査業務委託）」
整理報告書作成（令和元年度）
「総合交付金（改築）工事（蓮田杉戸線・埋蔵文化財整理業務委託）」
- 5 発掘調査、整理報告書作成はI-3に示した組織により実施した。発掘調査は、平成29年10月1日から平成30年2月9日まで実施し、上野真由美、入江直毅が担当した。整理報告書作成は、平成31年4月15日から令和2年3月31日まで実施し、上野が担当した。報告書は令和2年3月23日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第464集として印刷、刊行した。
- 6 発掘調査における基準点測量は中央航業株式

- 会社、3次元測量は株式会社ヤマト測建、空中写真撮影は株式会社新日本エグザに委託した。
- 7 自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 8 整理作業時の3次元測量作業は上野が行い、青木弘、魚水環の協力を得た。
- 9 巻頭図版の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。
- 10 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、整理作業時の遺物写真撮影は上野が行い、福田聖の協力を得た。
- 11 出土品の整理・図版作成は上野が行い、村山卓・瀧瀬芳之・黒坂禎二の協力を得た。
- 12 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、IIを赤熊浩一、IV-1(1)の一部を黒坂、2、3の遺物を村山、VIを青木、その他を上野が行った。Vの自然科学分析は、委託成果を受け上野が編集した。
- 13 本書の編集は上野が行った。
- 14 本書に掲載した資料は令和2年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
- 15 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関・方々からご教示、御協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

蓮田市教育委員会 東京国立博物館東京大学史料編纂所 独立行政法人国際文化財機構奈良文化財研究所 府中市教育委員会 荒木臣紀 梅沢太久夫 坂誥秀一 竹尾進 永井久美男 野口勇 馬場基

凡 例

- 1 遺跡全体におけるX・Yの座標は、世界測地系による国家標準平面直角座標第IX系（原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基

づく座標値であり、Zの座標の値は標高を示す。また、各挿図に記した方位は全て座標北を示す。K-15グリッド北西杭の座標は、以下の通り

である。

X = -1360.000m、Y = -1480.000m、Z = 14.622m（北緯35° 59' 15" 4669・東経139° 40' 09" 1082）である。標高である。

2 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標第IX計に基づく10×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、全体の方眼網を組んだ。

3 グリッド名称は、北西隅を起点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばK-15グリッドと呼称した。

4 本書の本文・挿図・表中に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S J…竪穴住居跡 S B…掘立柱建物跡

S D…堀・溝跡 S E…井戸跡

S K…土壤 P…小穴・柱穴

5 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。ただし、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

調査区全体図 1:500 遺構配置図 1:
250 遺構図 1:60 土器実測図・拓影図
等 1:3・1:4 土製品 1:2・1:3
石器・石製品 1:2・1:3 鉄製品 1:
3 銭貨 1:1

6 遺構図の表記方法は以下のとおりである。

■…地山

7 遺構断面図に表記した水準数値は、標高（m）で表した。

8 遺物観察表及び各計測表の表記方法は以下のとおりである。

・遺物計測値は、陶磁器・土器・金属器等をcm、
銭貨をmm、重さをg単位とした。

・計測値の（ ）は復元推定値、〔 〕は現存値

を示す。

・陶磁器の計測値のうち、口径は口縁上端部の径を、底径は豊付下端部の径を示した。

・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。

A:雲母 B:片岩 C:角閃石 D:長石

E:石英 F:鈆石 G:砂粒子 H:赤色粒子

I:白色粒子 J:針状物質 K:黒色粒子

L:その他 M:チャート

・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けて示した。

・残存率は器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・備考には出土位置、煤の付着、推定生産地、文様の特徴、特筆される事項等を記した。陶磁器では（ ）内に慣用名を記した。

9 本書に掲載した地形図類は国土地理院発行の1/50000地形図、久喜市発行の1/2500都市計画図を編集のうえ、使用した。

10 遺構番号は、原則、調査時のものを用いた。
調査の都合上、遺構番号に欠番が生じているが、
これらについて欠番のまま扱った。欠番遺構およ
び変更結果は本文と遺構新旧対照表に示した。

11 文中の引用文献等は、（著者 発行年）の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に掲載した。

12 大量に埋められた銭貨については、呪術的・
宗教的な埋納物という考え方（埋納銭と呼称）と、
何らかの財産保全のために埋蔵されたという説
(備蓄銭と呼称)がある。埋納銭や備蓄銭の呼
称は出土銭の性格を示す。中立的立場をとるた
め本書では、「埋蔵銭」という名称を用いる。

13 埋蔵銭に関する整理範囲と内容においては、
埼玉県教育委員会が設けた指導委員会において
提出された案に基づく同教委の指示に従った。

目 次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1	(8) グリッド出土遺物	168
1	発掘調査に至る経過	1	3 近世の遺構と遺物	172
2	埋蔵錢の取扱いについて	3	(1) 土壌	172
3	発掘調査・報告書作成の経過	3	(2) 溝跡	182
4	発掘調査・報告書作成の組織	4	(3) ピット	183
II	遺跡の立地と環境	5	(4) グリッド出土遺物	183
1	地理的環境	5	V 自然科学分析	188
2	歴史的環境	6	1 新井堀の内遺跡出土錢貨の蛍光X線分析	188
III	遺跡の概要	10	2 新井堀の内遺跡出土の縄紐の材料について	189
IV	遺構と遺物	16	3 新井堀の内遺跡出土の布片の同定	191
1	縄文時代の遺構と遺物	16	4 新井堀の内遺跡出土大甕に貼られた	193
(1)	住居跡	16	漆の分析	193
(2)	土壌	36	5 放射性炭素年代測定	196
(3)	グリッド出土遺物	37	VI 出土遺物の3次元記録	205
2	中世の遺構と遺物	42	VII 調査のまとめ	215
(1)	掘立柱建物跡	42	1 縄文時代	215
(2)	ピット	49	2 中世	215
(3)	井戸跡	71	(1) 館跡について	215
(4)	埋蔵錢	80	(2) 埋蔵錢について	217
(5)	地下室式坑	139		
(6)	堀跡	145		
(7)	土壌	159		

写真図版

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	5	第36図 第1号掘立柱建物跡（2）	44
第2図 周辺の遺跡	8	第37図 第1号掘立柱建物跡（3）	45
第3図 基本土層図	10	第38図 第2号掘立柱建物跡（1）	46
第4図 調査区位置図	11	第39図 第2号掘立柱建物跡（2）	47
第5図 全体図（1）	12	第40図 掘立柱建物跡出土遺物	48
第6図 全体図（2）	13	第41図 ピット全体図	49
第7図 全体図（3）	14	第42図 ピット（1）	50
第8図 全体図（4）	15	第43図 ピット（2）	51
第9図 第1号住居跡	16	第44図 ピット（3）	52
第10図 第1号住居跡遺物出土状況	17	第45図 ピット（4）	53
第11図 第1号住居跡出土遺物（1）	19	第46図 ピット（5）	54
第12図 第1号住居跡出土遺物（2）	20	第47図 ピット（6）	55
第13図 第1号住居跡出土遺物（3）	21	第48図 ピット（7）	56
第14図 第1号住居跡出土遺物（4）	22	第49図 ピット（8）	57
第15図 第2号住居跡	24	第50図 ピット（9）	58
第16図 第2号住居跡出土遺物	25	第51図 ピット（10）	59
第17図 第3・4号住居跡	26	第52図 ピット（11）	60
第18図 第3号住居跡	27	第53図 ピット（12）	61
第19図 第3号住居跡出土遺物（1）	28	第54図 ピット（13）	62
第20図 第3号住居跡出土遺物（2）	29	第55図 ピット（14）	63
第21図 第4号住居跡	30	第56図 ピット（15）	64
第22図 第4号住居跡出土遺物（1）	31	第57図 ピット（16）	65
第23図 第4号住居跡出土遺物（2）	32	第58図 ピット出土遺物（1）	66
第24図 第5号住居跡	33	第59図 ピット出土遺物（2）	67
第25図 第5号住居跡出土遺物	34	第60図 ピット出土遺物（3）	68
第26図 第6号住居跡	35	第61図 第1号井戸跡・出土遺物分布図	71
第27図 第6号住居跡出土遺物	36	第62図 第1号井戸跡出土遺物（1）	72
第28図 土壌・土壤出土遺物	37	第63図 第1号井戸跡出土遺物（2）	73
第29図 グリッド出土土器（1）	37	第64図 第1号井戸跡貝位置図	74
第30図 グリッド出土土器（2）	38	第65図 第2号井戸跡	75
第31図 グリッド出土土器（3）	39	第66図 第3号井戸跡・出土遺物分布図	76
第32図 グリッド出土土製品	40	第67図 第3号井戸跡出土遺物	77
第33図 グリッド出土石器	41	第68図 第7号井戸跡・出土遺物	79
第34図 掘立柱建物跡全体図	42	第69図 埋蔵線位置図	80
第35図 第1号掘立柱建物跡（1）	43	第70図 第1～4号埋蔵線	81

第 71 図 第 1 号埋蔵錢	83	出土状況	121
第 72 図 第 1 号埋蔵錢出土遺物（1）	84	第 105 図 第 3 号埋蔵錢第 1 号縕錢（1）	122
第 73 図 第 1 号埋蔵錢出土遺物（2）	85	第 106 図 第 3 号埋蔵錢第 1 号縕錢（2）	123
第 74 図 第 1 号埋蔵錢出土遺物（3）	86	第 107 図 第 3 号埋蔵錢第 1 号縕錢（3）	124
第 75 図 第 2 号埋蔵錢・第 57 号土壤（1） 第 57 号土壤出土遺物	87	第 108 図 第 3 号埋蔵錢第 1 号縕錢（4）	125
第 76 図 第 2 号埋蔵錢・第 57 号土壤（2）	88	第 109 図 第 3 号埋蔵錢第 1 号縕錢（5）	126
第 77 図 第 3 号埋蔵錢	90	第 110 図 第 3 号埋蔵錢第 2・3 号縕錢 出土状況	129
第 78 図 第 3 号埋蔵錢出土遺物（1）	91	第 111 図 第 3 号埋蔵錢第 2 号縕錢（1）	130
第 79 図 第 3 号埋蔵錢出土遺物（2）	92	第 112 図 第 3 号埋蔵錢第 2 号縕錢（2）	131
第 80 図 第 3 号埋蔵錢石蓋表面傾斜・標高図	93	第 113 図 第 3 号埋蔵錢第 2 号縕錢（3）	132
第 81 図 第 3 号埋蔵錢出土遺物（3）	94	第 114 図 第 3 号埋蔵錢第 2 号縕錢（4）	133
第 82 図 第 3 号埋蔵錢一面出土状況	95	第 115 図 第 3 号埋蔵錢第 2 号縕錢（5）	134
第 83 図 第 3 号埋蔵錢一面出土状況・ 第 3 号埋蔵錢一面出土錢貨（1）	96	第 116 図 第 3 号埋蔵錢第 3 号縕錢（1）	136
第 84 図 第 3 号埋蔵錢一面出土錢貨（2）	97	第 117 図 第 3 号埋蔵錢第 3 号縕錢（2） 石蓋裏出土錢貨	137
第 85 図 第 3 号埋蔵錢一面出土錢貨（3）	98	第 118 図 第 4 号埋蔵錢・第 54 号土壤	138
第 86 図 第 3 号埋蔵錢一面出土錢貨（4）	99	第 119 図 第 4 号埋蔵錢出土遺物	139
第 87 図 第 3 号埋蔵錢一面出土錢貨（5）	100	第 120 図 地下式坑位置図	139
第 88 図 第 3 号埋蔵錢一面出土錢貨（6）	101	第 121 図 地下式坑第 47 号土壤	140
第 89 図 第 3 号埋蔵錢一面出土錢貨（7）	102	第 122 図 地下式坑第 47 号土壤出土遺物	141
第 90 図 第 3 号埋蔵錢一面出土錢貨（8）	103	第 123 図 地下式坑第 61 号土壤	142
第 91 図 第 3 号埋蔵錢一面出土錢貨（9）	104	第 124 図 地下式坑第 61 号土壤 出土遺物（1）	143
第 92 図 第 3 号埋蔵錢一面出土錢貨（10）	105	第 125 図 地下式坑第 61 号土壤 出土遺物（2）	144
第 93 図 第 3 号埋蔵錢二面出土状況	108	第 126 図 第 1 号溝跡（1）	146
第 94 図 第 3 号埋蔵錢二面出土錢貨（1）	109	第 127 図 第 1 号溝跡（2）	147
第 95 図 第 3 号埋蔵錢二面出土錢貨（2）	110	第 128 図 第 1 号溝跡（3）	148
第 96 図 第 3 号埋蔵錢二面出土錢貨（3）	111	第 129 図 第 1 号溝跡出土遺物	149
第 97 図 第 3 号埋蔵錢二面出土錢貨（4）	112	第 130 図 第 2・3 号溝跡（1）	151
第 98 図 第 3 号埋蔵錢二面出土錢貨（5）	113	第 131 図 第 2・3 号溝跡（2）	152
第 99 図 第 3 号埋蔵錢二面出土錢貨（6）	114	第 132 図 第 2・3 号溝跡（3）	153
第 100 図 第 3 号埋蔵錢三面出土状況・ 第 3 号埋蔵錢三面出土錢貨（1）	117	第 133 図 第 2・3 号溝跡出土遺物	154
第 101 図 第 3 号埋蔵錢三面出土錢貨（2）	118	第 134 図 第 3 号溝跡出土遺物（1）	155
第 102 図 第 3 号埋蔵錢三面出土錢貨（3）	119	第 135 図 第 3 号溝跡出土遺物（2）	156
第 103 図 第 3 号埋蔵錢四面出土状況	120	第 136 図 第 3 号溝跡出土遺物（3）	157
第 104 図 第 3 号埋蔵錢第 1 号縕錢			

第137図	土壤（1）	160	第164図	新井堀の内遺跡出土の布片の 試料写真と走査型電子顕微鏡写真	194
第138図	土壤（2）	161	第165図	塗膜表面の赤外分光スペクトル（1）	197
第139図	土壤（3）	162	第166図	塗膜表面の赤外分光スペクトル（2）	198
第140図	土壤（4）	163	第167図	分析対象遺物	199
第141図	土壤（5）	164	第168図	塗膜構造（a）と反射電子像（b）（1）	200
第142図	土壤（6）	165	第169図	塗膜構造（a）と反射電子像（b）（2）	201
第143図	土壤出土遺物（1）	166	第170図	暦年較正結果（1）	203
第144図	土壤出土遺物（2）	167	第171図	暦年較正結果（2）	204
第145図	グリッド出土遺物（1）	169	第172図	マルチプロット図	204
第146図	グリッド出土遺物（2）	170	第173図	第3号埋蔵錢の3次元モデルの 作成工程	212
第147図	土壤（1）	173	第174図	第3号埋蔵錢石蓋3次元モデルの 作成工程	213
第148図	土壤（2）	174	第175図	第1号埋蔵錢の3次元モデルの 作成工程	214
第149図	土壤出土遺物（1）	175	第176図	周辺の城館跡	216
第150図	土壤出土遺物（2）	176	第177図	太田氏略系図	217
第151図	土壤出土遺物（3）	177	第178図	埋蔵錢使用常滑燒甕	218
第152図	土壤（3）	178	第179図	緑泥片岩製石蓋	219
第153図	土壤（4）	179	第180図	第3号埋蔵錢出土縄紐 縄紐分析採集位置	220
第154図	土壤（5）	180			
第155図	土壤出土遺物（4）	181			
第156図	土壤（6）	181			
第157図	溝跡	183			
第158図	ピット（1）	184			
第159図	ピット（2）	185			
第160図	ピット（3）	186			
第161図	グリッド出土遺物	187			
第162図	分析対象遺物と測定位置	190			
第163図	新井堀の内遺跡出土の縄紐の 走査型電子顕微鏡写真	192			

表 目 次

第1表 周辺の遺跡	9	第32表 第3号埋蔵銭二面出土銭貨観察表	114
第2表 第1号住居跡出土石器観察表	22	第33表 第3号埋蔵銭三面出土銭貨観察表	119
第3表 第1号住居跡貝類計測表	23	第34表 第3号埋蔵銭出土第1号縁銭観察表	126
第4表 第2号住居跡ピット計測表	24	第35表 第3号埋蔵銭出土第2号縁銭観察表	134
第5表 第3号住居跡ピット計測表	27	第36表 第3号埋蔵銭出土第3号縁銭観察表	137
第6表 第3号住居跡出土石器観察表	29	第37表 埋蔵銭闊連構計測表	137
第7表 第4号住居跡ピット計測表	30	第38表 第4号埋蔵銭出土遺物観察表	139
第8表 第4号住居跡出土石器・石製品 観察表	32	第39表 地下式坑第47号土壤 出土遺物観察表	141
第9表 第5号住居跡ピット計測表	33	第40表 地下式坑第61号土壤 出土遺物観察表	145
第10表 第5号住居跡出土石器観察表	34	第41表 地下式坑第61号土壤 出土銭貨観察表	145
第11表 第6号住居跡ピット計測表	35	第42表 第1号溝跡出土遺物観察表	149
第12表 第6号住居跡出土石器観察表	36	第43表 第2・3号溝跡出土遺物観察表	158
第13表 繩文土壌計測表	37	第44表 第3号溝跡出土銭貨観察表	158
第14表 グリッド出土土製品観察表	40	第45表 中世土壤計測表	166
第15表 グリッド出土石器観察表	40	第46表 中世土壤出土銭貨観察表	166
第16表 第1号掘立柱建物跡ピット計測表	45	第47表 中世土壤出土遺物観察表	167
第17表 第2号掘立柱建物跡ピット計測表	47	第48表 グリッド出土遺物観察表	171
第18表 第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表	48	第49表 グリッド出土銭貨観察表	171
第19表 第1号掘立柱建物跡出土銭貨観察表	48	第50表 第1号土壤出土遺物観察表	176
第20表 ピット出土遺物観察表	67	第51表 第1号土壤出土銭貨観察表	176
第21表 ピット出土銭貨観察表	68	第52表 第2・8号土壤出土遺物観察表	177
第22表 ピット計測表	69	第53表 近世土壤出土銭貨観察表	177
第23表 第1号井戸跡出土遺物観察表	73	第54表 第9・11号土壤出土遺物観察表	181
第24表 第1号井戸跡出土銭貨観察表	73	第55表 近世土壤計測表	182
第25表 第1号井戸跡貝類殻高分布表	74	第56表 ピット計測表	185
第26表 第3号井戸跡出土遺物観察表	78	第57表 グリッド出土金属製品観察表	187
第27表 第7号井戸跡出土遺物観察表	79		
第28表 第1号埋蔵銭出土遺物観察表	85		
第29表 第1号埋蔵銭出土銭貨観察表	86		
第30表 第57号土壤出土遺物観察表	87		
第31表 第3号埋蔵銭一面出土銭貨観察表	105		

第58表	遺構名新旧対照表	187	第64表	測定資料および処理	202
第59表	分析対象一覧	188	第65表	放射性炭素年代測定および 曆年校正の結果	202
第60表	判定量分析結果	189	第66表	3次元モデル作成にかかる作業工程と モデルの品質	210
第61表	新井堀の内遺跡出土繩紐の同定結果	191	第67表	第3号埋蔵銭出土銭貨一覧表	221
第62表	分析対象一覧	193			
第63表	生漆の赤外吸収位置とその強度	195			

写真図版目次

卷頭図版 1	1 第3号埋蔵銭	3 第4号住居跡炉
	2 第1号埋蔵銭・第3号埋蔵銭	4 第5号住居跡
卷頭図版 2	1 第3号埋蔵銭（上から）	5 第5号住居跡炉
	2 第3号埋蔵銭（斜めから）	6 第5号住居跡遺物出土状況
	3 第3号埋蔵銭（斜めから拡大）	7 第6号住居跡
卷頭図版 3	1 第3号埋蔵銭石蓋（上 表面・ 下 裏面）	8 第6号住居跡炉
卷頭図版 4	1 第3号埋蔵銭木筒	図版 7 1 3区全景（東側）
図版 1	1 調査区全景（垂直写真）	2 ピット（I-18P2）
図版 2	1 調査区遠景（南東から）	3 ピット（I-17P50）土層断面
	2 調査区近景（西から）	4 第1号井戸跡
	3 調査区全景（南から）	5 第1号井戸跡遺物出土状況
図版 3	1 1区全景	図版 8 1 第2号井戸跡完掘状況
	2 2区全景	2 第3号井戸跡完掘状況
図版 4	1 3区全景	3 第7号井戸跡完掘状況
図版 5	1 第1号住居跡	4 第1号埋蔵銭遺物出土状況
	2 第1号住居跡遺物出土状況	5 第1・2号埋蔵銭完掘状況
	3 第1号住居跡貝出土状況	6 第2号埋蔵銭遺物出土状況
	4 第2号住居跡	7 第4号埋蔵銭・第54号土壤土層断面
	5 第2号住居跡炉	8 第4号埋蔵銭・第54号土壤完掘状況
	6 第3・4号住居跡	図版 9 1 第3号埋蔵銭に伴う第57号土壤土層 断面（1）
	7 第3号住居跡	2 第3号埋蔵銭に伴う第57号土壤土層 断面（2）
	8 第3号住居跡炉	3 第3号埋蔵銭に伴う第57号土壤
図版 6	1 第3号住居跡遺物出土状況	4 第2・3号埋蔵銭・第57号土壤
	2 第4号住居跡	図版 10 1 第3号埋蔵銭石蓋検出状況（1）

2	第3号埋蔵銭石蓋検出状況（2）		8	第1号住居跡
3	第2号埋蔵銭・第3号埋蔵銭石蓋検出状況（3）	図版18	1	第2号住居跡
4	第3号埋蔵銭石蓋検出状況（4）		2	第2号住居跡
5	第3号埋蔵銭甕出土状況		3	第3号住居跡
6	第3号埋蔵銭甕埋設状況（左）		4	第3号住居跡
7	第3号埋蔵銭甕埋設状況（右）		5	第5号住居跡
図版11	1 第1・2・3号埋蔵銭・第57号土壤完掘状況		6	グリッド
2	第2・3号埋蔵銭・第57号土壤（1）	図版19	7	第1号住居跡出土遺物（1）
3	第2・3号埋蔵銭・第57号土壤（2）		8	第1号住居跡出土遺物（2）
図版12	1 第3号埋蔵銭出土状況（1）	図版19	1	第1号住居跡出土遺物（3）
2	第3号埋蔵銭出土状況（2）		2	第1号住居跡出土遺物（4）
3	第3号埋蔵銭出土状況（3）		3	第1号住居跡出土遺物（5）
4	第3号埋蔵銭甕出土状況（1）		4	第1号住居跡出土遺物（6）
5	第3号埋蔵銭甕出土状況（2）		5	第1号住居跡出土遺物（7）
6	第3号埋蔵銭甕出土状況（3）		6	第2号住居跡出土遺物（1）
7	第3号埋蔵銭甕出土状況（4）	図版20	7	第2号住居跡出土遺物（2）
図版13	1 第3号埋蔵銭甕出土状況（2）		8	第3号住居跡出土遺物
2	第3号埋蔵銭木簡出土状況		1	第4号住居跡出土遺物（1）
図版14	1 地下式坑 第47・61号土壤		2	第4号住居跡出土遺物（2）
2	地下式坑 第47号土壤		3	第4号住居跡出土遺物（3）
3	地下式坑 第61号土壤		4	第5号住居跡出土遺物
図版15	1 第1・2・3号溝跡完掘状況		5	第6号住居跡出土遺物
2	第1号溝跡		6	グリッド出土遺物（1）
図版16	1 第2・3号溝跡（1）	図版21	7	グリッド出土遺物（2）
2	第2・3号溝跡（2）		8	グリッド出土遺物（3）
3	第43号土壤		1	グリッド出土遺物（4）
4	第60号土壤		2	グリッド出土遺物（5）
5	第7号溝跡		3	グリッド出土土製品
図版17	1 第1号住居跡	図版22	4	グリッド出土石器
2	第1号住居跡		5	第1号埋蔵銭
3	第1号住居跡		1	第1号埋蔵銭貨跡（1）
4	第1号住居跡		2	第1号埋蔵銭貨跡（2）
5	第1号住居跡		3	第1号埋蔵銭底内面布目痕（1）
6	第1号住居跡		4	第1号埋蔵銭底内面布目痕（2）
7	第1号住居跡		5	第1号埋蔵銭底内面布目痕（3）
			6	第1号埋蔵銭底内面布目痕（4）
			7	第1号埋蔵銭洞内面布目痕（1）

	8 第1号埋蔵銭洞内面布目痕（2）	7 ピット
図版23	1 第3号埋蔵銭四面（1）	8 ピット
	2 第3号埋蔵銭四面（2）	9 ピット
	3 第3号埋蔵銭四面（3）	10 ピット
	4 第3号埋蔵銭四面（4）	11 ピット
図版24	1 第3号埋蔵銭出土木簡・赤外線写真 (奈良文化財研究所撮影)	12 ピット 13 第1号井戸跡
図版25	1 第3号埋蔵銭石蓋（表面）	図版29 1 第1号井戸跡
	2 第3号埋蔵銭石蓋（裏面）	2 第1号井戸跡
	3 第3号埋蔵銭石蓋（表面）拡大	3 第1号井戸跡
	4 第3号埋蔵銭石蓋（裏面）拡大（1）	4 第1号井戸跡
	5 第3号埋蔵銭石蓋（裏面）拡大（2）	5 第1号井戸跡
	6 第3号埋蔵銭石蓋（裏面）拡大（3）	6 第1号井戸跡
図版26	1 埋蔵銭と石蓋を合成した3次元モデルの展開図（1/30）	7 第1号井戸跡 8 第1号井戸跡
	2 石蓋の3次元モデル（1/15）	9 第1号井戸跡
	3 繙銭取り上げ後の3次元モデル（1/8）	10 第1号井戸跡
	4 X線写真	図版30 1 第1号井戸跡
図版27	1 第1号掘立柱建物跡	2 第3号井戸跡
	2 第1号掘立柱建物跡	3 第3号井戸跡
	3 第1号掘立柱建物跡	4 第3号井戸跡
	4 第1号掘立柱建物跡	5 第3号井戸跡
	5 第1号掘立柱建物跡	6 第3号井戸跡
	6 第1号掘立柱建物跡	7 第3号井戸跡
	7 第2号掘立柱建物跡	8 第3号井戸跡
	8 ピット	9 第3号井戸跡
	9 ピット	10 第3号井戸跡)
	10 ピット	11 第3号井戸跡
	11 ピット	12 第3号井戸跡
	12 ピット	13 第3号井戸跡
	13 ピット	14 第3号井戸跡
図版28	1 ピット	15 第7号井戸跡
	2 ピット	図版31 1 第1号埋蔵銭
	3 ピット	2 第1号埋蔵銭
	4 ピット	3 第57号土壤
	5 ピット	4 地下式坑第47号土壤
	6 ピット	5 地下式坑第47号土壤

6	地下式坑第47号土壤	14	第3号溝跡
7	地下式坑第61号土壤	15	第3号溝跡
8	地下式坑第61号土壤	図版34	1 第3号溝跡
9	地下式坑第61号土壤		2 第3号溝跡
10	地下式坑第61号土壤		3 第3号溝跡
11	地下式坑第61号土壤		4 第3号溝跡
12	地下式坑第61号土壤		5 第3号溝跡
13	地下式坑第61号土壤		6 第3号溝跡
14	地下式坑第61号土壤		7 第3号溝跡
15	地下式坑第61号土壤		8 第3号溝跡
図版32	1 第1号溝跡		9 第3号溝跡
	2 第1号溝跡		10 第3号溝跡
	3 第1号溝跡		11 第43号土壤
	4 第1号溝跡		12 第40号土壤
	5 第1号溝跡		13 第43号土壤
	6 第1号溝跡	図版35	1 第52号土壤
	7 第1号溝跡		2 第60号土壤
	8 第1号溝跡		3 グリッド
	9 第2号溝跡		4 グリッド
	10 第1号溝跡		5 グリッド
	11 第2号溝跡		6 グリッド
	12 第2号溝跡		7 グリッド
	13 第2号溝跡		8 グリッド
	14 第2・3号溝跡		9 グリッド
図版33	1 第2・3号溝跡		10 グリッド
	2 第2・3号溝跡		11 グリッド
	3 第2・3号溝跡		12 グリッド
	4 第2・3号溝跡		13 グリッド
	5 第3号溝跡	図版36	1 グリッド
	6 第3号溝跡		2 グリッド
	7 第3号溝跡		3 グリッド
	8 第3号溝跡		4 グリッド
	9 第3号溝跡		5 グリッド
	10 第3号溝跡		6 第1号土壤
	11 第3号溝跡		7 第1号土壤
	12 第3号溝跡		8 第1号土壤
	13 第3号溝跡		9 第1号土壤

- | | | | | |
|------|--------|-----------------|------|----------------|
| 10 | 第1号土壤 | 図版45 | 1 | 第3号埋蔵銭第2号縫錢（1） |
| 11 | 第2号土壤 | 図版46 | 1 | 第3号埋蔵銭第2号縫錢（2） |
| 12 | 第8号土壤 | | 2 | 第3号埋蔵銭第3号縫錢 |
| 13 | 第9号土壤 | | 3 | 第3号埋蔵銭石蓋裏出土銭貨 |
| 14 | 第11号土壤 | 図版47 | 1 | 第1号埋蔵銭出土銭貨 |
| 15 | 第11号土壤 | | 2 | 第1号掘立柱建物跡出土銭貨 |
| 図版37 | 1 | 第3号埋蔵銭一面出土銭貨（1） | | 3 ピット出土銭貨 |
| 図版38 | 1 | 第3号埋蔵銭一面出土銭貨（2） | | 4 第1号井戸跡出土銭貨 |
| 図版39 | 1 | 第3号埋蔵銭一面出土銭貨（3） | | 5 第61号土壤出土銭貨 |
| 図版40 | 1 | 第3号埋蔵銭一面出土銭貨（4） | 図版48 | 1 第3号溝跡出土銭貨 |
| | 2 | 第3号埋蔵銭二面出土銭貨（1） | | 2 土壌（中世）出土銭貨 |
| 図版41 | 1 | 第3号埋蔵銭二面出土銭貨（2） | | 3 グリッド出土銭貨 |
| 図版42 | 1 | 第3号埋蔵銭二面出土銭貨（3） | | 4 土壌（近世）出土銭貨 |
| | 2 | 第3号埋蔵銭三面出土銭貨（1） | | 5 第4号縫紐 |
| 図版43 | 1 | 第3号埋蔵銭三面出土銭貨（2） | | 6 第8号縫紐 |
| | 2 | 第3号埋蔵銭第1号縫錢（1） | | 7 出土鉄製品 |
| 図版44 | 1 | 第3号埋蔵銭第1号縫錢（2） | | |

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

埼玉県では、新たに平成29年度からの5年間の県政運営の基本となる『埼玉県5か年計画－希望・活躍・うるおいの埼玉－』を策定し、各分野での施策を取り組んでいる。このうち成長の活力をつくる分野では、「埼玉の活力を高める社会基盤をつくる」という基本目標を掲げ、埼玉の活力を高める道路ネットワーク整備のなかで橋りょうなど道路施設の適切な維持管理を進めている。

こうした中で埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では文化財の保護について、従前より関係部署と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

一般県道蓮田杉戸線（黒浜バイパス）道路改築事業における埋蔵文化財の所在及びその取扱いについては、杉戸県土整備事務所長から平成28年7月1日付け杉整第416号で生涯学習文化財課長（当時）宛てに、照会がなされた。

これに対し、生涯学習文化財課（当時）では試掘による確認調査を実施し、埋蔵文化財の有無を確認した。この結果をもとに、平成28年11月2日付け教生文第1625-1号で次の内容で回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には、次の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名称	種別	時代	所在地
新井堀の内遺跡 (No. 82-127)	城館跡	縄文・室町	蓮田市大字黒浜

2 法手続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

「発掘調査をする区域」については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

その後、事業の計画変更及び埋蔵文化財の現状保存は困難との結論に達したため、記録保存の措置を講ずることとした。

調査にあたっては、実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と杉戸県土整備事務所、生涯学習文化財課（当時）の三者で、調査日程や調査区域について協議を行った。

なお、文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が杉戸県土整備事務所長から平成29年8月1日付け杉整第726号で提出され、記録保存のための発掘調査を実施する必要がある旨の指示通知は下記のとおりである。

平成29年8月6日付け教生文第4-1087号

また同法第92条の規定による発掘調査届が公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、それに対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は下記のとおりである。

平成29年9月7日付け教生文第2-30号

2 埋蔵銭の取扱いについて

調査は平成29年10月1日から平成30年1月31日まで実施予定であった。しかし調査終盤の12月下旬に円形に加工された緑泥石片岩が土坑の底面から確認された。加工された緑泥石片岩の下を調査したところ、甕が埋設されていたことが確認された。緑泥石片岩の一部が割れており、割れている箇所を取り除いたところ、甕の内部には銭が口縁付近まで充填されていることが確認された。

調査の結果、胴部最大径約94cm、器高約74cmの大甕の内部に銭が充填されており、緑泥石片岩製の蓋も完形であり、埋蔵銭が埋設当時の状況のままであることが確認された。

中世の埋蔵銭の出土例は国内各地で確認されているが、一ヶ所で数万枚以上の銭貨が甕等に入つて出土することは比較的少ない。また、出土状況も工事・耕作等による偶発的な発見による例が多い中、新井堀の内遺跡の事例は、遺跡の発掘調査により周囲の遺構や埋設状況を把握することができた。

当初、平成30年1月31日までに調査を終了し、用地を杉戸県土整備事務所に返却する予定であった。しかし、埋蔵銭の調査のために調査期間を平成30年2月9日まで延長することの協議を杉戸県土整備事務所、事業団、生涯学習文化財課で行い、杉戸県土整備事務所から了承を得た。

埋蔵銭は記録を取った後、養生し取り上げ、埼玉県文化財収蔵施設にて保管している。

取り上げ当初から埋蔵銭の整理作業の方針や保存や活用方針について、議論があった。そこで文化資源課は、平成30年6月18日に第1回埼玉県発掘調査評価・指導委員会を開催し、中世の専門家や保存処理の専門家に今後の保存・活用方針を中心に指導を仰いた。

委員会では、埋蔵銭の学術的な価値の検討・評価、保存及び活用の方向性について検討された。

委員からは埋蔵銭の数量と共に、出土状況の重要性が指摘された。新井堀の内遺跡が館跡であることが確定できれば、館跡から出土した最初の発見例となり、学術的評価も高くなる。発掘情報から遺跡の性格がわかり、埋蔵銭の意義も明らかになってくる。全点の銭をばらして調査する方法もあるが、内容物の銭が資料価値の基本となってしまう。現状のまま保存し、実際の発見状況を伝えていく方が価値は高いという意見が出された。

また、銭一枚一枚の分析は、これまでの出土資

料から傾向は分かっていることから、表面の浮いているバラ銭や縫銭2本程度分析すれば全体の傾向は掴めると指摘があった。

委員からは現状のまま保存し展示することが望ましいという意見が強かった。しかし現状での保存は銭や大甕の漆緞ぎの劣化が心配される。劣化を遅らせるためには温湿度の管理が不可欠で、温湿度が管理できる収蔵室ないし収蔵用の箱を作成して管理する必要性を指摘された。

指導委員会の意見を踏まえて、文化資源課では、埋蔵銭の調査及び保存活用方針を平成30年11月7日付け教文資第1350号で定めた。

基本的な保存方針は「出土した状態で保存することを原則」とし、充填された銭の取り出しあは最小限にとどめることとした。

調査の方針は以下の通りである。

①発掘調査によって得られた情報及び周辺の遺跡の情報から、新井堀の内遺跡の性格について考察し、埋蔵銭と遺跡との関連性を検証すること。

②銭貨について、縫から分離している銅貨及び縫の1連ないし2連を対象に、3次元測量を行いながら取り上げ、銭種の判読、縫の状態の確認等を行い記録するとともに重量測定、その他必要に応じて理科学分析を行うこと。

③縫紐について、紐の燃りや結び等を記録すること。

④縫紐、甕に施された漆緞ぎ、木簡及びその他の資料について、必要に応じて理科学分析を行うこと。

今回の報告は、上記の方針に基づいて調査した結果をまとめたものである。

(埼玉県教育局市町村支援部文化資源課)

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

新井堀の内遺跡の第1次発掘調査は、総合交付金（改築）工事（蓮田杉戸線）事業に伴い、平成29年10月1日から平成30年2月9日かけて実施した。調査面積は1,835m²である。

平成29年9月1日に埋蔵文化財発掘届等を蓮田市教育委員会に提出し、事務手続きを行った。事前準備として、10月4日から12日に開柵を設置し、10月5、6日に発掘事務所を設置した。

重機による表土掘削を10月10日から18日まで実施した。10月10日からは補助員による作業を開始し、遺構確認作業を行った。遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業は、10月24日に実施した。

遺構確認作業の結果、縄文時代の住居跡や、中世の堀跡、土壤、ピットなどが検出された。順次遺構断面図、平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。堀跡については、幅が広く掘削深度が深く発掘作業に危険が伴うため、掘削工事を11月16日から12月21日まで行った。また、12月末には埋蔵銭が検出された。平成30年1月11日に高所作業車を使用し、堀跡などの撮影を行った。1月12日には空中写真の撮影委託を行い、同日、堀跡の3次元測量委託を行った。

遺構の調査後は1月31日から埋戻しを開始し、2月6日に埋蔵銭取り上げ工事を行い、2月9日終了した。発掘事務所は1月24日から26日にかけて撤去した。その後、事務手続きを行い、発掘調査を終了した。

(2) 整理報告書作成

整理報告書の作成事業は、平成31年4月15日から令和2年3月31日まで実施した。

遺物は、水洗・注記の後、接合・復元を行った。復元を終えた掲載遺物は、実測とト雷斯、必要に応じて採拓を行った。実測には磁気式3次元位

置計測装置、正射投影画像撮影機などを活用した。トレス図と拓本は、スキャナでデータ化し、印刷用の版下を作成した。令和元年11月には図版用の遺物写真を撮影し、遺構写真と合わせて、写真図版用の版下データを作成した。遺構ごとにパソコンで印刷用の図版組を行った。

発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等は、照合・修正を加え、第2原図を作成しスキャナでコンピュータに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いてトレースした。これに土層説明等を組み込み、印刷用の版下データを作成した。

令和元年9月から原稿の執筆と報告書の割付・編集を行った。令和2年2月7日に選定した印刷業者に入稿した。3回の校正を経て、令和2年3月23日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団第464集『新井堀の内遺跡』を刊行した。

遺物及び図面類・写真類・データ類等の諸資料は、3月に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

埋蔵銭の整理について

埋蔵銭の整理については、埼玉県教育委員会による「埋蔵銭の調査及び保存活用方針について」の、調査方針に従い作業を行った。

6月から3次元測量を行なながら、縁から分離している銭貨及び縁の2連を取り上げた。取り上げた銭種の判読、縁の状態の確認等を行い記録した。9月17日に理化学分析委託のため、分析試料を採集した。11月末に分析結果の報告書を受け取った。

8月18日に埋蔵銭の実測台移動及び、重量測定のための委託業者を選定し、9月18日に実測台への移動及び重量の計測を行った。

10月に埋蔵銭の実測とト雷斯を行い、スキャナでデータ化し、印刷用の版下を作成した。

埋蔵銭の委託写真是、銭貨取り上げ前の5月と、実測台移動後の11月の2回に分けて行った。

3 発掘調査・報告書作成の組織

平成29年度（発掘調査）

理事長	塙野谷 孝志	調査部	
常務理事兼総務部長	川目 晴久	調査部 長	赤熊 浩一
総務部		調査部副部長	田中 広明
総務部副部長	黒坂 稔二	主幹兼調査第二課長	上野 真由美
総務課長	曾川 浩二	主事	入江 直毅

令和元年度（整理・報告書作成）

理事長	藤田 栄二	調査部 長	黒坂 稔二
常務理事兼総務部長	高津 導	調査部副部長兼整理第一課長	上野 真由美
総務部			
総務部副部長	山本 靖		
総務課長	新井 了悟		

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

新井堀の内遺跡は、埼玉県東部の蓮田市黒浜に所在する。JR宇都宮線蓮田駅から北東約1.5kmの位置にあたる。

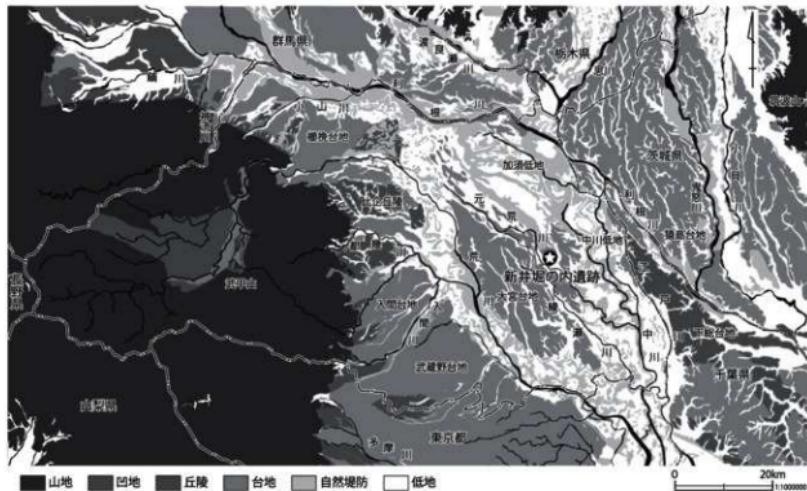
第1図に埼玉県の地形と新井堀の内遺跡の位置を示した。遺跡は、県東部地域の荒川と中川に挟まれた大宮台地に立地している。大宮台地は、関東平野の中央部に位置し、北西から南東方向に細長く伸びる台地で、北側の鴻巣市から南側の川口市にかけて続く。全体的には、約8万年前以降に利根川一荒川水系によって形成された関東ローム層からなる洪積台地である。台地の西側は荒川および荒川低地によって武藏野台地と隔てられ、東側は中川および中川低地によって下総台地と隔てられている。標高は13m～30mで、南側ほど低くなる。また、台地は南側ほど浸食谷が発達していて、元荒川、綾瀬川、芝川、鴨川などの中小河川によって開析された南北方向の浅い谷地形によ

る支台が多く形成されている。

遺跡は、その中の黒浜・白岡支台に立地し、この支台は白岡市篠津付近から始まり、白岡駅周辺、蓮田市黒浜、椿山、江ヶ崎、笹山あたりまで続き、元荒川左岸にあたる。

支台の西側には、元荒川によって隔てられた蓮田・岩槻支台が南北方向に延びる。この支台は蓮田市高虫付近から始まり、井沼、潤戸を経て蓮田駅付近まで続き、元荒川右岸にあたる。更に、西側には綾瀬川によって隔たる浦和大宮支台が位置する。

新井堀の内遺跡は、元荒川左岸に面する台地上に立地し、元荒川までは直線距離で600m程度である。遺跡は元荒川から台地に向かって緩やかな斜面地を登り切った台地上の平坦地に位置する。遺跡の標高は約15mで、元荒川と台地との比高差は約5mである。



第1図 埼玉県の地形

2 歴史的環境

新井堀の内遺跡（1）の位置する蓮田白岡台地周辺には、旧石器時代から近世に至る数多くの遺跡がある。旧石器は、久台遺跡（21）、荒川附遺跡（23）でナイフ形石器が出土し、宿浦遺跡（5）で礫群、天神前遺跡（2）、伊奈町大山遺跡で石器集中が確認されている。

縄文時代に入ると、草創期から早期の遺跡が急増する。最終氷河期が終わった一萬一千年前頃から海進が一層顕著となり、蓮田台地周辺の綾瀬川や元荒川は、前期までに内湾化が進んだと推測される。天神前遺跡、宿下遺跡（3）、堂山公園遺跡（22）、馬込新屋敷遺跡（30）、馬込大原遺跡（31）などで早期後半の炉穴が検出されている。

前期は海進の影響により奥東京湾と呼ばれる内水域が広がる。黒浜貝塚（6）、関山貝塚（25）などの貝塚が形成される。他にも天神前遺跡、宿下遺跡、椿山遺跡（7）、宿上遺跡（4）、帆立遺跡（29）が台地縁辺に分布する。新井堀の内遺跡の所在する台地上には、前期中葉黒浜式土器の標識遺跡として著名である国指定史跡黒浜貝塚が位置する。これまでの調査で集落中央部分には北側谷部に向かって開口する東西約50メートル、南北40メートルの凹地状の広場を取り囲むように、住居跡51軒、土壙約50基、生活面廐棄貝層5ヶ所が存在し、集落の規模は、東西約150メートル、南北95メートル程の範囲に広がることが確認されている。宿下遺跡の調査では前期前葉関山式期の集落が南北に分かれて存在し、前期中葉黒浜式期から後葉諸磣式期の集落も台地縁辺に営まれている。天神前遺跡でも前期中葉黒浜式期から後葉諸磣式期の集落が検出されている。綾瀬川左岸には前期前葉の関山式土器の標識遺跡である関山貝塚が位置する。

中期になると、五千年前以降の海退によって古奥東京湾は消滅して陸地化し、貝塚も造られなくなる。遺跡は台地上に広がりを見せ、馬込八番遺跡（28）、宿下遺跡では集落が存在し、椿山遺跡、

ささら遺跡（27）、井沼遺跡では住居跡が検出されている。

後期から晩期では、久台遺跡や、ささら遺跡をはじめとして、広義の大宮台地東部に、宿下遺跡、八幡溜遺跡（32）、宮の前遺跡（33）裏慈恩寺東遺跡（38）で住居跡が発見されている。また、帆立山遺跡をはじめ、裏慈恩寺遺跡（37）、黒浜拾九町遺跡（40）、井沼遺跡、清左衛門遺跡（34）、安行式の標識遺跡となった真福寺貝塚（67）などがある。縄文後晩期の集落として注目されている環状盛土遺構は、久台遺跡、雅樂谷遺跡（10）、前田遺跡（11）、入郷地遺跡（44）、正福院貝塚（45）でも認められている。

弥生時代前期の様相は不明確である。遺跡は弥生時代中期後半以降再び増加し始める。遺跡は元荒川、綾瀬川に面した台地縁辺に形成され、宿下遺跡からは須和田期の再葬墓が2基発見された。副葬品として管玉が出土した。また、さいたま市南遺跡、諫訪山遺跡から須和田期の土器が出土している。中期後半には、掛遺跡（18）、馬込遺跡（19）が元荒川流域に、さいたま市平林寺遺跡（20）、深作東部遺跡群（62）、西原遺跡（68）が綾瀬川流域に集落が分布している。

弥生時代後期終末から古墳時代初頭になると大宮台地上に多数の集落が営まれるようになる。椿山遺跡、宿上遺跡、ささら遺跡、馬込八番遺跡、馬込新屋敷遺跡、馬込大原遺跡、さいたま市平林寺遺跡、木曾良遺跡、吉野原遺跡、高台山遺跡（59）、伊奈町薬師堂根遺跡、戸崎前遺跡、向原遺跡、大山遺跡、上尾市三番耕地遺跡、尾山台遺跡（54）などが発見されている。久台遺跡や白原遺跡からは方形周溝墓が検出されている。この時期は東海地域の外来系土器の搬入や、その土器の影響を受けた土器が在地で製作される特徴がある。

古墳時代中期には遺跡数が激減する。荒川附遺跡、白岡町神山遺跡（47）、閏戸吹上遺跡（49）、伊奈町大山遺跡で住居跡が発見されている。元荒川

左岸の椿山古墳群では、5世紀末前後の中期古墳4基と後期古墳1基が調査されている。

古墳時代後期では、元荒川流域の荒川附遺跡、殿の下遺跡(69)、白岡町神山遺跡、綾瀬川流域に伊奈町大山遺跡が発見されている。この地域の中核的集落である荒川附遺跡では住居跡31軒が検出された。後期古墳は元荒川右岸に十三塚古墳(26)が位置する。直径24mの円墳で、凝灰質砂岩切石積みの横穴式石室が検出された。また、さら遺跡からは3基の円墳が調査されている。左岸には椿山古墳群に1基確認されている。

奈良・平安時代になると集落は増加する。元荒川流域の荒川附遺跡は、古墳時代中期から奈良・平安時代まで継続する集落で住居跡268軒が検出されている。鍛治工房跡や土師器焼成土坑が発見されるなど、古代の生産遺跡もある。右岸の椿山遺跡は、平安時代の住居跡76軒が検出され、製鉄関連の生産跡23基が検出されている。また、タカラ山遺跡(42)からは鉄滓や羽口が出土し、白岡町神山遺跡からは炭窯が検出されている。椿山遺跡やタカラ山遺跡、神山遺跡周辺は元荒川流域に形成された古代の製鉄関連遺跡である。さらに、「武藏」銘の鋸鍛車が出土した御林遺跡、御殿場遺跡(8)がある。綾瀬川流域の伊奈町大山遺跡は大規模な製鉄遺跡で、製鉄炉28基、鍛治工房跡、炭窯が検出されている。集落は伊奈町薬師堂根遺跡、戸崎前遺跡、向原遺跡、丸山遺跡、赤羽遺跡、上尾市秩父山遺跡(53)、宿前I遺跡(55)などが存在する。

中世では、新井堀の内遺跡をはじめ、周辺には中世後期から近世初頭にかけての城館跡が存在している。新井堀の内遺跡の北東約1.8kmには、黒浜沼のある谷を挟んで江ヶ崎城跡(70)が位置する。江ヶ崎城は『新編武藏風土記稿』に堀の内となり、鎌倉時代末から室町時代の城館跡として伝わっている。北側には堀跡が残り、1957・1958年の発掘調査で土壘に並行して、東西60m、南北67

m、土壘と内郭を持つことが判明した。北約2kmには南鬼座氏館跡(71)、北西約3kmには閔戸堀の内遺跡(72)があり、中世後期から近世初頭の城館跡と考えられている。同遺跡からは掘立柱建物跡13棟、井戸跡13基、溝跡34条、土壘4基などが検出されている。南西約2.7kmには桑原堀の内遺跡(73)が存在する。さら遺跡や久台遺跡では区画溝跡と建物跡が検出され屋敷の存在を示す。他に、帆立遺跡、馬込新屋敷遺跡、馬込大原遺跡、伊奈町薬師堂根遺跡、伊奈氏屋敷跡(77)からは溝跡や土壘が検出され、陶磁器や板碑などが出土している。南東約5.2kmには、太田氏が治めていた岩付城(74)があり、その周囲には佐技氏館跡(75)、渋江氏館跡(76)が存在する。

岩付城は、江戸城とともに扇谷上杉氏の勢力圏として太田氏が治めていた。岩付城は長禄元(1457)年に太田資清(道真)・資長(道灌)父子により築城されたと伝えられ、道灌の養子である資家が初代の城主として岩付太田氏を称した。その後は、資頼(道可)からその子資時(全艦)、さらに跡を継いだ弟の資正(三楽斎)と系譜をたどる。太田資正是永祿七(1564)年に後北条氏に敗れ、岩付城を追われ、常陸国に逃れ、城を奪い返そうとしたが失敗した。その後は、資正の子氏資が後北条氏と結び支配下に入る。新井堀の内遺跡の主は、岩付城主太田資正の家臣であつた野口多門であったと伝わっている。この敗北をきっかけに野口氏は新井堀の内地で帰農したと伝えられている。

新井堀の内遺跡の調査では中世の二重の堀跡が検出された。内側からは、中世の掘立柱建物跡2棟、井戸跡4基、地下式坑2基などが検出された。また、常滑焼の甕の中から埋蔵錢が埋められた当時の状態のままで発見された。遺跡の周囲には小さな谷が複雑に入り込んでいて、北側と西側には浅い谷地形となり、こうした地形を利用して館が形成されたと考えられる。



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
1	新井堀の内遺跡	蓮田市黒浜	40	黒浜拾九町遺跡	蓮田市黒浜
2	天神前遺跡	蓮田市黒浜	41	神辺遺跡	白岡町小久暮
3	宿下遺跡	蓮田市黒浜	42	タカラ山遺跡	白岡町白岡
4	宿上遺跡	蓮田市黒浜	43	七カマド遺跡	白岡町白岡
5	宿裏遺跡	蓮田市黒浜	44	入耕地遺跡	白岡町白岡
6	黒浜貝塚	蓮田市黒浜	45	正福院貝塚	白岡町白岡
7	椿山遺跡	蓮田市黒浜	46	白岡東遺跡	白岡町白岡
8	御殿場遺跡	蓮田市黒浜	47	神山遺跡	白岡町篠津
9	御林遺跡	蓮田市黒浜	48	閔戸足利遺跡	蓮田市閔戸
10	雅楽谷遺跡	蓮田市黒浜	49	閔戸吹上遺跡	蓮田市閔戸
11	前田遺跡	白岡町実ヶ谷	50	根金大山遺跡	蓮田市根金
12	不動山貝塚	蓮田市江ヶ崎	51	上閔戸遺跡	蓮田市閔戸
13	江ヶ崎貝塚	蓮田市江ヶ崎	52	小貝戸貝塚	伊奈町小滝
14	黒浜耕地遺跡	蓮田市黒浜	53	秩父山遺跡	上尾市瓦葺
15	寺前平方遺跡	蓮田市黒浜	54	尾山台遺跡	上尾市瓦葺
16	黒浜新井遺跡	蓮田市黒浜	55	宿前I遺跡	上尾市瓦葺
17	桜山遺跡	蓮田市桜山	56	二十一番耕地I遺跡	上尾市原市、瓦葺
18	掛遺跡	さいたま市掛	57	二十一番耕地II遺跡	上尾市原市、瓦葺
19	馬込遺跡	さいたま市馬込	58	東北原遺跡	さいたま市東大宮4
20	平林寺遺跡	さいたま市平林寺	59	高台山遺跡	大宮市砂町2丁目
21	久台遺跡	蓮田市東	60	丸ヶ崎遺跡	さいたま市丸ヶ崎
22	堂山公園遺跡	蓮田市上町	61	稲荷原遺跡	さいたま市深作
23	荒川附遺跡	蓮田市麗山	62	深作東部遺跡群	さいたま市深作
24	坂堂貝塚	蓮田市麗山	63	深作稻荷台遺跡	さいたま市深作
25	閔山貝塚	蓮田市麗山	64	小深作前遺跡	さいたま市小深作
26	十三塚古墳	蓮田市閔戸	65	小深作遺跡	さいたま市小深作
27	ささら遺跡	蓮田市東3	66	宮ヶ谷塔貝塚	さいたま市宮ヶ谷塔
28	馬込八番遺跡	蓮田市馬込	67	真福寺貝塚	さいたま市城南3
29	帆立遺跡	蓮田市馬込	68	西原遺跡	さいたま市岩槻区岩槻
30	馬込新屋敷遺跡	蓮田市馬込	69	殿の下遺跡	蓮田市蓮田
31	馬込大原遺跡	蓮田市馬込	70	江ヶ崎城跡	蓮田市
32	八幡溜遺跡	蓮田市蓮田	71	南鬼塚氏館跡	蓮田市
33	宮の前遺跡	蓮田市御前橋1	72	閔戸屋の内遺跡	蓮田市閔戸
34	清左衛門遺跡	白岡町彦兵衛	73	桑原堀の内遺跡	蓮田市
35	下小笠原遺跡	白岡町彦兵衛	74	岩付城跡	さいたま市岩槻区
36	土橋山遺跡	白岡町太田新井	75	佐枝氏館跡	さいたま市岩槻区
37	裏慈恩寺遺跡	さいたま市裏慈恩寺	76	渋江氏館跡	さいたま市岩槻区
38	裏慈恩寺東遺跡	さいたま市裏慈恩寺	77	伊奈氏屋敷跡	伊奈町小室
39	桜山貝塚	さいたま市裏慈恩寺			

III 遺跡の概要

新井堀の内遺跡は、蓮田市黒浜1177番地他に所在している。大宮台地の東部に立地し、西側に元荒川左岸に面する標高約15mの黒浜・白岡支台に位置している。

遺跡の西側は、元荒川に向かって緩やかに傾斜している。遺跡の周囲には、小さな谷が複雑に入り込んでいる。小さな谷を挟んだ西側には、縄文時代前期や中期の集落、中世の遺構や遺物が検出された宿下遺跡が立地している。

遺跡は、古くから中世館跡として知られている。遺跡の周辺には、小さな谷が複雑に入り込んでおり、第4図に見られるように、遺跡北側の谷は天然の堀の役割を果たしていたと考えられる。北側の谷によって、方形に台地が作り出されている。その方形の地形から想定された台地の平坦部分が、館跡として遺跡の範囲とされていた。今回の調査で検出された幅約6mに及ぶ、2重の堀跡は、遺跡の想定範囲の西側部分にはぼ重なっていた。しかし、遺跡の南側部分は現在平坦地となっており、

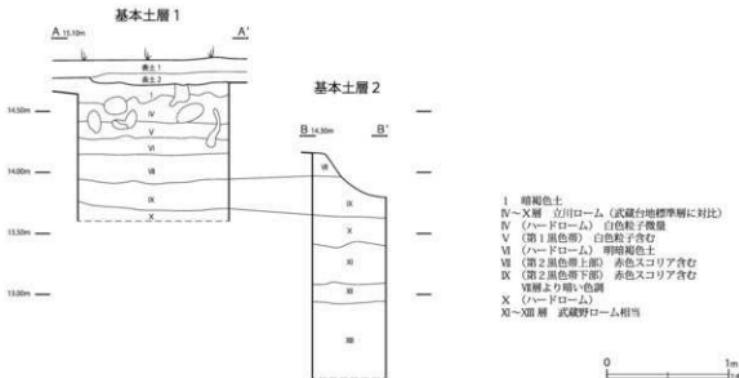
館の南側の境界部分は不明である。この館の主については、岩付城を治めていた太田氏に仕えていた家老であったといわれている。

発掘調査は、総合交付金（改築）工事（蓮田杉戸線）に伴うもので、平成29年度に実施した。

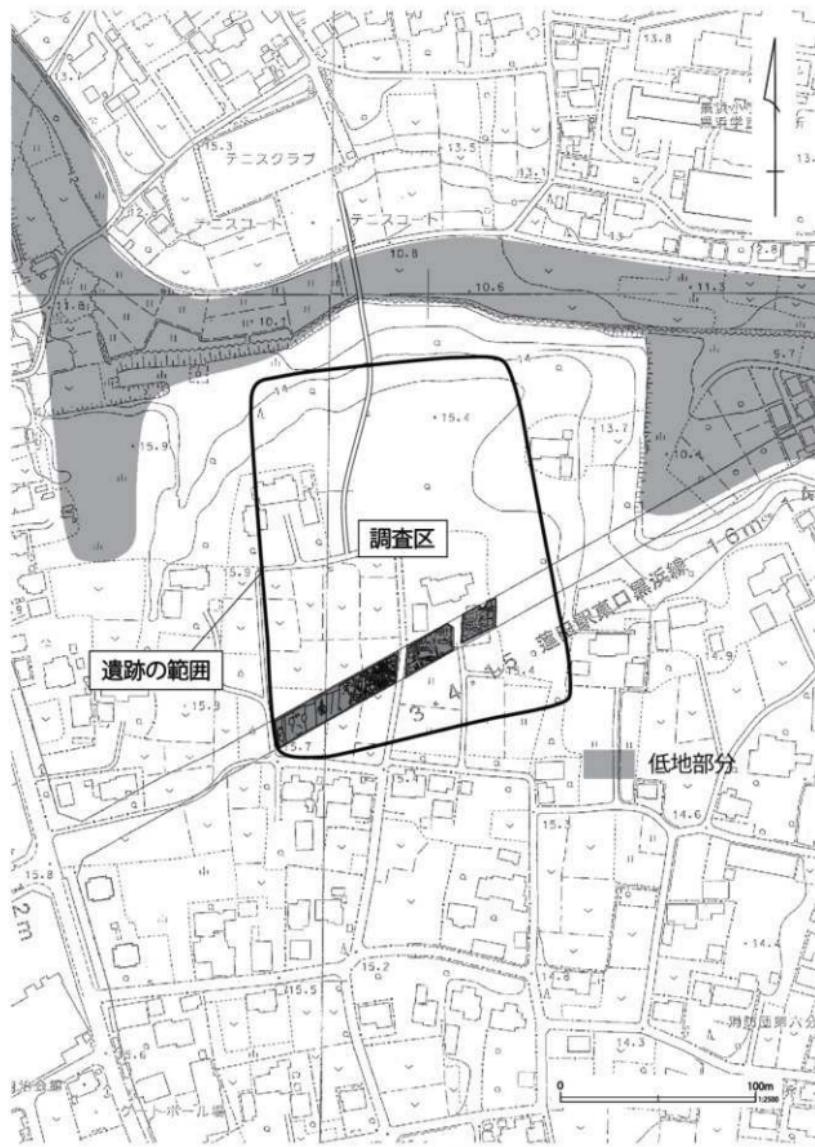
基本層序（第3図）は、調査区西側のK-13グリッドと、調査区中央の地下式坑である第63号土壌の壁面で確認した。表土層は、畑の耕作土で0.2m程度である。遺構確認面は、館の外側と考えられる堀跡（第1・3号構跡）の西側では、表土層と1層の境界部分である。館内と考えられる堀跡の東側では、1層やIV層が削平され、V層からVI層の間が遺構確認面となっている。

今回の発掘調査によって、縄文時代、中世、近世の遺構と遺物が検出された。

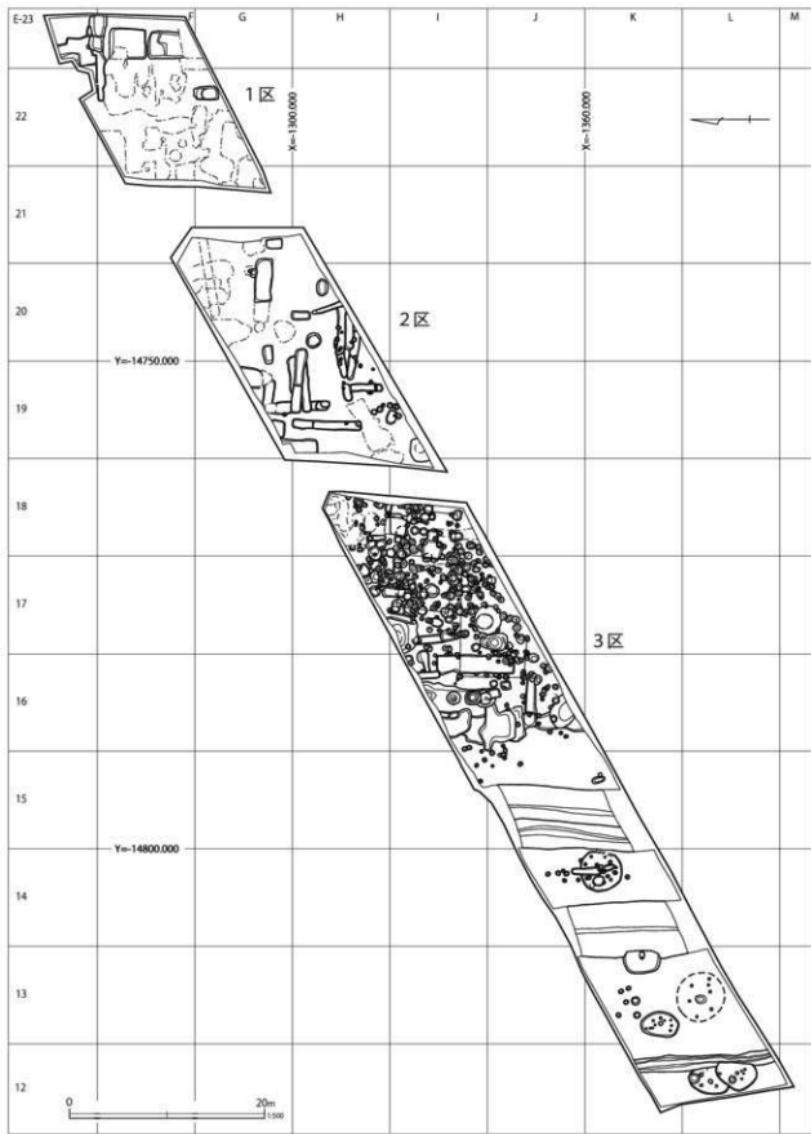
調査時は、生活道路によって分割された調査区を便宜的に東側から1区、2区、3区と呼称していた。1区はその大部分が攪乱を受けしており、東側に残されていた遺構は近世のものであった。2



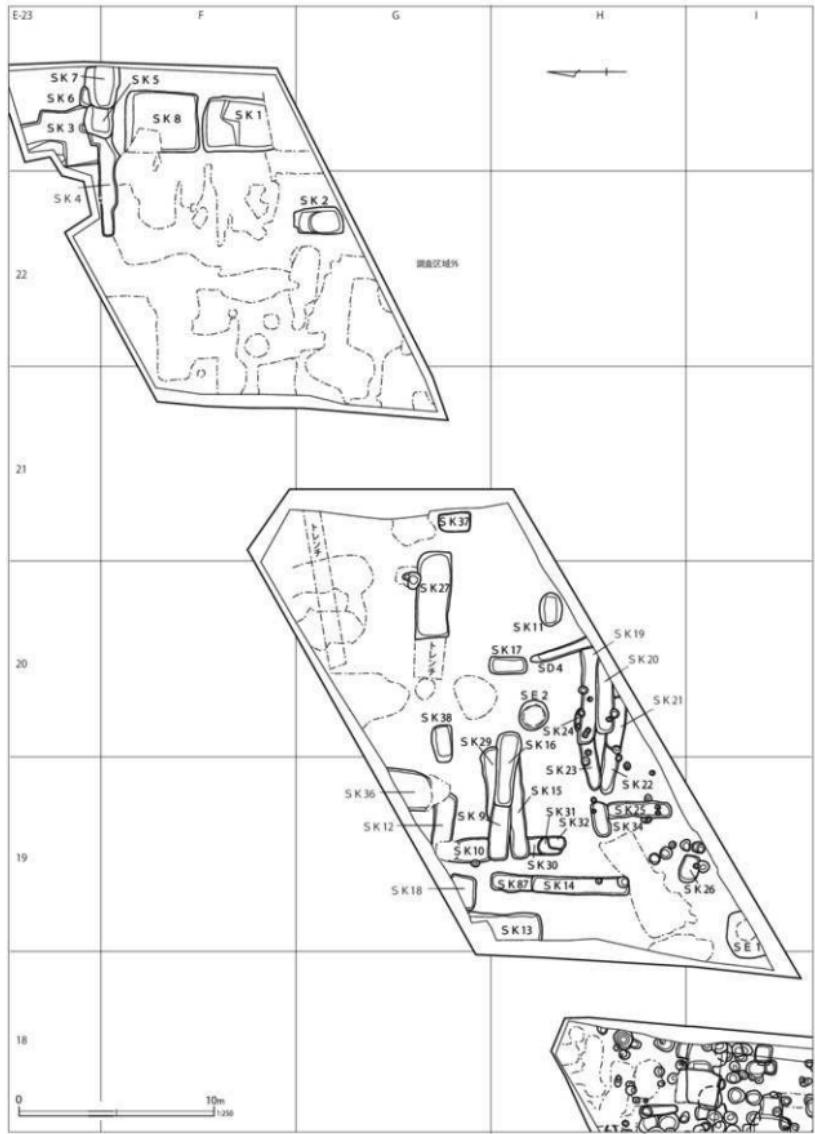
第3図 基本土層図



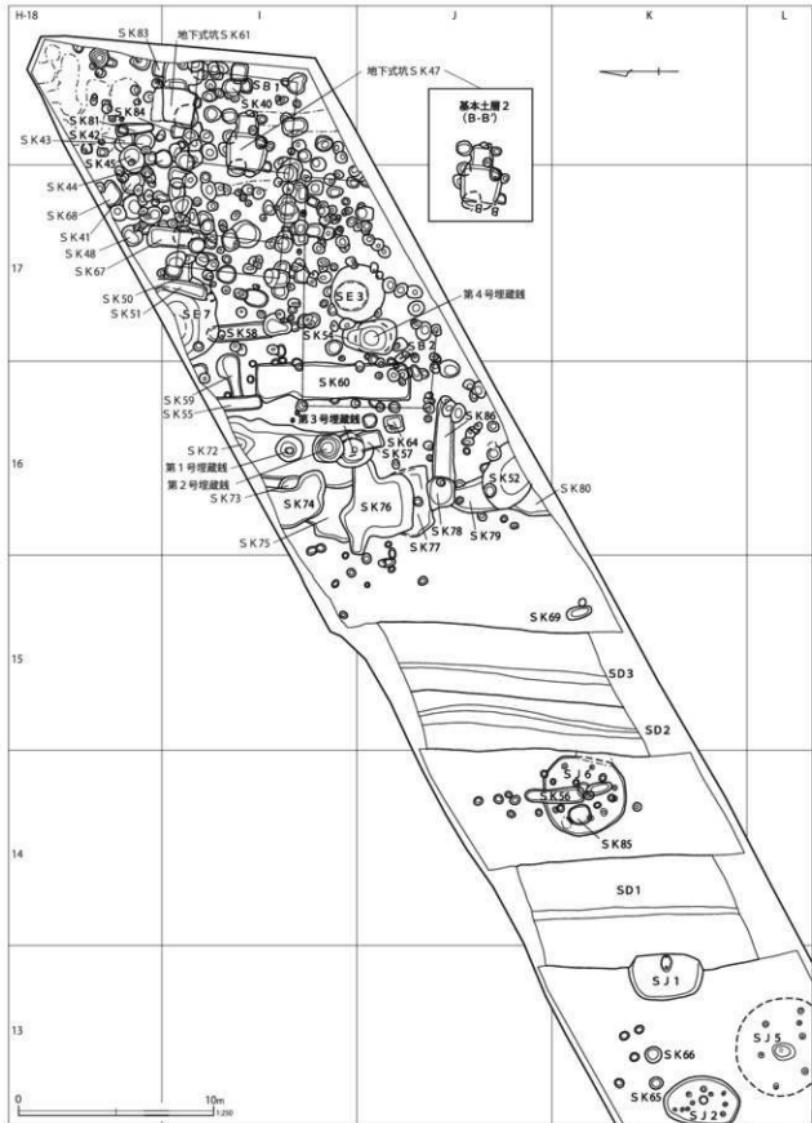
第4図 調査区位置図



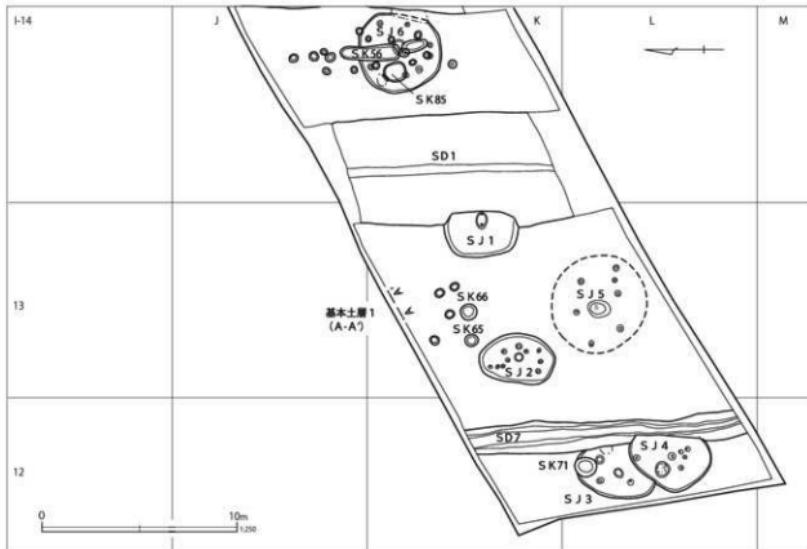
第5図 全体図（1）



第6図 全体図（2）



第7図 全体図 (3)



第8図 全体図(4)

区は、井戸跡以外の遺構は近世と考えられる。3区は、館内と考えられる堀跡の東側から中世の遺構が密に検出された。堀跡の東側からは縄文時代の遺構が検出された。

縄文時代の遺構は、住居跡6軒、土壙2基が検出された。前述したように、堀跡の東側は全体に削平されており、そのため縄文時代の遺構が失われたと考えられる。時期は、出土した遺物から、住居跡のうち1軒が前期中葉、5軒が中期後葉である。前期の住居跡は、第1号堀跡によって東半分が廃された状況で検出された。住居跡内からは、関山式期の土器が出土した。住居跡内からは、少量の貝が検出された。中期の住居跡は、掘り込みがごく浅いもので、加曾利式期の土器が出土した。第2・3号住居跡は、調査区の西端から検出されており、中期の集落は調査区の西側に続くと考えられる。

中世の遺構は、掘立柱建物跡2棟、多量のピッ

ト群、井戸跡4基、埋蔵銭4基、埋蔵銭に地下式坑2基、堀跡2条、土壙32基を検出した。井戸跡以外は、3区内から検出された。多量に検出されたピットは、掘立柱建物跡の柱穴と考えられるが、重複が激しいため、調査時は単独のピットとして扱った。堀跡に近い地域には、埋蔵銭が埋設されたと考えられる遺構が4基検出された。中でも第3号埋蔵銭は、15世紀前半に焼かれた常滑の甕に、緑泥片岩製の蓋がされた状態で検出された。甕の内部からは、口縁に掛けられたような状態で木簡が検出された。木簡には、4行分の文字が書かれており、錢の埋蔵された時期や、量が書かれたと考えられる。木簡には、260貫と推定できる文字が書かれており、それを内容量とすればおよそ26万枚の錢貨が埋蔵されていると考えられる。

近世の遺構は、土壙37基、溝跡3条、ピット多数が検出された。第2号溝跡は、堀跡である第3号溝跡に重複して、掘削されていた。

IV 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構と遺物

検出された縄文時代の遺構は、前期の住居跡1軒、中期の住居跡5軒、土壙2基である。堀跡の西側から検出されているが、基本土層で指摘したように、館部分は全体に削平されている可能性が高く、削平前は堀跡の東側にも縄文時代の遺構が分布していたと考えられる。前期の住居跡は単独で検出され、集落の状況は不明である。中期の住居跡は、その分布から調査区の西側に集落域が広がっていたと推定される。

(1) 住居跡

第1号住居跡（第9～14図）

第1号住居跡は、K-13グリッドで検出された。東半分は、中世の第1号堀跡によって埋められていたため、西半分のみが残存していた。覆土は、

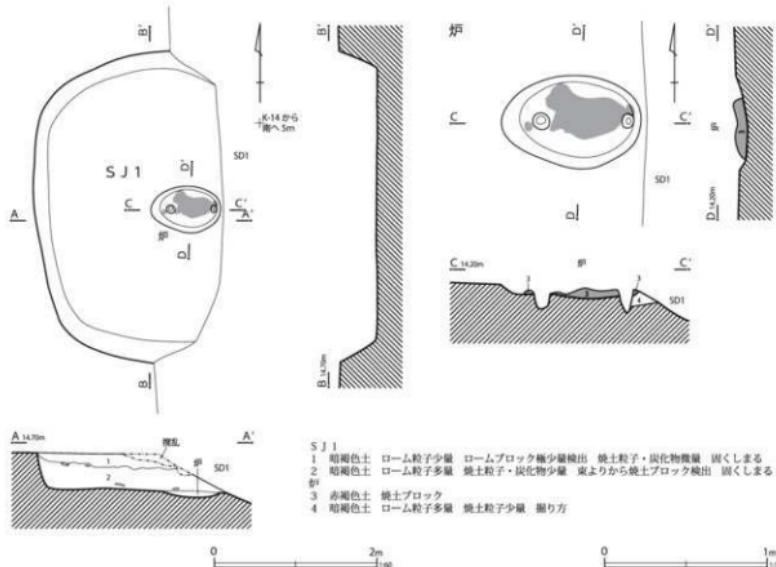
遺構検出面と見分けが付きにくく、第1号堀跡の壁面を精査中に住居跡を確認した。平面形態は隅丸方形である。

規模は長軸3.80m、短軸(2.30)m、深さ0.41mである。住居跡の形状と炉跡を基準とした主軸方向は、N-0°である。

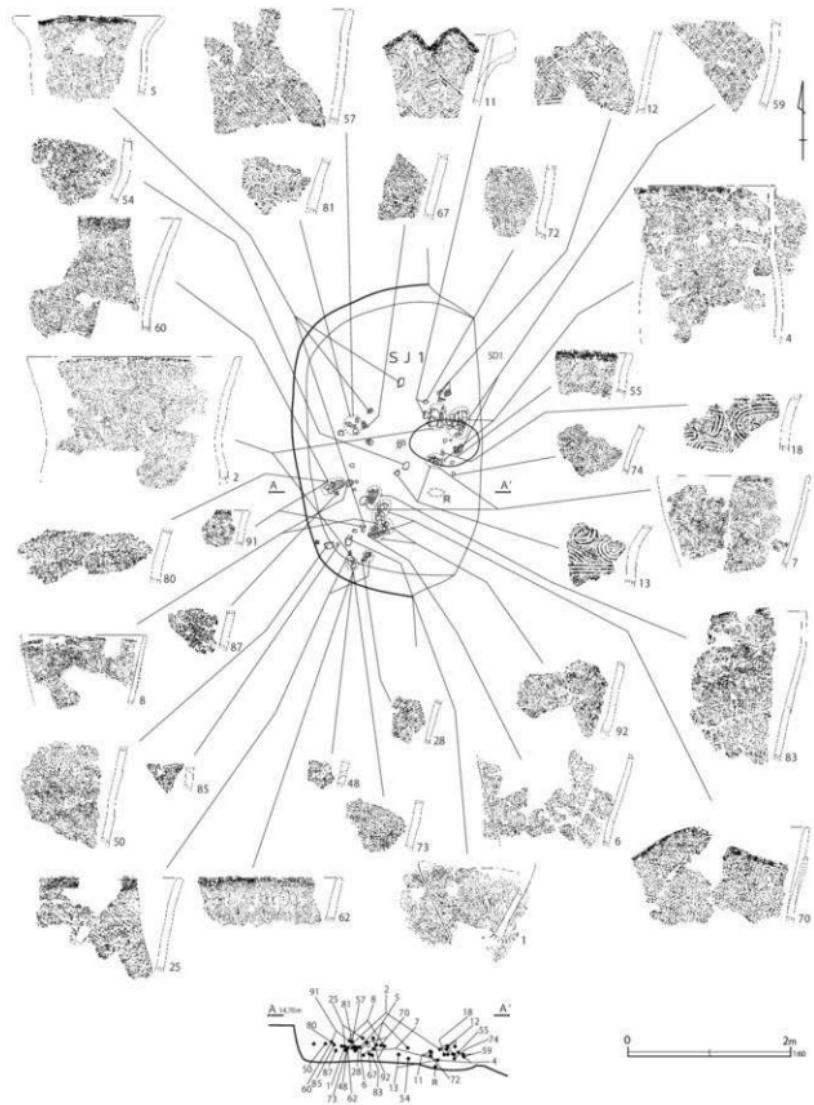
柱穴は床面を精査したが検出することができなかつた。

炉跡はほぼ中央から検出された。平面形状は梢円形である。規模は、長径0.85m、短径0.58m、深さ0.12mである。床面には、小穴が2箇所掘り込まれていた。

出土遺物の多くは2層内から検出された。また、住居跡の北側から、小礫がやまとまって検出さ



第9図 第1号住居跡



第10図 第1号住跡遺物出土状況

れたが、焼蹠ではなく自然蹠と考えられる。貝はごく少量が検出されたが、量も少なく地点貝塚とはしなかった。壊された東半部に、地点貝塚が存在していた可能性が高い。

本住居跡からは、縄文時代前期前半の関山式を主体とする土器が見つかった。これらは全て同式でも後方に製作されたものである。

第11図1～8、第12図9～50、第13図51～82、第14図83～106は検出された土器である。

9～18は、口縁部付近に工具文が描かれ、文様帶を構成するものである。このうち9は、無文地に縦方向のレンズ状文を描いており、以下の構成とは異質で、他遺跡でも例を見ない。しかし、胎土に纖維を含むことから、同類に含めて考えた。これ以外の破片のなかで、2～3本を一組とする管内痕残す半截竹管文の描出手法と地文とする縄文から、11、12、17、13～15、18が、それぞれ同一個体の可能性がある。10は注口部脇の突起、11は注口部の破片である。19～28は、0段多条の単節斜縄文が施文される破片である。19～25は環状末端を多段に転がしている。19～21は同一個体である。また、22は、小破片での観察だが、鋸歯状多段ループ帶を櫛描真正コンパス文の地文としているらしい。

1、29～40は、異条斜縄文のうち、いわゆる正反の合を施文した資料で、29～36は最終撚りを替えた原体の回転痕を組み合わせて羽状が構成されている。直前段の正縄・反縄ともに変化なく、観察できる範囲では全て0段多条である。中には反縄の圧痕がひと際深く印されているものもあり、付加条法により施文原体が作られたとも思われる。

2～4、43～51には組縄（組紐の組み違え）の回転痕が残る。組縄原体には持ち寄る2本の1段縄と、これを絡げる方向により、理論上、疑似異節、疑似単節、疑似複節の3種ができる。ここではそのうち前二者が見つかった。2～4、43

～50は、一見すると組紐や、異節の原体を回転押捺されたように見えるが、前者では縦方向、後者では斜方向に整然と通るはずの条の筋が整っていない。43はR・Lの1段縄を組紐製作と同じ要領で双方をL方向に絡げた原体が押捺されている。これ以外はR方向に絡げた原体の圧痕が観察できる。

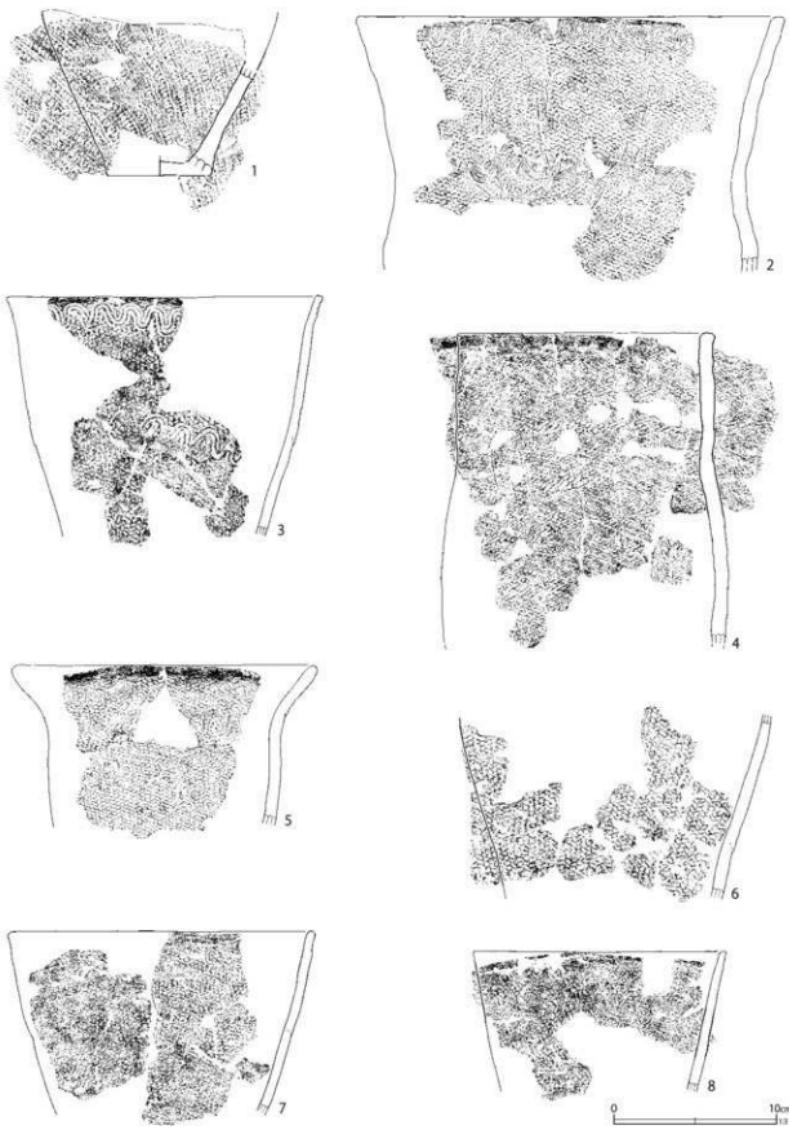
一方、51は、Rの1段縄2本を双方R方向に絡げた原体が施文されている。結果として、前々段反撚の3段疑似単節の圧痕と酷似する文様が現れている。組縄は基本0段2条のようだ、コンパス文は全て櫛状工具で支点を上下させながら描かれている。

52～59は付加条縄文が施文された破片である。出土点数は少ないながらも偏差に富んでおり、目立たぬ文様にも多様さを求めた往時の趣向が垣間見える。縄軸に逆行させて2本の付加縄を段が進むように絡げる付加条法は、撚り戻しによる正反の合原体との弁別がしづらいため、全て前段で扱っており、ここでは、それ以外の付加法を紹介する。

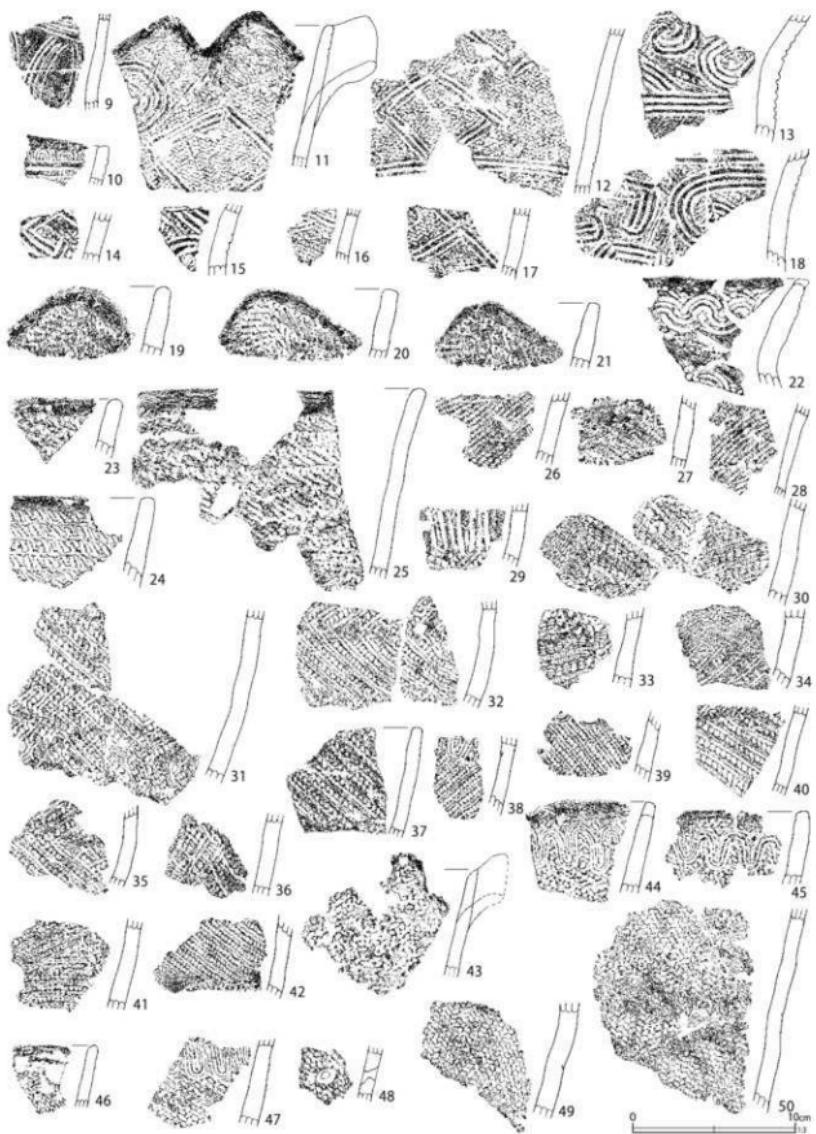
52は、拓影上段が1段縄L2本をS方向に、下段が同RとLをZ方向に絡げた原体が転がされている。縄軸はどちらもR Lであり、上段は1段縄側で反撚りを2回繰り返す正反の合と同等の効果を生み、下段は単節2条の合間に順逆の付加縄が介する4条一組の圧痕となる。

これに対し53は、52下段の圧痕と類似するが、こちらは付加縄を順方向の1段縄（R）で統一したものである。54の拓影左側も同原体が施文されているが、右側は最終撚りLの正反の合が押捺されている。

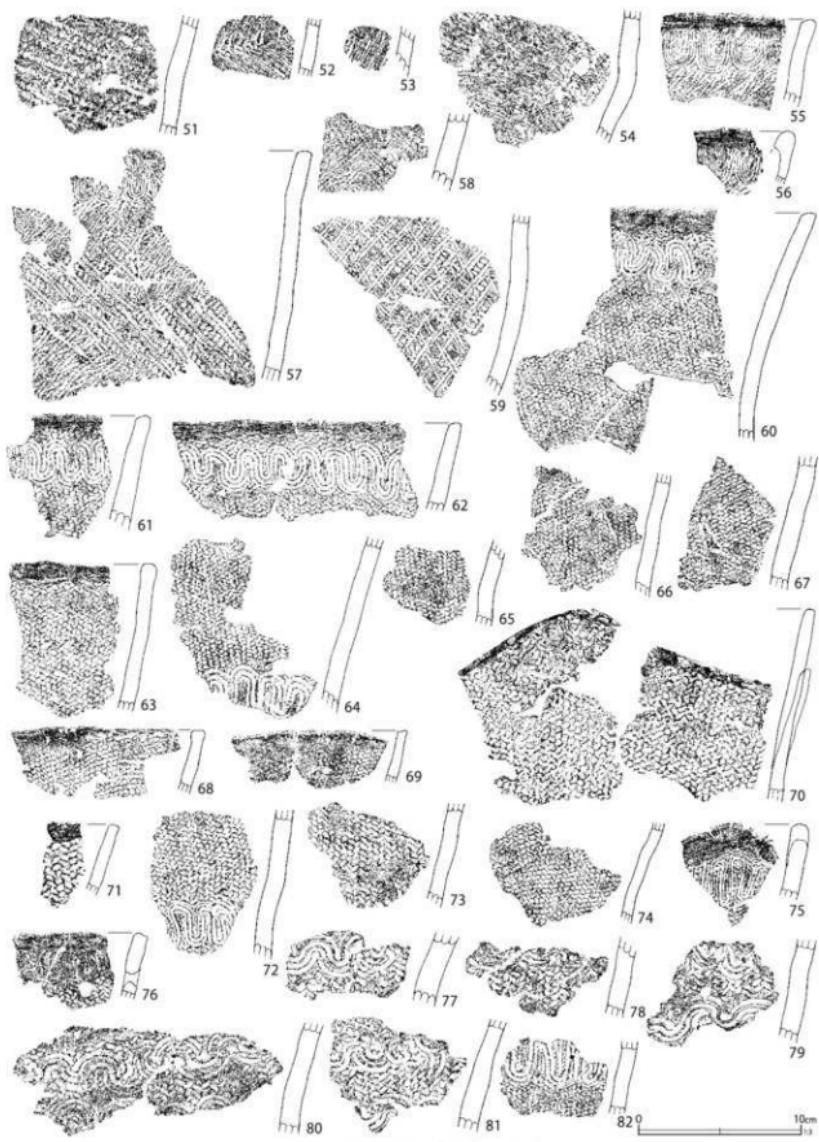
一方、同一個体の55、56は、2段縄LRに1段縄LをS方向に付加した原体を横位施文している。縄軸、付加縄、絡げ方向の三条件全てが撚り戻す方向へと作用した結果、縄軸は2段とも3段ともいえない圧痕を表すことになる。櫛工



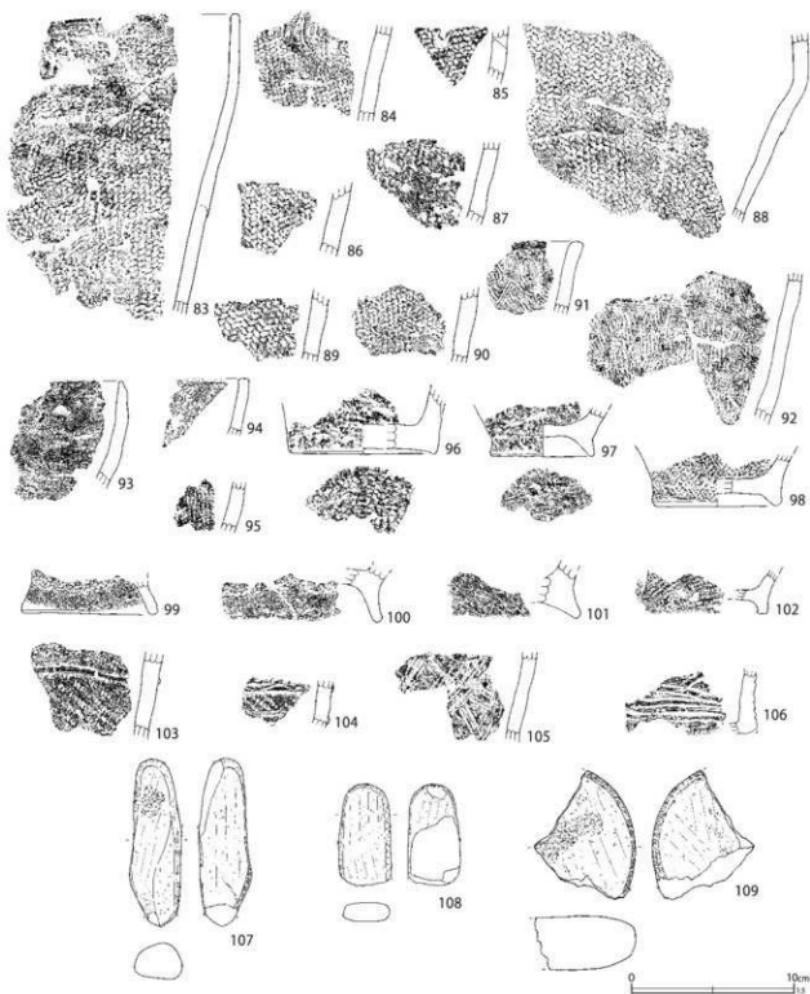
第11図 第1号住居跡出土遺物（1）



第12図 第1号住居跡出土遺物（2）



第13図 第1号住居跡出土遺物（3）



第14図 第1号住居跡出土遺物（4）

第2表 第1号住居跡出土石器観察表（第14図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
107	敲石	10.4	3.3	2.4	108.5	砂岩	No6 一部欠損
108	砥石	6.3	3.3	1.2	33.3	砂岩	北 1/3 残存 赤色化
109	磨石	[7.9]	[6.3]	3.4	176.5	閃緑岩	No28 1/4 残存 一部黒色化

第3表 第1号住居跡貝類計測表

番号	分類	右・左	殻長 (mm)	殻幅 (mm)	重量 (g)
1	サルボウ	右	22.36	27.73	2.1
2	サルボウ	左	19.88	(17.70)	0.3
3	サルボウ	右	(17.23)	(25.62)	0.7
4	サルボウ	右	(14.34)	(18.05)	0.5
5	サルボウ	右	(10.31)	(15.30)	0.3
6	サルボウ	右	(13.46)	(11.00)	0.2
7	サルボウ	左	13.36	16.62	0.4
8	サルボウ	左	17.84	23.22	0.8
9	ハイガイ	右	25.98	(28.78)	1.6

具のコンパス文は、支点を上下に移動させている。さらに、こちらも同一個体と考えられる57、58は、最終撚りRの正反の合と、55、56と同じ付加条法の原体、LR(L+L)Sとで菱形羽状が形成されている。こちらのコンパス文も櫛状工具で支点を上下させている。

以上の付加条は片方向であったが、59は縄軸R Lに対して、はじめ1段縄L 2本をZ方向に、その後R 2本をS方向に絡げられた両方向付加条である。結果として、最初の付加縄は縄軸の合間に節のような圧痕として現れることになる。付加条法による原体は、判別できる限りにおいては、全て0段多条の撚縄を使っている。

5 ~ 7、60 ~ 90は組紐文が印されたもので、本住居跡出土土器の縄文原体別では最も比率が高い。組縄とは違い、圧痕に現れた条の筋が縦方向に通る。図に掲げた組紐文のうち、詳しい原体が判別できるものは、全て1段縄RとLが素材となる基本的な組縄を転がしている。60 ~ 67のR R L Lと、5、6、68 ~ 74のL L R Rの違いは、原体製作時にそれぞれの1段縄を左右どちらに通すかで決まる。これらの原体は0段多条が基本のようだが、2条を疑わせるものも少なからず存在する。

この他、7、75 ~ 90は、2段目の節の並びから組紐文であることは判別できるものの、細節は風化で見分けることができない。コンパス文の工具の特徴から、支点上下で施文する60 ~ 62、64、真正に支点をはずす77 ~ 81は、それぞれ同一個体と考えられる。

番号	分類	右・左	殻長 (mm)	殻幅 (mm)	重量 (g)
10	ハイガイ	不明	(32.45)	(19.06)	1.6
11	ハイガイ	不明	(22.74)	(33.18)	2.1
12	ハイガイ	不明	(22.11)	(23.52)	2.1
13	ハイガイ	不明	(20.40)	(17.61)	0.6
14	ハイガイ	不明	(23.68)	(14.26)	0.9
15	不明	不明	(8.84)	(3.72)	0.0
小片一語	サルボウ	—	—	—	4.4
小片一語	ハイガイ	—	—	—	1.1
小片一語	不明	—	—	—	3.6

91 ~ 95は貝殻文が施文されたもので、顆粒を備える貝殻を用いている。このうち、同一個体の91、92は、押圧文の上にコンパス文に類する櫛歯波状文が展開される。両片を総合すると、口縁部文様帶を形成する上部には、大波の鋸歯文を施文しているともとれる。また、93は背压痕をまばらに印す程度で、ほとんどが無文である。

96 ~ 102には底部を一括した。受熱による荒れが著しく、外面の文様が識別できないものが多いが、大略これまでに触れた縄文原体の比率を反映している。底裏面に施文されるのは底部外周がとがり気味の2点のみで、他は脚付ともいえる上げ底となっている。

103 ~ 106は、竹管文系の破片である。具体的には103、104に諸磯b式の浮線文、105、106では諸磯c式の集合沈線文が見て取れる。

第14図107 ~ 109は、出土した石器である。107は棒状の敲石で、側縁や表面に敲打痕が認められる。使用のためか、先端と側縁の一部が欠損している。108は薄手のもので、砥石と考えられる。109は磨石で、側縁は敲打によって平坦になつていて、表面に敲打痕が認められる。

出土した貝類は、主にサルボウとハイガイで、第3表に計測値を示した。計測可能なものは、15点で、サルボウ8点、ハイガイ6点、不明1点であった。

第2号住居跡(第15、16図)

第2号住居跡は、K-13グリッドに位置する。南側に第5号住居跡が近接している。

平面形状は橢円形である。規模は長径3.80m、

短径2.50m、深さ0.25mである。住居の形状と炉を基準とした主軸方位は、N-3°-Wである。覆土は遺構確認面である基本土層の漸移層とほぼ同じで、遺構確認が困難な状況であった。

柱穴は10本が検出された。いずれも浅く、壁柱穴であったと考えられる。

炉は、ほぼ中央から検出された。炉の平面形状は円形である。地床炉で、規模は、長径0.45m、短径0.45m、深さ0.06mである。

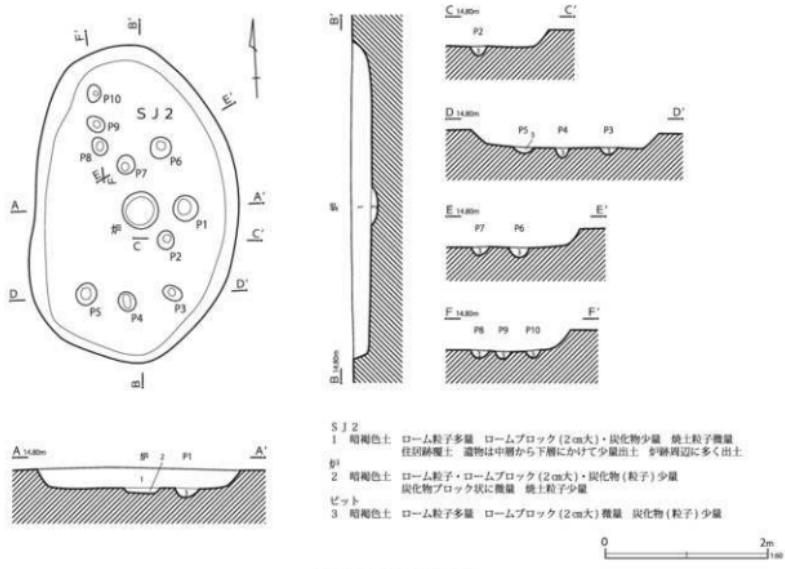
遺物は、第1層の中層から下層にかけて、炉周辺から出土した。出土した遺物から、住居跡の時期は加曾利E III式期と考えられる。

第16図 1～23は出土した土器である。

1、2は器形復元が可能な土器である。1は、

小型の深鉢形土器の胴部である。胴部には、平行する2本の沈線で磨消懸垂文が施文される。沈線文の施文は粗く、痕跡程度が残存する箇所もある。地文は単節RLの縋文で、縦方向に施文されるが、一部横方向に施文される。残存高は10.7cmである。2は大型の深鉢形土器の胴部から底部である。胴部には、平行する2本の沈線で磨消懸垂文が施文される。地文は複節RLの縋文で、縦方向に充填される。残存高33.6cm、推定される底径9.6cmである。

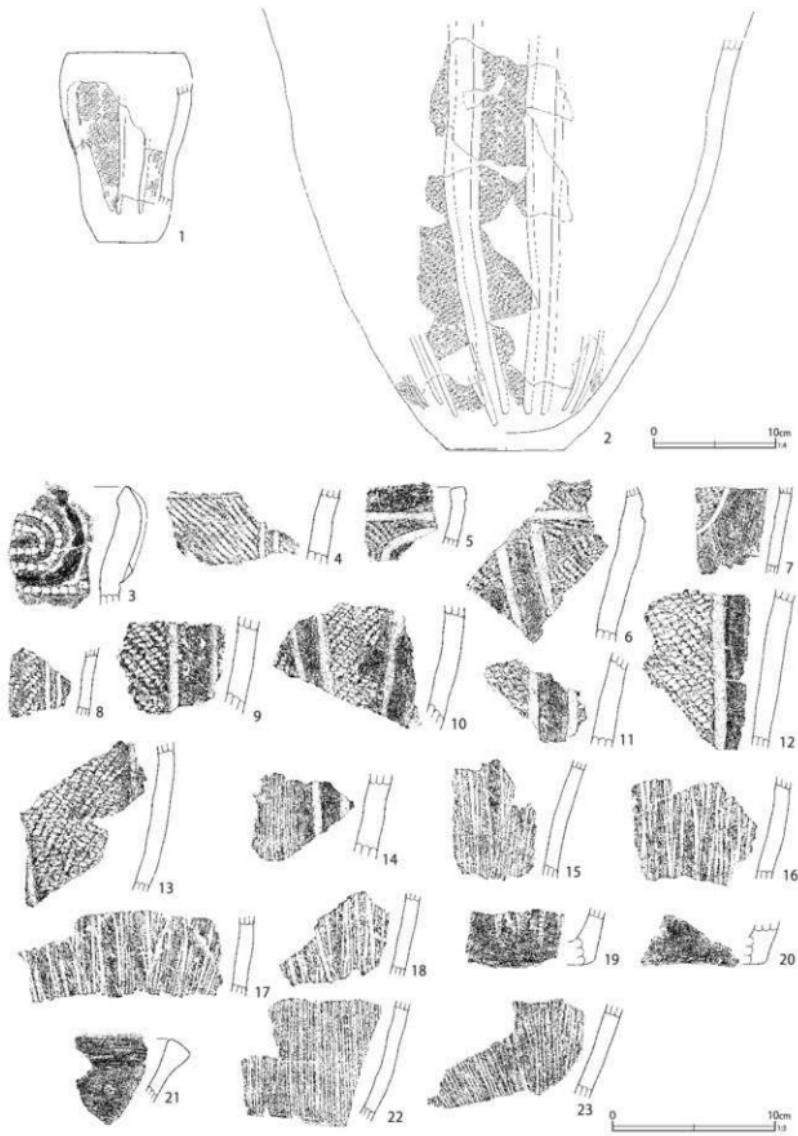
3～23は破片資料である。3は中期中葉の勝坂式系の深鉢形土器の口縁部である。口縁部文様の隆帯に沿い、角押文が施文されている。4は加曾利E II式と考えられる胴上部の破片である。地



第15図 第2号住居跡

第4表 第2号住居跡ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P 1	30.0	30.0	11.4	P 2	22.0	20.0	9.8	P 3	23.0	16.0	7.1
P 4	24.0	20.0	10.3	P 5	27.0	27.0	6.3	P 6	26.0	26.0	9.7
P 7	23.0	20.0	10.6	P 8	22.0	19.0	9.6	P 9	24.0	18.0	7.8
P 10	22.0	15.0	7.6								



第16図 第2号住居跡出土遺物

文は無節Lである。5～21は深鉢形土器である。いずれも沈線で文様が施文されている。5は、無文の狭い口縁部文様帯が、沈線によって区画されている。胴部には沈線で曲線文様が施文される。地文は単節R Lで、横向方に施文されている。6は口縁部文様から胴部の破片で、胴部には磨消繩文が施文されている。地文は単節R Lの繩文で、横や斜め方向に施文されている。7は胴上部で、曲線で文様が施文され、文様内に単節L Rの繩文を縦方向に充填している。8～14は胴部で、2本1組の沈線で磨消懸垂文を垂下させている。地文として、8は単節R L、9は単節L R、10、13は複節R L R、11、12は複節L R Lの繩文が縦方向に施文されている。14の地文は条線文

である。15～18は、地文である条線のみが施文される。19、20は底部である。21～23は浅鉢形土器である。

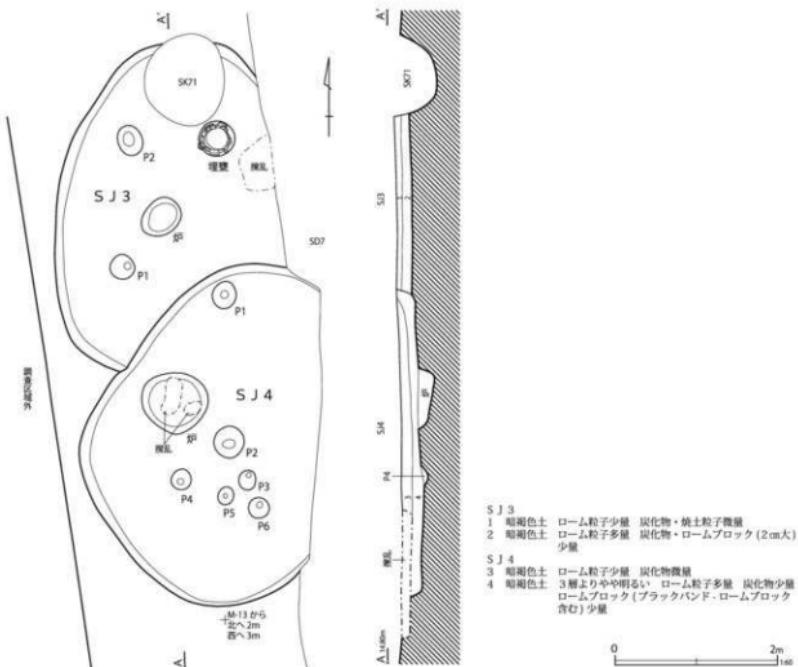
第3号住居跡（第17～20図）

第3号住居跡は、L-12グリッドに位置する。東側を近世の第7号溝跡に、南側は重複する第4号住居跡に接している。

平面形状は梢円形である。規模は長径(3.36)m、短径2.70m、深さ0.18mである。平面形状と炉を基準とした主軸方位は、N-6°-Wである。

柱穴は3本が検出された。いずれも浅く、壁柱穴であったと考えられる。

炉は、ほぼ中央からやや南側から検出された。炉の平面形状は円形である。規模は、長径0.51m、



第17図 第3・4号住居跡

短径0.41m、深さ0.05mである。

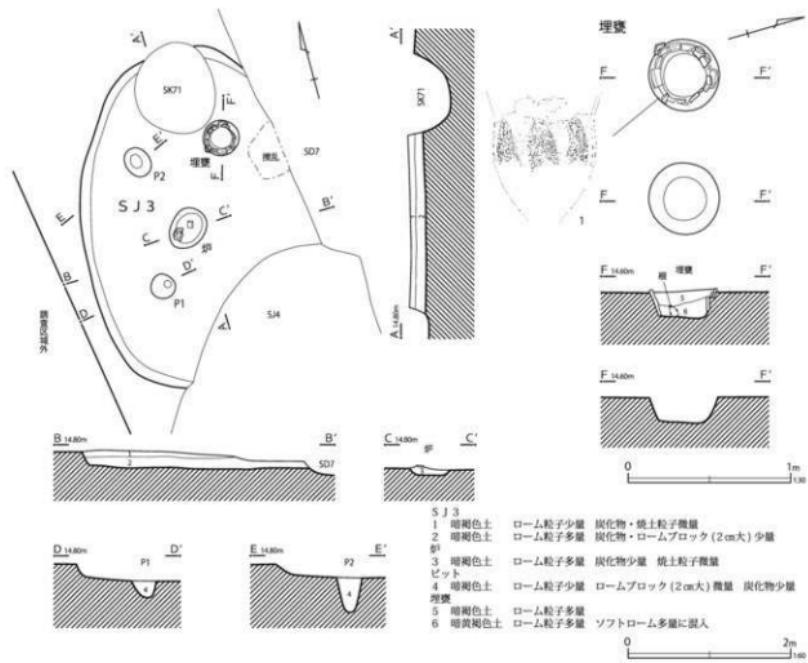
埋甕は、住居跡の中央や北側から検出された。第19図1が底部を欠損し正位で埋設されていた深鉢形土器である。口縁部は、後世の削平などによって失われていた。埋設は、幅を広げ柱穴を利用した可能性がある。住居跡の廃絶後に埋設されたと推定されるが、住居跡確認時に埋甕の掘り込みは確認できなかったため、住居が埋まりきる前に埋設されたと考えられる。規模は、長径0.40m、短径0.38m、深さ0.18mである。

時期は、出土した土器や、埋甕の時期より古い。

と推定すると、加曾利E III式期と考えられる。

遺物量は少なく、中央付近から主に出土した。第19図1、第20図2～19は出土した土器である。

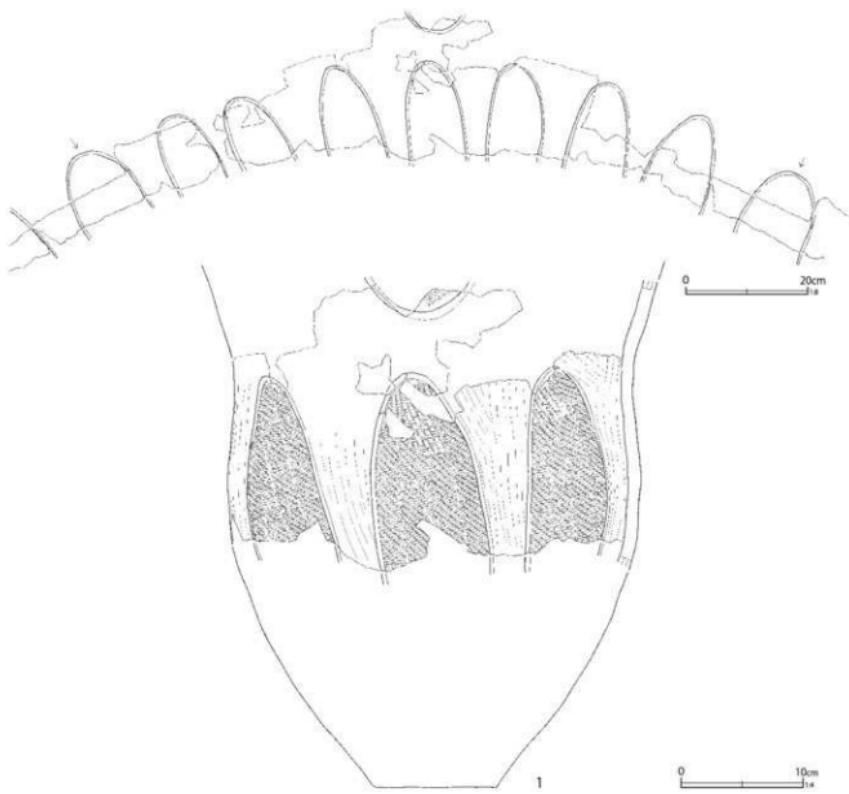
1、2は器形復元が可能な土器である。1は埋甕で、キャリバー形の深鉢形土器の胴部である。胴上部の文様は、一部が残存しているのみのため、全容は不明であるが胴下部同様、単位文が施文されると考えられる。胴下部の文様は、逆U字状の文様が8単位施文される。文様内には、単節L Rの繩文が充填される。残存高は23.6cmである。2は浅鉢形土器の胴下半から底部である。無



第18図 第3号住居跡

第5表 第3号住居跡ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P 1	30.0	30.0	24.0	P 2	36.0	29.0	41.0				



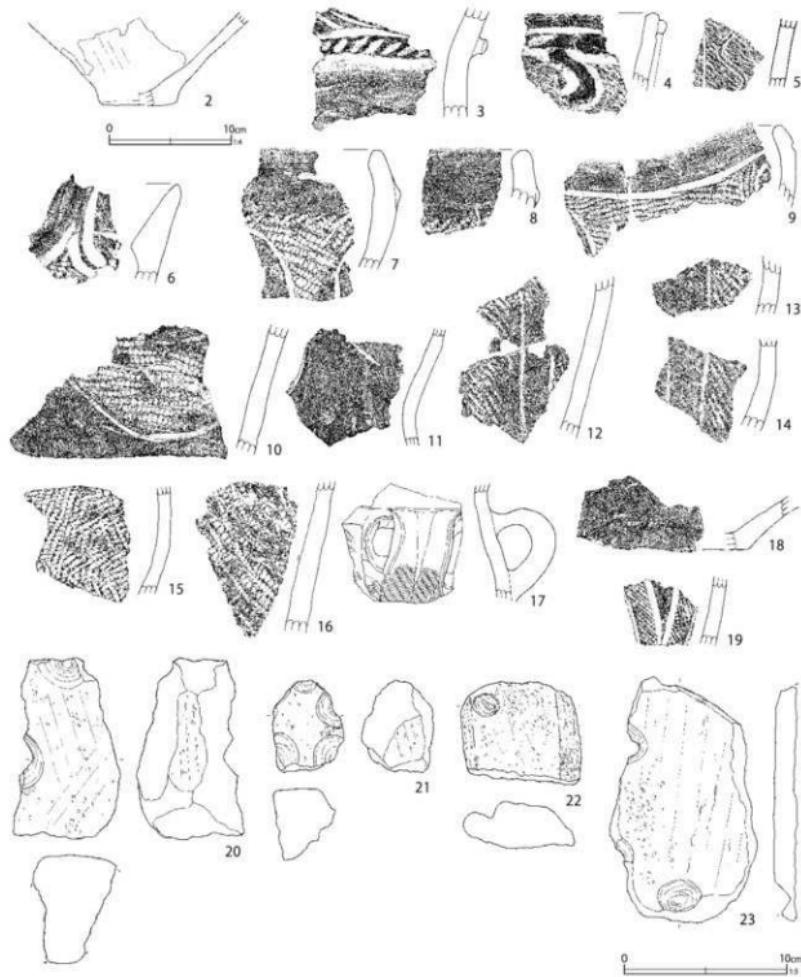
第19図 第3号住居跡出土遺物（1）

文で調整痕が認められる。残存高6.8cm、底径6.0cmである。

3～19は破片資料である。3は勝坂式末葉の土器である。4、5は、加曾利E I～II式である。6～18は加曾利E III式の新しい段階が主体となる。6～18は、深鉢形土器である。7～11は、口縁部文様がなくなり、胴部には波状文や逆U字状文が施文される。6は口縁の突起部分である。7～9は口縁部文様が狭い無文帶となるもので、胴部と7、8は微隆起状の隆帯で、9は沈線

で区画されている。胴部の文様内は磨り消されている。10、11は胴上部で、10は波状文内に地文を充填している。12～14は胴部の破片で、沈線で磨消懸垂文が施文される。15、16は地文のみが施文される。地文は、7～10、12～14は単節L Rの縄文で、6は単節R Lの縄文である。17は両耳壺の把手部分で、地文として単節L Rの縄文が施文される。18は浅鉢形土器の底部である。19は後期初頭称名寺式土器である。

20～23は出土した石器である。いずれも、器



第20図 第3号住居跡出土遺物（2）

第6表 第3号住居跡出土石器観察表（第20図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
20	石皿	[11, 2]	[6, 7]	6.7	488.2	閃緑岩	一部残存
21	石皿	[5, 7]	[4, 5]	4.5	112.5	安山岩	一部残存
22	磨石	[6, 4]	[7, 4]	[3, 9]	200.6	安山岩	No2 一部残存
23	石皿	[15, 2]	[9, 1]	[1, 6]	331.7	緑泥片岩	No1 一部残存

面に漏斗状の凹部が残されている。22は磨石類で、他は石皿の小破片である。

第4号住居跡（第21～23図）

第4号住居跡は、L-12グリッドに位置する。東側を近世の第7号溝跡に、北側は重複する第4号住居跡を壊している。

平面形状は楕円形で隅丸方形ある。規模は長軸(3.42)m、短軸3.30m、深さ0.18mである。住居の形状を基準とした主軸方位は、N-40°～Wである。

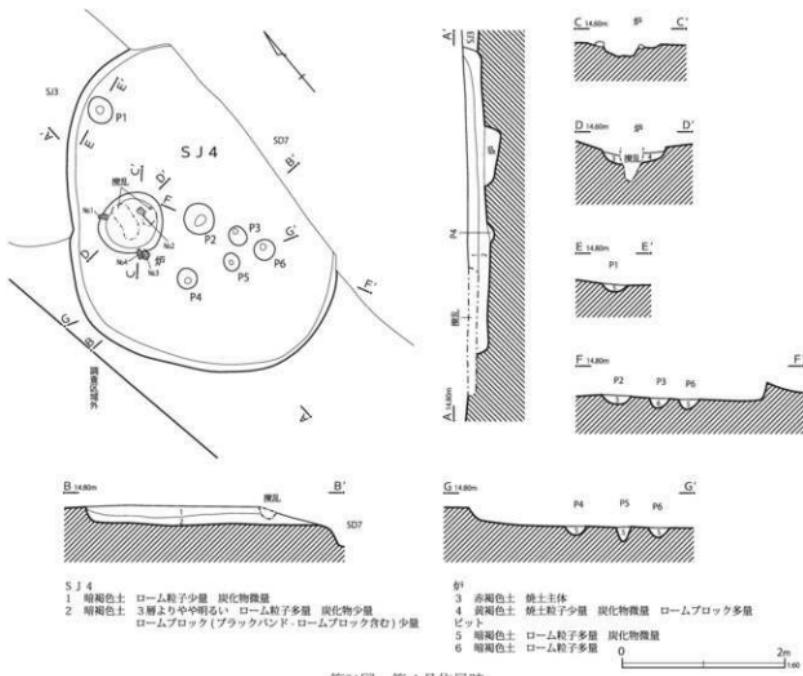
柱穴は6本が検出された。いずれも浅く、不規則に検出された。壁柱穴であったと考えられる。

炉は、中央西側から検出された。炉の縁辺からは、磨石類の破片などが検出され、石囲炉であった可能性がある。炉の平面形状は円形である。規模は、長径0.80m、短径0.76m、深さ0.21mである。

時期は、出土土器は、加曾利E III式からE IV式まで混在するが、第3号住居跡を壊していることから、加曾利E III末から加曾利E IV式期と考えられる。

第22図1～25は出土した土器である。

1～23は深鉢形土器の破片資料である。1～15は加曾利E式土器である。1～4は口縁部で、1は波状口縁の波頂部、2は橋状把手の破片であ

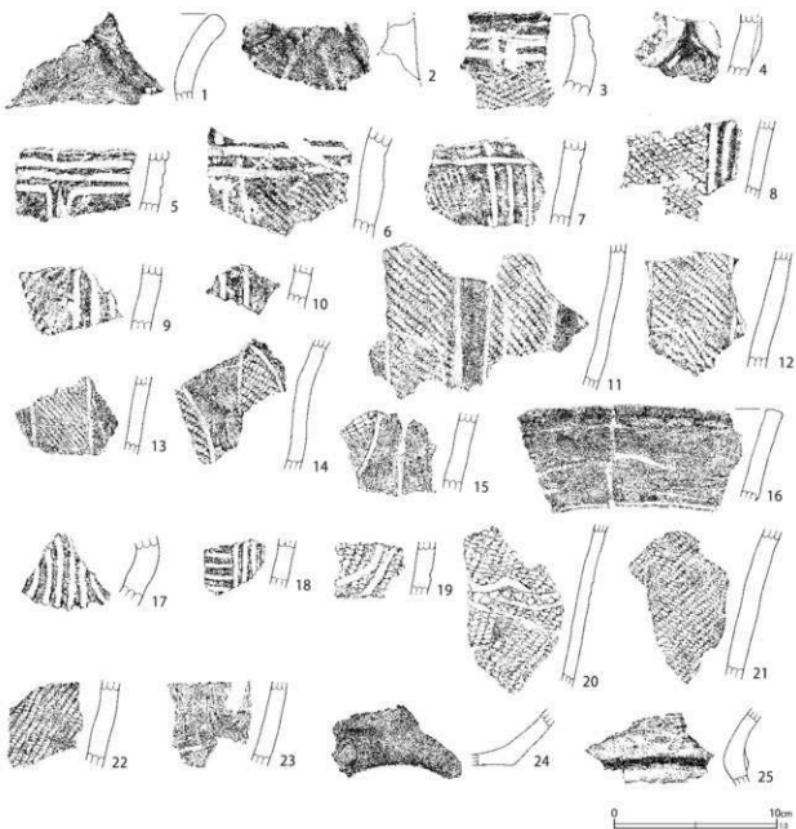


第21図 第4号住居跡

第7表 第4号住居跡ピット計測表

(cm)

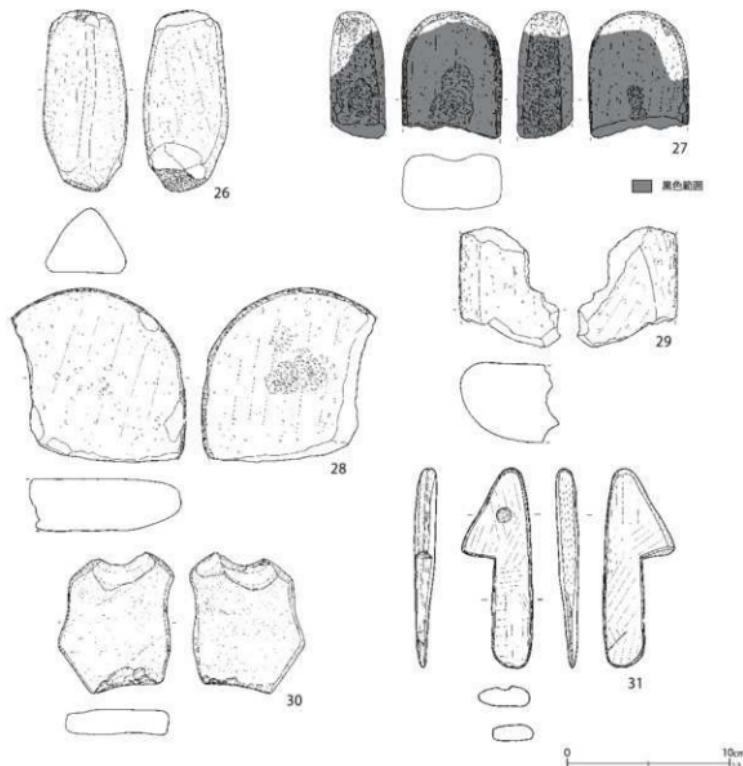
番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P 1	33.0	30.0	9.7	P 2	48.0	48.0	10.0	P 3	24.0	20.0	13.3
P 4	23.0	23.0	10.7	P 5	21.0	20.0	16.0	P 6	25.0	25.0	12.0



第22図 第4号住居跡出土遺物（1）

る。4は口縁部文様帶の破片で、隆帯脇には幅広の沈線が施される。5～7は頸部から胴部の破片で、頸部と胴部は沈線によって区画される。胴部には3本1組の沈線を垂下させ、沈線間は磨り消している。8～13は胴部で、沈線による磨消懸垂文が施される。沈線文間は磨り消されている。14、15は沈線で波状文などが施されるもので、加曾利EIV式と考えられる。文様内には地文が充填されている。地文は、3、6、7、9

～12、14、15は単節LR、4は単節RL、5は無節L、8は複節LRL、13は多条LRLの縄文が施される。16は口縁に幅広の無文部を持つている。17、18は地文が条線の曾利系土器である。19、20は連弧文系の土器で、3本1組の沈線で波状文を施文するが、文様のくずれが顕著である。21～23は地文のみ施文され、21、22は単節RLの縄文、23は条線である。24は浅鉢形土器の底部、25は両耳壺の頸部と考えられる。



第23図 第4号住居跡出土遺物（2）

第8表 第4号住居跡出土石器・石製品観察表（第23図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
26	敲石	[11.2]	5.2	4.4	312.1	砂岩	赤色化
27	磨石	[7.8]	6.1	3.4	302.1	閃緑岩	一部黒色化
28	磨石	[10.8]	[10.7]	3.3	593.4	閃緑岩	
29	石皿	[7.4]	[6.2]	[5.9]	295.0	安山岩	
30	石錐	8.7	7.1	1.8	165.9	安山岩	
31	垂飾	8.2	2.9	0.9	22.7	砂岩	木製品

第23図26～29は出土した石器である。26は敲石である。棒状で、端部に敲打痕が顕著に認められる。27、28は磨石である。いずれも表面に敲打痕が残されている。29は石皿の小破片である。表面に使用による凹みが認められる。

第23図30、31は石製品で、30は石錐である。31は、器面を丁寧に磨いている。表面には円孔が認められるが、貫通はされていない。垂飾の未製品と考えられる。

第5号住居跡（第24、25図）

第5号住居跡は、K、L-13グリッドに位置する。南側に第2号住居跡が近接している。

掘り込みはなく、柱穴から平面形状は円形と推定される。推定される規模は、長径（4.92）m、短径（4.86）mである。主軸方位は不明である。

柱穴は7本が検出された。いずれも浅く、壁に沿って掘られた壁柱穴であったと考えられる。

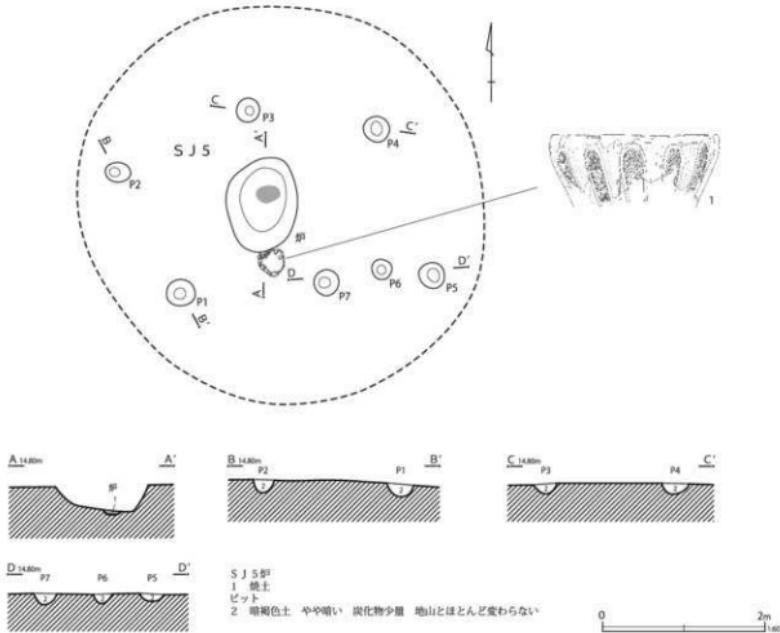
炉は地床炉で、中央から検出された。炉の平面形状は梢円形である。規模は、長径1.14m、短径0.87m、深さ0.32mである。

炉の南側からは第25図1の、キャリバー形の深鉢形土器が伏甕状に検出された。表土掘削時に露出して検出されていたもので、住居跡の廃絶後に埋設されたと考えられる。

住居跡の時期は、出土土器から加曾利E III式期と考えられる。

第25図1～13は出土した土器である。

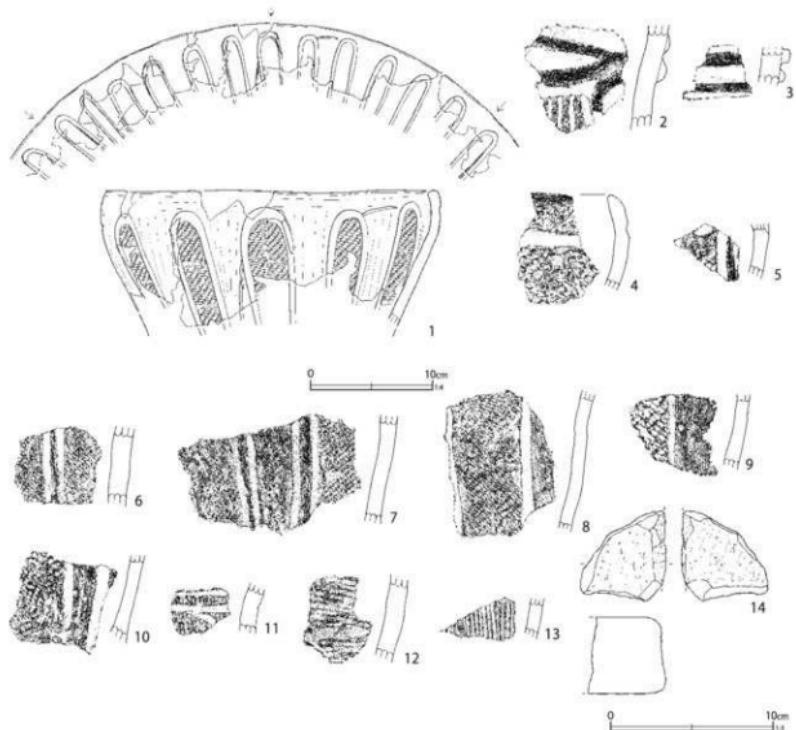
1は器形復元が可能であった土器である。キャリバー形の深鉢形土器の口縁から胴上部である。口縁部文様帶はなくなり沈線で、逆U字状文が12単位施文され、文様が多単位化している。文様内



第24図 第5号住居跡

第9表 第5号住居跡ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P 1	35.0	30.0	14.5	P 2	30.0	23.0	15.7	P 3	29.0	29.0	11.5
P 4	32.0	30.0	14.0	P 5	30.0	30.0	11.1	P 6	25.0	25.0	11.7
P 7	30.0	30.0	12.5								



第25図 第5号住居跡出土遺物

第10表 第5号住居跡出土石器観察表 (第25図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
14	石皿	[5.6]	[5.3]	4.7	194.0	安山岩	一部残存

には単節R Lの縄文が縦方向に充填されている。口径26.6cm、残存高11.2cmである。

第25図2～13は深鉢形土器の破片資料である。2、3は頸部に隆帯が巡らされるもので、2は地文が条線の曾利系の土器である。住居跡の時期よりも古い。4～10はキャリバー形の深鉢形土器である。4は無文の狭い口縁部を作り出し、胴部とは沈線で区画されている。5～10は胴部で、平行する沈線で、磨消懸垂文が施文される。地文は4がO段多条RL、5は単節LR、6～10は

単節RLの縄文が施文される。11は頸部の破片で、胴部とは、2本の平行する沈線で区画されている。地文は条線で曾利系の土器である。12、13は地文のみが施文されている。

第25図14は石皿の小破片である。

第6号住居跡 (第26、27図)

第6号住居跡は、J、K-14グリッドに位置する。中世の第1号堀跡と近世の第2号溝跡の間から検出された。近世の土壤を精査中に、炉跡が検出され縄文の住居跡であることがわかつた。他

と同様、覆土が漸移層とほとんど変わらないため、住居跡を確認することが困難であった。住居跡内は、近世の土壤である第56、69、85号土壤やピットが重複し壊されている。

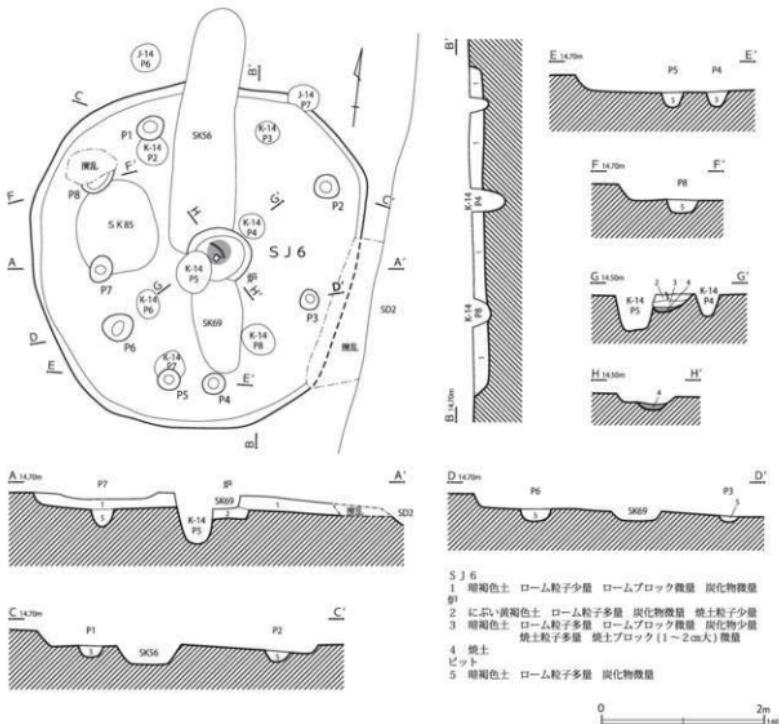
平面形状は円形である。推定される規模は長径(4.26) m、短径4.08m、深さ0.18mである。主軸方位はN-7°-Wである。

柱穴は8本が検出された。いずれも浅く、壁に沿うように検出された。

炉は中央から検出された。炉内からは第27図8の大型土器片が検出されており、土器埋設炉であった可能性がある。炉の平面形状は円形である。規模は、長径[0.50] m、短径0.72m、深さ0.17mである。

住居跡の時期は、炉から出土した土器から、加曾利E III式期と考えられる。

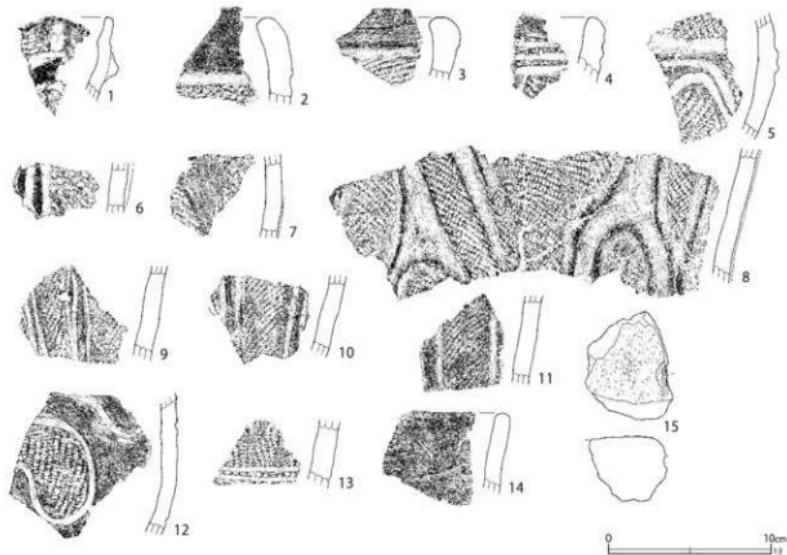
第27図1～14は出土した深鉢形土器の破片である。8以外は小破片で、器形復元できるものは



第26図 第6号住居跡

第11表 第6号住居跡ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P 1	35.0	29.0	13.0	P 2	32.0	28.0	13.0	P 3	24.0	24.0	8.2
P 4	35.0	25.0	18.5	P 5	29.0	25.0	18.5	P 6	38.0	32.0	14.0
P 7	33.0	26.0	19.2								



第27図 第6号住居跡出土遺物

第12表 第6号住居跡出土土器観察表（第27図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
15	石皿	[6.7]	[5.5]	[4.5]	155.0	閃緑岩	一部残存

検出されなかった。

1～3、5～11はキャリバー形の深鉢形土器である。1～3は口縁部である。1は波状口縁の波頂部の破片である。口縁と胴部とは隆帯で区画されている。2、3は無文の口縁部と胴部が沈線で区画される。5は口縁部に近いもので、胴部には2本1組の沈線で波状文などが施文されている。6～8は微隆起状の隆帯で文様が施文される。8は2本1組の隆帯で渦巻き文などが施文されている。9～11は2本1組の沈線で、胴部に磨削感・垂文が施文されている。地文は2、5、9～12は単節LR、3、7、8は単節LR、6は無節Lが施文されている。

12は大木系の土器で、アルファベットが施文されている。地文は単節RLの縄文である。

4、13は連弧文系の土器で、3本1組の沈線で文様が施文されている。4は口縁部、13は頭部の破片である。地文は単節LRの縄文である。

14は無文の開口縁を持つ器形である。

15は石皿の小破片である。

(2) 土壌

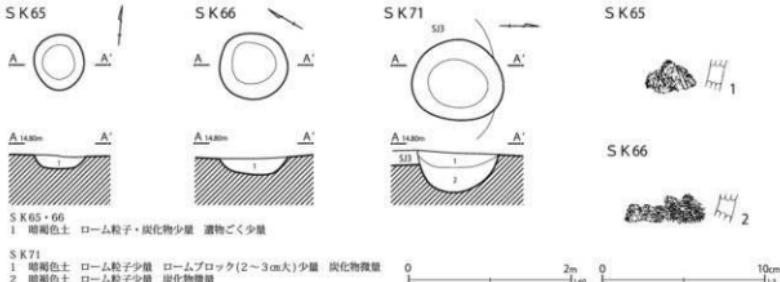
縄文時代の土壌は3基検出された。基本土層の1層に近い覆土の土壌を縄文時代とした。

第65号土壌（第28図）

第65号土壌はK-13グリッドに位置する。第2号住居跡の東側に隣接している。第28図1は出土した早期後半の条痕文系土器の胴部片である。

第66号土壌（第28図）

第66号土壌はK-13グリッドに位置する。第



第28図 土壌・土壤出土遺物

第13表 縄文土壌計測表

遺構番号	位置	平面形	長径方向	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	重複遺構
SK65	K-13	円形	N-25°-W	0.66	0.60	0.16	
SK66	K-13	円形	N-20°-W	0.84	0.81	0.22	
SK71	L-12	楕円形	N-6°-E	1.13	0.97	0.43	SK3

65号土壌の東側に隣接している。第28図2は出土した、中期の深鉢形土器の小片である。

第71号土壌（第28図）

第71号土壌はL-12グリッドに位置する。第3号住居跡と重複し、北壁を壊していることから、中期後半以降の時期と考えられる。

（3）グリッド出土遺物

遺構に伴わなかった土器・土製品・石器である。土器と土製品については、第3号溝跡より東側からは検出されなかった。石器については、調査区全体から散逸的に検出された。

グリッド出土土器（第29～31図）

グリッド出土土器は、前期から後期の土器が検出された。ここでは第I群土器を前期、第II群土器を中期、第III群土器を後期として大別し、さらに各群内で細別した。

第I群土器

前期の土器群を一括する。

第1類土器（第30図2～17）

前期前葉の関山式土器を一括した。2～5は口縁部に半裁竹管で文様を施す土器である。6、14は貝殻によって地文が施される。6は押圧状

に施文されるが、14は回転状に施文されている。7～13、15は縄文のみが施文されるもので、7、8はループ文が施文されている。11～13はコンバス文が施文される。11は注口部分である。15は器面に孔を貫通させている。補修孔の可能性がある。16は上げ底の底部である。

第2類土器（第30図18～55）

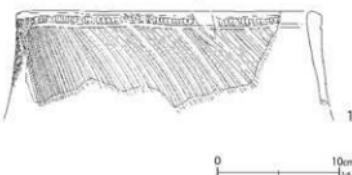
前期後葉の土器を一括する。

18～42は諸磯式土器である。18～23は諸磯a式である。24～38は諸磯b式である。24～27は竹管文が施文され、28～38は浮線文が施文される。39～42は諸磯c式である。集合沈線が施文される。

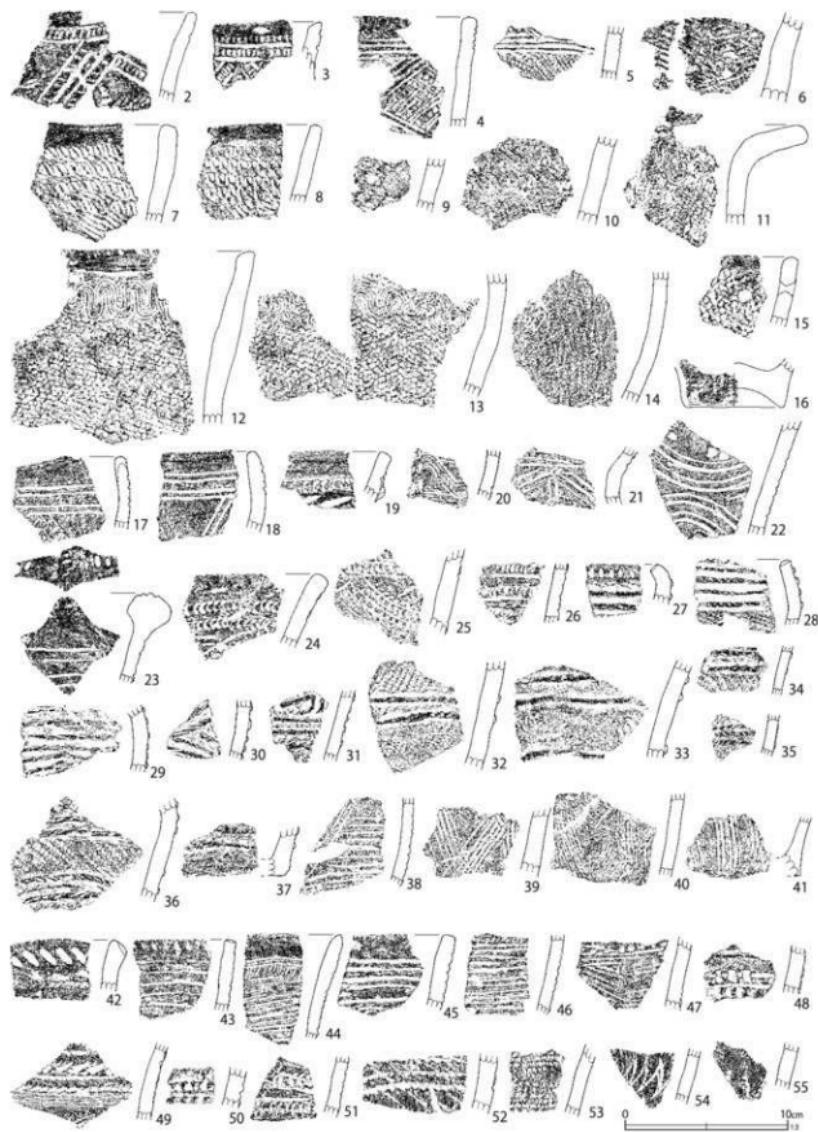
43～55は浮島・興津式土器である。

第II群土器

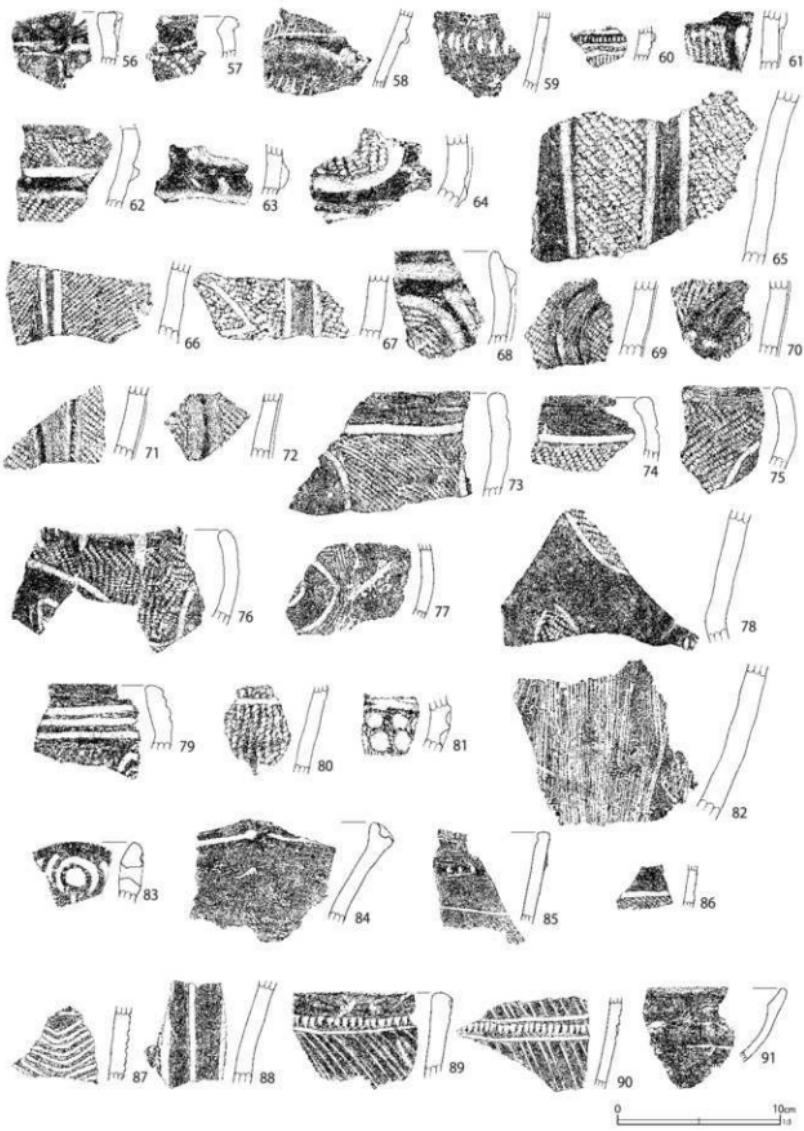
中期の土器群を一括する。



第29図 グリッド出土土器（1）



第30図 グリッド出土土器（2）



第31図 グリッド出土土器（3）

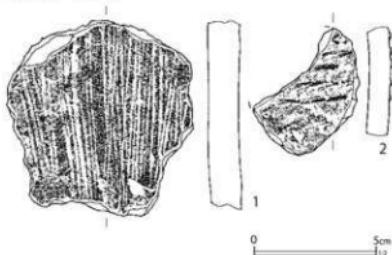
第1類土器（第31図56～60）

中期中葉の土器を一括した。56～59は阿玉台式土器である。57は結節沈線が施文され、胎土に金雲母が含まれる。60は勝坂式末葉の土器である。

第2類土器（第31図61～82）

中期後葉の土器を一括した。

61～78は加曾利E式土器で、61は加曾利E I式、62、63は加曾利E II式と考えられる。61は地文として撚糸文Lが施文されている。64～67は沈線で磨消懸垂文が施文される加曾利E III式土器である。68～77は口縁部文様帯がなくなる、新しい様相を持つ加曾利E III式土器である。68～72は微隆起線状模文で文様が施文される。78は加曾利E IV式土器で、後期初頭の可能性がある。70、80は連弧文系の土器である。81、82は浅鉢形土器である。



第32図 グリッド出土土製品

第14表 グリッド出土土製品観察表（第32図）

番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	SD3	土製円盤	7.6	7.5	1.2	93.4	
2	SD2	土製円盤	4.4	4.1	0.9	15.3	

第15表 グリッド出土石器観察表（第33図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構名	備考
1	打製石斧	[5.6]	6.5	[2.9]	142.7	ホルンフェルズ	SD2・3	1/2 残存
2	打製石斧	[5.3]	5.7	2.3	102.8	砂岩	SD1	1/4 残存
3	敲石	9.9	2.8	2.6	96.1	砂岩	SE3	左側縁欠損 赤色化
4	磨石	[7.5]	[5.7]	[5.2]	277.2	安山岩	SD3	1/4 残存 黒色化
5	磨石	[5.5]	[4.7]	3.6	128.0	安山岩	SD1	一部残存 一部黒色化
6	磨石	9.7	6.1	4.9	399.3	砂岩	SD3	完形 赤色化
7	磨石	[5.4]	[7.7]	4.0	234.3	安山岩	SE3	下層 1/2 残存 一部赤色化
8	石皿	[11.9]	[9.2]	5.4	747.5	安山岩	SD2・3	
9	石皿	[11.0]	[7.9]	[8.3]	761.1	閃緑岩	SE3	一部残存 一部黒色化・赤色化
10	石皿	[9.3]	[10.0]	[5.0]	535.5	安山岩	SD3	一部残存
11	石皿	[8.4]	[8.5]	[7.2]	477.6	安山岩	SE3	No5 一部残存

第Ⅲ群土器

後期の土器群を一括する。

第1類土器（第31図83～88、91）

後期前葉の土器を一括する。83、84、87、88は堀之内I式、85、86、91は堀之内2式である。91は鉢形土器で、他は深鉢形土器である。

第2類土器（第29図1、第31図89、90）

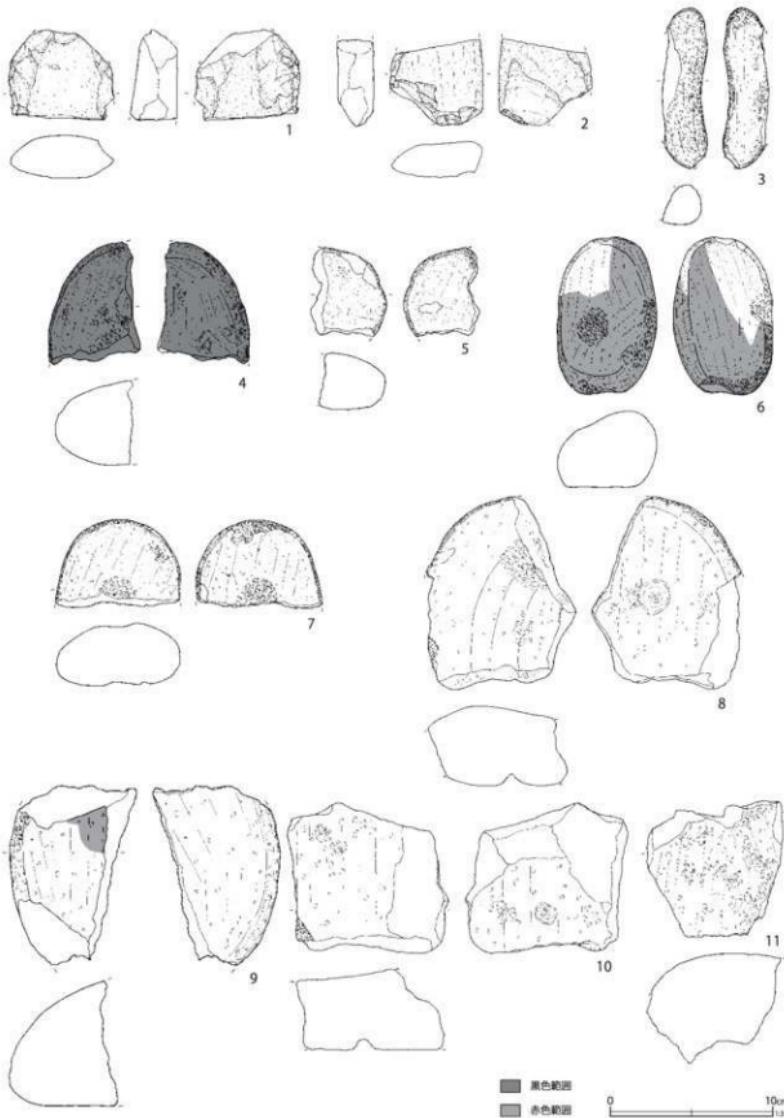
後期後葉の土器を一括する。1、89、90は平行1式の紐線文土器である。1は器形復元が可能であった深鉢形土器の口縁部である。口縁部に沈線文を巡らし、沈線の直上に刻みが巡らされている。推定口径23.6cm、残存高7.9cmである。

グリッド出土土製品（第32図）

第32図1、2は出土した土製円盤である。1は中期後半、2は前期後葉葉諸磧b式の深鉢形土器の胴部片を利用している。

グリッド出土石器（第33図）

第33図1～11は出土した石器である。1、2は打製石斧である。1は基部、2は刃部の破片である。扁平な自然礫を利用している。3は敲石である。上下端部、側縁に敲打痕が認められる。4～7は磨石である。8～11は石皿である。8は、割れ口に磨面や敲打痕が認められるもので、破損後磨石として転用されたと考えられる。8と10の裏面には、漏斗状の凹部が認められる。



第33図 グリッド出土石器

2 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、調査区の3区を中心に検出された。3区の中で中世とした遺構は、堀跡で区画された館の内郭部分に想定される。第3号堀跡より東側である。検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、ピット296基、井戸跡4基、埋蔵鉄4基、埋蔵銭関連土壌2基、地下式坑2基、堀跡2条、土壙30基を検出した。

(1) 掘立柱建物跡 (第34図)

3区からは、ピットが重複して多量に検出された。規模も大きく、深く掘削されたものも多かった。重複が激しく、調査時には柱穴の配置から掘立柱建物跡を確認することは困難であった。

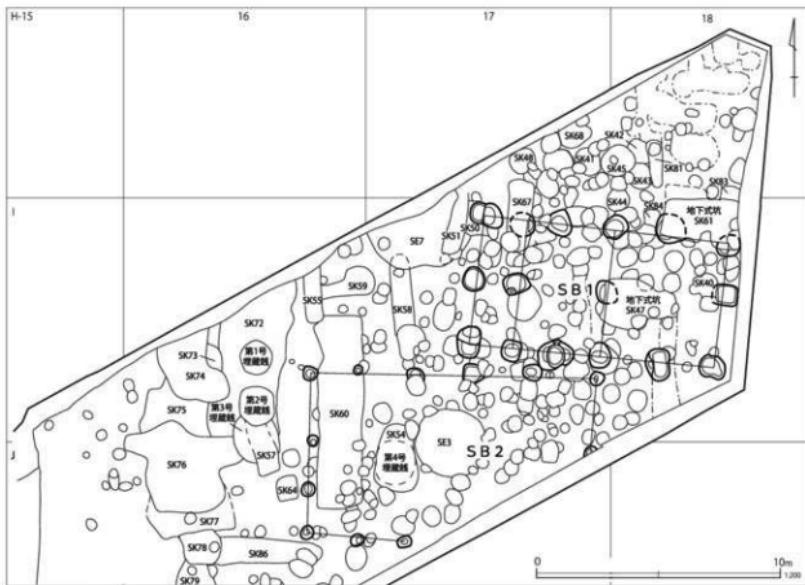
検出されたピットには、土層から柱痕が観察されたもののが多かった。また、柱痕部分に灰白色粘土ブロックが充填されたものも複数検出された。そこから、柱穴と考えられるピットの配置を検討

し、2棟の掘立柱建物跡を復元した。

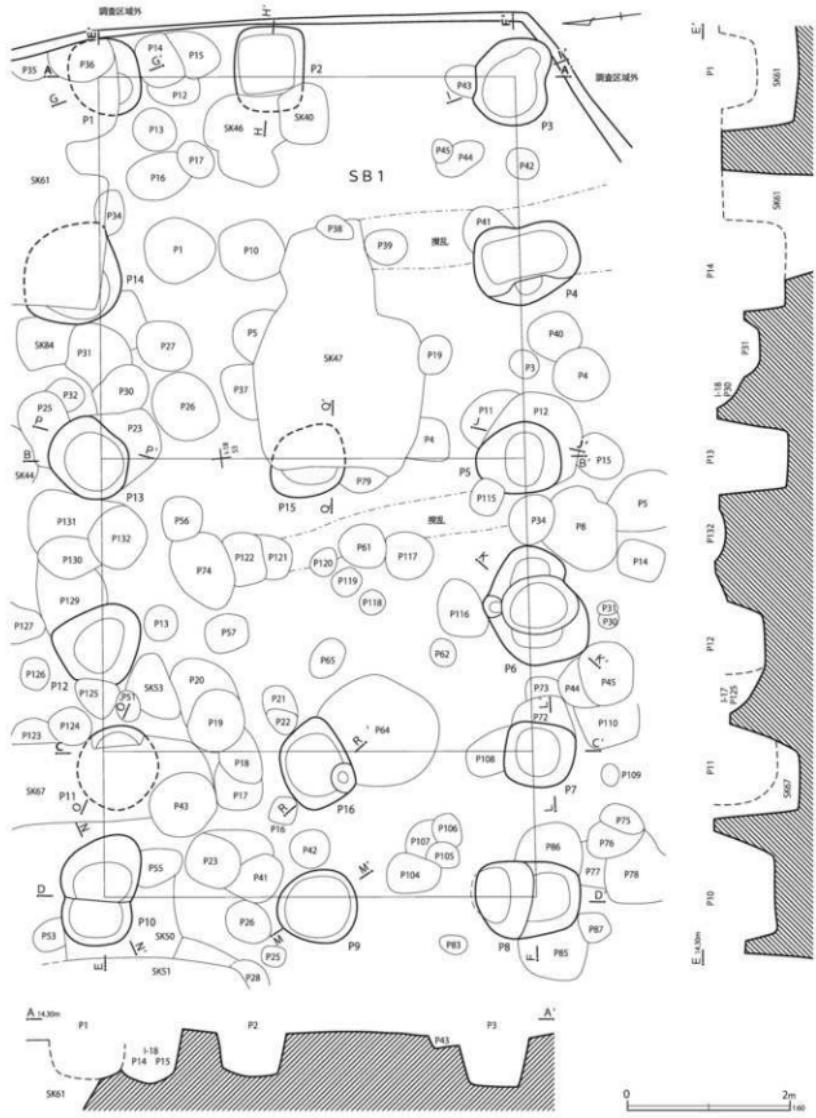
第1号掘立柱建物跡 (第35～37、40図)

第1号掘立柱建物跡は、I-17、18グリッドから検出された。南側には、第2号掘立柱建物跡が隣接する。東側は調査区域外で東側に建物が伸びる可能性もある。本建物の柱穴は、第46・47・50・61・64・67号土壙を壞している。他にも周辺の柱穴と重複関係にある。

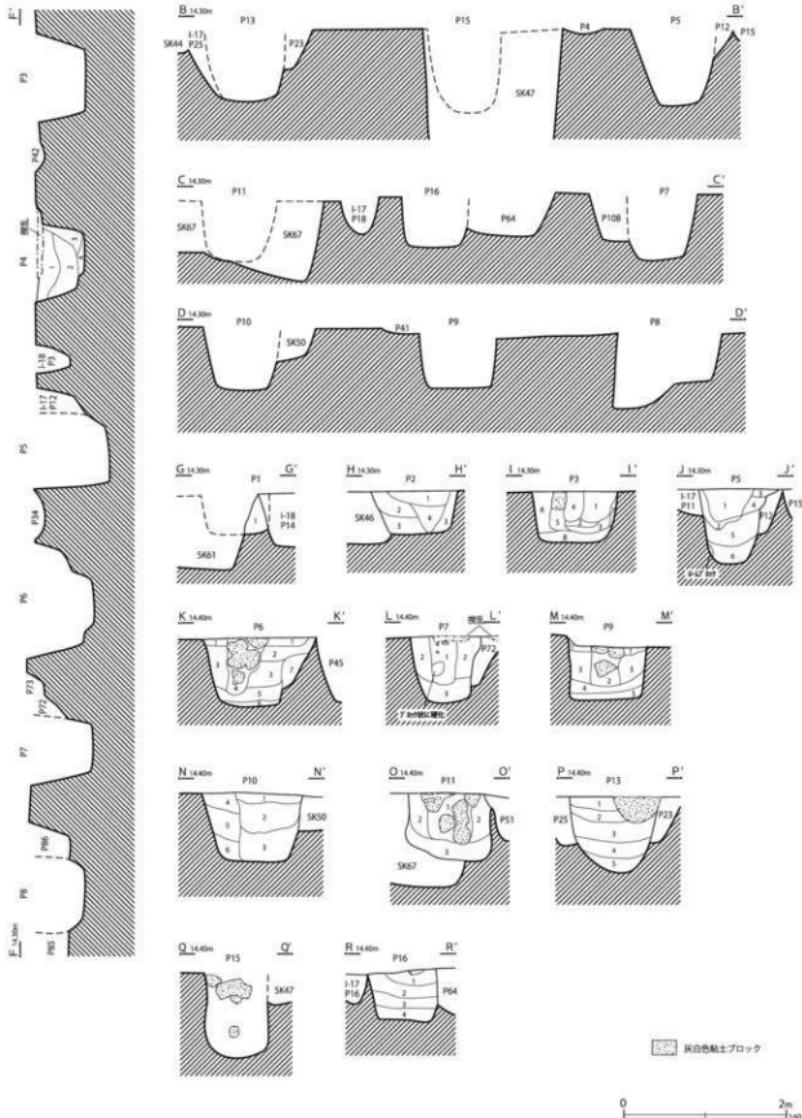
建物規模は、桁行5間、梁行2間の西側に廂をもつ東西棟の建物跡である。桁行10.0m、梁行5.3m、柱間は桁行P3～P8で2.3-2.3-1.8-1.8-1.8m、東側の梁行P1～P3で2.3-3.0m、西側の梁行P8～P10で2.65-2.65mである。主軸方位はN-81°-Wである。柱穴の掘方は長径0.84～1.47m、深さ0.50～1.08mの隅丸方形である。柱穴の土層観察では柱痕が残るも



第34図 掘立柱建物跡全体図



第35図 第1号掘立柱建物跡 (1)



第36図 第1号掘立柱建物跡 (2)

S B 1 P 1	ローム粒子(粗) 多量 炭化物少量
P 2	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 炭化物微量
P 2	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1~2cm大)・炭化物少量
P 3	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1~10cm大) 多量
	黒色土が混入 炭化物微量
P 3	褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量 杖痕
P 4	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~3cm大)・炭化物少量
P 4	褐色土 ローム粒子(粗) ロームブロック(1~2cm大) 多量 炭化物微量
P 4	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1cm大)・炭化物微量
P 4	褐色土 ローム粒子(粗) 炭化物微量 杖痕 しまりなし
P 4	褐色土 ローム粒子(粗) 炭化物微量 杖痕 しまりなし
P 4	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 多量 炭化物微量
P 4	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 密に多量 ソフトローム多量 固くしまる
P 4	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大)・炭化物・灰褐色土 粒子少量 灰褐色土粒子微量
P 4	褐色土 ローム粒子(粗) ロームブロック(1~2cm大) 多量 炭化物少量
P 4	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1~2cm大) 多量 炭化物微量
P 4	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 多量 炭化物微量
P 5	褐色土 灰白色粘土ブロック(20~30cm大) 主体となりて埋められている層
P 5	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 灰白色粘土粒子状にうき入る しまりない
P 5	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 灰褐色粘土粒子微量
P 5	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 微量 炭化物少量
P 5	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 多量 炭化物微量
P 5	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 多量 炭化物微量
P 6	褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大) 多量
P 6	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~3cm大) 密に多量 炭化物少量
P 6	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大)・炭化物少量
P 6	褐色土 黒色粘土ブロック状に少量 固くしまる
P 6	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 黒色粘土ブロックが落ち込むように入れる しまりなし 杖痕
P 6	褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック(1cm大) 粒度 しまるの 黏性あり
P 6	褐色土 ローム粒子、ロームブロック(1~2cm大) 少量 固くしまる 黏性あり
P 6	褐色土 ソフトローム主体 炭化物少量

第37図 第1号掘立柱建物跡（3）

のがあり、P 3、6、9、11、13、15、16には灰白色粘土ブロックが充填されている。また、柱痕の周囲には径1~3cm大のロームブロックが多く含む埋土が見られる。

遺物は第40図1~14が出土した。かわらけや陶磁器が出土したのは、北辺のP 12、13、東辺のP 2、南辺のP 3~6である。

P 13からは、かわらけ8片、陶磁器2片が出土したが、隣接するピットと一緒に取り上げられており、確実に建物のピットに伴うとは断定できない。6は瀬戸美濃系陶器の鉄釉皿で、地下式坑である第61号土壙から同一個体の破片が出土

P 7	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 灰白色粘土ブロック上層に少量 しまりなし 杖痕
P 7	褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 多量 固くしまる
P 7	褐色土 ローム粒子多量 固くしまる
P 9	褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大) 多量
P 9	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 灰白色粘土ブロックが落ち込むように入る 炭化物微量 粘性 しまりなし 杖痕
P 9	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 灰白色粘土ブロック(1~2cm大)・炭化物微量
P 10	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 灰白色粘土ブロック(1~2cm大)・炭化物微量
P 10	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 灰白色粘土ブロック(1~2cm大)・炭化物微量
P 10	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 灰白色粘土ブロック(1~2cm大)・炭化物微量
P 10	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 灰白色粘土ブロック(1~2cm大)・炭化物微量
P 11	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1cm大)・炭化物・焼土粒子・灰白色粘土ブロック(2cm大)微量
P 11	褐色土 ローム粒子(粗) 少量 灰白色粘土微量
P 13	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~4cm大)・炭化物微量
P 13	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大)・炭化物微量
P 13	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~3cm大) 密に多量 炭化物微量
P 13	褐色土 烧土粒子少量 灰白色粘土粒子粘性微量
P 13	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大)・炭化物微量
P 13	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 灰白色粘土微量
P 16	褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~3cm大) 少量 炭化物微量
P 16	褐色土 灰白色粘土ブロックが帶状に混入する層 固くしまる 黏性あり
P 16	褐色土 黒色土中にソフトロームが帯状に混入する層 固くしまる 黏性あり
P 16	褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~3cm大) 多量
P 16	褐色土 灰白色粘土ブロック少量 灰白色粘土粒子多量
P 16	褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~3cm大) 密に多量 炭化物微量
P 16	褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大)・炭化物微量
P 16	褐色土 烧土粒子微量

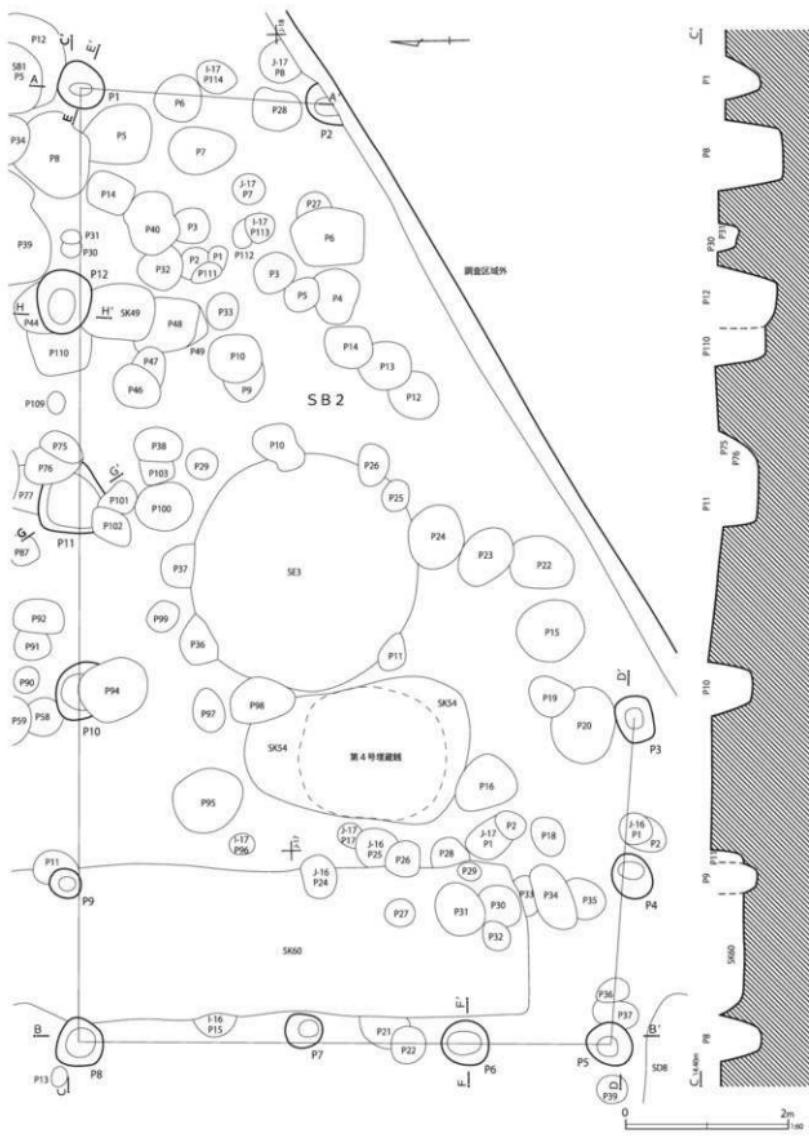
している（第124図9）。大窯第4段階の所産で、16世紀末に位置づけられる。7は中国産青花の細片で、内面のみ染付が残る。

P 2からは、かわらけの体部下位破片1片が出土したが、図示し得なかった。

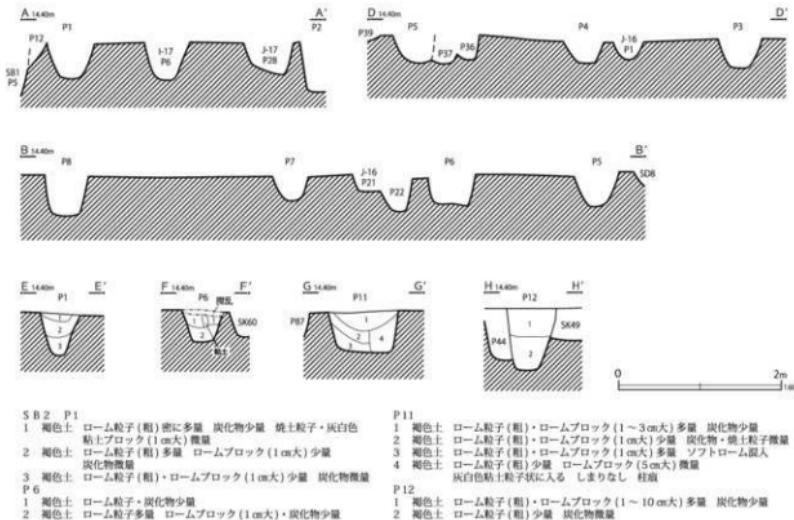
P 3からは、かわらけ4片と常滑焼細片が出土したが、図示し得なかった。P 4からは、かわらけ8片が出土した。1はかわらけの口縁部破片である。胎土は粗く、径1mm程の赤色粒子を多く含むほか、角閃石も一定量含む。5はかわらけの底部破片で、内面には回転ナデが施される。P 5からは、かわらけ口縁部1点と土師器壺1点が出土し

第16表 第1号掘立柱建物跡ビット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P 1	90.0	[26.0]	50.9	P 2	[85.0]	84.0	55.1	P 3	114.0	75.0	64.4
P 4	127.0	92.0	60.0	P 5	103.0	87.0	92.0	P 6	147.0	105.0	83.2
P 7	84.0	78.0	82.5	P 8	125.0	90.0	93.5	P 9	96.0	86.0	79.2
P 10	133.0	85.0	82.1	P 11	[107.0]	100.0	108.0	P 12	110.0	92.0	61.8
P 13	102.0	83.0	90.3	P 14	130.0	[30.0]	78.8	P 15	92.0	[35.0]	101.4
P 16	100.0	83.0	64.7								



第38図 第2号掘立柱建物跡（1）



第39図 第2号掘立柱建物跡（2）

第17表 第2号掘立柱建物跡ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P 1	60.0	50.0	50.3	P 2	60.0	[25.0]	65.0	P 3	57.0	40.0	38.4
P 4	57.0	45.0	42.8	P 5	57.0	52.0	48.1	P 6	58.0	55.0	37.5
P 7	43.0	41.0	32.3	P 8	62.0	61.0	51.2	P 9	38.0	34.0	17.0
P 10	71.0	[35.0]	54.0	P 11	80.0	[73.0]	49.6	P 12	78.0	60.0	77.2

た。2はかわらけで口縁部がやや玉縁状になる。

被熱が認められる。P 6からは、かわらけ4と瓦質土器細片が出土した。3、4にかわらけを示した。いずれも強く被熱しており、3の口縁部は変形して一部膨張している。

北辺のP12からは、8の板状を呈する鉄製品が出土している。

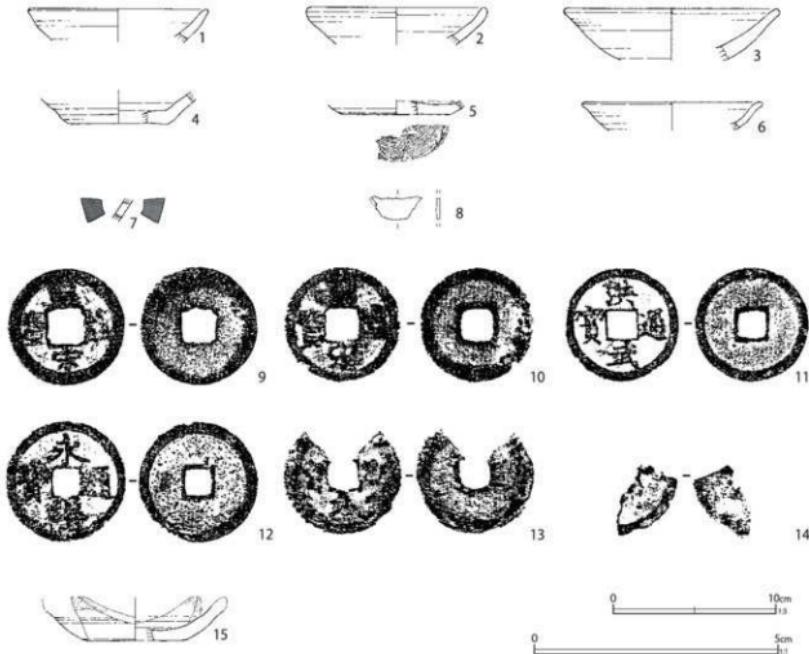
9~14は出土した銭貨である。いずれも他の重複するピット一括で取り上げられたものである。
第2号掘立柱建物跡（第38~40図）

第2号掘立柱建物跡は、I-16、17、J-16、17グリッドから検出された。北側には、第1号掘立柱建物跡が隣接する。南東側は調査区域外に伸びている。本建物は、第3号井戸跡、第54、60号土壙、第4号埋蔵線と重複し、第49号土壙を壊し

ている。他にも周辺の柱穴と重複関係にある。

建物規模は、桁行5間、梁行3間の東西棟の側柱建物跡である。桁行11.65m、梁行6.80m、柱間は桁行P 8~P 12、P 1で西から1.80~2.35~2.35~2.35~2.80m、西側の梁行P 5~P 8で2.0~2.0~2.8mである。主軸方位はN-88°-Wである。柱穴の掘方は長径0.38~0.80m、深さ0.17~0.77mの円形である。柱穴の土層観察では、径1cm大のロームブロックや炭化物粒子が含まれる埋土が見られる。

遺物は、P 12からかわらけ4片（体部3、底へ口縁部1）が出土した。第1号掘立柱建物跡の、P 6と同一個体と考えられるかわらけが2個体分あり、いずれも被熱していた。第40図15にそのうちの1個体を示す。



第40図 挖立柱建物跡出土遺物

第18表 第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	かわらけ	小皿	[10.8]	[2.0]	—	CHI	5	普通	淡黄橙	P4	胎土砂質 外面保付着	27-1
2	かわらけ	小皿	[10.8]	[2.3]	—	AII	5	普通	淡黄橙	P5	被熱・上部変色	27-2
3	かわらけ	小皿	[13.0]	[3.1]	—	AII	20	普通	橙	P6	胎土粉質 被熱により一部変形・変色	27-3
4	かわらけ	小皿	—	[2.0]	(6.0)	EGI	10	普通	明黄褐色	P6	胎土砂質 被熱・一部変色	
5	かわらけ	小皿	—	[0.9]	(6.6)	EHI	5	普通	淡黄橙	P4	底部系切痕	27-4
6	陶器	碟皿	[10.8]	[1.7]	—	DK	5	普通	淡黄橙	P13	瀬戸美濃系 内外面施釉 SK61に同一個体あり	27-5
7	磁器 (青花)	盤	現存長	[1.6]	—	K	5	普通	淡黄橙	P13	中国景德鎮窯系 内外面施釉 内面染付	27-6
8	鉄製品	不明	縦 [1.4]cm	横 [3.1]cm	厚さ 0.2cm	重さ 3.2g				P11		48-7
15	かわらけ	小皿	—	[2.7]	(6.6)	AII	10	普通	にぶい 黄橙	P11	底部系切痕 (磨耗激しい) 胎土粉質 被熱 体 部上位は黒化・変形 (発泡)	27-7

第19表 第1号掘立柱建物跡出土銭貨観察表(第40図)

編 番 号	銭貨名	背面	銭径 (mm)		銭厚 (mm)	重量 (g)	書体	残存	初鑄年・国	出土 位置	備考	図版
			縦	横								
9	皇宋通寶		24.75	24.66	1.63	3.3	真書	完形	1038 北宋	P11		47-2
10	皇宋通寶		24.10	23.92	1.73	2.6	真書	完形	1038 北宋	P10		47-2
11	洪武通寶		23.80	23.90	1.68	2.8	真書	完形	1368 明	P10	マ頭通・単点通	47-2
12	永樂通寶		25.09	25.01	1.65	2.8	真書	完形	1408 明	P10		47-2
13	□口元通寶		24.94	[21.89]	1.81	1.7	真書	2/3残		P1		47-2
14	不明		[16.67]	[9.17]	1.54	0.6		1/4残		P1		47-2

(2) ピット (第41～60図)

3区から検出されたピットのうち、館の掘立柱建物に関連すると考えられる、堀の東側に分布するピット群である296基が検出された。

掘立柱建物跡でも記したが、ピットは重複して多量に検出された。1基の規模が大きく、深く掘削されており、調査時に土壌としたものもある。検出されたピットには、土層から柱痕が観察されたものや、柱痕部分に灰白色粘土ブロックが検出されたものも複数検出された（第41図）。掘立柱建物の柱穴であると推定されたが、建物の柱穴として復元することができなかった。

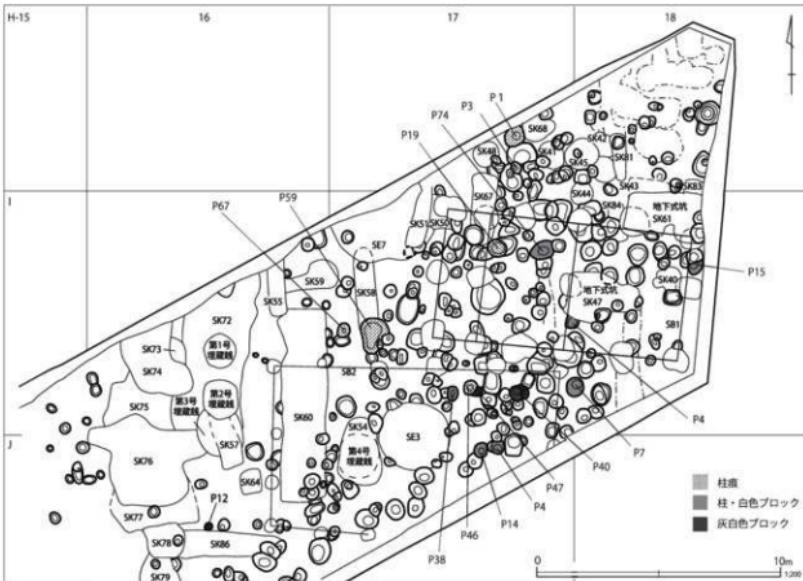
柱穴の中には、検出された地下式坑が廃棄された後に掘削されたものもあった。また、第4号埋蔵鉄を掘り出すために掘削されたと考えられる第54号土壌の土層断面には、柱穴の痕跡が認められた。3区に建物跡が建てられたのは館の変遷の中

でも新しい時期であったとも考えられる。

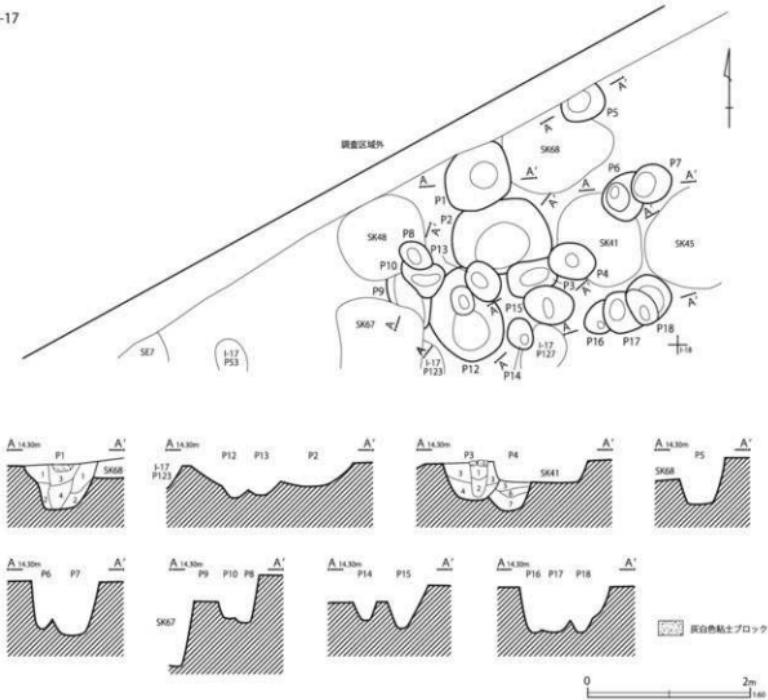
ピットは、第42～57図にグリッドごとに図示した。ピット番号は、グリッドごとに1からつけた。グリッドを跨いでいる場合は、より多くの面積が位置する方に含めた。表記については、グリッド名の後にピット番号を記している。

第58図1～18、第59図19～23、第60図24～34はピットから出土した遺物である。

1、2はH17P3、4から出土したかわらけである。1は底部の破片で、内底面の中心を指頭で撫でついている。坏形を呈するかわらけと思われる。胎土はやや白色味を帯び、硬質である。2は口縁部の破片である。口縁部直下に強いヨコナデによる棱が形成され、短く屈曲するような形状を呈する。本遺跡では、類似形態の口縁部を有すかわらけが比較的多くみられる。胎土は粉っぽく、微細な雲母と思われる光る鉱物が含まれる。



第41図 ピット全体図



H-17 P 1
 1 暗色土 ローム粒子・ロームブロック(1~2cm大)多量
 2 暗色土 ローム粒子多量 黏性あり 固くしまる
 3 暗色土 ローム粒子少量 灰白色粘土が粒子状に少量混入する
 塗化物微量 しまりなくやわらかい
 4 暗色土 ローム粒子少量 塗化物微量 しまりなくやわらかい
 P 3・4
 1 暗色土 灰白色粘土粒子・ブロック(0.5cm大)が多量に入る
 しまり、粘性なし 粒粗

2 暗色土 ローム粒子(粗) 少量 灰白色粘土粒子少量入る
 しまり、粘性なし 粒粗
 3 暗色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 頽量
 4 暗色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大) 多量
 5 暗色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 多量
 6 暗色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1cm大) 頽量
 7 暗色土 ローム粒子(粗) ロームブロック主体 固くしまる 黏性あり

第42図 ピット (1)

3はI-17P33から出土したかわらけ底部である。胎土は粉っぽいが、硬質・緻密である。雲母微細粒がかなり多く含まれる。

4はI-17P34から出土したかわらけ口縁部である。被熱して、変色、硬質化している。形態等から第1号掘立柱建物跡出土のかわらけ(第40図4)と同一個体の可能性がある。

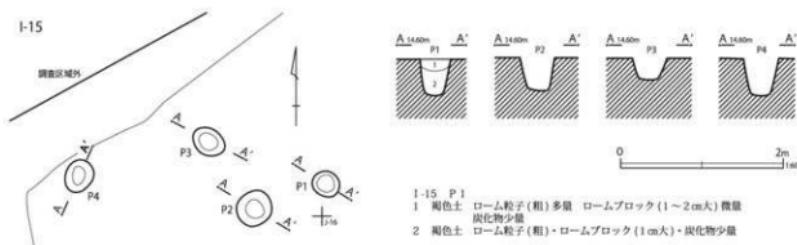
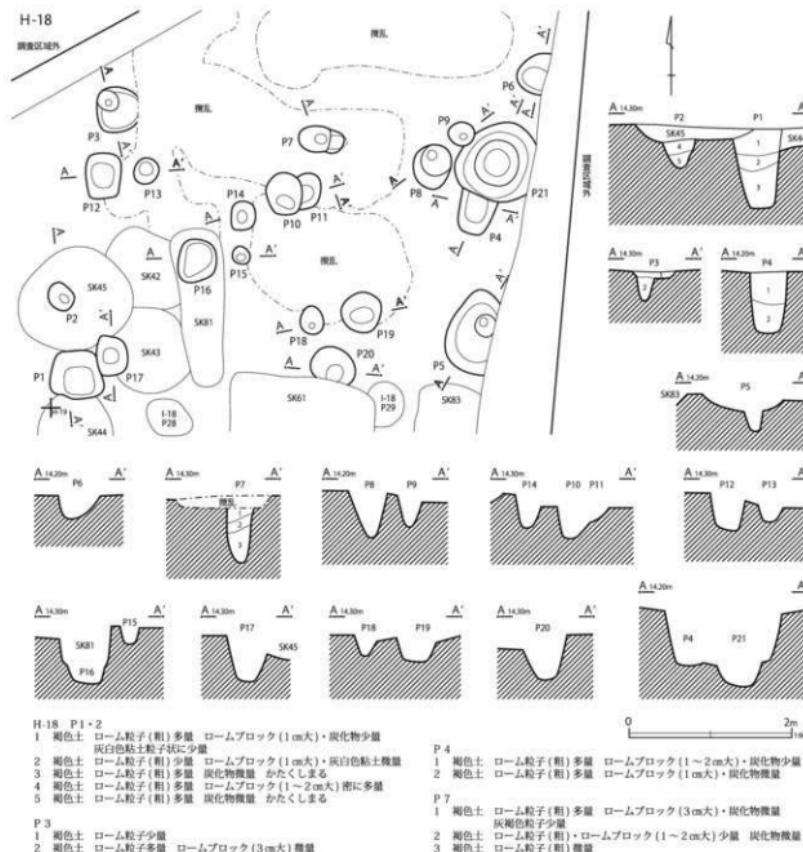
5はI-14P39から出土したかわらけで、底径が小さく胎土は白色味を帯びる。胎土は砂っぽい

が緻密である。坏形を呈するものと思われる。

6はI-17P41から出土した瓦質土器である。遺存部が少なく全体像が推定し難いが、火鉢の脚部と推定した。上面は接合面で剥離する。外面の一部が遺存し、小さな窪みが認められる。

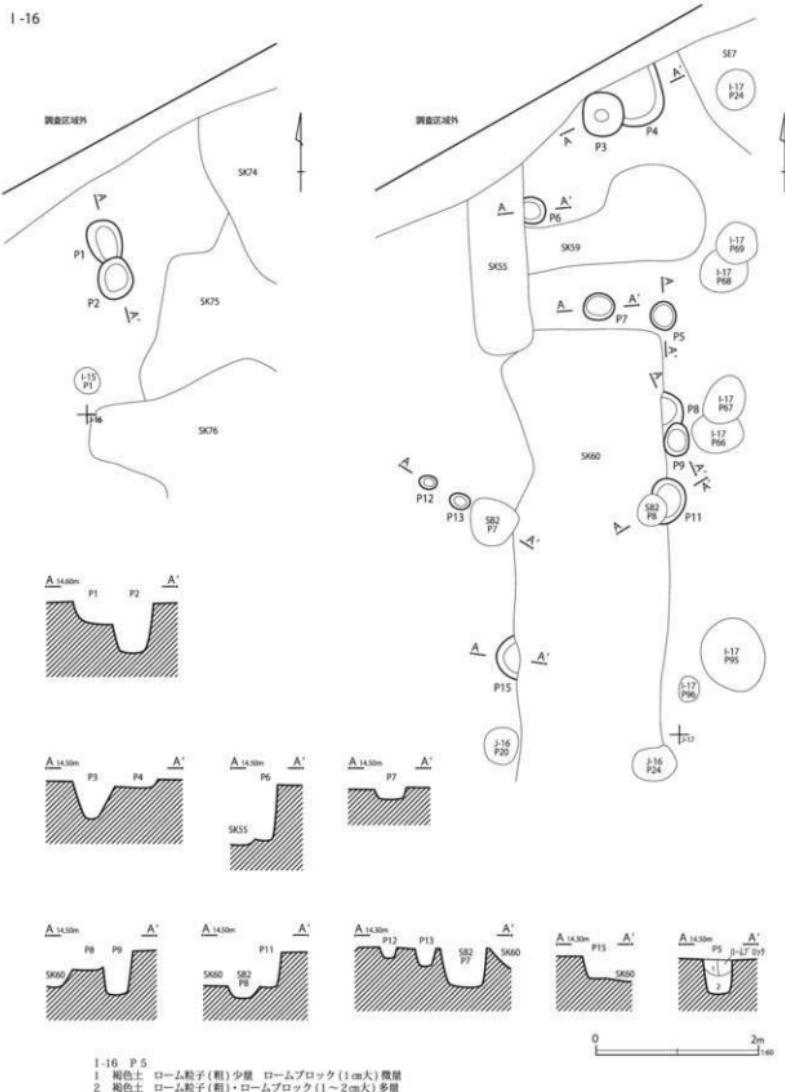
7はI-17P59から出土したかわらけで、体部は外傾して直線的に立ち上がる。胎土は硬質・緻密で、微細な雲母粒を含む。

8はI-17P69から出土したかわらけで、胎土



第43図 ピット(2)

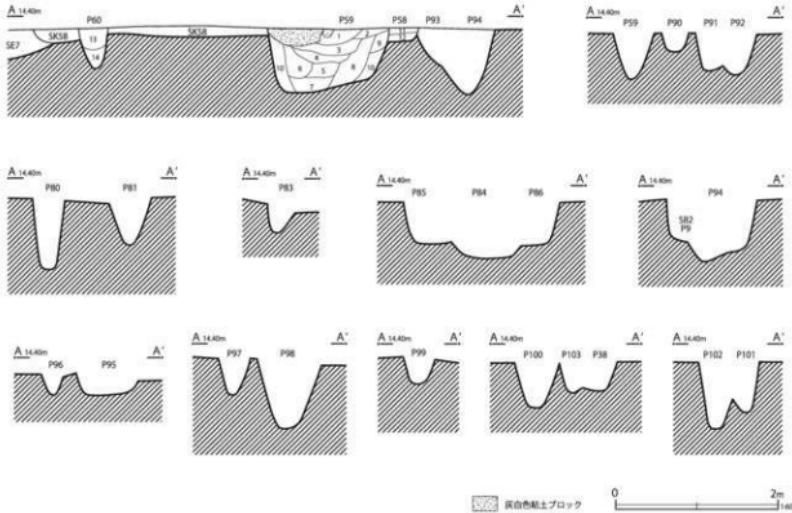
I-16



第44図 ピット(3)

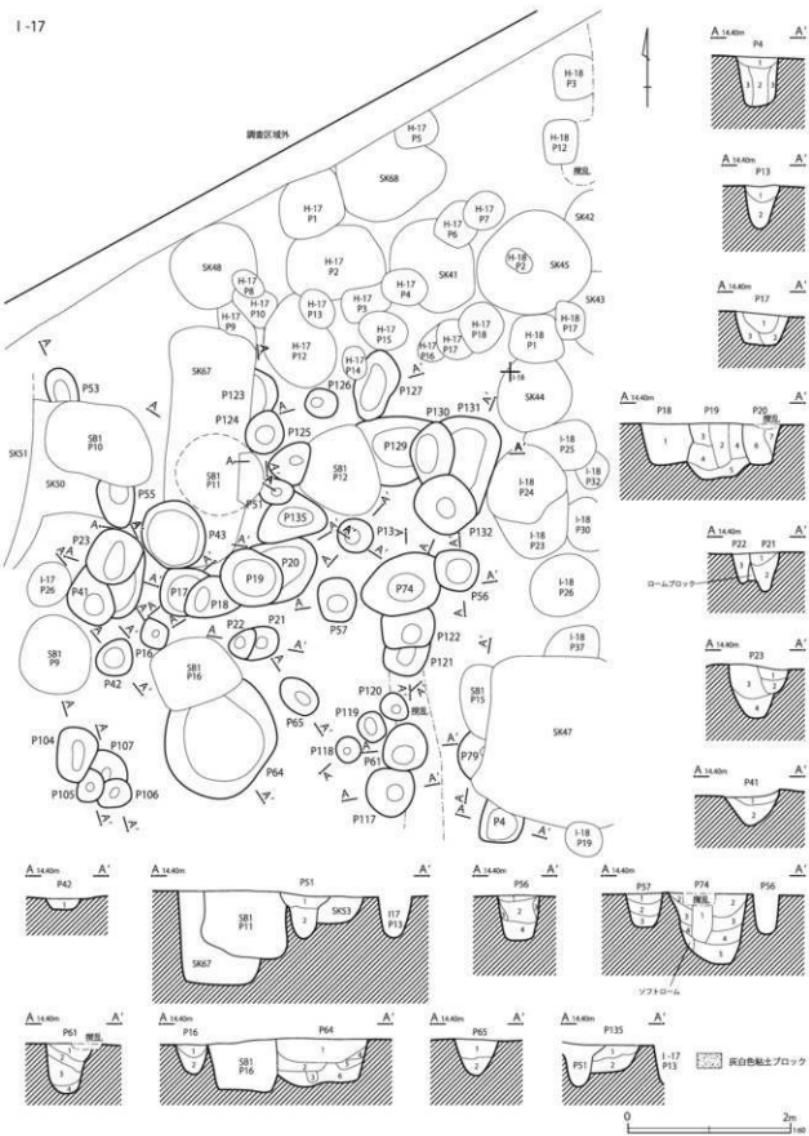


第45図 ビット (4)

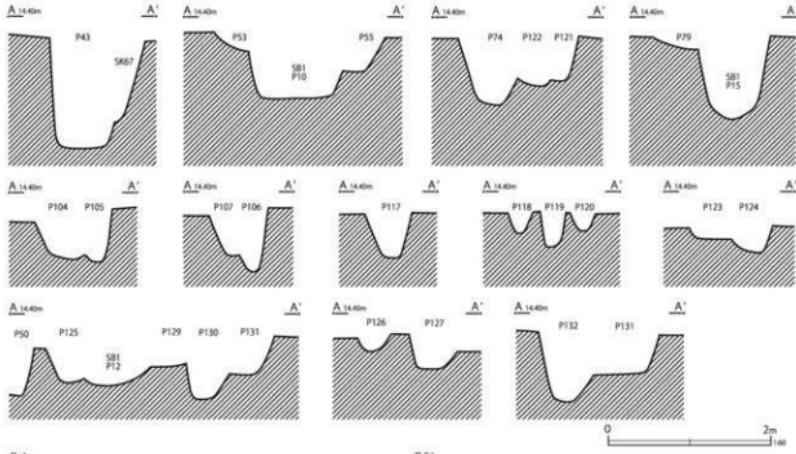


I-17	P24	1 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大)・炭化物少量 2 黑褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ローム・ブロック(1cm大)・炭化物微量 3 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 炭化物微量 しまりなし
P25・26		1 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 2 黑褐色土 ローム粒子(粗) 多量 炭化物少額 3 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 多量 炭化物微量
P27・28		1 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(2cm大) 離量 2 黑褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ローム・ブロック(1~2cm大) 多量 3 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ローム・ブロック(1cm大)・炭化物少量 4 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 炭化物微量
P29		1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ローム・ブロック(1cm大)・炭化物少量
P36		1 褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック(1~2cm大)・炭化物微量
P37		1 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大) 多量 炭化物少額 黒色土ブロック状に混入
P38		1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 炭化物微量 2 黑褐色土 ローム粒子(粗) 少量 炭化物微量 柱粒 3 褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム多量に混入
P58・59・60		1 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 多量 炭化物微量 2 黑褐色土 ローム粒子(粗) 多量 炭化物少額 灰白色粘土ブロック(0.5cm大) 多量 3 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 灰白色粘土ブロック(0.5cm大) 多量 4 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~3cm大) 多量 炭化物、灰白色粘土柱粒 柱粒 5 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~10cm大) 少量 炭化物推進 かくしまる 6 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ローム・ブロック(1~3cm大) 微量 炭化物少額 しまりなし 柱粒
P75・76・77		1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 炭化物微量 2 黑褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ローム・ブロック(1cm大)・炭化物微量 3 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 灰白色粘土ブロック(0.5cm大) 多量 4 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ローム・ブロック(1cm大) 少量 ソフトローム 多量 5 黑褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ローム・ブロック(1~3cm大) 少量 炭化物微量 6 褐色土 ローム粒子(粗)・ブロック(1~3cm大) 多量 7 褐色土 ローム粒子(粗)・ローム・ブロック(1~2cm大) 多量

第46図 ピット(5)



第47図 ピット (6)



P 4
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(0.5~1cm大) 少量
 成化物少量 硫土粒子微量
 2 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1cm大) ごく微量
 成化物少量 柱痕
 3 にぶい 黄褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック(1cm大) 多量
 ソフトローム主体の塊

P 13
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 廉化物微量
 2 褐色土 ローム粒子(粗) 少量

P 16
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 少量
 2 褐色土 ローム粒子(粗) ロームブロック(1cm大) 多量

P 17
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 少量
 2 褐色土 ローム粒子多量
 3 褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック密に多量

P 18・19・20
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 微量
 成化物少量 硫土粒子微量
 2 黒褐色土 ローム粒子(粗) 多量 廉化物(0.5cm大) 少量
 灰色粘土ブロック(1~3cm大)・灰白色粘土粒子多量 柱痕
 3 にぶい 黄褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~3cm大)
 固くしまる
 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~3cm大) 多量
 成化物微量

4 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~3cm大) 多量
 成化物微量
 5 褐色土 ローム粒子(粗)・廉化物少量 固くしまる 粘性あり
 6 褐色土 ローム粒子(粗)・廉化物少量
 7 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大) 多量
 廉化物少量

P 21・22
 1 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~5cm大) 多量
 成化物微量
 2 褐色土 ローム粒子(粗)・廉化物少量
 3 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 多量
 廉化物少量

P 23
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 少量
 ソフトローム主体の塊
 2 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1cm大) 廉化物微量
 3 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大)・成化物少量
 4 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1cm大) 多量
 廉化物少量

P 41
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 少量
 2 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 微量

P 42
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 少量

P 51
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 灰白色粘土粒子微量
 2 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 少量

P 56
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 少量
 廉化物微量
 2 褐色土 1種より細い ローム粒子(粗) 少量
 ロームブロック(1~2cm大)・廉化物微量
 3 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ソフトローム多量に混入
 ローム粒子多量

P 57
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 少量
 廉化物微量
 2 褐色土 1種より細い ローム粒子(粗) 少量
 ロームブロック(1~2cm大)・廉化物微量
 3 單褐色土 ローム粒子多量

P 61
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1cm大) 微量
 廉化物少量 硫土粒子微量
 2 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~3cm大) 多量
 廉化物微量
 3 單褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 少量 廉化物微量
 ローム粒子 多量

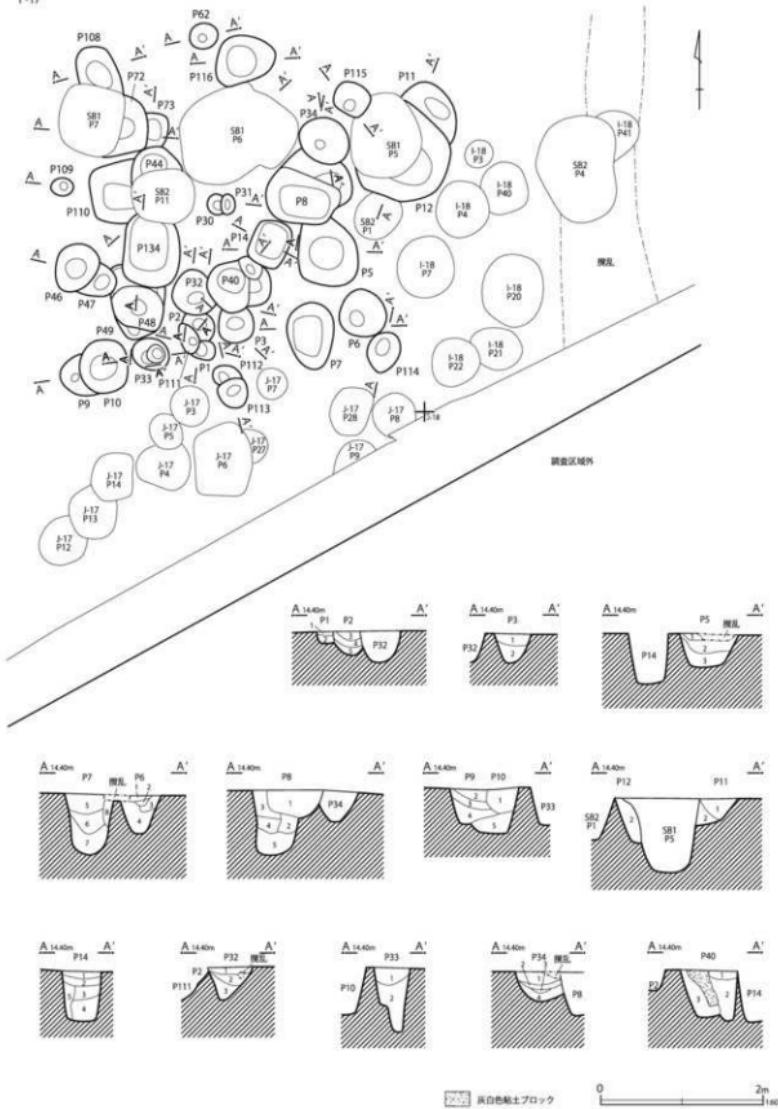
P 64
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 少量
 2 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 廉化物微量
 3 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 微量
 4 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ソフトローム多量に混入
 5 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大) 少量
 6 にぶい 黄褐色土 ローム・ロームブロックで埋め戻し

P 65
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 廉化物少量 灰白色粘土粒子状に少量
 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1cm大) 微量

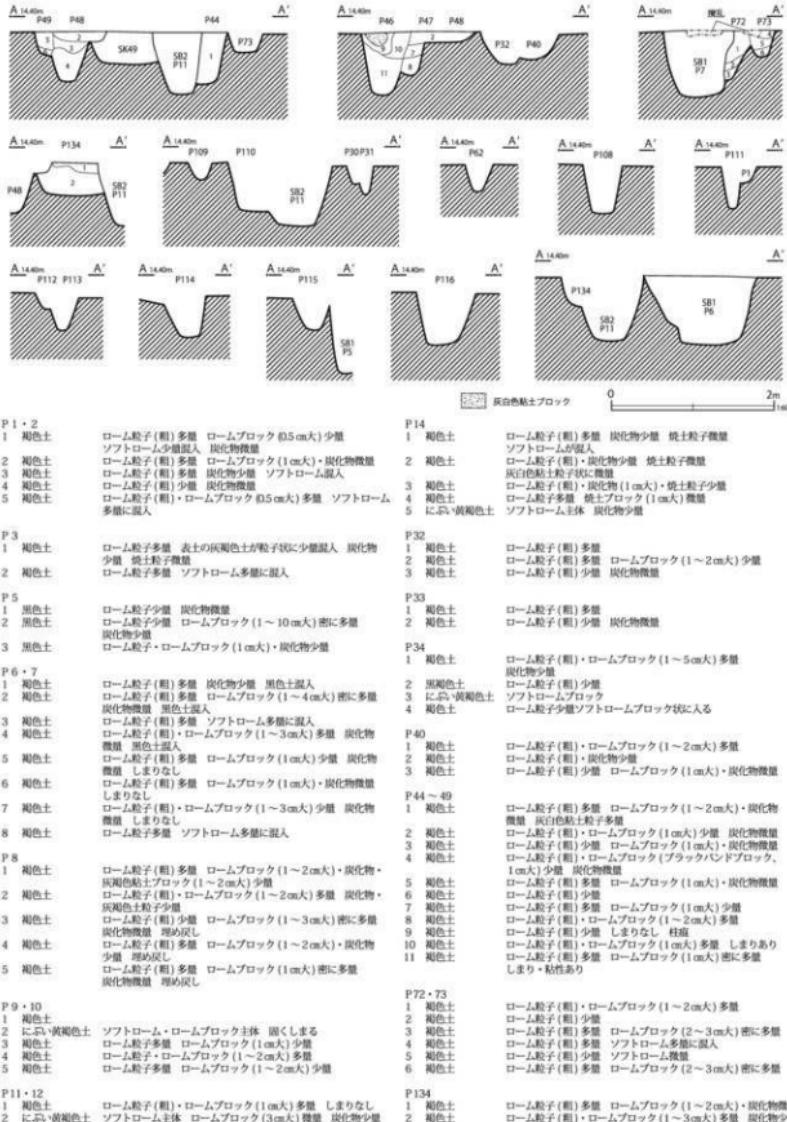
P 74
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(0.5cm大) 雜種
 廉化物少量 灰白色粘土粒子状に入りこまないし 柱痕
 2 褐色土 1種より細い ロームブロック(2~2.5cm) 多量
 廉化物少量 ソフトローム混入 固くしまる
 ローム粒子(粗)・ロームブロック(2~5cm大) 多量
 黒褐色土、褐色土が互層に柱状に入る 固くしまる
 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 少量 固くしまる
 ローム粒子・ロームブロック(1~2cm大) 少量

P 135
 1 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大) 多量
 黑褐色土充てんに混入 埋め戻し土
 2 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 密に多量
 埋め戻し土

I-17

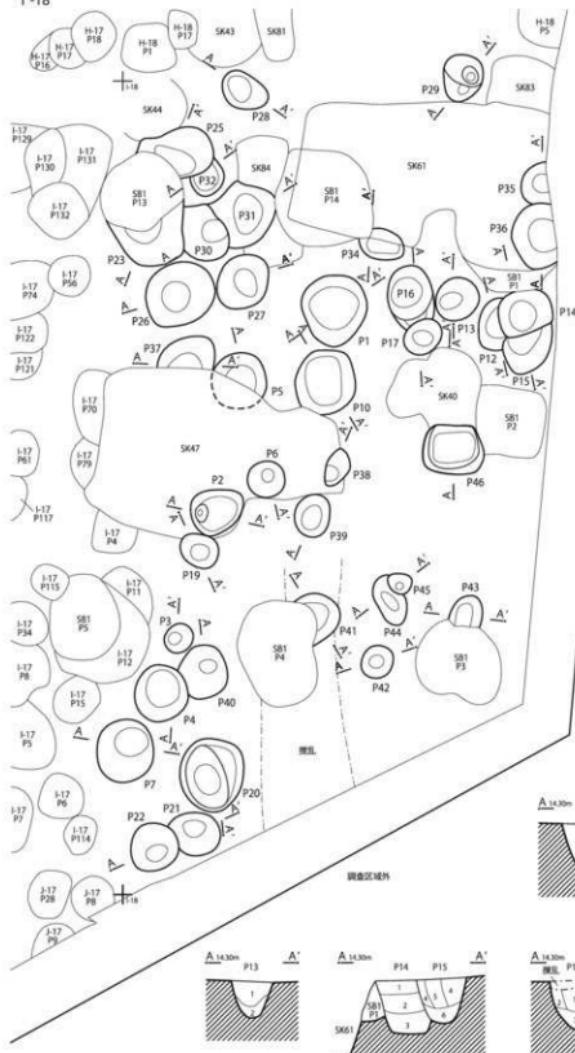


第49図 ビット (8)



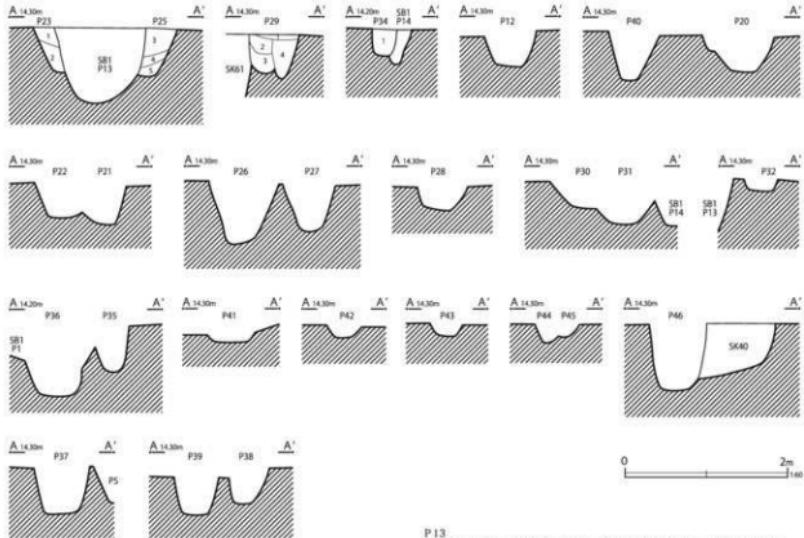
第50図 ピット (9)

I-18



0 2m

第51図 ピット (10)



P 1
 1 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 多量、炭化物少量
 2 褐色土 ローム粒子(粗) 少量
 3 褐色土 ローム粒子(粗) 多量
 4 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ソフトローム混入
 5 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 少量
 6 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 多量

P 2
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 炭化物微量 しまりなし
 2 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 しまりなし
 3 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ソフトローム混入
 4 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 少量
 5 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 多量 しまりなし

P 3・4
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 炭化物少量
 2 褐色土 ローム粒子(粗) 炭化物少量
 3 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大) 多量
 灰褐色土ブロック間に埋め
 4 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 密に多量
 灰褐色土ブロック(2cm大) 種量 ソフトローム混入

P 5・6
 1 褐色土 ローム粒子 多量 灰褐色土ブロック(1cm大) 種量
 2 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(0.5cm大) 少量
 焙土粒子微量
 3 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 微量
 炭化物、焙土粒子少量 焙土ブロック下面に混入

P 7
 1 褐色土 ローム粒子(粗)・炭化物少量 焙土粒子微量 ソフトローム(4cm大)
 ブロック間に混入
 2 褐色土 ローム粒子 多量 ロームブロック(0.5cm大) 少量
 しまりなし・柱状
 3 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 少量 ソフトローム
 多量に混入
 4 褐色土 ローム粒子 少量 固くしまる

P 10
 1 黒褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大)・炭化物少量
 2 黑褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1cm大) 少量 炭化物少量
 3 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1cm大)・炭化物微量
 4 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 少量 炭化物微量

P 13
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 炭化物・焙土粒子微量 灰褐色粒子多量
 2 褐色土 ローム粒子、炭化物少量 黏性あり

P 14・15
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量、ロームブロック(1cm大)・炭化物少量
 焙土粒子微量
 2 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 多量 炭化物少量
 3 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大)・炭化物微量
 4 褐色土 焙土粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 少量
 炭化物微量
 5 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大)・炭化物少量
 柱面
 6 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1cm大)・炭化物微量

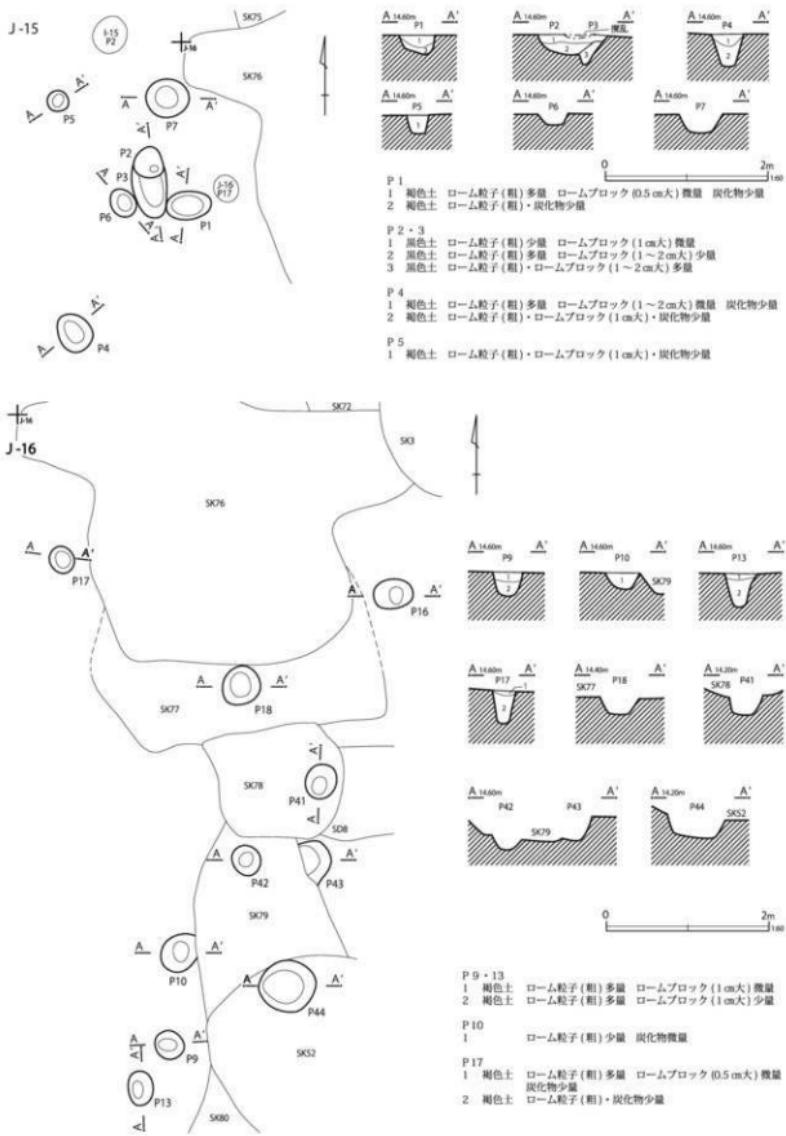
P 16・17
 1 褐色土 ローム粒子(粗)・炭化物少量
 2 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~3cm大) 少量
 灰褐色土ブロック間に埋め
 3 褐色土 焙土粒子少量 黏性あり 固くしまる
 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大) 密に多量
 5 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 種量
 6 褐色土 ローム粒子(粗) 少量

P 19
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 多量 炭化物微量
 2 褐色土 ローム粒子(粗)・炭化物微量

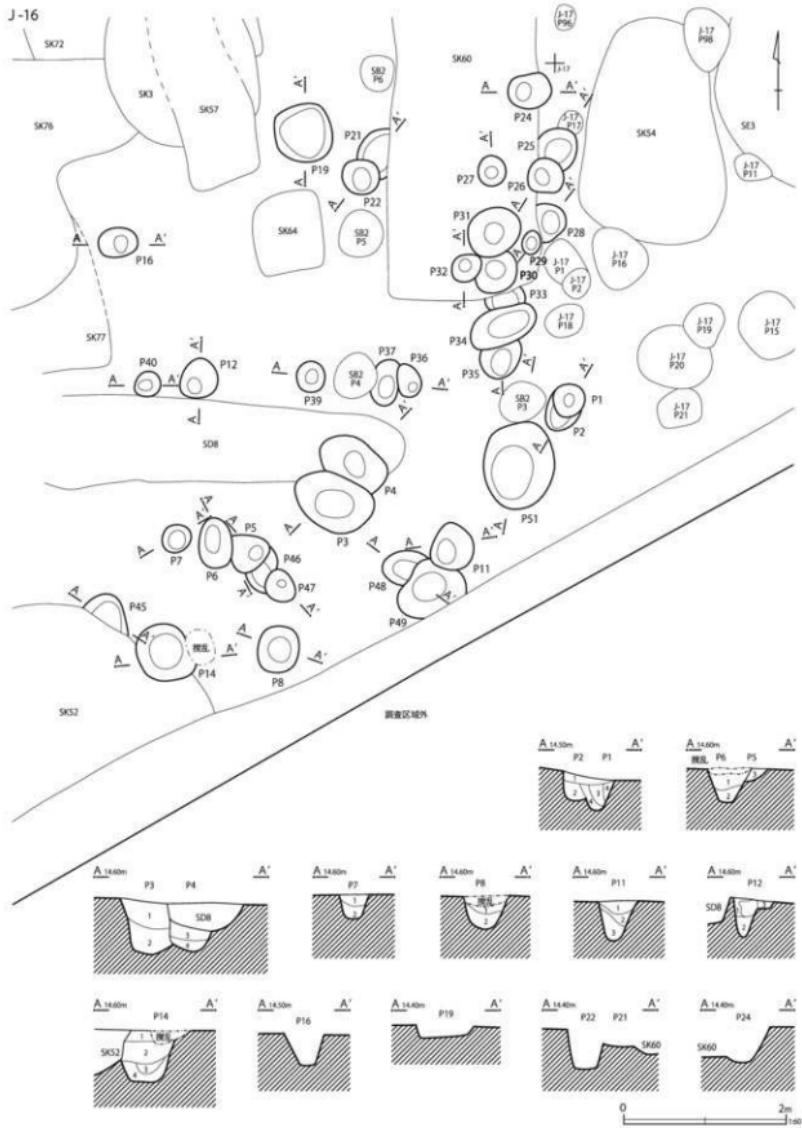
P 23・25
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 炭化物・焙土粒子微量
 灰褐色土粒子状に混入
 2 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大)・炭化物少量
 3 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1cm大) 種量 炭化物少量
 4 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1cm大) 少量 炭化物微量
 5 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~3cm大) 多量 炭化物微量

P 29
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 炭化物・焙土粒子微量
 灰褐色土粒子状に混入
 2 褐色土 ローム粒子(粗) 多量 ロームブロック(1~2cm大)・炭化物少量
 焙土粒子微量
 灰褐色土粒子状に少量混入
 3 褐色土 ローム粒子 多量 ロームブロック(1~2cm大) 少量
 4 褐色土 ローム粒子 多量 ロームブロック(1~2cm大) 密に多量
 炭化物・焙土粒子微量 細めに混ざる

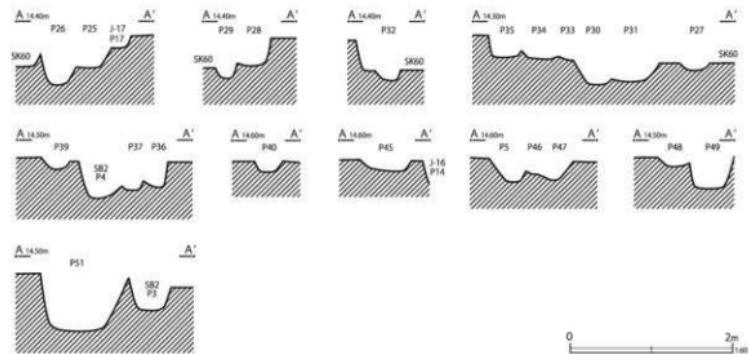
P 34
 1 褐色土 ローム粒子(粗) 少量 ロームブロック(1cm大) 微量 炭化物少量



第53図 ピット (12)



第54図 ピット (13)



P 1・2		
1 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1~2cm大)・炭化物微量
2 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1~2cm大) 少量 炭化物微量
3 褐色土	ローム粒子(粗)・炭化物少量	柱痕
4 褐色土	ローム粒子少量	炭化物微量 固くしまる
P 3・4		
1 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1~2cm大)・炭化物微量
2 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1cm大) 多量 炭化物微量
3 褐色土	ローム粒子(粗)・炭化物少量	(1cm大のものを含む)
4 褐色土	ローム粒子(粗) 少量	ロームブロック(1cm大)・炭化物微量
P 5・6		
1 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	炭化物微量
2 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1cm大) 少量 炭化物微量
3 にぶい黄褐色土	ソフトローム主体	
P 7		
1 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	炭化物微量
2 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1cm大) 少量 炭化物微量

P 8		
1 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	炭化物微量
2 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1cm大) 少量 炭化物微量
P 11		
1 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1cm大) 少量
2 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	炭化物微量
3 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1cm大) 少量 炭化物微量
P 12		
1 褐色土	ローム粒子(粗) 少量	灰白色粘土粒子少量
2 褐色土	ローム粒子(粗) 少量	灰白色粘土ブロック微量
3 褐色土	ローム粒子(粗) 少量	灰白色粘土ブロック(1cm大) 微量
P 14		
1 褐色土	ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 多量 炭化物微量	
2 褐色土	ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大) 炭化物微量	
3 褐色土	ローム粒子・炭化物少量	
4 褐色土	ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 多量 炭化物微量	

第55図 ピット (14)

は粉っぽい。口縁部直下の外面に小さな稜があり、2と同タイプと思われる。

9、10はI-17P80から出土した陶器とかわらけである。9は常滑焼窯の底部破片で、内外面ともヘラナダが施される。外面は赤味を帯びる。

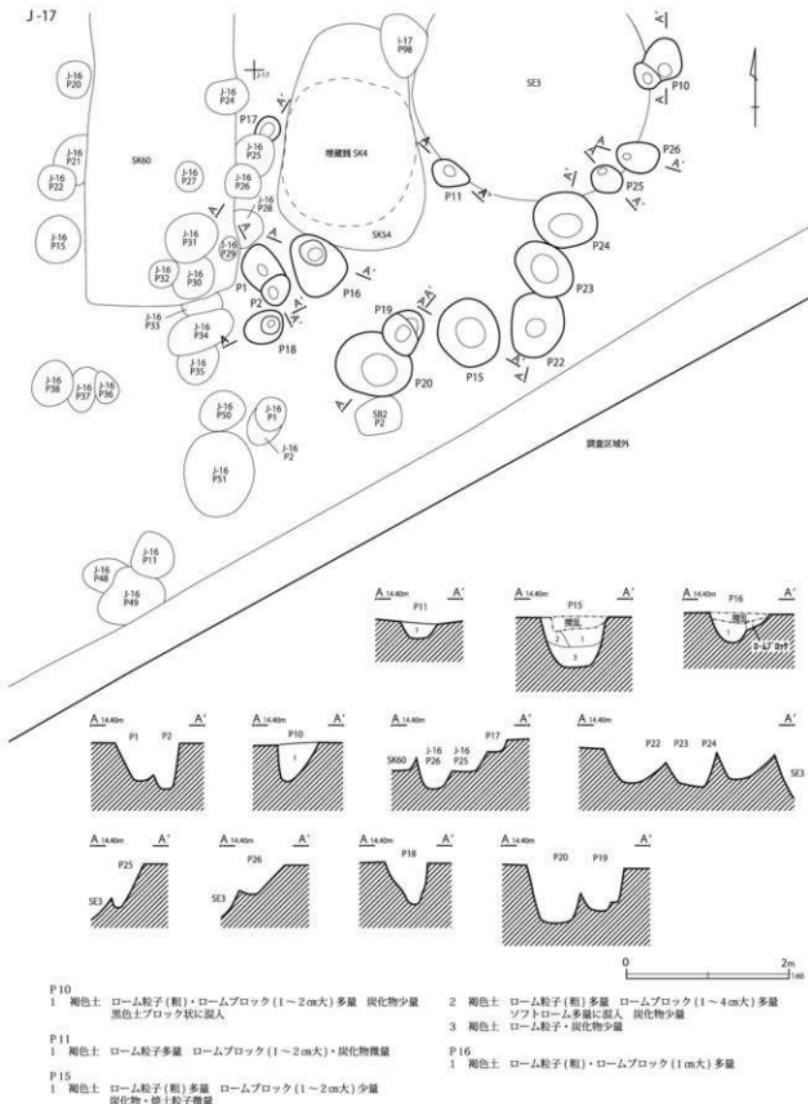
10は大型のかわらけである。ピットの下部から伏せた状態で出土した。内底面は渦巻状のナデ痕が残るが、その後に極めて弱い横位のナデが加えられる。胎土は粉っぽく、混入物は少ない。

11はI-18P2から出土した坏形のかわらけで、白色味を帯びる。胎土は粗く、径2mm程の赤色粒子と角閃石を多く含む。内底面は強く撫でつけられる。

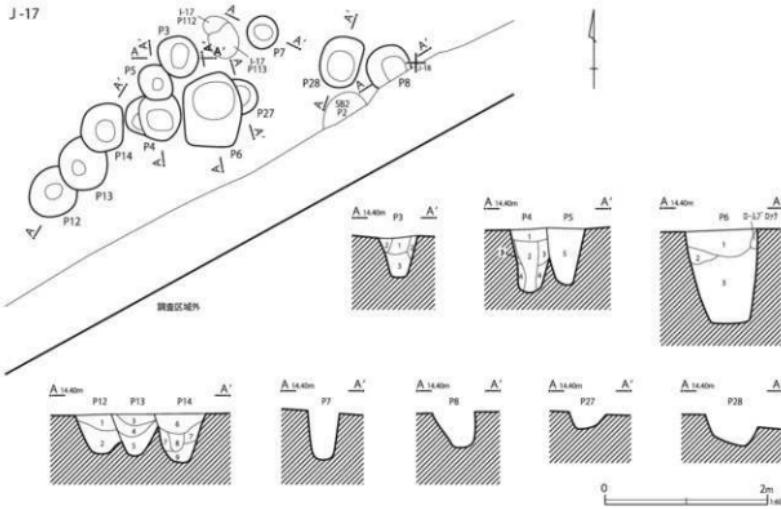
12~14はI-18P13から出土したかわらけである。このうち12は同一個体と思われる破片4点から図上復元して示したものである。口縁部直下の外面に稜が形成されるのは、2と同じ特徴である。胎土は粉っぽく、一定量の雲母微細粒が含まれる。13もほぼ同様の特徴を有し、12と同一個体の可能性もある。14も口縁部の形状が12、13と共通するが、体部がやや内湾して立ち上がる。胎土は粉っぽいが緻密で、混入物が極めて少ない。

15はI-17P39から出土したかわらけ底部で内底面中心が少し瘤むが、調整痕は確認できない。

16、17はJ-16P1、2から出土したかわらけの口縁部で、口縁部直下の外面に稜があるタイプ



第56図 ピット (15)



- P 3
1 褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1cm大)微量
炭化物少量
2 褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1~2cm大)少量
炭化物微量
3 にぶい黄褐色土 ソフトローム主体となる層
- P 4・5
1 褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大)多量
2 黒褐色土 ローム粒子(炭化物少量)柱頭
3 褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1cm大)少量
炭化物微量 しまる
4 褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1cm大)密に多量
理成り
5 褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
- P 6
1 褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1cm大)少量
黒色土ブロック状(1cm大)に微量 炭化物微量
- 2 褐色土 ローム粒子(粗)少量 ロームブロック(2cm大)微量
黒色土ブロック状(1cm大)に微量 炭化物微量
3 褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1~2cm大)
密に多量 黒色土ブロック状(1cm大)に少量 炭化物微量
ソフトローム混入
- P 12・13・14
1 褐色土 ローム粒子多量
2 褐色土 ロームブロック(1cm大)少量
3 褐色土 ローム粒子(粗)多量 炭化物微量
4 褐色土 ローム粒子(粗)多量
5 褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量 圓くしまる
6 褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック(1cm大)・炭化物少量
7 褐色土 ローム粒子(粗)多量 炭化物微量
8 褐色土 ローム粒子(粗)・炭化物少量 仕面 しまりなし
9 褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック(1~2cm大)微量 しまりあり

第57図 ピット (16)

である。16の胎土は粉っぽく、摩耗が著しい。17は被熱により器壁の一部が発泡する。

18はJ-16P 3、4から出土した坏形のかわらけである。内底面中心部が窟むものと考えられる。色調はやや茶色味を帯びる。胎土には角閃石が多く含まれる。

19はJ-16P 16から出土したかわらけである。胎土や調整は、11に類似しており、同タイプと考えて良いだろう。内面は火を受けて一部緋色に発色する。

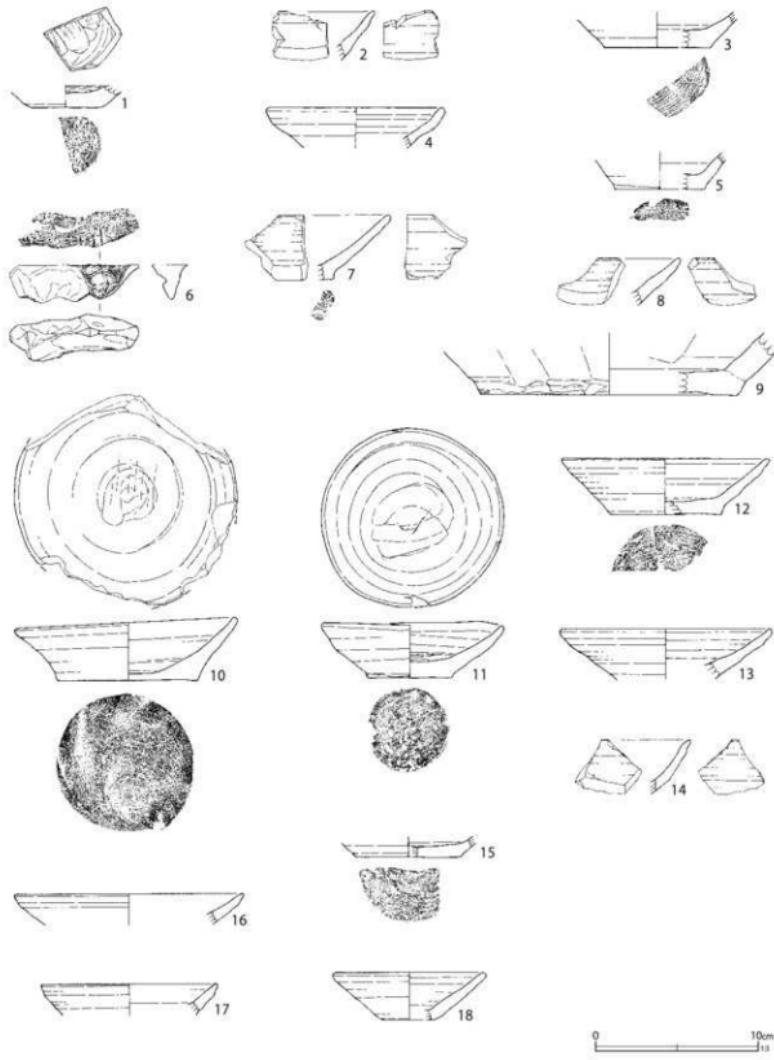
20はI-17P 65から出土した常滑焼甕の口縁部破片で、13世紀後半の所産である。

21はJ-17P 6から出土した鍛冶羽口の先端部である。外面は還元し、粘土が一部発泡する。表面は薄く滓で覆われる。内面は酸化する。

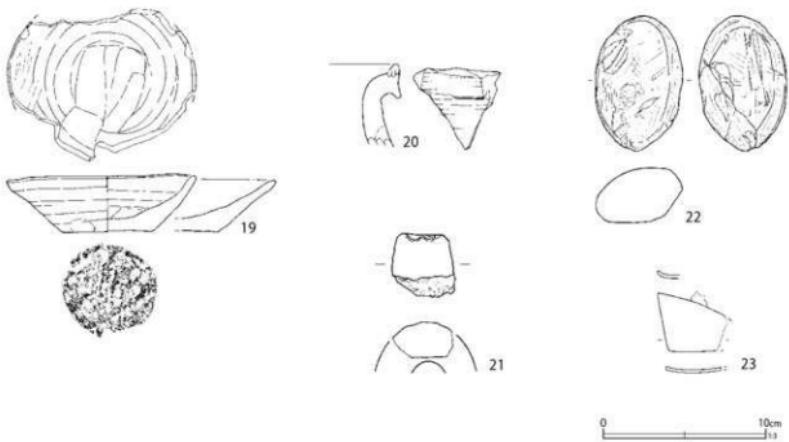
22はI-18P 9から出土した角閃石安山岩製の磨石である。

23はI-17P 59から出土した鉄製品で、板状を呈する。

24~34はピットから出土した錢貨である。



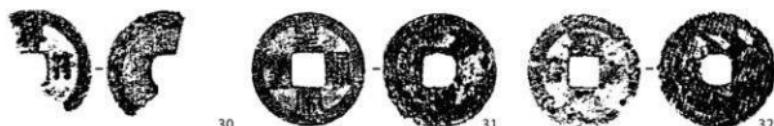
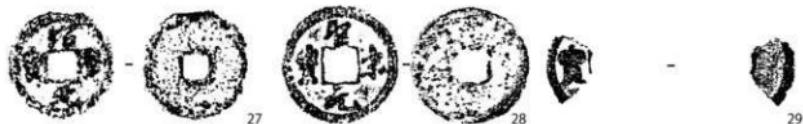
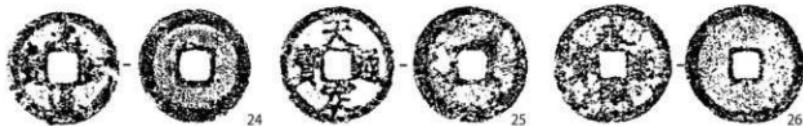
第58図 ピット出土遺物（1）



第59図 ピット出土遺物（2）

第20表 ピット出土遺物観察表（第58・59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	かわらけ	小皿	—	[1.4]	(4.0)	CI	10	普通	にぶい黄緑	H-17 P3・4	底部系切痕（右） 板目状压痕 外面 少量煤付着	27-7
2	かわらけ	小皿	—	[2.9]	—	AII	5	普通	根	H-17P3・4	胎土粉質	27-8
3	かわらけ	小皿	—	[2.3]	(6.6)	AEII	10	良好	にぶい根	I-17P33	底部系切痕 胎土粉質	27-9
4	かわらけ	小皿	(10.6)	[2.5]	—	EI	10	普通	明黄緑	I-17P34	被熱 一部褐色に変色	27-10
5	かわらけ	小皿	—	[2.3]	(5.4)	EII	10	普通	灰白	I-14P39	底部系切痕	27-11
6	瓦質土器	火鉢か	—	[2.3]	—	RHK	—	普通	にぶい黄緑	I-17P41	火鉢の脚部か 手びねり 内外面極す	27-12
7	かわらけ	小皿	—	3.9	—	AHK	5	良好	根	I-17P59	底部系切痕（右）	27-13
8	かわらけ	小皿	—	[2.9]	—	H	5	普通	根	I-17P69	胎土粉質	27-14
9	陶器	甕	—	[3.7]	(15.7)	DEII	5	良好	黄灰	I-17P80	常滑 砂目底 内面暗灰多い	27-15
10	かわらけ	小皿	13.2	3.9	8.6	CDEI	70	普通	根	I-17P80	底部系切痕（右） 胎土粉質 ピット 最下部から底部を上にして出土	27-16
11	かわらけ	小皿	10.9	3.5	5.2	CEI	95	普通	灰白	I-18P2	No1 底部系切痕（右） 胎土砂質 被 熱か	28-1
12	かわらけ	小皿	(12.6)	(3.4)	(6.8)	ADH	20	普通	にぶい黄緑	I-18P13	底部系切痕 胎土粉質 直接接合しな い 4破片から出土復元	28-2
13	かわらけ	小皿	(12.7)	[3.1]	—	AI	10	普通	にぶい根	I-18P13	胎土粉質	28-3
14	かわらけ	小皿	—	[3.3]	—	AG	5	良好	にぶい根	I-18P13	胎土粉質	28-4
15	かわらけ	小皿	—	[1.3]	(6.4)	CEII	10	普通	にぶい黄緑	I-17P39	底部系切痕	28-5
16	かわらけ	小皿	(13.9)	[1.9]	—	EH	5	普通	にぶい黄緑	J-16P1・2	胎土粉質 小破片からの固化 口怪値 が若干前後する可能性あり	28-6
17	かわらけ	小皿	(10.7)	[1.9]	—	E	5	普通	根	J-16P1・2	胎土粉質 被熱・一部変形	28-7
18	かわらけ	小皿	(9.1)	2.9	3.2	CEII	40	普通	浅黄緑	J-16P3・4	底部系切痕	28-8
19	かわらけ	小皿	10.3	3.5	5.5	CEII	75	普通	灰白	J-16P16	底部系切痕 板目状压痕 一部被熱・ 変色 口縁部歪む	28-9
20	陶器	甕	—	[4.3]	—	EGIK	5	普通	灰	I-17P65	常滑 内外面一部暗灰 6a型式	28-10
21	土製品	鍛冶羽口	外径(6.1)cm	内径(2.1)cm	長さ[3.7]cm	幅[3.6]cm	—	—	—	J-17P6	鍛冶羽口の先端部	28-11
22	石製品	磨石	長さ8.2cm	幅5.4cm	厚さ3.5cm	重さ48.5g	—	—	—	I-18P9	完形	28-12
23	鉄製品	不明	縦3.6cm	横[4.2]cm	厚さ0.2cm	重さ11.8g	—	—	—	I-17P59	—	48-7



第60図 ピット出土遺物（3）

第21表 ピット出土銭貨観察表（第60図）

拂国 番号	錢貨名	背面	錢径 (mm)		錢厚 (mm)	重量 (g)	書体	殘存	初鑄年・國	出土位置	備考	図版
			縱	横								
24	元祐通寶		23.95	23.83	1.75	2.7	行書	完形	1086 北宋	H-18P4 ~ 6		47-3
25	天聖通寶		24.69	24.30	2.49	4.2	真書	完形	1359 天聖	H-18P4 ~ 6		47-3
26	永通萬國		24.63	24.94	1.53	2.3	真書	完形	1408 明	H-18P4 ~ 6		47-3
27	紹聖通寶		22.05	22.11	2.03	2.7	行書	完形	1094 北宋	I-17P62		47-3
28	聖宋通寶		24.40	24.39	1.91	3.6	行書	完形	1101 北宋	I-17P62		47-3
29	□□□實	[14, 34] [9, 43]	1.09	0.4			行書	1/5 残		I-17P62		47-3
30	祥符□□		24.18	[14.09]	1.42	1.0	真書	1/2 残	1069 北宋	I-17P74	祥符[通寶ないし元寶]	47-3
31	皇宋通寶		23.91	23.83	1.17	1.9	篆書	完形	1038 北宋	I-18P10		47-3
32	皇宋通寶		23.37	23.87	1.77	2.7	篆書	完形	1038 北宋	I-18P10		47-3
33	元祐通寶		24.16	24.74	1.99	2.6	行書	完形	1086 北宋	I-18P20		47-3
34	治平元寶		24.67	24.60	1.65	2.9	篆書	完形	1064 北宋	I-18P23 ~ 25		47-3

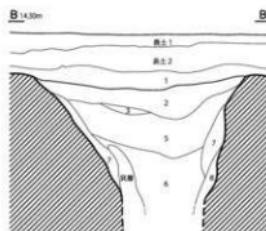
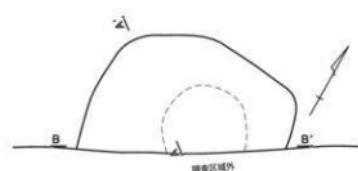
第22表 ピット計測表

グリッド	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	グリッド	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	グリッド	番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
H-17	P 1	82.0	[71.0]	54.4	I-16	P 12	20.0	17.0	13.2	I-17	P 51	40.0	29.0	41.0
	P 2	120.0	90.0	35.6		P 13	25.0	18.0	22.6		P 52	67.0	53.0	39.2
	P 3	60.0	40.0	41.6		P 14	欠番				P 53	40.0	37.0	23.0
	P 4	57.0	45.0	51.9		P 15	57.0	[30.0]	27.5		P 54	欠番		
	P 5	55.0	[35.0]	57.1		P 1	[22.0]	23.0	18.1		P 55	50.0	45.0	50.2
	P 6	[37.0]	50.0	59.1		P 2	42.0	30.0	25.7		P 56	57.0	50.0	53.3
	P 7	52.0	47.0	71.8		P 3	[37.0]	41.0	34.9		P 57	53.0	45.0	43.3
	P 8	43.0	30.0	57.4		P 4	[40.0]	52.0	61.6		P 58	46.0	45.0	17.0
	P 9	[40.]	50.0	29.2		P 5	84.0	72.0	37.7		P 59	145.0	66.0	69.5
	P 10	58.0	30.0	29.6		P 6	58.0	56.0	49.8		P 60	42.0	35.0	60.5
H-18	P 11	欠番				P 7	83.0	57.0	63.9		P 61	60.0	52.0	63.4
	P 12	105.0	81.0	46.2		P 8	90.0	84.0	80.5		P 62	35.0	30.0	33.0
	P 13	51.0	37.0	16.2		P 9	44.0	[24.0]	45.4		P 63	欠番		
	P 14	40.0	29.0	21.4		P 10	64.0	58.0	56.4		P 64	150.0	135.0	56.4
	P 15	62.0	47.0	50.8		P 11	83.0	[30.0]	37.4		P 65	53.0	36.0	51.0
	P 16	[25.0]	35.0	56.2		P 12	[45.0]	104.0	64.4		P 66	65.0	42.0	61.6
	P 17	50.0	38.0	52.1		P 13	43.0	39.0	50.0		P 67	60.0	49.0	73.3
	P 18	61.0	55.0	56.2		P 14	57.0	46.0	64.6		P 68	60.0	44.0	52.0
	P 1	65.0	60.0	96.4		P 15	欠番				P 69	53.0	50.0	69.7
	P 2	35.0	28.0	30.0		P 16	35.0	35.0	23.7		P 70	欠番		
H-18	P 3	55.0	[45.0]	38.5		P 17	60.0	[35.0]	38.7		P 71	欠番		
	P 4	[43.0]	42.0	75.0		P 18	[60.0]	45.0	55.3		P 72	76.0	[33.0]	55.2
	P 5	102.0	[50.0]	49.2		P 19	75.0	66.0	69.7		P 73	40.0	[24.0]	28.6
	P 6	51.0	[34.0]	30.0		P 20	[50.0]	71.0	56.7		P 74	[95.0]	69.0	85.7
	P 7	55.0	30.0	66.5		P 21	[30.0]	35.0	46.1		P 75	58.0	31.0	68.2
	P 8	52.0	45.0	59.0		P 22	36.0	25.0	37.2		P 76	[41.0]	52.0	79.5
	P 9	32.0	28.0	38.0		P 23	95.0	75.0	59.8		P 77	53.0	[26.0]	32.9
	P 10	51.0	40.0	52.3		P 24	50.0	48.0	60.0		P 78	欠番		
	P 11	43.0	[23.0]	21.1		P 25	28.0	25.0	42.8		P 79	[60.0]	[32.0]	31.0
	P 12	55.0	42.0	50.0		P 26	56.0	50.0	49.3		P 80	44.0	38.0	86.9
I-15	P 13	30.0	30.0	21.0		P 27	[45.0]	[40.0]	29.0		P 81	51.0	48.0	57.7
	P 14	35.0	30.0	40.9		P 28	[50.0]	[50.0]	50.0		P 82	41.0	40.0	28.6
	P 15	24.0	21.0	23.4		P 29	39.0	36.0	45.7		P 83	33.0	22.0	28.6
	P 16	57.0	40.0	33.0		P 30	25.0	[15.0]	22.7		P 84	欠番		
	P 17	47.0	36.0	56.0		P 31	25.0	18.0	36.7		P 85	85.0	[75.0]	46.4
I-16	P 18	35.0	30.0	26.0		P 32	56.0	45.0	40.0		P 86	80.0	[50.0]	53.9
	P 19	50.0	50.0	30.0		P 33	45.0	40.0	77.1		P 87	35.0	35.0	30.5
	P 20	54.0	44.0	57.0		P 34	64.0	53.0	40.5		P 88	48.0	45.0	47.5
	P 21	[95.0]	[90.0]	98.0		P 35	欠番				P 89	40.0	25.0	64.8
	P 1	31.0	31.0	41.7		P 36	[40.0]	57.0	26.4		P 90	33.0	31.0	21.1
I-16	P 2	44.0	41.0	39.5		P 37	[40.0]	54.0	40.0		P 91	43.0	[35.0]	43.0
	P 3	40.0	31.0	26.2		P 38	60.0	41.0	37.6		P 92	61.0	42.0	48.8
	P 4	40.0	33.0	46.8		P 39	欠番				P 93	欠番		
	P 1	[48.0]	31.0	27.8		P 40	80.0	60.0	57.5		P 94	87.0	73.0	81.0
	P 2	51.0	42.0	61.2		P 41	70.0	50.0	45.5		P 95	87.0	76.0	27.1
	P 3	54.0	50.0	49.5		P 42	48.0	40.0	12.8		P 96	29.0	24.0	30.8
	P 4	[62.0]	[62.0]	10.8		P 43	85.0	75.0	95.7		P 97	53.0	36.0	46.1
	P 5	35.0	33.0	39.0		P 44	60.0	[30.0]	65.5		P 98	80.0	35.0	84.0
	P 6	[27.0]	32.0	67.2		P 45	欠番				P 99	40.0	35.0	34.4
	P 7	39.0	30.0	15.4		P 46	60.0	50.0	77.3		P 100	70.0	59.0	55.3
	P 8	[47.0]	[25.0]	23.8		P 47	[30.0]	37.0	54.5		P 101	[40.]	40.0	62.3
	P 9	38.0	30.0	54.9		P 48	95.0	70.0	61.0		P 102	60.0	37.0	85.4
	P 10	欠番				P 49	40.0	[15.0]	29.6		P 103	40.0	[25.0]	39.3
	P 11	57.0	40.0	41.5		P 50	欠番				P 104	66.0	45.0	58.6

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
I-17	P 105	40.0	30.0	62.9	I-18	P 25	90.0	61.0	56.0	J-16	P 27	39.0	33.0	11.3
	P 106	42.0	33.0	76.4		P 26	90.0	75.0	78.4		P 28	42.0	35.0	33.6
	P 107	[40.0]	[30.0]	56.0		P 27	75.0	60.0	60.2		P 29	30.0	23.0	14.4
	P 108	[55.0]	49.0	57.6		P 28	49.0	45.0	40.2		P 30	53.0	[43.0]	30.7
	P 109	28.0	20.0	19.4		P 29	56.0	45.0	54.0		P 31	66.0	58.0	25.3
	P 110	75.0	[48.0]	61.1		P 30	70.0	56.0	37.4		P 32	35.0	31.0	13.4
	P 111	40.0	20.0	47.2		P 31	79.0	70.0	54.4		P 33	48.0	[16.0]	28.4
	P 112	[20.0]	26.0	19.0		P 32	[30.0]	42.0	16.0		P 34	87.0	45.0	29.5
	P 113	35.0	35.0	41.3		P 33					P 35	47.0	[41.0]	26.5
	P 114	50.0	38.0	48.6		P 34	55.0	24.0	27.2		P 36	41.0	30.0	29.9
	P 115	43.0	36.0	42.6		P 35	46.0	[28.0]	55.0		P 37	56.0	[28.0]	34.7
	P 116	77.0	55.0	64.2		P 36	81.0	[45.0]	90.0		P 38			
	P 117	62.0	60.0	54.4		P 37	67.0	[35.0]	59.0		P 39	36.0	35.0	16.6
	P 118	30.0	30.0	27.2		P 38	45.0	[30.0]	47.4		P 40	31.0	30.0	13.1
	P 119	35.0	32.0	44.1		P 39	50.0	44.0	44.5		P 41	43.0	40.0	24.7
	P 120	37.0	30.0	22.4		P 40	62.0	58.0	60.5		P 42	37.0	35.0	17.3
	P 121	55.0	[35.0]	54.1		P 41	60.0	[30.0]	21.9		P 43	51.0	[33.0]	28.6
I-18	P 122	62.0	[45.0]	61.7		P 42	47.0	42.0	16.2		P 44	73.0	63.0	35.7
	P 123	[62.0]	[30.0]	25.7		P 43	[35.0]	37.0	17.0		P 45	60.0	[32.0]	14.8
	P 124	47.0	47.0	32.2		P 44	72.0	36.0	23.2		P 46	50.0	[17.0]	18.8
	P 125	50.0	40.0	40.8		P 45	30.0	26.0	15.4		P 47	43.0	34.0	22.1
	P 126	40.0	35.0	21.6		P 46	76.0	57.0	82.6		P 48	[40.0]	43.0	14.3
	P 127	85.0	47.0	44.0		P 1	55.0	35.0	24.5		P 49	87.0	[60.0]	37.0
	P 128					P 2	[53.0]	49.0	25.1		P 50			
	P 129	[70.0]	84.0	41.8		P 3	[33.0]	33.0	32.6		P 51	105.0	87.0	70.4
	P 130	[73.0]	51.0	82.8		P 4	48.0	41.0	40.5		P 51	[42.0]	44.0	47.3
	P 131	[85.0]	[55.0]	45.0		P 5	27.0	25.0	25.5		P 2	38.0	30.0	59.2
	P 132	80.0	70.0	83.6		P 6	36.0	31.0	11.8		P 3	47.0	47.0	53.2
	P 133	105.0	89.0	10.0		P 7	50.0	47.0	24.0		P 4	69.0	52.0	78.0
	P 134	[80.0]	68.0	38.5		P 1	42.0	40.0	44.0		P 5	47.0	39.0	72.4
	P 135	83.0	55.0	36.1		P 2	[21.0]	40.0	34.7		P 6	92.0	80.0	118.3
I-18	P 1	88.0	80.0	75.8	J-16	P 3	100.0	65.0	71.4		P 7	38.0	38.0	60.3
	P 2	65.0	53.0	55.0		P 4	90.0	[50.0]	60.3		P 8	45.0	[38.0]	44.7
	P 3	37.0	33.0	44.7		P 5	50.0	47.0	27.2		P 9			
	P 4	68.0	65.0	63.9		P 6	62.0	42.0	39.7		P 10	65.0	36.0	48.1
	P 5	70.0	[70.0]	53.0		P 7	38.0	32.0	30.1		P 11	50.0	32.0	23.0
	P 6	47.0	42.0	50.0		P 8	58.0	50.0	42.8		P 12	[52.0]	47.0	50.4
	P 7	75.0	68.0	60.6		P 9	36.0	30.0	26.8		P 13	63.0	60.0	62.7
	P 8					P 10	[47.0]	42.0	23.2		P 14	63.0	60.0	61.0
	P 9					P 11	54.0	50.0	50.0		P 15	82.0	73.0	59.8
	P 10	80.0	70.0	48.1		P 12	50.0	45.0	48.4		P 16	78.0	55.0	37.2
	P 11					P 13	41.0	30.0	40.3		P 17	[23.0]	30.0	14.8
	P 12	60.0	[27.0]	51.6		P 14	77.0	65.0	66.3		P 18	50.0	35.0	53.1
	P 13	53.0	49.0	41.4		P 15					P 19	53.0	45.0	54.2
	P 14	65.0	55.0	57.2		P 16	47.0	35.0	39.1		P 20	95.0	75.0	69.5
	P 15	[45.0]	55.0	51.8		P 17	35.0	25.0	39.0		P 21			
	P 16	[70.0]	[57.0]	48.9		P 18	47.0	45.0	19.1		P 22	80.0	65.0	42.6
	P 17	50.0	40.0	25.4		P 19	70.0	70.0	15.6		P 23	80.0	60.0	46.6
	P 18					P 20					P 24	80.0	67.0	42.7
	P 19	48.0	40.0	29.5		P 21	[30.0]	35.0	23.6		P 25	40.0	30.0	53.5
	P 20	90.0	75.0	46.6		P 22	45.0	40.0	50.5		P 26	53.0	33.0	37.0
	P 21	65.0	52.0	52.6		P 23					P 27	42.0	(22.0)	21.1
	P 22	60.0	60.0	45.3		P 24	53.0	40.0	43.1		P 28	60.0	45.0	31.9
	P 23	[43.0]	80.0	49.7		P 25	53.0	[46.0]	36.6					
	P 24					P 26	43.0	43.0	56.5					

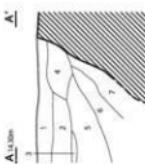
(3) 井戸跡

中世の井戸跡は、2区から2基、3区から2基が検出された。湧水面が深いため、いずれも底面まで調査しなかった。

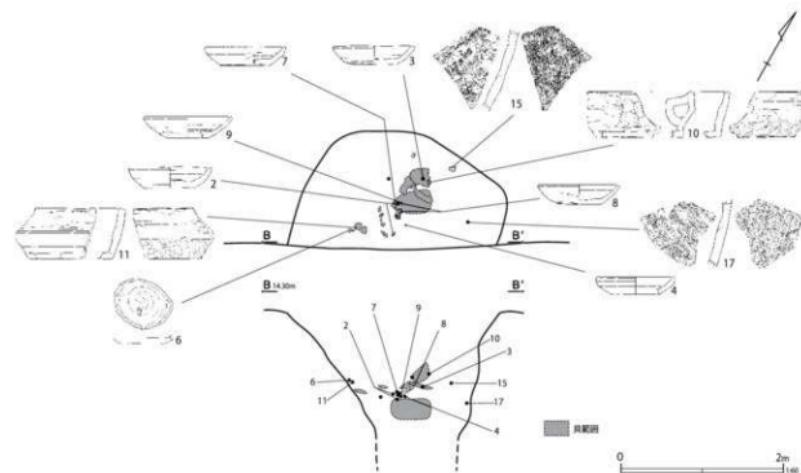


第1号井戸跡 (第61～64図)

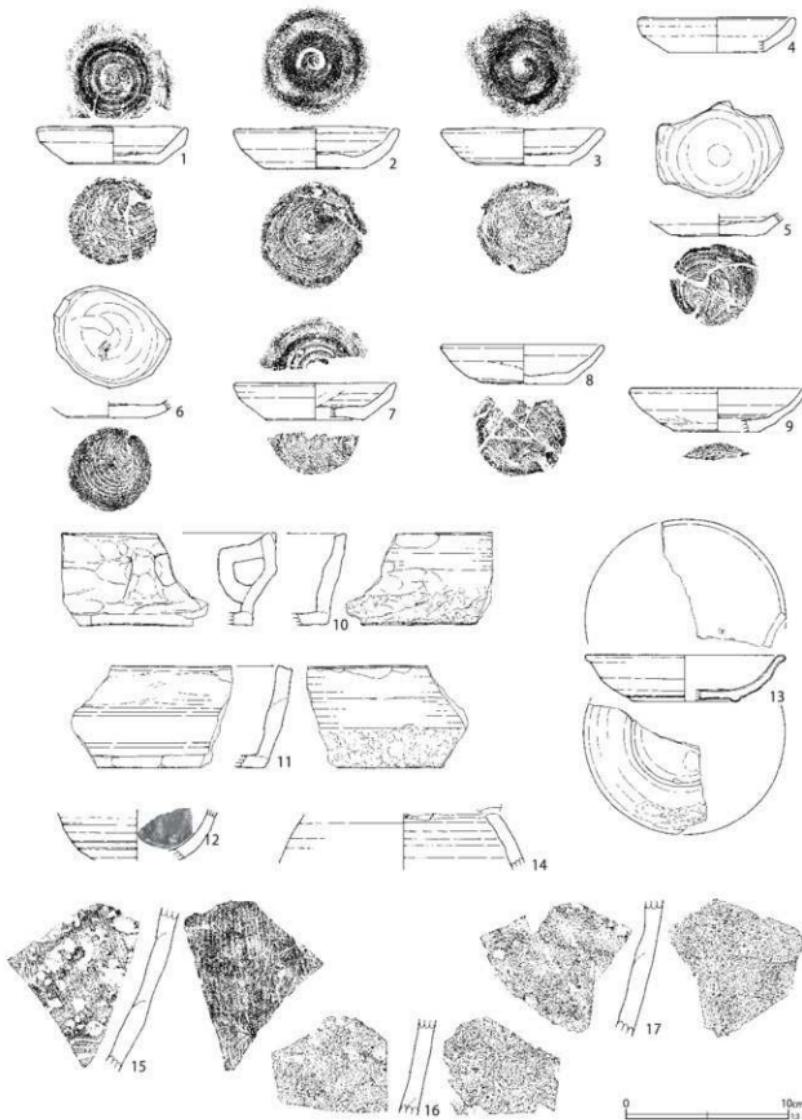
第1号井戸跡は、I-19グリッドから検出された。2区の南西隅から検出され、南半分は調査区外となっている。



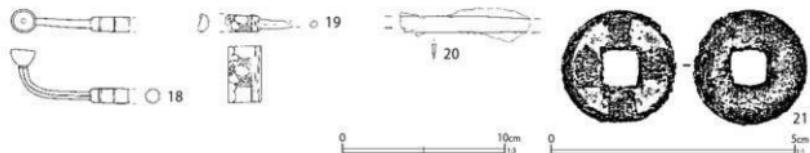
- SE 1
- 1 黄褐色土 ローム粒子・炭化物少量 しまりなし
 - 2 黄褐色土 ローム粒子多量 炭化物・燒土粒子少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物・ロームブロック(1～2cm大)少量
 - 4 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
 - 5 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
 - 6 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
 - 7 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 ロームブロック(1～2cm大)少量
 - 8 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 ロームブロック1～2cm大)多量



第61図 第1号井戸跡・出土遺物分布図



第62図 第1号井戸跡出土遺物（1）



第63図 第1号井戸跡出土遺物(2)

第23表 第1号井戸跡出土遺物観察表(第62・63図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	かわらけ	小皿	9.0	2.3	5.3	CHI	70	普通	橙	SE1	底部系切痕(左) 胎土砂質 口縁部歪む (最大径9.4cm)	28-13
2	かわらけ	小皿	9.8	2.6	5.9	CFH	95	普通	にぶい黄褐色	SE1	No9・14 底部系切痕(左) 胎土砂質	29-1
3	かわらけ	小皿	9.5	2.3	5.8	CFHI	100	普通	にぶい橙	SE1	No13 底部系切痕(左) 胎土砂質	29-2
4	かわらけ	小皿	(9.5)	2.1	(5.9)	CHI	10	普通	橙	SE1	No7 胎土砂質	29-3
5	かわらけ	小皿	—	[1.5]	4.8	AB	40	普通	にぶい黄褐色	SE1	底部系切痕(右) 胎土粉質	29-4
6	かわらけ	小皿	—	[1.1]	5.0	AB	30	普通	橙	SE1	No10 底部系切痕(右) 胎土粉質	29-5
7	かわらけ	小皿	(9.7)	2.3	(6.1)	CFGH	40	普通	橙	SE1	No6 底部系切痕(左) 胎土砂質	29-6
8	かわらけ	小皿	(9.7)	2.4	5.4	H	40	普通	にぶい橙	SE1	No4・8 底部系切痕(右) 胎土粉質	29-7
9	かわらけ	小皿	(10.6)	2.6	5.3	AB	25	普通	橙	SE1	No4 底部系切痕 胎土粉質	29-8
10	瓦質土器	焰烙	—	5.6	—	CEH	5	良好	にぶい橙	SE1	No2 底部～体部下位シワ状痕 一部墨す	29-9
11	瓦質土器	焰烙	—	6.2	—	CEHI	5	普通	にぶい橙	SE1	No8 底部～体部下位シワ状痕 外面保付 着 やや酸化焼成	29-10
12	陶器	碗	—	[3.1]	—	HI	5	普通	浅黄褐色	SE1	内外面緑釉	29-9
13	陶器	小皿	(12.0)	2.8	(6.4)	D	35	普通	灰白	SE1	瓶戸美濃系 内外面長石釉 ピン痕・外 面目痕 17c初～前(志野小皿)	29-10
14	陶器	瓶類	—	[3.5]	—	GI	10	普通	灰白	SE1	瀬戸美濃系 外面鉄釉 上端二次研磨	30-1
15	陶器	甕	—	[10.0]	—	DK	5	良好	灰白	SE1	No1 常滑 内外面ヘラナデ 強く選元炎 焼成	
16	陶器	甕	—	[5.8]	—	DE	5	褐灰	SE1	常滑 外面ヘラナデ		
17	陶器	甕	—	[8.3]	—	DEI	5	褐灰	SE1	常滑 外面ヘラナデ		
18	銅製品	煙管	長さ[7.3]cm	火皿径1.5cm	小口径0.9cm	重さ8.2g				SE1	雁首	48-7
19	銅製品	煙管	長さ[4.2]cm	小口径[1.1]cm	小口横[0.7]cm	口付銀 [0.4]cm	重さ2.3g			SE1	吸口	48-7
20	鉄製品	小柄	長さ[8.1]cm	刃長[7.8]cm	刃幅1.0cm	背幅0.2cm	重さ14.6g			SE1		48-7

第24表 第1号井戸跡出土錢貨観察表(第63図)

持国 番号	銭貨名	背面	直径(mm) 縦 横	厚さ (mm)	重量 (g)	書体	残存	初鑄年・国	出土位置	備考	図版	
21	皇宋通寶		24.08	23.92	1.63	2.7	篆書	完形	1038	北宋	SE1	47-4

平面形状は不整円形で、断面形状は上部が広がり途中で狭まる漏斗状である。残存部の規模は、長径2.52m、短径(1.42)mで、狭まった径1.04mである。

遺物は、幅が広がった部分から検出された。井戸の廃棄後、土壤状に残った凹み部分に廃棄されたと考えられる。遺物は近世のものが含まれるが、井戸自体は中世に使用されていたと考えられる。

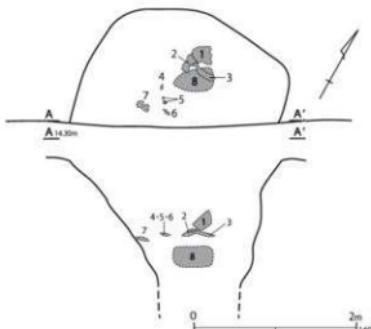
出土遺物は、かわらけ7点、瓦質土器焰烙18点(うち11点は同一個体)、常陸系の土師質土器焰烙3点、陶器8点(数字は破片数、以下同じ)

と金属製品である。第62図1～17、第63図18～21は図示した遺物である。

1～9はかわらけである。1～4と7は胎土が粗く砂っぽい印象のものである。1はやや歪んでいるが、概ね口径9.5～9.8cm、器高2.1～2.6cmと規格的である。また、内底面に弱く満巻状のナデ痕を残す点も共通する。北武藏や上野地域で16世紀後葉以降に普及するタイプである。5、6、8、9はこれらとは別のタイプで、胎土は粉っぽい印象である。5、6は底部破片である。内底面の回転ナデは5では弱く、6はやランダムである。

第25表 第1号井戸跡貝類殻高分布表

			10.0 ～ 14.9	15.0 ～ 19.9	20.0 ～ 24.9	25.0 ～ 29.9	30.0 ～ 34.9	35.0 ～ 39.9	40.0 ～ 44.9	不明	計		不明	計				
1	イシガイ	右	12	36	13	1				177	239		4	イシガイ	左	1		
	イシガイ	左	10	55	22				178	265			マツカサガイ	左	1		1	
	マツカサガイ	右	10	25	13				58	106		5	イシガイ	右	2	2		
	マツカサガイ	左	6	25	15	1			78	125		5	イシガイ	左	5	5		
	マツカサガイ	左右	2	1					3			3	マツカサガイ	右	3	3		
	チリメンカワニナ			1	1			1	3			6	イシガイ	右	1	1		
	不明(巻貝)							31	31				イシガイ	左	2	2		
1.2	イシガイ	右	3	10	5				55	73		7	イシガイ	右	1	6	1	
	イシガイ	左	3	14	2				52	71			イシガイ	左	5	2		
	マツカサガイ	右		5	1	1			32	39			マツカサガイ	右	2	2		
	マツカサガイ	左	1	9	2				27	39			マツカサガイ	左	2	1		
	イシガイ	左右	2	2					1	5			チリメンカワニナ		2	2		
	マルタニシ					1				1			マルタニシ		3	3		
	不明(巻貝)								1	1			8	イシガイ	右	25	14	1
2	イシガイ	右	3	29	7	1			55	95			イシガイ	左	5	32	10	
	イシガイ	左	6	15	2				78	101			マツカサガイ	右	1	15	8	
	マツカサガイ	右	5	8	4				38	55			マツカサガイ	左	7	38	8	
	マツカサガイ	左	1	8	7				40	56			イシガイ	左	1		1	
	マツカサガイ	左右		1						1			マルタニシ		1	1		
	マルタニシ					1	4	5					チリメンカワニナ	1	2	2	1	
	チリメンカワニナ					1		3	4				はまぐり?		1	1		
	不明(巻貝)							60	60				不明(巻貝)		55	55		
3	イシガイ	右	4	18	7				53	82			一括	イシガイ	右			
	イシガイ	左	2	10	3				56	71				イシガイ	左	2	2	
	マツカサガイ	右	5	4	8				55	72				マツカサガイ	右	5	5	
	マツカサガイ	左		6	6				76	88				マツカサガイ	左	2	2	
	マツカサガイ	左右			1					1								
	チリメンカワニナ				1					1	2							
	不明(巻貝)									16	16							



第64図 第1号井戸跡貝類位置図

る。8、9はほぼ同じ器形のもので、器壁が薄手である。胎土に赤色粒子が多量に含まれる点も共通している。

10、11は瓦質土器の熔融で、北武藏、上野地域に16世紀後半以降普及するものである。いずれも体部外面下位は無調整で、成形に伴うシワ状の痕跡が残っている。内面中位には明瞭な稜が認められ、10は内耳の下端が体部下位に接続する。11は器高が高い。全体的に古手の特徴を有し、16世紀後半～17世紀前半に位置付けられる

12は陶器の丸碗で、白い斑が入る深緑色の縁釉が掛けられる。肥前系陶器の可能性がある。

13は瀬戸美濃系陶器の皿で、内外面に厚く長石釉が掛けられる。口縁部は端反状、底部は削り込み高台である。所謂、志野丸皿である。内面にビン痕が残り、高台内には目跡が残る。体部の一部に釉薬が溶けて発泡した痕跡が認められるが、被熱では無く焼成時の痕跡と考えられる。17世紀前葉に位置づけられる。

14は瀬戸美濃系陶器の瓶類で、外面に赤味を帯びた灰褐色の鉄釉が掛けられる。上部の破損面が研磨されており、二次的に砥具として使用されたものと思われる。

15～17は常滑焼窯の胴部破片である。いずれも中世の所産と思われる。15の内外面にはヘラナデ痕跡が顕著に残り、一部刷毛目状になっている。陶器ではこのほかに、17世紀の肥前系陶器呉器手碗の破片が出土している。

出土したかわらけ・焰烙の様相や、陶器の年代観から、17世紀中葉前後の埋没と想定される。

18～21は金属製品である。18、19は銅製品の煙管である。18は雁首で、圈線を伴う肩と火皿の補強帶がつき、脂反しは強く反っている。19

は吸口部分とみられ、肩には毛彫り状に模様が施される。いずれも17世紀代の煙管と考えて良いであろう。

他に、貝が多量に検出された。出土状況から8箇所に分割して取り上げた（第64図）。イシガイとマツカサガイが主体であった（第25表）。

第2号井戸跡（第65図）

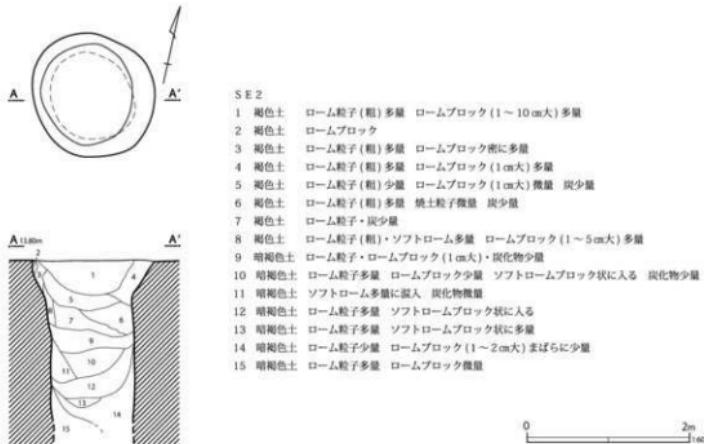
第2号井戸跡は、H-20グリッドから検出された。平面形状は円形で断面形状は漏斗状である。規模は、長径1.52m、短径1.48mで、狭まった径1.24mである。遺物は検出されなかった。

第3号井戸跡（第66、67図）

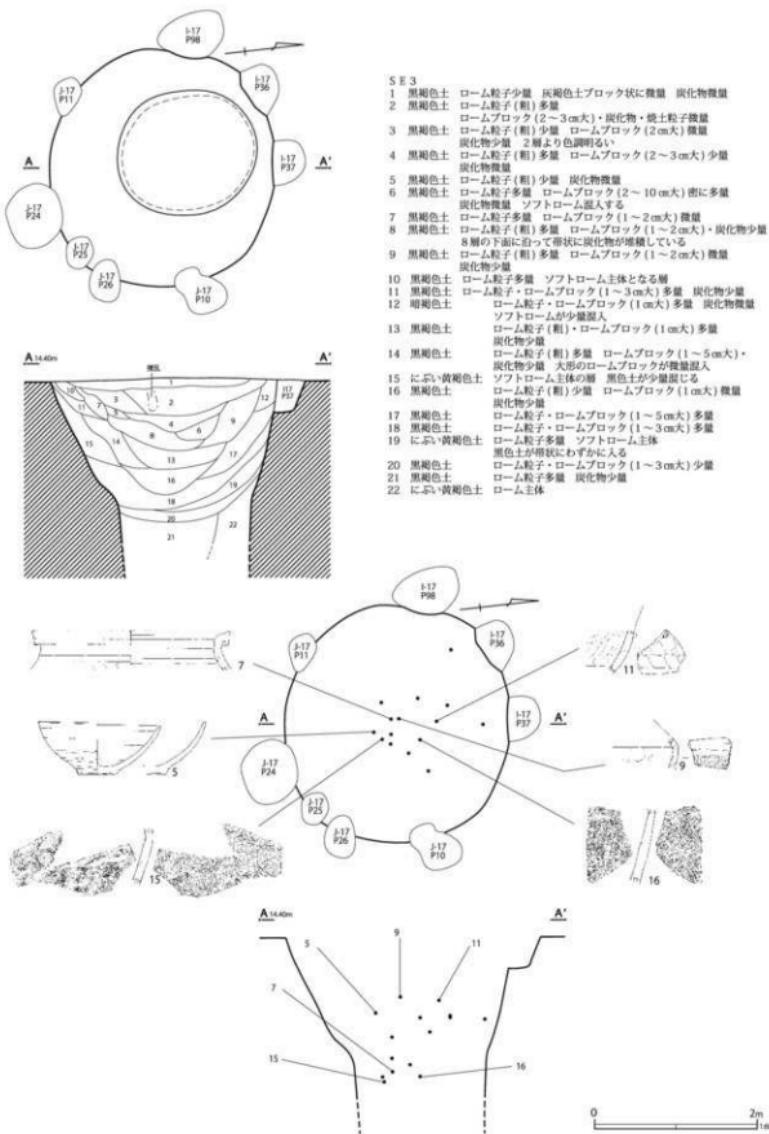
第3号井戸跡は、I、J-17グリッドから検出された。ピットが密集する3区から検出され、多くのピットと重複する。西側に第4号埋蔵鉄が隣接している。

平面形状は円形で、断面形状は漏斗状である。残存部の規模は、長径2.78m、短径2.76mで、狭まった径1.70mである。

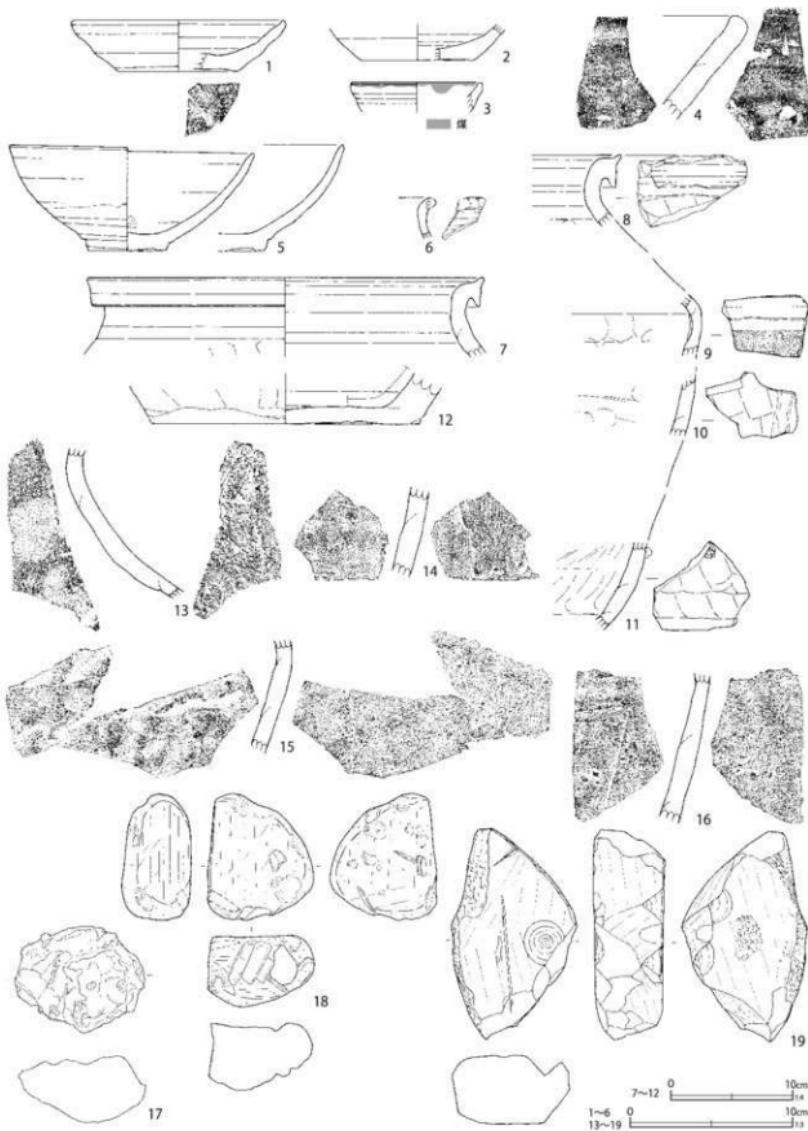
井戸は幅が狭くなった部分より下方は、短期間で埋め戻されたと考えられ、遺物はそれより上部



第65図 第2号井戸跡



第366図 第3号井戸跡・出土遺物分布図



第67図 第3号井戸跡出土遺物

第26表 第3号井戸跡出土遺物観察表（第67図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	造構	備考	団版
1	かわらけ	小皿	[12.8]	3.1	(7.2)	A	15	良好	にぶい黄橙	SE3	底部糞切痕 胎土粉質 底部煤付着	30-2
2	かわらけ	小皿	-	[2.2]	(6.9)	EGB	10	普通	桜	SE3	底部糞切痕(磨耗激しい) 胎土粉質	
3	かわらけ	小皿	(7.8)	[1.8]	-	A	5	良好	にぶい桜	SE3	胎土粉質 口縁部タール付着	30-3
4	瓦質土器	鉢	-	[6.3]	-	BDE	5	普通	灰白	SE3	内外面焼付	30-4
5	陶器	平碗	14.9	6.5	4.8	D	90	良好	灰白	SE3	No9 古瀬戸 内外面灰釉 内面目跡4 後 II期	30-5
6	陶器	瓶類	-	[2.6]	-	I	5	良好	灰黄褐	SE3	志戸呂昌 外面鉄釉	30-6
7	陶器	甕	(32.4)	[6.5]	-	DE	5	良好	黄灰	SE3	No12 常滑 外面降灰(自然釉) 7型式	30-7
8	陶器	甕	-	[5.8]	-	DE	5	良好	灰黄褐	SE3	常滑 外面降灰(自然釉) 7型式	30-8
9	陶器	甕	-	[5.0]	-	DEI	5	良好	灰黄褐	SE3	No7 常滑 外面上位降灰(自然釉) 下位押印文	
10	陶器	甕	-	[5.3]	-	DEIK	5	良好	灰黄褐	SE3	常滑 外面降灰(自然釉)	30-9
11	陶器	甕	-	[7.3]	-	DIK	5	良好	灰黄褐	SE3	No4 常滑 外面裏内付着物(降灰による)	
12	陶器	甕	-	[3.1] (16.4)	-	DEIK	5	良好	灰黄	SE3	常滑 砂目甕 外面降灰(自然釉) 破損後 内面二次使用(磨滅)	
13	陶器	甕	-	[9.0]	-	DEK	5	良好	灰白	SE3	常滑 外面降灰(自然釉) 内面一部二次使用(紙具)	30-10
14	陶器	甕	-	[5.5]	-	DI	5	良好	灰	SE3	常滑 外面ヘラナデ	30-11
15	陶器	甕	-	[7.0]	-	DEK	5	良好	灰	SE3	常滑 外面上位降灰・下位ヘラナデ	
16	陶器	甕	-	[9.2]	-	DEK	5	良好	灰白	SE3	常滑 外面ヘラナデ やや小型 楕形鋸沿溝だが厚みがあり比重が高い	30-12
17	鉄滓	楕円鋸沿溝	直径 7.8 cm	厚さ 3.6 cm	重さ 225.6 g							
18	石製品	磨石	長さ 7.7cm	幅 6.5cm	厚さ 4.3cm	重さ 59.5 g	角			SE3	ほぼ完形	30-13
19	石製品	砥石	閃石安山岩	長さ [13.0]cm	幅 [7.7]cm	厚さ 4.4cm	重さ 525.2 g 砂岩			グリッド	石皿転用	

から出土した。

出土遺物は、かわらけ9点、瓦質土器鉢2点、陶器17点（うち常滑焼15点）、須恵器甕1点と、鋸沿溝、石製品である。第67図1～19は図示した遺物である。

1～3はかわらけである。1は復元口径12.8cmと、やや大形のかわらけである。胎土は粉っぽい印象だが、硬質である。口縁端部はつまみ上げるようにナデ調整され、内面には強い稜が形成される。口縁部外側は二段にわたるヨコナデが施される。底部外側に少量の煤が付着する。2も胎土が粉っぽい印象のかわらけである。全体の摩耗が激しく、調整等は観察し難い。3は小型のかわらけで、口縁部のみ遺存する。頸部に煤が付着しており、灯明皿として用いられたものである。胎土は粉っぽい印象だが、硬質である。

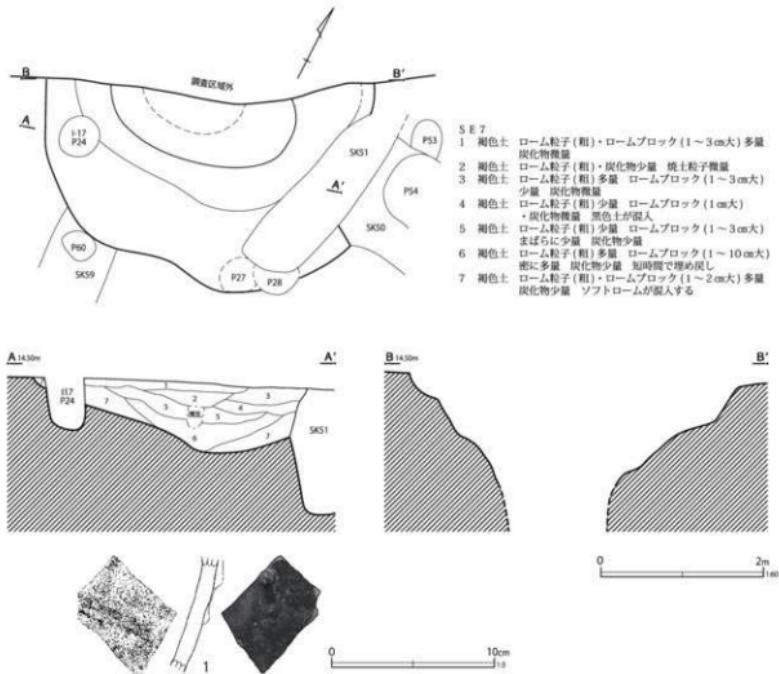
4は瓦質土器鉢の口縁部破片である。全体的に厚手で、口縁部は強いヨコナデで仕上げられる。外側下位には弱い指理圧痕が、内側下位にはやや斜方向に強いナデが観察される。胎土には径2～5mm程度の長石・石英粒が含まれるほか、少量の

片岩粒子が認められる。

5は陶器平碗で、内外面にやや渦った灰釉が施される。内面には目跡が4箇所認められる。高台はやや浅く削り込まれ、外側の下端部には不規則な面取りが認められる。古瀬戸後期様式（後II期）の製品で、14世紀後葉～15世紀前葉に位置づけられる。

6は陶器瓶類の口縁部小破片である。胎土は炻器質で、外側に黒褐色の光沢がある鉄釉が施される。

7～16は常滑焼の甕である。このうち7～11までは同一個体と考えられる。口径が復元できる破片を7に示し、他の破片は復元的に配置して8～11に示した。胎土は黄灰～灰黄色であるが、外側面はにぶい赤褐色に発色する。頸部以下の外側は、全体的にヘラナデが施され、肩部直下に押印文が認められる。常滑編年7型式に相当し、14世紀前半の所産と思われる。12は底部破片である。内面が摩耗しており、上部破損後に鉢として転用された可能性がある。13～16は頸部～胴部にかけての破片である。13は頸部破片で外側全面



第68図 第7号井戸跡・出土遺物

第27表 第7号井戸跡出土遺物観察表（第68図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	施成	色調	構造	備考	図版
1	陶器	甕	-	[7.0]	-	DEH	5		灰黄	SE7	常滑 内外面降灰 外面自然釉たれ	30-15

に自然釉が掛かる。内面の一部に二次的な摩擦が認められ、転用砥具に使用されたものと思われる。

15は肩部直下の胴部破片で、上面に自然降灰が認められる。16も肩部直下の胴部破片である。14は胴部下位の破片で、胎土が強く還元している。

17は楕形鍛冶津である。上面は中央部が平坦で、一部鉄塊が付着し突出部がみられる。周間に破断面をもつ。下面は船底形で細かな凹凸がみられる。やや小型であるが、厚みがあり比重が重い。

18、19は砾石である。19は縄文時代の石皿片を再利用している。

出土遺物の様相から中世の所産であり、15世

紀代に帰属する可能性がある。

第7号井戸跡（第68図）

第7号井戸跡は、I-17グリッドから検出された。北半部は調査区外となり、検出されなかつた。平面形状は不整円形で、断面形状は漏斗状である。残存部の規模は、長径3.48m、短径2.68mで、狭まった径1.38mである。

出土遺物は少なく、瓦質土器の熔接ないし鍋の底部1点と常滑焼甕1点のみである。

第68図1は、常滑焼の甕で胴部上位の破片と考えられる。外面には自然釉が流れる。内面上位には横方向のユビナデが連続的に施される。

(4) 埋蔵銭

埋蔵銭に関連する遺構は、埋蔵銭が埋設された遺構4基、埋蔵銭を取り出すために掘削された土壙2基である（第69、70図）。

第1、2、4号埋蔵銭は、当初は井戸跡としていた。

井戸が検出された周辺であることや、深く円筒状に掘削された様子から、井戸跡としていたものである。しかしながら、他の井戸と比べ、底面が検出できしたことや、大型の甕の破片が上面から出土するなど、様相が違っていたことから、土壙とすることも考えられていた。

その後、埋蔵銭が発見された段階で、それらの遺構について見直しを行い、改めて埋蔵銭に関連する遺構とした。埋蔵銭が埋設されていたと考えられる遺構については、埋蔵銭と称するとすることした。

第1～3号埋蔵銭は南北方向に並んで検出された。また、第2号埋蔵銭には、第57号土壙が連

結していたが、これについても埋蔵銭に関連する遺構のため、ここに含めた。

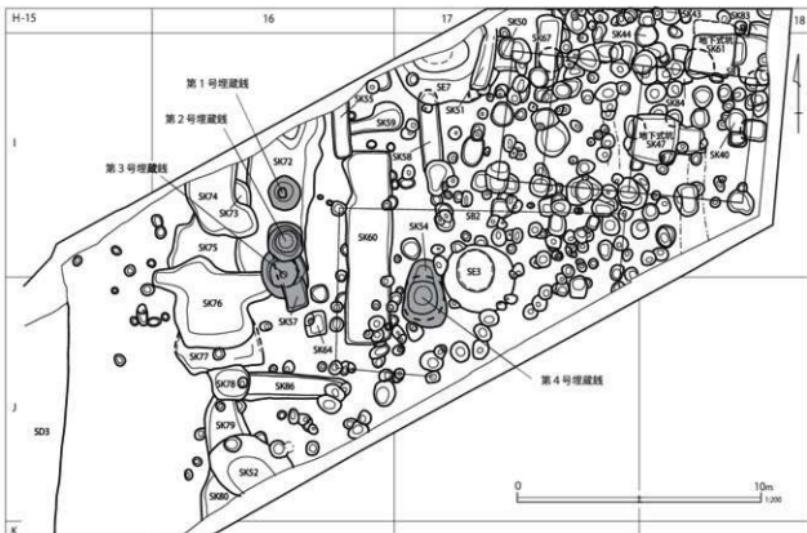
第1～3号埋蔵銭とは東側にやや離れていたが、第4号埋蔵銭についても、他の埋蔵銭と遺構の形状が同様であることや、それに連結して検出された第54号土壙が第57号土壙と同様であることから埋蔵銭と、それに関連する土壙と判断した。

遺構は、堀と掘立柱建物群との間に位置する。埋蔵銭は、建物の床下に埋められていた可能性があるが第4号埋蔵銭の周囲からは、掘立柱建物が検出されているが、第1～3号埋蔵銭の周辺からは明確な建物は検出することはできなかつた。

第1～3号埋蔵銭の周囲には、規模の大きい性格不明土壙が多く検出されており、何らかの関連があった可能性がある。

第1号埋蔵銭（第71～74図）

第1号埋蔵銭は、I-16グリッドから検出された。南側に第2号埋蔵銭が隣接している。遺構は土層から2層まで、短期間に埋め戻されたと考

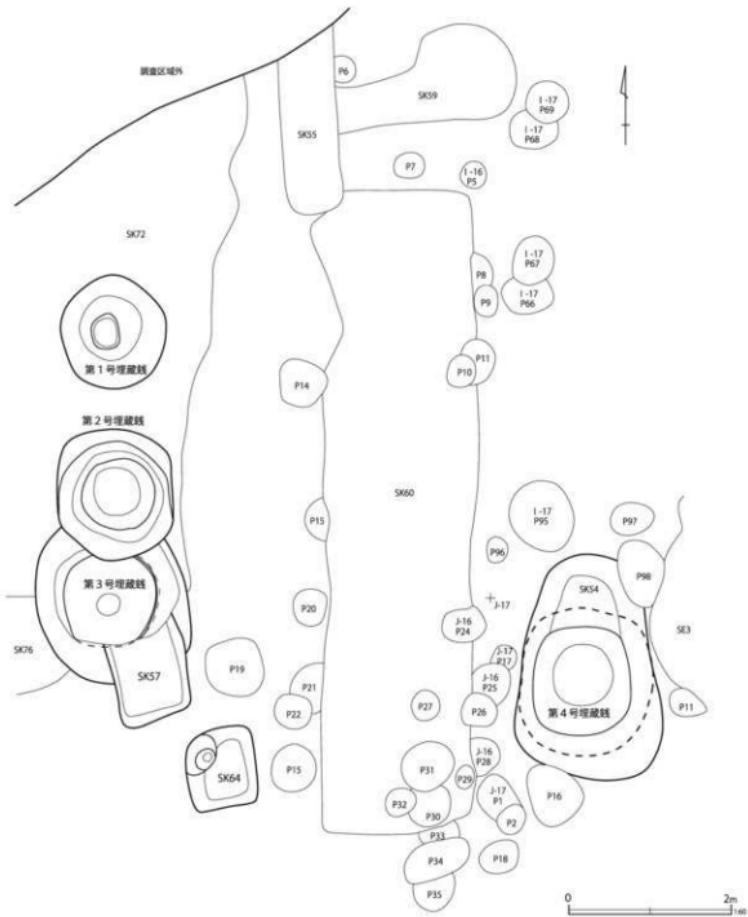


第69図 埋蔵銭位置図

えられる。埋まりきらなく、浅い窪みが残つていった部分からは、大量の常滑焼の破片が検出された。出土状況の第71図15は、底部分で、底面が上を向いて検出された。このような遺物の出土状況は、調査時は不可解であったが、破片を復元したところ、第2号埋蔵鉄の底面付近から検出された口縁部が同一個体ということが判明した。そのため第

2号埋蔵鉄の甕を破壊して銭貨を取り出した際に、すぐ横の第1号埋蔵鉄の窪みに廃棄されたものであると推定できた。表土掘削時にも、この周辺から常滑焼の甕の大型破片が検出されている。

遺構の形状は円形で、ほぼ円筒状に掘り込まれていた。底面を精査してところ、中央付近から浅い窪みを確認することができた。第3号埋蔵鉄の



第70図 第1～4号埋蔵鉄

甕取り上げ時に、底部周辺が同じような形状で窪んでいたことから、甕の底部分が自重で落ち込んだ痕跡であると考えられる。

第2号埋蔵銭の容器が検出されたことから、第2号埋蔵銭を取り出した時に、第1号埋蔵銭は遺構が埋まりかけた状態であったことがわかった。出土遺物は陶器9点（常滑焼甕1個体分を含む）、かわらけ3点、土師質土器（火鉢か）1点、スサ入り粘土塊1、金属製品（錢貨）8点である。第72図1、第73図2～6、第74図7～14は図示した遺物である。

1は常滑焼の甕である。底部から肩部にかけての遺存部分と、肩部から口縁部にかけての遺存部分には直接の接点が無いが、各々の計測値とバランスから復元して図示した。なお、第2号土壙底面付近から、同一個体の口縁部が出土している。口径51.4cm、胴部最大径92.6cm、底径21.9cm、器高92.0cmに復元される。口縁部は幅広い縁帶を形成し、常滑編年9型式の特徴を備える。口縁部から外面の頸部上位まではヨコナデで仕上げられる。頸部から肩部にかけては、ヨコナデに先行するヘラナデ痕が僅かに認められる。肩部以下は縦方向のヘラナデで調整される。頸部下位と肩部直下には、押印が巡っている。押印は縦線文に「×」文を組み合わせる。中央に横線が一条入るタイプで、C b 1類に分類される（愛知県史編さん委員会2012）。内面は頸部に縦方向、胴部中央部に横方向のヘラナデが認められ、下位は斜方向のナデが施される。また、粘土の輪積み接合痕を中心に、縦方向に連続する指頭圧痕が認められる。内面には、底面と胴部上位を中心にして布の痕跡が遺存していた。この痕跡については、自然科学分析を行ったところ、それ自体が压痕であり、布の織維本体は残存していないことがわかった。残された压痕から推測された織維は、カラムシなどのイラクサ科の織維か、アサである可能性が高いとされた。布压痕から、放射性炭素年代測定が行われ、

15世紀前半から中ごろの曆年代が示された。

また、底面のほぼ中央部に僅かながら緑青が確認され、甕の中に銅銭が入れられていた痕跡と思われる。ただし、全体的には緑青や錢貨の痕跡がほとんど認められないので、アサ布等に包まれて錢貨が入れられていた可能性も考慮される。

2は厚手のかわらけで、底径が小さく坏形を呈する。内底面は一方向に撫でつけられる。胎土には角閃石とともに赤色粒子の混入が目立つ。このタイプは15世紀後半に類例が認められる。

3は陶器の瓶類としたもので、外面に赤褐色の鉄釉が掛けられる。胎土は炻器質である。古瀬戸系陶器の祖母懐茶壺である可能性が高い。

4～6はいずれも常滑焼甕の胴部破片である。

7～14は出土した錢貨である。第2号埋蔵銭内から錢貨が取り出されたとき、その一部が残されたものと考えられる。

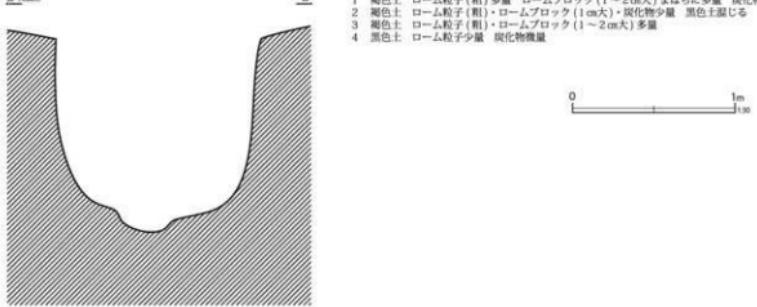
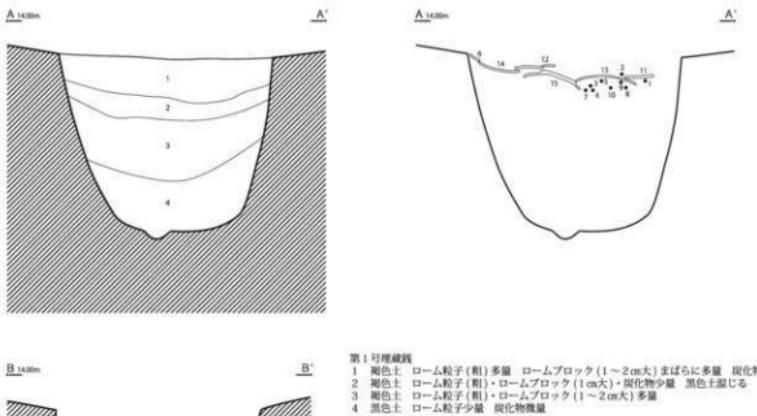
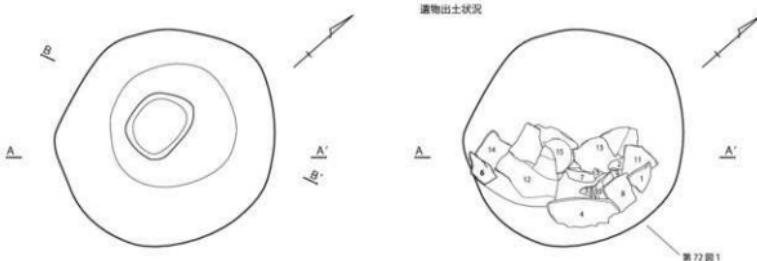
第2号埋蔵銭（第75、76図）

第2号埋蔵銭は、I-16グリッドから検出された。北側に第1号埋蔵銭が隣接している。

平面形はほぼ円形であるが、断面から壁面が何段階かに分かれて掘られていることが観察された。底面近くが最も狭くなっている。底面中央には、第1号埋蔵銭から検出された甕と同一個体の甕の口縁部が検出された。錢貨が入れられた甕の一部である。第1号埋蔵銭で触れたように、錢貨を入れた甕を見つけるために掘り起こしている。土層の10層から、遺構は半分近くが掘削後に短期間で埋まったと考えられる。10層はロームブロックが主体であることから、第57号土壙の掘削土とも考えられる。

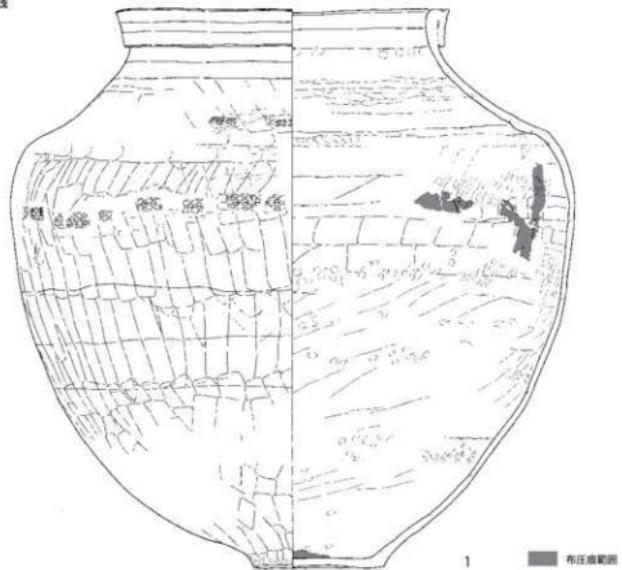
第57号土壙（第75、76図）

第57号土壙は、I、J-16グリッドから検出された。第2号埋蔵銭に連結している。土壙は、第2号埋蔵銭の甕を見つけるために掘削されたと考えられる。最初に約0.7mの深さで北側方向に、平らに0.9mほど掘り込み、その後第2号埋蔵銭

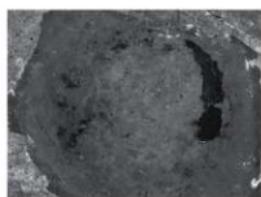


第71図 第1号埋蔵坑

第1号埋藏罐



底内面布压痕



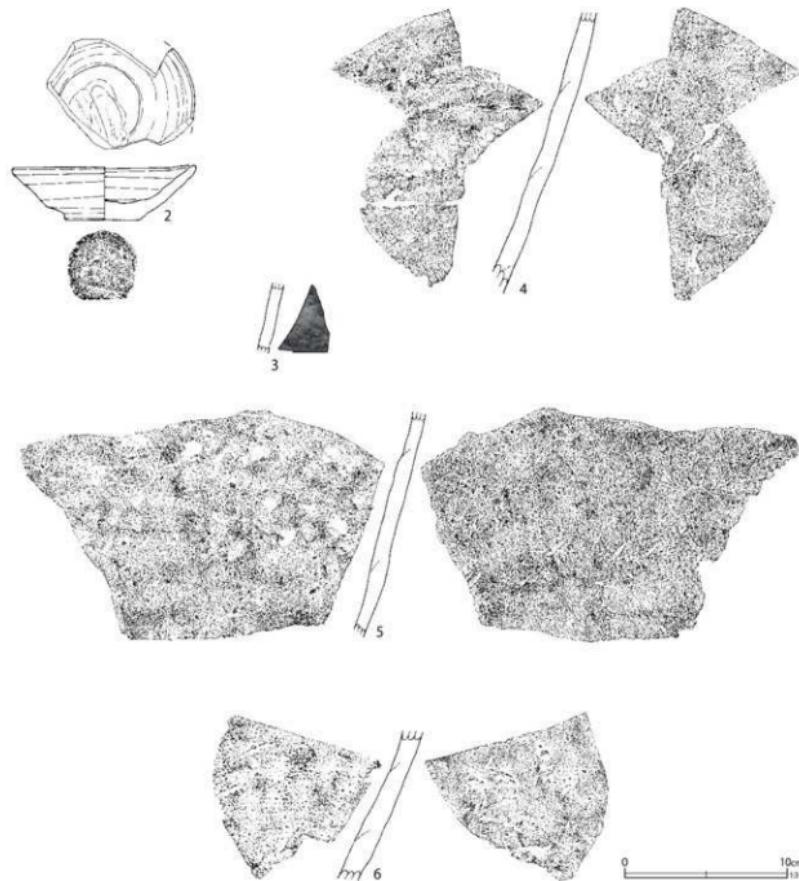
0 20cm

押印



0 5cm

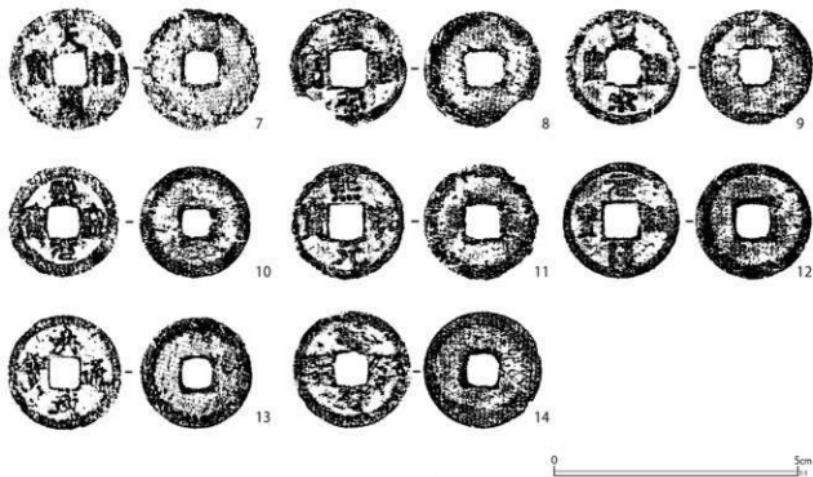
第72図 第1号埋藏罐出土遺物（1）



第73図 第1号埋蔵鉢出土遺物（2）

第28表 第1号埋蔵鉢出土遺物観察表（第72・73図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	団版	
1	陶器	甕	(51, 4)	(90, 2)	21.9	DEG	30	普通	褐	常滑 内面布庄痕付着	21-5	
2	かわらけ	小皿	(11, 0)	3.2	4.6	CEHI	40	不良	灰黄褐	底部赤切痕(右) 口縁部一部erosion	31-1	
3	陶器	瓶頸	—	[4, 4]	—	—	1	5	良好	黄灰	古瀬戸 外面鉄輪 胎土柘器質 後期様式祖母懐茶葉か	31-2
4	陶器	甕	—	[13, 7]	—	DEG	10	普通	にぶい黄褐	常滑 外面ヘラナデ		
5	陶器	甕	—	[17, 4]	—	DEG	10	普通	にぶい黄褐	常滑 外面ヘラナデ		
6	陶器	甕	—	[9, 3]	—	DE	5	普通	灰白	常滑 外面ヘラナデ 内面降灰激しい		



第74図 第1号埋蔵銭出土遺物（3）

第29表 第1号埋蔵銭出土銭貨観察表（第74図）

番号 番号	銭貨名	背面	銭径 (mm)		銭厚 (mm)	重量 (g)	書体	残存	初鑄年・国	備考	回版
			縦	横							
7	天祐通寶		25.50	25.27	1.63	1.9	真書	完形	1017	北宋	47-1
8	皇宋通寶		24.45	24.67	1.56	2.3	篆書	12ば完形	1038	北宋	47-1
9	皇宋通寶		24.28	24.07	1.70	2.3	真書	完形	1038	北宋	47-1
10	熙寧元寶		23.23	23.22	1.35	2.4	篆書	完形	1068	北宋	47-1
11	熙寧元寶		24.30	23.84	1.52	2.2	真書	完形	1068	北宋	47-1
12	元祐通寶		24.43	24.49	1.63	3.0	篆書	完形	1086	北宋	47-1
13	漢武通寶		23.90	23.69	1.73	2.4	真書	完形	1368	明 マ頃通・單点通	47-1
14	□□□□		24.66	24.52	1.59	2.6	真書	完形			47-1

に向けて斜めに掘削している。斜め方向の掘り込みは最終段階の掘削であり、実際は北側に向かって第2号埋蔵銭の掘り込みの痕跡がわかる部分まで続けて掘削していた可能性が高い。痕跡がわかつたため、斜め方向に掘っていったとも考えられる。そのように考えると、周辺の第60号土壙や、埋蔵銭の周辺を一段下げる第72号土壙などは、埋蔵銭を見つけるための試掘坑であったとも推測できる。

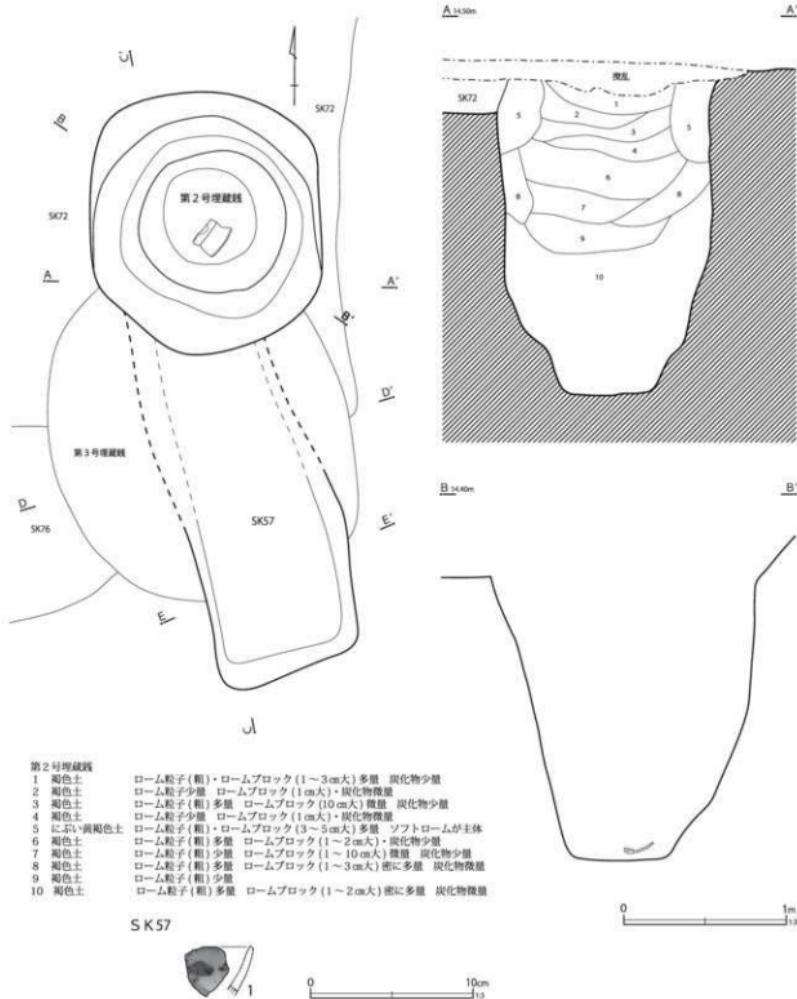
第75図1は土壙上部から出土した肥前系磁器の碗で、口縁部の小破片である。胎質が粗雑で厚手の所謂「波佐見系」の製品と考えられ、18世紀代に比定される。出土位置は遺構断面図（第76図）に示した。第57号土壙の埋土上層と認識さ

れる位置であり、本跡を用いた埋蔵銭の抜き取りは、近世段階で行われた可能性が高いと言える。

第3号埋蔵銭（第77～117図）

第3号埋蔵銭は、I、J-16グリッドから検出された。第57土壙に埋された第76号土壙の掘り込みより下の4層は、硬くしまったローム土で埋められており、当初は地山と見なしていた。

遺構は、第57号土壙の土層断面図の精査中に見つかった。土層を精査していたところ、周辺の地山と考えられていた部分が、ブロック状に崩れることがわかつた埋土であったことが判明した。第57号土壙の下を掘り進んだところ、その下に5層の黒褐色土層があり、その直下から緑泥片岩製の円形板石が検出された。黒褐色土は板石の上に薄



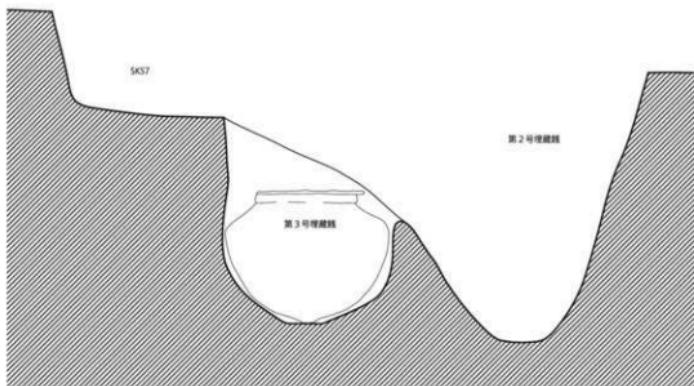
第75図 第2号埋藏鉢・第57号土壤(1)・第57号土壤出土遺物

第30表 第57号土壤出土遺物観察表(第75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	磁器	碗	—	[3.0]	—	—	5	普通	灰白	SK57	No.1 肥前系 内外面施釉 外面染付 烧成 18 c	31-3

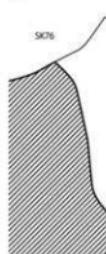
C 14.50m

C'



D 14.00m

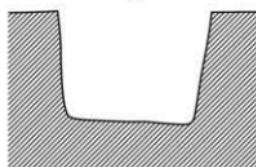
SK57



D'

E 14.50m

SK57



S K57

- 1 黒褐色土 しまり強 1層より大きいロームブロック ($\phi 5\text{cm}$ まで) 多量 磁器陶片出土
 2 褐色土 しまりやや弱 ロームブロック ($\phi 3\text{cm}$) とローム粗粒 ($\phi 1\text{cm}$) の層
 一部黒褐色土を楕円状に囲じえる
 3 黒褐色土 しまり弱 粘性あり ローム粗粒 ($\phi 1\text{cm}$) 少量
 4 黒褐色土 しまり弱 粘性弱 ローム粗粒 ($\phi 1\text{cm}$) が4割程度混じる ロームブロック ($\phi 3\text{cm}$) 少量
 5 黒褐色土 しまり強 粘性あり ロームブロック ($\phi 2\sim 3\text{cm}$) 少量
 6 黒褐色土 しまり極めて弱い ローム粗粒 ($\phi 1\text{cm}$) 少量 しまりが6層よりさらに弱い
 *振り返したあとに埋めた土



第76図 第2号埋藏鉢・第57号土壤 (2)

く堆積するのみで、板石を検出するとその周辺には地山に見える硬くしまったローム面が広がっていた。そのため、当初は円形の板石が土壌の底面に置かれていたと考えた。ところがその円形の板石が、府中市で検出された埋蔵銭の石蓋と同じ形状であることがわかり、板石の下に銭貨が入った甕が存在する可能性が指摘された。そこで、石の下に細い木製串を差して確認したところ、甕の口縁らしいものに当たり、板石が石蓋であることがわかった。その後、石蓋と甕の肩部分まで検出し、石蓋を動かして甕の内部を確認したところ、銭貨が詰まっていることがわかった。

他の埋蔵銭がすべて取り出されているのに対し、第3号埋蔵銭のみが何故残されたのかは不明であるが、第57号土壌が第3号埋蔵銭の直上まで掘り込まれていることから、当時でも埋蔵銭周辺の土が地山であると勘違いしたとも考えられる。また、掘り出す時間帯や、建物の床下であれば、さらに土の様子が見えにくく、見つけることができなかつたのではないかと考えられる。

埋蔵銭についてはその規模から、人力での移動是不可能であり、調査をすべて終了してから、移動することとなった。その移動時に見つかった遺物が第81図の木簡である。また、石蓋の裏面の中央付近から、銭貨が一枚付着して検出された。木簡は、口縁部から検出された。文字が横となる方向で、左端が口縁に掛けられ石蓋に押さえられた状態で出土した。

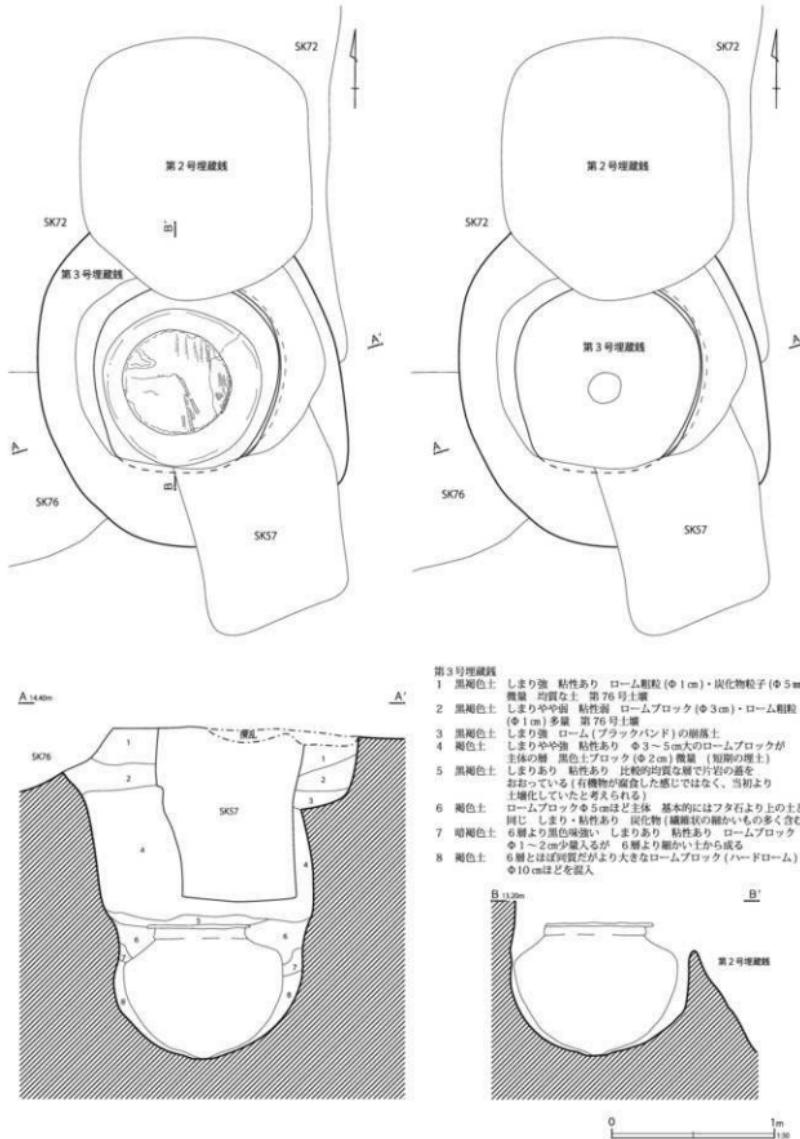
最後に、甕を移動した後に遺構底面を精査したところ、第1号埋蔵銭と同様に甕の底部分周辺が円形に窪んでいた。

土壌内からは埋蔵銭容器の常滑焼甕とその石蓋、甕の内容物である銭貨と木簡が出土しているが、他の遺物はほとんど無く、繩文土器細片と緑泥片岩細片が各1点出土したのみであった。第78図に常滑焼甕、第79、80図に石蓋、第81図に木簡を示した。

1は埋蔵銭を収めた甕で、常滑焼である。遺存部口径59.2cm、器高75.3～77.4cm、底径21.5～23.0cmである。銭貨を含む重量963kgである。器形が片方によって若干潰れ、肩部や口縁部に歪みが生じている。全体的に低平な印象が強い甕で、東京都品川区御殿山に伝世した資料（品川歴史館所蔵・常滑9型式）に形態・サイズとも極めて近い（谷口1991）。口縁部は幅広の縁帯が巡り、典型的な常滑9型式の特徴を備えている。外面の頸部から肩部付近にかけては薄く降灰がみられ、器面の整形・調整痕は確認し難い。縁帯部の直下には幅広く方向の工具痕が認められる。その下には斜方向のヘラナデ痕が認められ、肩の上に押印が巡っている。肩部以下は縦方向のヘラナデが施され、下位には3段にわたって強いヘラの「あたり」が残されている。また、肩部の直下にも押印が巡らされている。従って、押印は肩部と合わせて2段確認される。上下とも同じ意匠のものが用いられ、縦線文の間に三重の亀甲文が3つ配された構成である。内面は銭貨が収められているため、下位の観察はできない。口縁部付近は強いヨコナデで調整される。

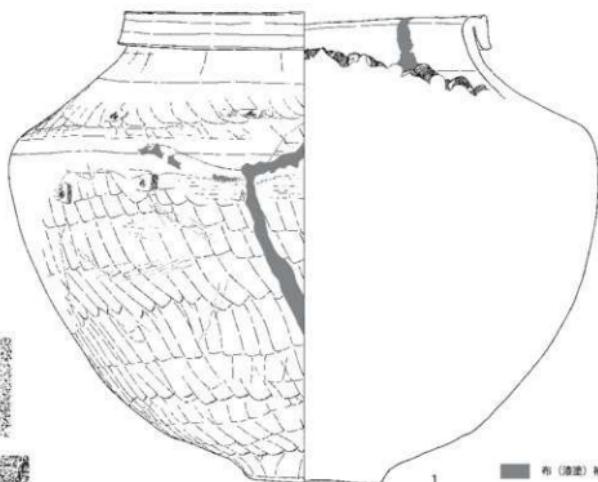
本資料には欠損や補修痕が認められ、埋蔵銭容器として用いられる前に何らかの用途で使用されたものと想定される。口縁部は縁帯部が全体の半分近く欠損していた。補修痕は、口縁部から底部に至る各所の内外面に認めることができる。器面に生じたヒビを覆うように布を当て、その上に漆を塗布して布を器面に接着させている。

本資料や、第1号埋蔵銭出土資料は、胴部径が90cm程度にもなるが、このサイズの常滑焼甕は出土例がかなり限られている。関東地方では神奈川県の鎌倉地域や国府所在地の東京都府中地域に集中し、他に東京湾沿岸地域で点々と出土している（白石・村山2011）。その分布状況から水上交通による輸送が前提にあったと考えられ、本遺跡でも元荒川との関係が問題になるだろう。また、用



第77図 第3号埋蔵鉄

第3号埋藏罐



1

■ 布(漆油)補修範囲

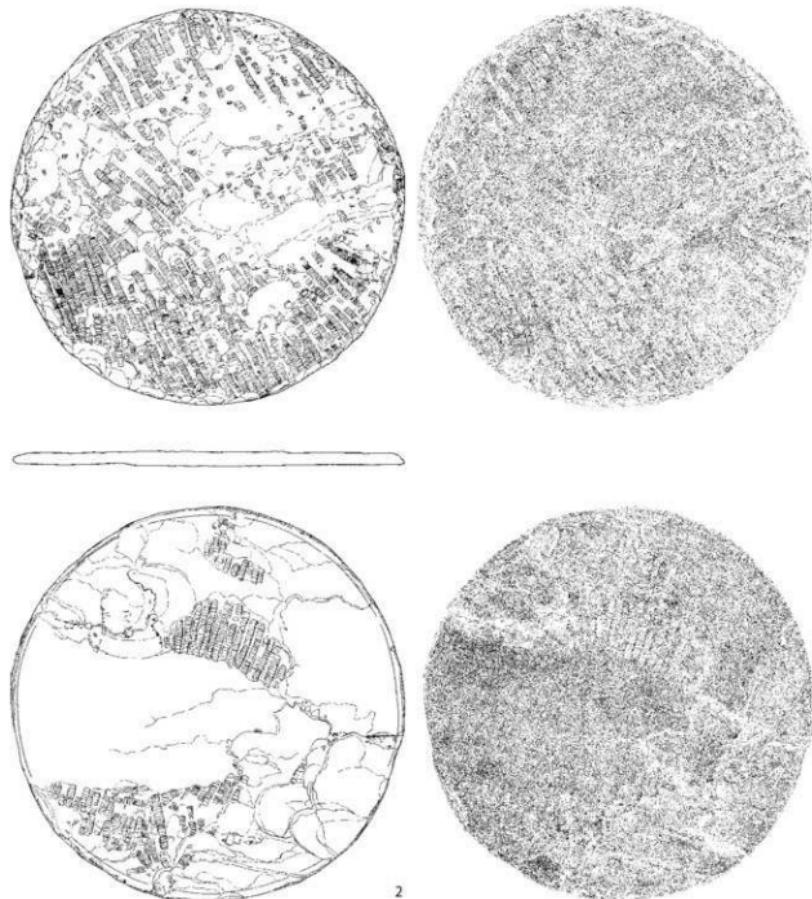


0 5cm

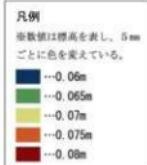
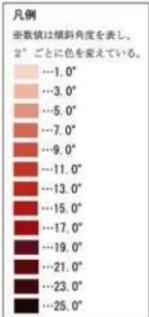
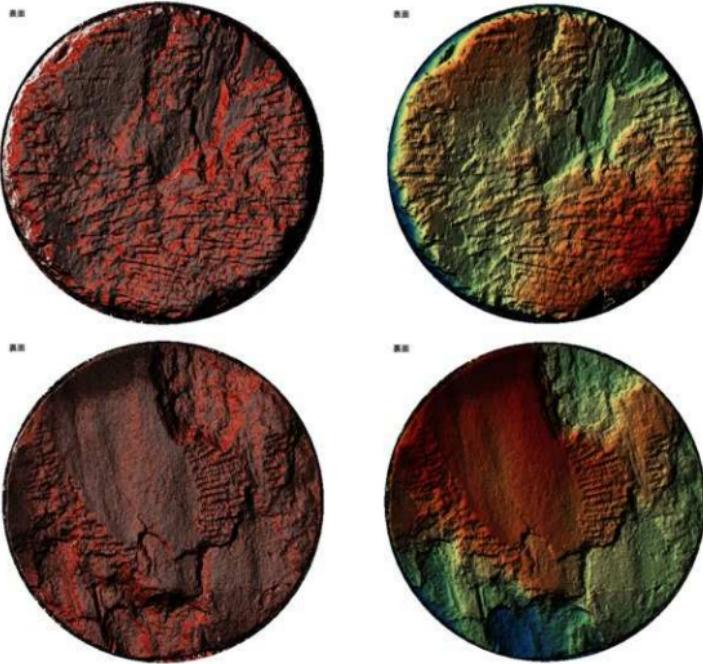
0 20cm

第78図 第3号埋藏罐出土遺物（1）

第3号埋蔵錢石蓋

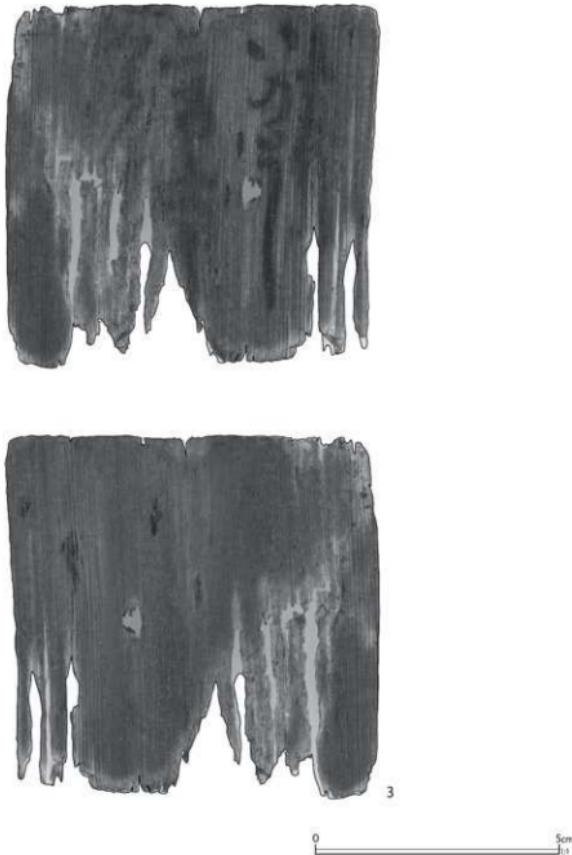


第79図 第3号埋蔵錢出土遺物（2）



0 20cm

第80図 第3号埋蔵銭石蓋表面傾斜・標高図



第81図 第3号埋蔵出土遺物（3）

途も限定的であったと考えられ、当地に2つの大甕がもたらされた背景にも留意する必要がある。

2は常滑焼甕の蓋として用いられていたものである。石質は良質な緑泥片岩で、色調は緑灰色、微細な磁鉄鉱を含む。直径64.1～65.2cm、厚さは最大で2.6cm、重量は19.5kgである。実測図の上・下は、出土状況の上・下と一致させている。以下、上面、下面の特徴を記述する。

上面には全体的に押し削り痕といわれる工具痕が認められる。押し削り痕は武藏型板碑の背面に多くみられ、平ノミの頭を玄能（ハンマー）で叩くことにより形成されるものと考えられる（村山2019）。実測図の左上部分では、押し削り痕がやや疎であり、不明瞭な部分も多い。一方で、右下部分は押し削り痕が密であり、一部ではほとんど間隔無く密集している。第80図に示す3次元画

像は、石材面の高低を示すために作成したもので、左が傾斜図、右が標高図である。標高図を確認すると、押し削り痕が密な部分は石材面が周囲より高く、全体でも厚手の部分であることが分かる。押し削り痕は面の高まり部分に密に施されていることが分かる。高まりを削り、面の高低のバランスをとることを意図した加工である蓋然性が高い。

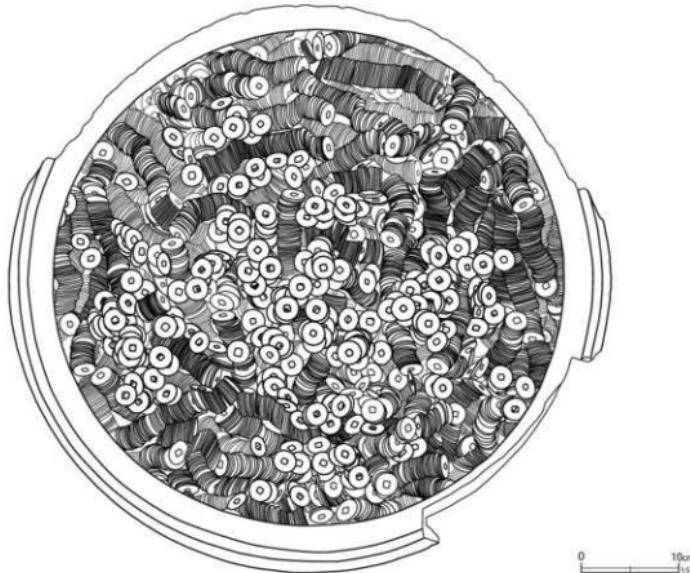
側縁部は叩打によって円形に成形されており、打ち欠きによる剥離は上面のみに認められる。このため、断面形は横に長い台形になっている。

下面側は上面と比較してより平滑だが、中心部が高く、周囲に三方から大きな剥離が及ぶ。このことは、第80図の傾斜図と標高図でも明確に表れている。下面にも押し削り痕がみられるが、上面よりも疎で、範囲も限定的である。下面の押し削り痕は、主に周囲の剥離部から中心の高まりに移行する間の部分に集中しており、傾斜部分を均

し、平滑化を意図した行為と考えられる。押し削り痕同士が密に施されているのもその証左と言える。以上のように、本資料の押し削り痕は主として、石材面の高低を均すことを意図している可能性が高い。なお、ノミ幅は上下面とも1.0cm程度である。

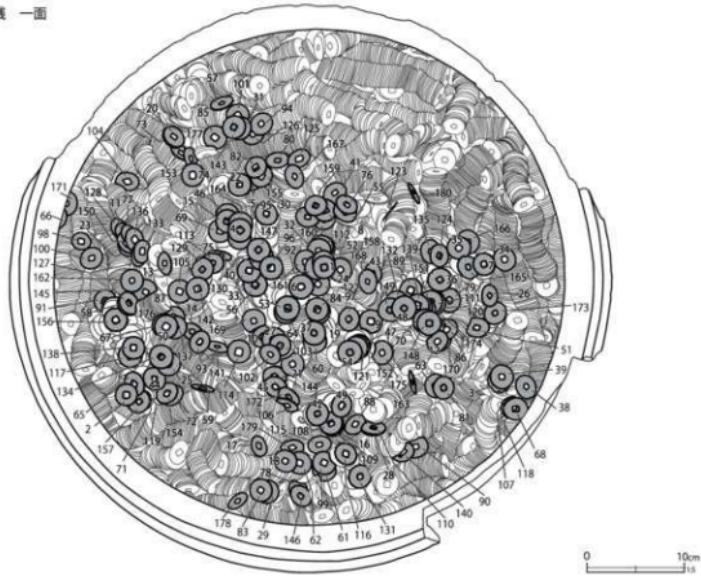
下面の側縁部には、端部に面取り状の細かいケズリ痕が残っている。また、側縁に沿った部分には、縁から7～15mm程離れて、円形に書き線が残されている。書き線の直径は62.5cmである。甕の口径より僅かに大きく、蓋は甕の直径に合わせて設計された蓋然性が高い。最終的には書き線より概ね一寸分大きく成形されている。なお、石蓋を外した際、下面に銭貨が一枚貼りついていた。当初は石蓋に接する高さまで銭貨が詰められていたものが、沈降したものと推定される。

大甕の蓋として加工された綠泥片岩製品は、東

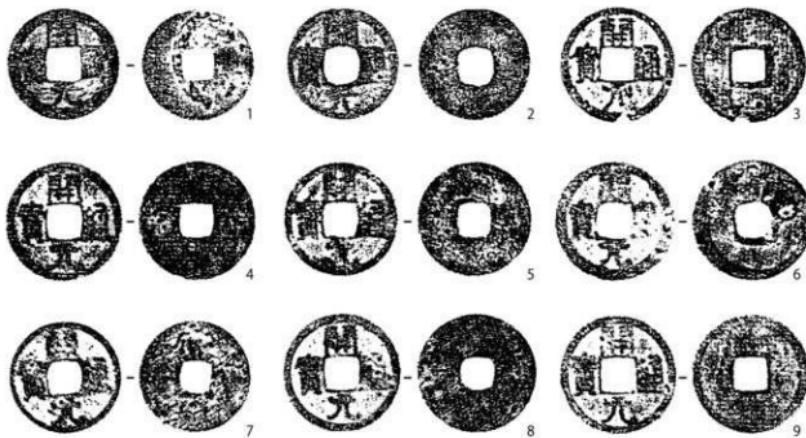


第82図 第3号埋蔵甕一面出土状況

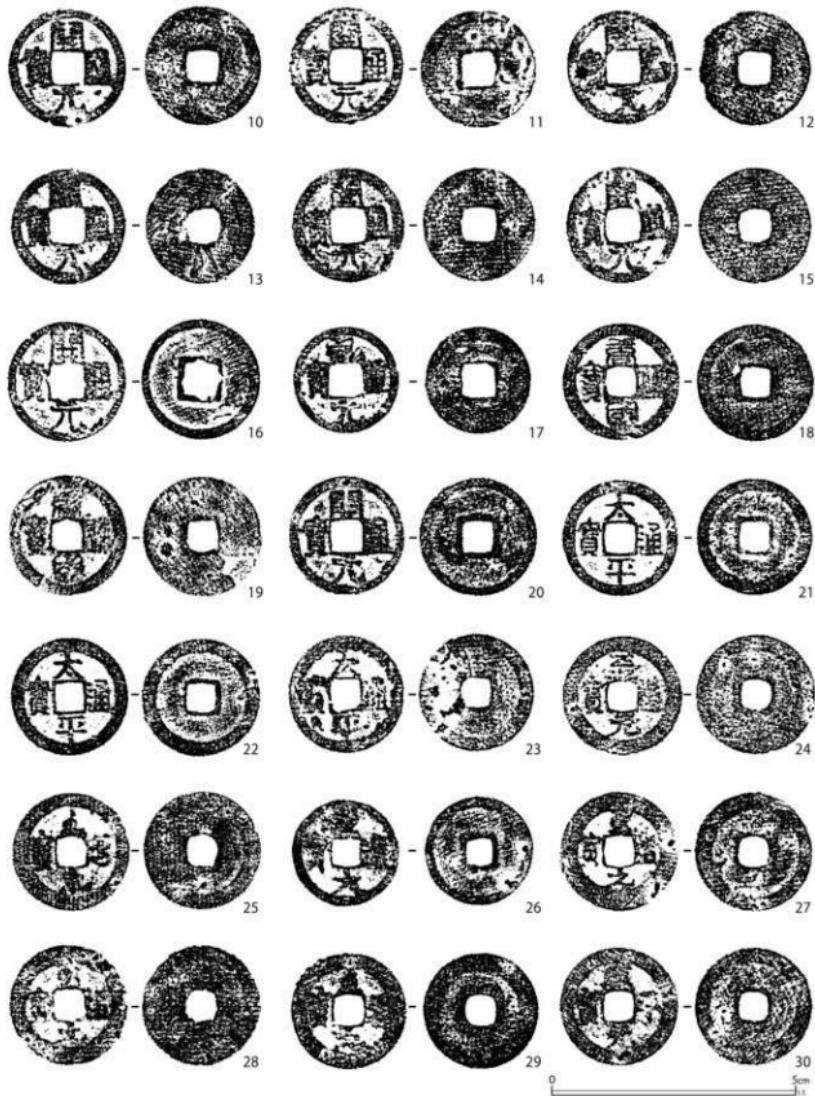
第3号埋藏錢 一面



第3号埋藏錢一面出土錢貨

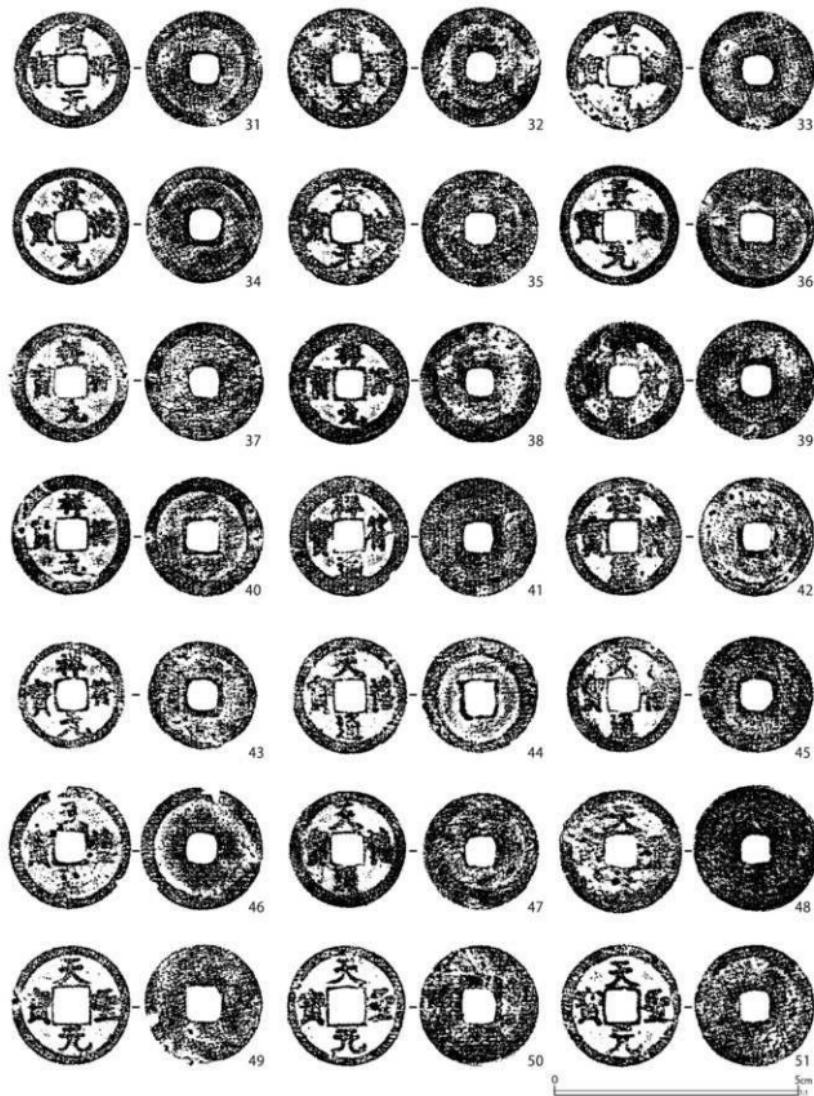


第3号埋藏錢一面出土錢貨



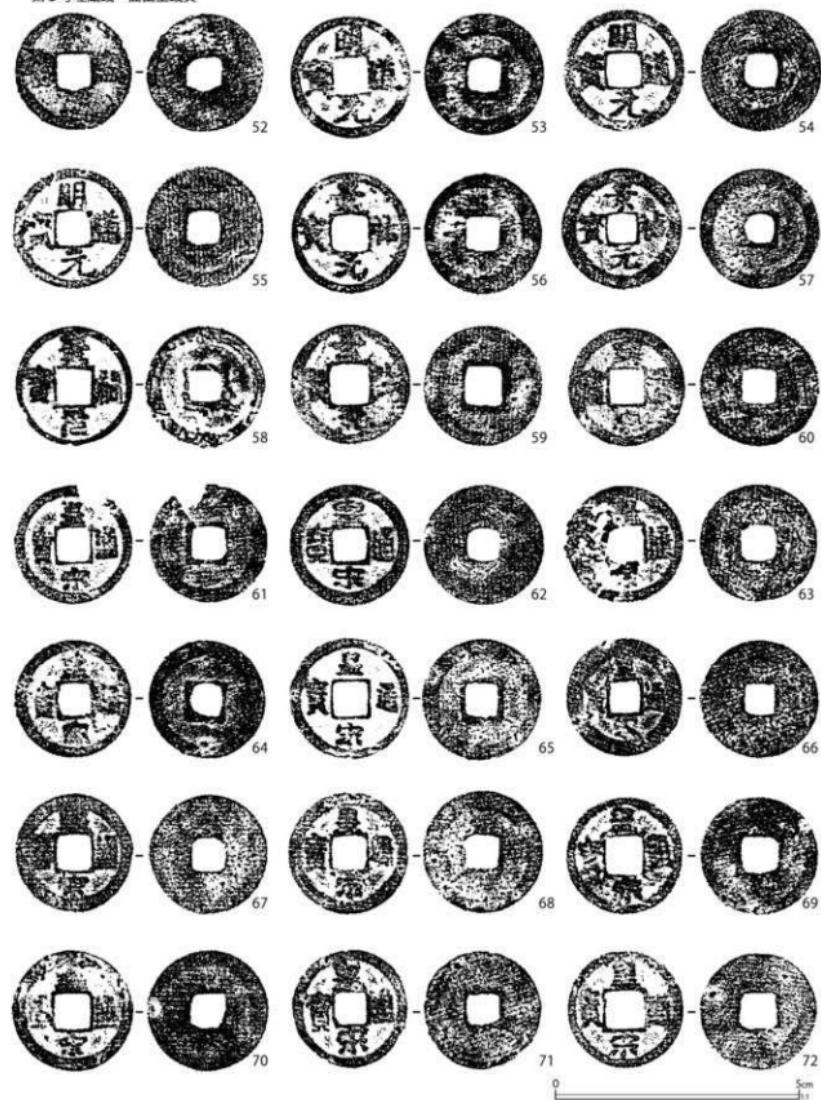
第84図 第3号埋藏錢一面出土錢貨（2）

第3号埋蔵錢一面出土錢貨



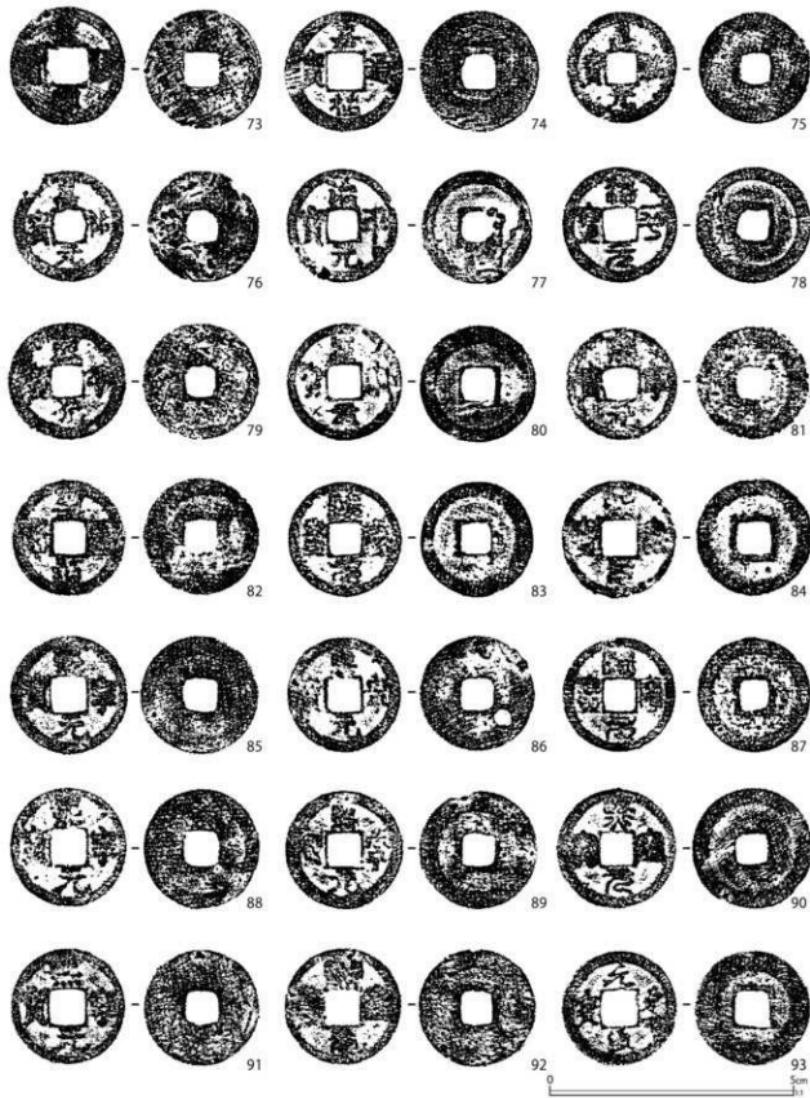
第85図 第3号埋蔵錢一面出土錢貨（3）

第3号埋藏錢一面出土錢貨



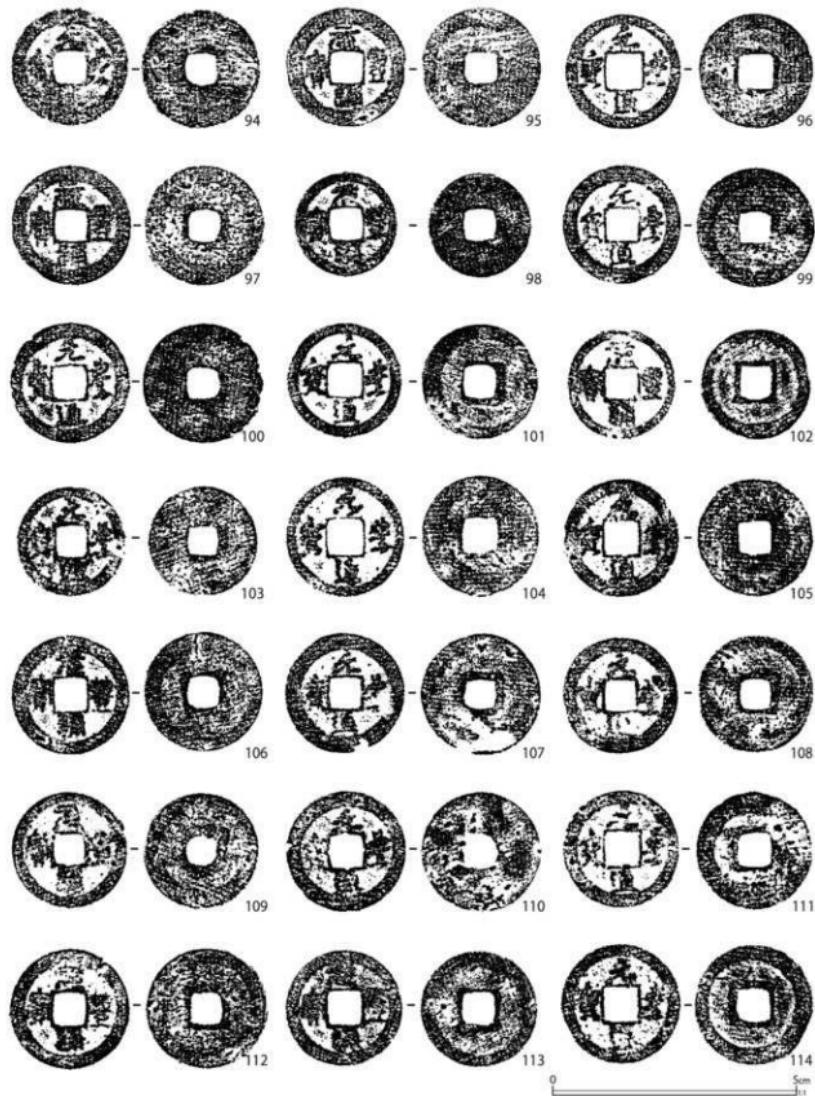
第86図 第3号埋藏錢一面出土錢貨（4）

第3号埋藏錢一面出土錢貨



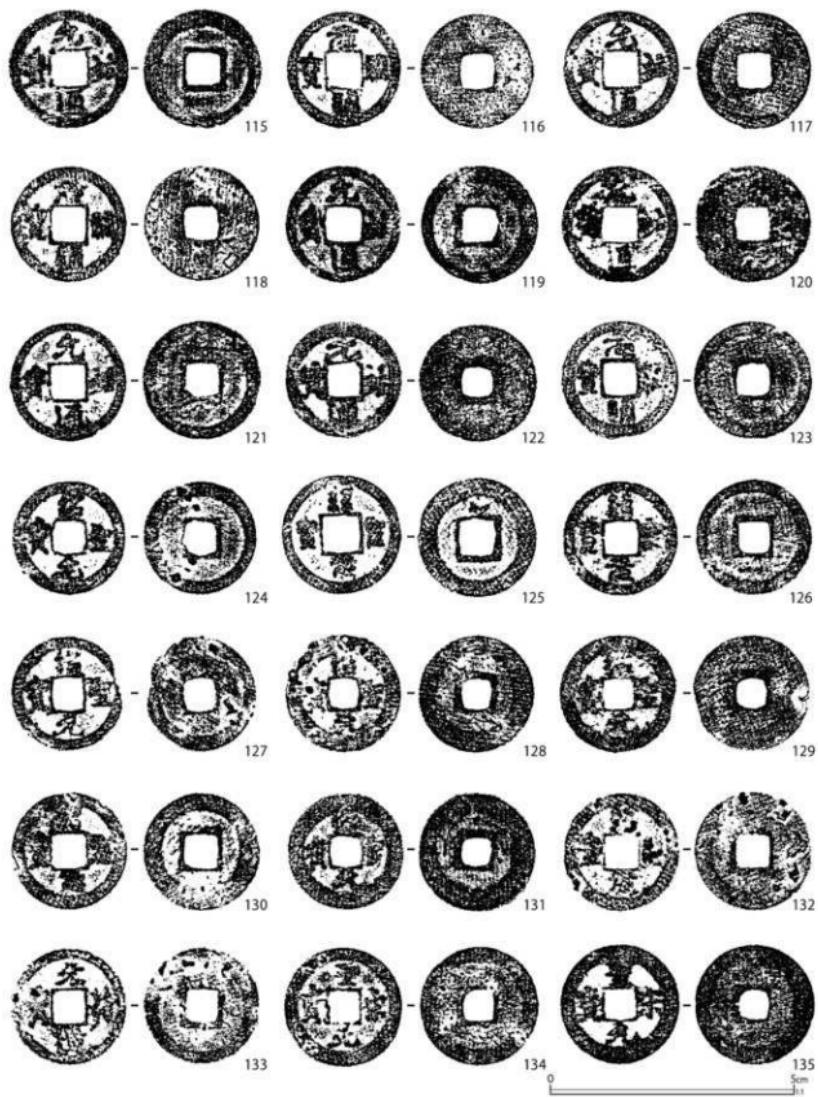
第87図 第3号埋藏錢一面出土錢貨（5）

第3号埋藏錢一面出土銭貨



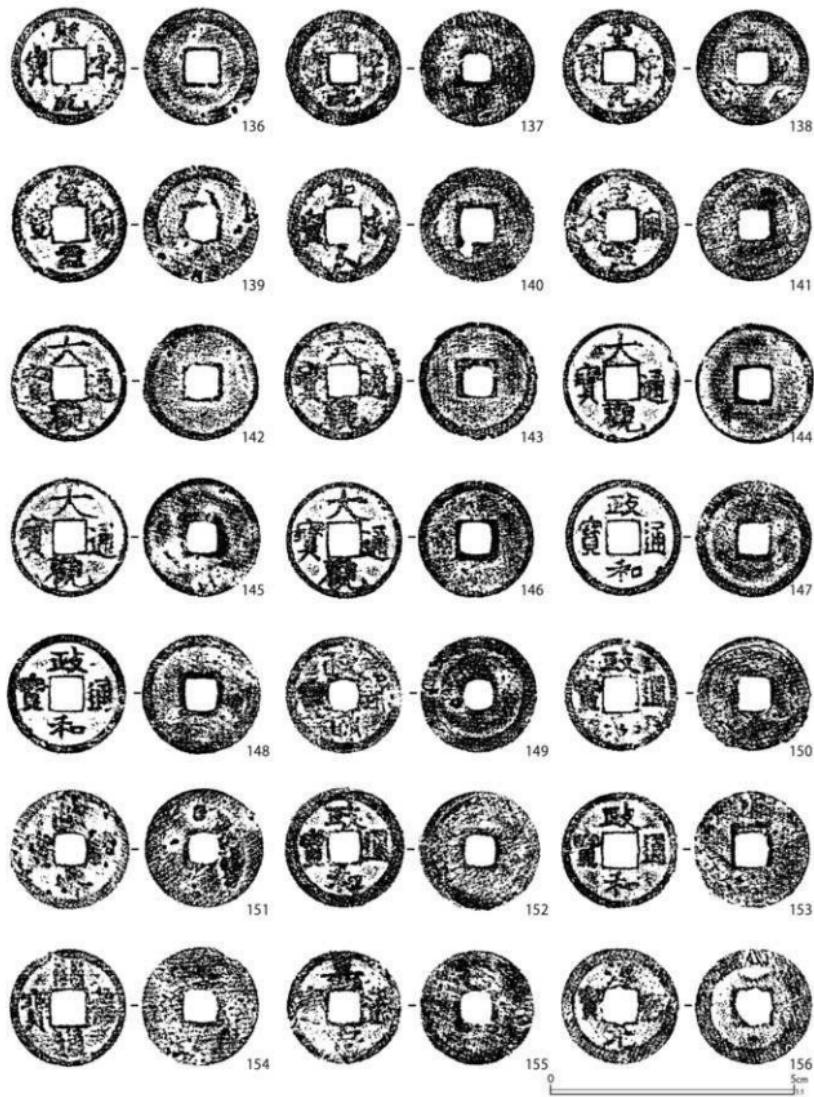
第88図 第3号埋藏錢一面出土銭貨（6）

第3号埋藏錢一面出土錢貨



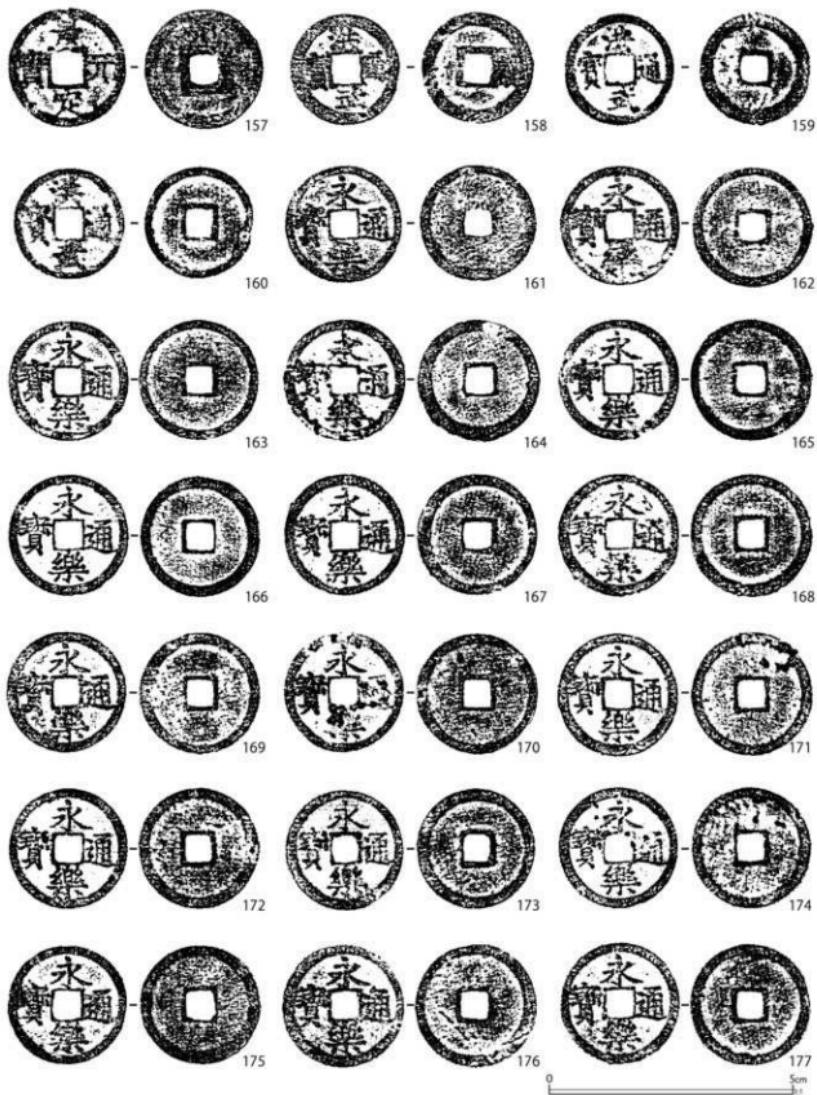
第89図 第3号埋藏錢一面出土錢貨（7）

第3号埋藏錢一面出土錢貨



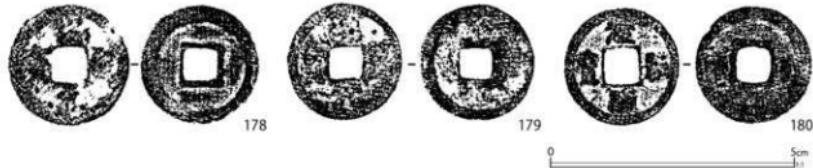
第90図 第3号埋藏錢一面出土錢貨（8）

第3号埋藏錢一面出土錢貨



第91図 第3号埋藏錢一面出土錢貨（9）

第3号埋藏錢一面出土錢貨



第92圖 第3号埋藏錢一面出土錢貨（10）

第31表 第3号埋藏錢一面出土錢貨觀察表

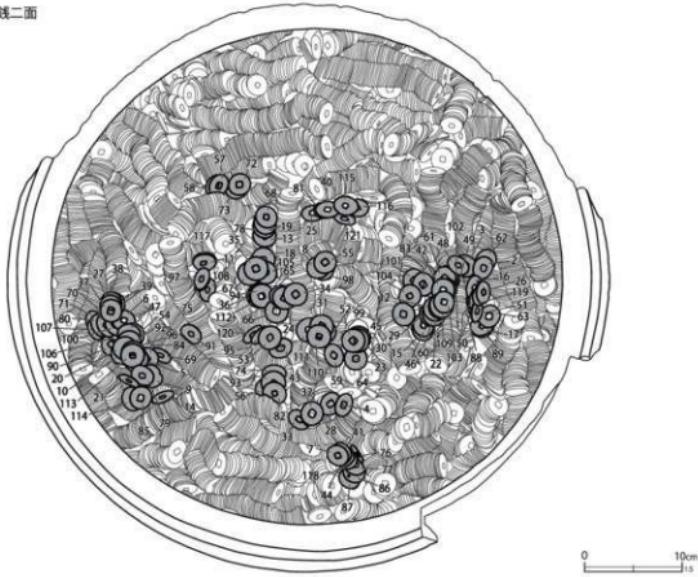
標印番号	錢貨名	背面	銭径 (mm)		銭厚 (mm)	重量 (g)	書体	殘存	初鑄年・國	備考	國版
			縱	橫							
第83國1	開元通寶		23.32	23.45	1.51	3.1	真書	完形	621 唐		37-1
第83國2	開元通寶		23.25	23.47	0.98	2.1	真書	完形	621 唐		37-1
第83國3	開元通寶		24.00	24.10	1.18	2.9	真書	13ぼ完形	621 唐		37-1
第83國4	開元通寶		24.66	24.59	1.25	2.7	真書	完形	621 唐		37-1
第83國5	開元通寶		23.72	23.80	1.25	2.8	真書	完形	621 唐		37-1
第83國6	開元通寶		24.97	25.09	1.50	3.4	真書	完形	621 唐		37-1
第83國7	開元通寶		23.08	23.10	1.48	2.8	真書	完形	621 唐		37-1
第83國8	開元通寶		24.64	24.79	1.16	3.0	真書	完形	621 唐		37-1
第83國9	開元通寶		24.63	24.44	1.34	3.0	真書	完形	621 唐		37-1
第84國10	開元通寶		24.47	24.65	1.35	3.1	真書	完形	621 唐		37-1
第84國11	開元通寶		24.13	24.50	1.51	3.3	真書	完形	621 唐		37-1
第84國12	開元通寶		23.86	23.54	1.91	3.3	真書	完形	621 唐		37-1
第84國13	開元通寶		23.98	23.89	1.67	4.0	真書	完形	621 唐		37-1
第84國14	開元通寶		23.71	23.73	1.39	3.3	真書	完形	621 唐		37-1
第84國15	開元通寶		24.05	23.72	1.52	3.5	真書	完形	621 唐		37-1
第84國16	開元通寶		24.97	24.88	1.51	3.4	真書	完形	621 唐	星形孔	37-1
第84國17	乾元重寶		22.25	22.24	1.44	2.8	真書	完形	758 唐		37-1
第84國18	唐國通寶		24.38	24.62	1.20	3.4	篆書	完形	959 南唐		37-1
第84國19	唐國通寶		25.09	25.08	1.63	3.0	篆書	完形	959 南唐		37-1
第84國20	開元通寶		24.62	24.58	1.41	3.4	真書	完形	960 南宋		37-1
第84國21	太平通寶		24.18	24.19	1.32	3.4	真書	完形	976 北宋	分析	37-1
第84國22	太平通寶		24.59	24.55	1.37	3.5	真書	完形	976 北宋		37-1
第84國23	太平通寶		24.28	24.41	1.41	3.2	真書	完形	976 北宋		37-1
第84國24	至道元寶		24.90	24.93	1.35	3.2	真書	完形	995 北宋		37-1
第84國25	至道元寶		24.79	24.68	1.25	3.2	草書	完形	995 北宋		37-1
第84國26	至道元寶		22.47	22.62	1.57	3.2	行書	完形	995 北宋		37-1
第84國27	至道元寶		24.88	24.86	1.87	3.6	行書	完形	995 北宋		37-1
第84國28	至道元寶		25.02	24.98	1.40	3.1	行書	完形	995 北宋	星形孔	37-1
第84國29	至道元寶		24.36	24.38	1.27	3.8	草書	完形	995 北宋		37-1
第84國30	咸平元寶		24.78	24.67	1.54	4.3	真書	完形	998 北宋		37-1
第85國31	咸平元寶		24.26	24.34	1.32	3.4	真書	完形	998 北宋		37-1
第85國32	咸平元寶		25.03	25.26	1.71	3.9	真書	完形	998 北宋		37-1
第85國33	景德元寶		24.96	24.86	1.55	4.4	真書	完形	1004 北宋		37-1
第85國34	景德元寶		24.31	24.33	1.16	3.3	真書	完形	1004 北宋	分析	37-1
第85國35	景德元寶		24.71	24.60	1.31	3.4	真書	完形	1004 北宋		37-1
第85國36	景德元寶		25.29	25.13	1.40	4.3	真書	完形	1004 北宋		37-1
第85國37	祥符元寶		24.93	25.09	1.51	3.3	真書	完形	1009 北宋		37-1
第85國38	祥符元寶		25.35	25.31	1.45	4.4	真書	完形	1009 北宋		37-1
第85國39	祥符通寶		24.85	25.05	1.20	3.4	真書	完形	1009 北宋		37-1
第85國40	祥符元寶		25.15	25.13	1.47	4.3	真書	完形	1009 北宋		37-1
第85國41	祥符通寶		25.13	25.02	1.34	3.9	真書	完形	1009 北宋		37-1
第85國42	祥符通寶		24.66	24.61	2.04	4.7	真書	完形	1009 北宋		37-1
第85國43	祥符元寶		22.45	22.61	1.68	2.8	真書	完形	1009 北宋		37-1

辨証番号	錢貨名	背面	錢徑 (mm)		錢厚 (mm)	重量 (g)	書体	殘存	初鑄年・國	備考	圖版
			縱	橫							
第 85 國 44	天祐通寶		24.34	24.22	1.72	4.2	真書	完形	1017 北宋		37-1
第 85 國 45	天祐通寶		24.02	24.15	1.64	3.6	真書	完形	1017 北宋		37-1
第 85 國 46	天祐通寶		25.47	25.54	1.56	3.9	真書	1017 完形	1017 北宋	小半孔	37-1
第 85 國 47	天祐通寶		24.42	24.47	1.60	4.1	真書	完形	1017 北宋		37-1
第 85 國 48	天聖元寶		25.63	25.57	1.55	4.5	真書	完形	1023 北宋		37-1
第 85 國 49	天聖元寶		25.08	25.06	1.33	3.4	真書	完形	1023 北宋	分析	37-1
第 85 國 50	天聖元寶		25.00	24.93	1.72	4.4	真書	完形	1023 北宋		37-1
第 85 國 51	天聖元寶		25.38	25.40	1.52	4.0	真書	完形	1023 北宋		37-1
第 86 國 52	天聖元寶		24.51	24.67	1.47	3.9	篆書	完形	1023 北宋	星形孔	37-1
第 86 國 53	明道元寶		25.35	25.02	1.29	3.3	真書	完形	1032 北宋		37-1
第 86 國 54	明道元寶		25.47	25.37	1.27	3.2	真書	完形	1032 北宋		37-1
第 86 國 55	明道元寶		25.13	25.04	1.29	3.7	真書	完形	1032 北宋	分析	37-1
第 86 國 56	景祐元寶		25.14	25.01	1.45	3.6	真書	完形	1034 北宋		37-1
第 86 國 57	景祐元寶		25.22	25.25	1.29	3.5	真書	完形	1034 北宋	分析	38-1
第 86 國 58	景祐元寶		25.05	24.94	1.97	5.2	篆書	完形	1034 北宋		38-1
第 86 國 59	景祐元寶		25.07	25.18	1.46	3.1	真書	完形	1034 北宋		38-1
第 86 國 60	皇宋通寶		24.99	25.11	1.67	4.1	真書	完形	1038 北宋		38-1
第 86 國 61	皇宋通寶		24.71	24.76	1.33	3.2	真書	1038 完形	1038 北宋		38-1
第 86 國 62	皇宋通寶		25.13	25.23	1.13	3.3	真書	完形	1038 北宋	分析	38-1
第 86 國 63	皇宋通寶		24.58	24.67	1.33	3.5	真書	完形	1038 北宋		38-1
第 86 國 64	皇宋通寶		24.58	24.40	1.33	3.3	篆書	完形	1038 北宋		38-1
第 86 國 65	皇宋通寶		25.30	25.08	1.34	3.3	真書	完形	1038 北宋		38-1
第 86 國 66	皇宋通寶		24.46	24.55	1.37	3.5	真書	完形	1038 北宋		38-1
第 86 國 67	皇宋通寶		24.90	24.97	1.43	3.7	真書	完形	1038 北宋		38-1
第 86 國 68	皇宋通寶		25.40	25.24	1.36	3.0	真書	完形	1038 北宋		38-1
第 86 國 69	皇宋通寶		24.42	24.43	1.36	3.3	真書	完形	1038 北宋		38-1
第 86 國 70	皇宋通寶		25.23	25.59	1.86	5.4	真書	完形	1038 北宋		38-1
第 86 國 71	皇宋通寶		24.55	24.62	1.63	4.1	真書	完形	1038 北宋		38-1
第 86 國 72	皇宋通寶		24.24	24.50	1.48	3.7	真書	完形	1038 北宋		38-1
第 87 國 73	皇宋通寶		24.69	24.67	1.18	3.1	篆書	完形	1038 北宋		38-1
第 87 國 74	嘉祐通寶		25.11	24.99	1.19	3.3	真書	完形	1056 北宋		38-1
第 87 國 75	嘉祐通寶		23.18	23.23	1.35	3.7	真書	完形	1056 北宋		38-1
第 87 國 76	嘉祐通寶		23.30	23.34	1.35	2.9	真書	1056 完形	1056 北宋		38-1
第 87 國 77	治平元寶		23.56	23.45	1.83	3.9	真書	完形	1064 北宋		38-1
第 87 國 78	治平元寶		24.09	24.29	1.60	4.2	篆書	完形	1064 北宋		38-1
第 87 國 79	熙寧元寶		24.42	24.58	1.42	3.0	真書	完形	1068 北宋		38-1
第 87 國 80	熙寧元寶		24.40	24.12	1.42	3.7	篆書	完形	1068 北宋		38-1
第 87 國 81	熙寧元寶		23.83	23.71	1.45	2.9	真書	完形	1068 北宋	錯范	38-1
第 87 國 82	熙寧元寶		24.14	24.18	1.16	3.0	篆書	完形	1068 北宋		38-1
第 87 國 83	熙寧元寶		23.96	23.75	1.43	3.8	篆書	完形	1068 北宋		38-1
第 87 國 84	熙寧元寶		24.45	24.01	2.02	4.4	篆書	完形	1068 北宋		38-1
第 87 國 85	熙寧元寶		24.88	24.68	1.38	3.9	真書	完形	1068 北宋		38-1
第 87 國 86	熙寧元寶		23.94	24.01	2.02	4.2	真書	完形	1068 北宋	小孔	38-1
第 87 國 87	熙寧元寶		23.79	23.87	1.62	3.7	篆書	完形	1068 北宋		38-1
第 87 國 88	熙寧元寶		24.87	24.55	1.61	4.2	真書	完形	1068 北宋		38-1
第 87 國 89	熙寧元寶		24.57	24.59	1.51	3.7	真書	完形	1068 北宋		38-1
第 87 國 90	熙寧元寶		25.24	25.26	1.42	3.5	篆書	完形	1068 北宋		38-1
第 87 國 91	熙寧元寶		24.08	23.96	1.45	3.9	真書	完形	1068 北宋		38-1
第 87 國 92	熙寧元寶		24.41	24.43	1.85	4.7	篆書	完形	1071 北宋		38-1
第 87 國 93	元豐通寶		24.10	24.27	1.55	3.3	行書	完形	1078 北宋		38-1
第 88 國 94	元豐通寶		24.75	24.78	1.31	3.3	行書	完形	1078 北宋		38-1
第 88 國 95	元豐通寶		24.90	24.81	1.28	2.7	篆書	完形	1078 北宋		38-1
第 88 國 96	元豐通寶		23.94	24.01	1.71	3.0	行書	完形	1078 北宋		38-1
第 88 國 97	元豐通寶		25.08	24.89	1.23	3.2	篆書	完形	1078 北宋		38-1
第 88 國 98	元豐通寶		21.81	21.58	1.10	2.2	篆書	完形	1078 北宋		38-1
第 88 國 99	元豐通寶		24.64	24.67	1.18	3.4	行書	完形	1078 北宋		38-1
第 88 國 100	元豐通寶		25.10	25.04	1.38	3.5	行書	完形	1078 北宋		38-1
第 88 國 101	元豐通寶		24.14	24.13	1.46	3.6	行書	完形	1078 北宋		38-1

拂國番号	錢貨名	背面	錢徑 (mm)		錢厚 (mm)	重量 (g)	書体	殘存	初鑄年・國	備考	國版
			縱	橫							
第88國102	元豐通寶		22.98	22.93	1.92	4.1	篆書	完形	1078 北宋		38-1
第88國103	元豐通寶		22.70	22.74	1.29	2.7	行書	完形	1078 北宋		38-1
第88國104	元豐通寶		24.95	24.74	1.46	3.3	行書	完形	1078 北宋		38-1
第88國105	元豐通寶		24.24	24.74	1.71	3.4	行書	完形	1078 北宋		38-1
第88國106	元豐通寶		24.77	24.78	1.42	4.1	篆書	完形	1078 北宋		38-1
第88國107	元豐通寶		25.16	25.27	1.65	4.3	行書	ほぼ完形	1078 北宋	小半孔	38-1
第88國108	元豐通寶		23.94	24.12	1.47	3.6	行書	完形	1078 北宋		38-1
第88國109	元豐通寶		23.97	23.99	1.74	4.0	篆書	完形	1078 北宋		38-1
第88國110	元豐通寶		24.87	25.04	1.47	3.5	行書	完形	1078 北宋	星形孔	38-1
第88國111	元豐通寶		24.39	24.47	1.73	4.0	行書	完形	1078 北宋		38-1
第88國112	元豐通寶		24.98	25.03	1.71	4.1	篆書	完形	1078 北宋		38-1
第88國113	元豐通寶		24.32	24.37	1.37	3.5	篆書	完形	1078 北宋		39-1
第88國114	元豐通寶		24.77	24.95	1.25	3.4	行書	完形	1078 北宋		39-1
第89國115	元祐通寶		24.74	24.90	1.57	4.1	行書	完形	1086 北宋		39-1
第89國116	元祐通寶		23.97	23.98	1.57	3.5	篆書	完形	1086 北宋		39-1
第89國117	元祐通寶		24.39	24.40	1.29	3.3	行書	完形	1086 北宋		39-1
第89國118	元祐通寶		24.14	24.18	1.81	3.8	篆書	完形	1086 北宋		39-1
第89國119	元祐通寶		24.32	24.38	1.41	3.2	行書	完形	1086 北宋		39-1
第89國120	元祐通寶		24.60	24.46	1.59	4.4	行書	完形	1086 北宋		39-1
第89國121	元祐通寶		24.60	24.54	1.48	3.7	行書	完形	1086 北宋		39-1
第89國122	元祐通寶		24.45	24.66	1.36	3.4	行書	完形	1086 北宋	分析	39-1
第89國123	元祐通寶		24.14	24.74	1.53	3.9	篆書	完形	1086 北宋		39-1
第89國124	紹聖元寶	上：星	23.74	23.89	1.46	3.4	行書	完形	1094 北宋	分析	39-1
第89國125	紹聖元寶	上：月	24.94	25.35	1.39	3.7	篆書	完形	1094 北宋		39-1
第89國126	紹聖元寶		24.04	24.09	1.60	3.6	篆書	完形	1094 北宋		39-1
第89國127	紹聖元寶		23.94	[23.20]	1.62	3.3	行書	ほぼ完形	1094 北宋		39-1
第89國128	紹聖元寶		24.31	24.28	1.51	3.5	行書	完形	1094 北宋		39-1
第89國129	紹聖元寶		24.31	24.30	1.36	3.7	篆書	完形	1094 北宋		39-1
第89國130	紹聖元寶		24.46	24.37	1.53	3.8	篆書	完形	1094 北宋		39-1
第89國131	紹聖元寶		24.30	24.12	1.31	3.8	行書	完形	1094 北宋		39-1
第89國132	紹聖元寶		24.50	24.46	1.40	3.1	篆書	完形	1094 北宋		39-1
第89國133	元符通寶		24.28	27.39	1.70	3.3	行書	完形	1098 北宋		39-1
第89國134	聖宋元寶		24.77	24.85	1.28	3.6	行書	完形	1101 北宋		39-1
第89國135	聖宋元寶		25.03	25.12	1.75	5.0	行書	完形	1101 北宋		39-1
第90國136	聖宋元寶		24.48	24.37	1.36	3.4	行書	完形	1101 北宋		39-1
第90國137	聖宋元寶		24.13	24.31	1.55	3.7	行書	完形	1101 北宋		39-1
第90國138	聖宋元寶		23.99	23.81	1.49	3.6	行書	完形	1101 北宋		39-1
第90國139	聖宋元寶		24.33	24.34	1.82	4.0	篆書	完形	1101 北宋	星形孔	39-1
第90國140	聖宋元寶		24.14	24.14	1.47	3.1	行書	ほぼ完形	1101 北宋	小孔	39-1
第90國141	聖宋元寶		23.79	24.08	1.68	4.2	篆書	完形	1101 北宋		39-1
第90國142	大觀通寶		24.37	24.51	1.51	3.5	真書	完形	1107 北宋		39-1
第90國143	大觀通寶		24.83	24.81	1.72	3.9	真書	ほぼ完形	1107 北宋		39-1
第90國144	大觀通寶		24.87	25.03	1.53	3.6	真書	完形	1107 北宋		39-1
第90國145	大觀通寶		24.76	24.67	1.56	2.8	真書	完形	1107 北宋		39-1
第90國146	大觀通寶		24.70	24.21	1.36	3.2	真書	完形	1107 北宋	分析	39-1
第90國147	政和通寶		24.50	24.62	1.40	2.7	分楷	完形	1111 北宋	分析	39-1
第90國148	政和通寶		24.98	24.86	1.48	4.0	分楷	完形	1111 北宋		39-1
第90國149	政和通寶		24.29	24.24	1.58	2.6	篆書	完形	1111 北宋		39-1
第90國150	政和通寶		23.78	23.82	1.25	2.8	分楷	完形	1111 北宋	錯范	39-1
第90國151	政和通寶		24.93	24.94	1.51	3.4	篆書	完形	1111 北宋	錯范	39-1
第90國152	政和通寶		25.04	25.16	1.22	2.9	分楷	完形	1111 北宋	錯范	39-1
第90國153	政和通寶		24.31	24.45	1.49	3.8	分楷	完形	1111 北宋		39-1
第90國154	開禧通寶		24.48	24.46	1.40	3.3	真書	完形	1205 南宋		39-1
第90國155	嘉定通寶		24.00	23.97	1.32	3.5	真書	完形	1208 南宋		39-1
第90國156	淳祐通寶		24.43	24.44	1.66	3.9	真書	完形	1241 南宋	星形孔 分析	39-1
第91國157	景定元寶	上：元	24.76	24.70	2.04	4.5	真書	完形	1260 南宋	分析	39-1
第91國158	洪武通寶		23.17	23.02	1.95	4.4	篆書	完形	1368 明	マ頭通・單点通	39-1
第91國159	洪武通寶		23.35	23.24	1.68	3.2	真書	完形	1368 明	マ頭通・單点通	39-1

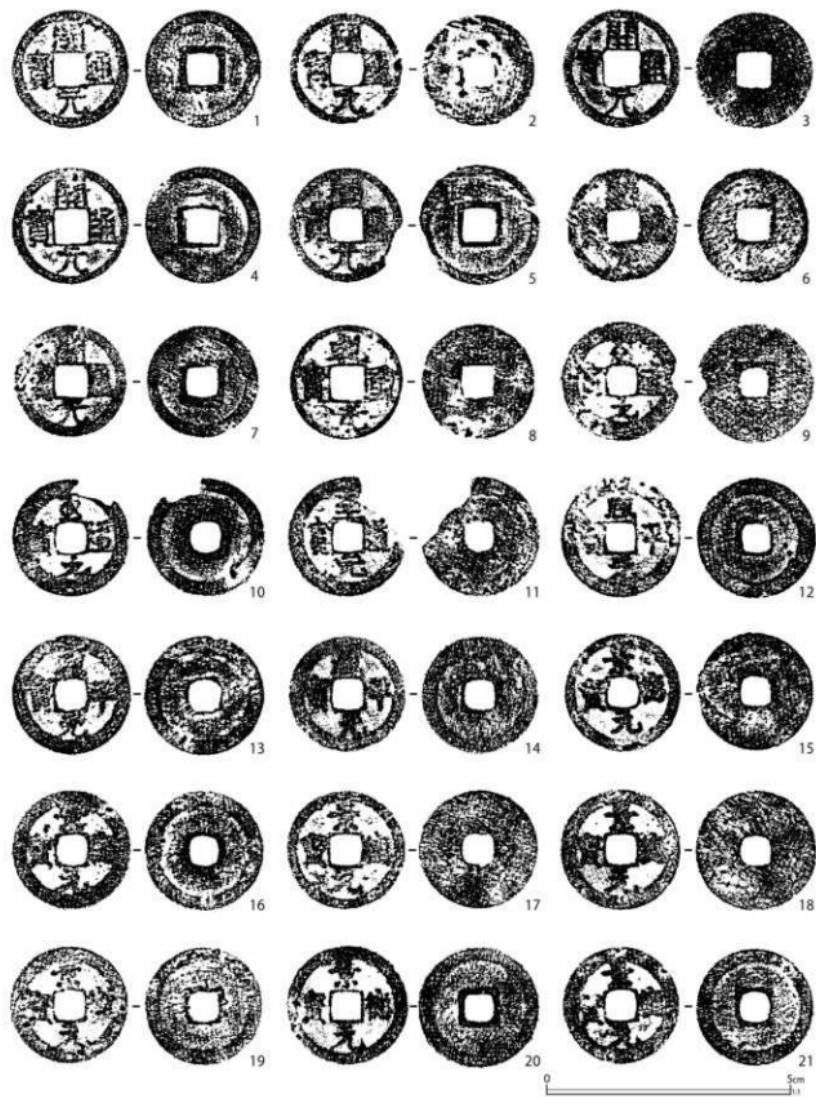
辨认番号	錢貨名	背面	錢径 (mm)		錢厚 (mm)	重量 (g)	書体	残存	初鑄年・国	備考	図版
			縱	横							
第91国160	洪武通寶		23.41	23.39	2.04	4.3	真書	完形	1368 明	マ頭通・単点通	39-1
第91国161	永樂通寶		24.05	24.26	1.67	4.1	真書	完形	1408 明		39-1
第91国162	永樂通寶		24.92	24.96	1.46	3.6	真書	完形	1408 明		39-1
第91国163	永樂通寶		24.99	25.09	1.25	3.2	真書	完形	1408 明		39-1
第91国164	永樂通寶		25.14	25.38	1.43	4.1	真書	完形	1408 明		39-1
第91国165	永樂通寶		25.13	25.27	1.48	3.8	真書	完形	1408 明		39-1
第91国166	永樂通寶		25.03	25.01	1.62	4.0	真書	完形	1408 明		39-1
第91国167	永樂通寶		25.22	25.26	1.63	4.4	真書	完形	1408 明		39-1
第91国168	永樂通寶		25.45	25.30	1.60	3.7	真書	完形	1408 明		39-1
第91国169	永樂通寶		25.20	24.77	1.40	3.4	真書	完形	1408 明		40-1
第91国170	永樂通寶		24.95	24.98	1.59	3.3	真書	完形	1408 明		40-1
第91国171	永樂通寶		25.50	25.29	1.62	4.1	真書	完形	1408 明		40-1
第91国172	永樂通寶		24.93	24.99	1.48	3.9	真書	完形	1408 明		40-1
第91国173	永樂通寶		24.72	24.65	1.69	3.8	真書	完形	1408 明		40-1
第91国174	永樂通寶		24.95	24.94	1.72	3.8	真書	完形	1408 明		40-1
第91国175	永樂通寶		24.64	25.07	1.55	4.0	真書	完形	1408 明		40-1
第91国176	永樂通寶		25.57	25.41	1.37	3.8	真書	完形	1408 明		40-1
第91国177	永樂通寶		25.04	24.94	1.36	3.2	真書	完形	1408 明		40-1
第92国178	□□□□		23.43	23.41	1.69	3.6		完形			40-1
第92国179	□□元寶		24.43	24.28	1.66	4.2		完形			40-1
第92国180	元□通寶		24.39	24.24	1.51	3.6	篆書	完形		元祐 1086 ? 元符 1098 ? 北宋	40-1

第3号埋藏錢二面



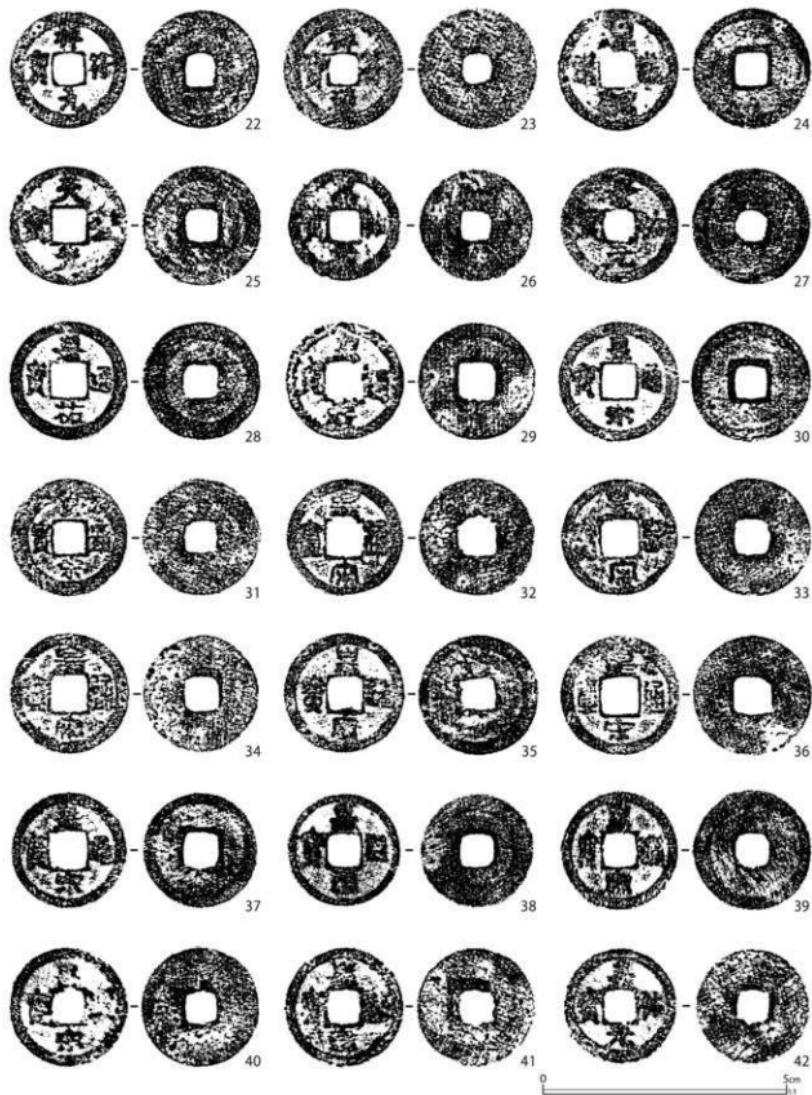
第93図 第3号埋藏錢二面出土状況

第3号埋藏錢二面出土錢貨



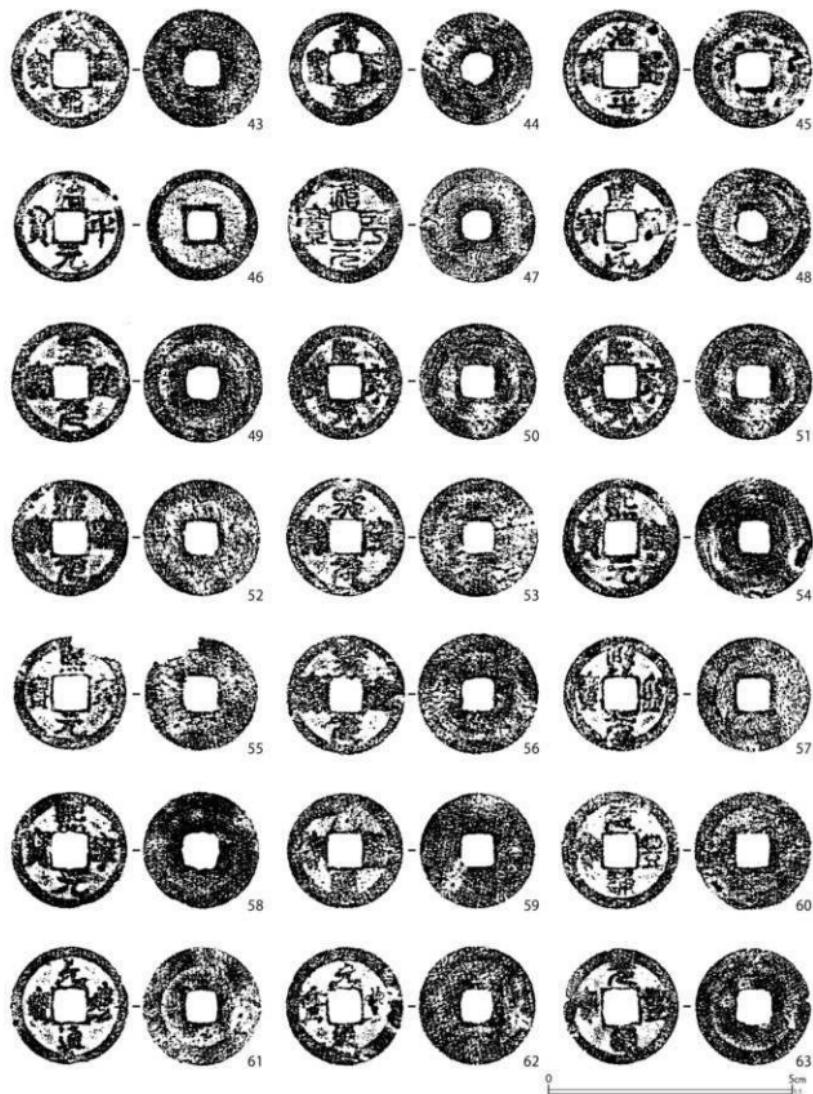
第94図 第3号埋藏錢二面出土錢貨（1）

第3号埋藏錢二面出土錢貨



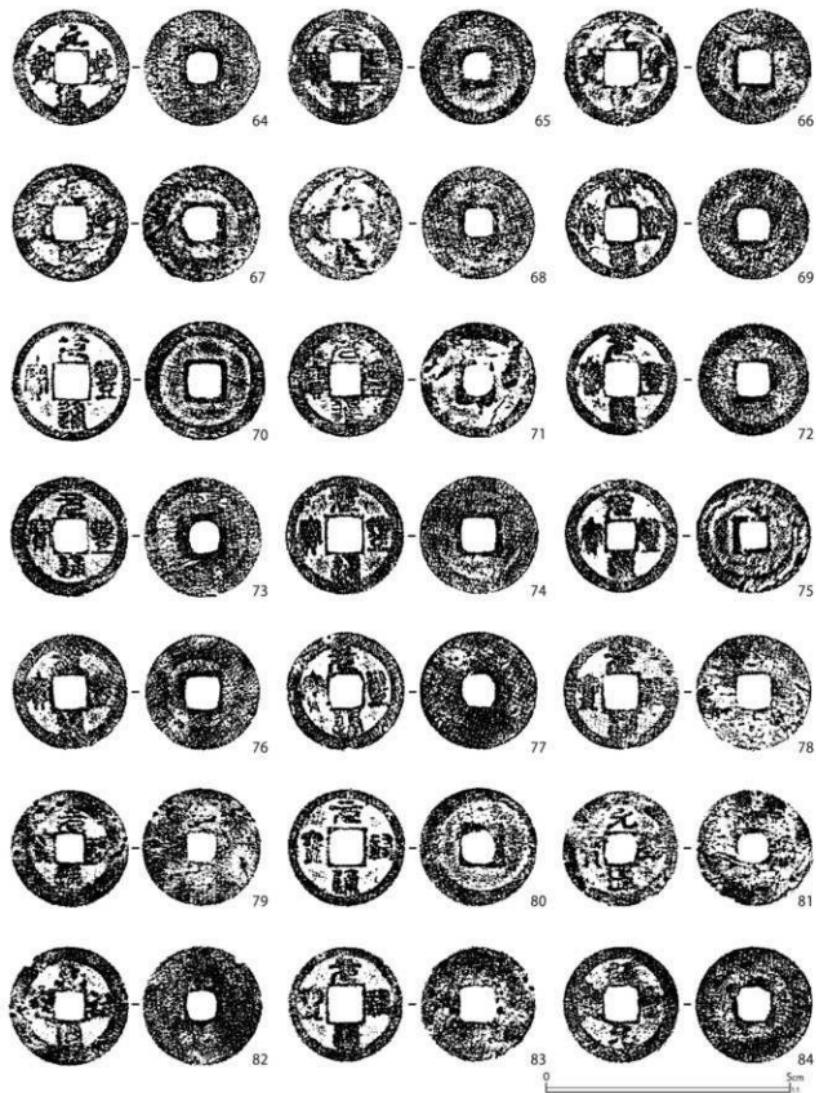
第95図 第3号埋藏錢二面出土錢貨（2）

第3号埋藏銭二面出土銭貨



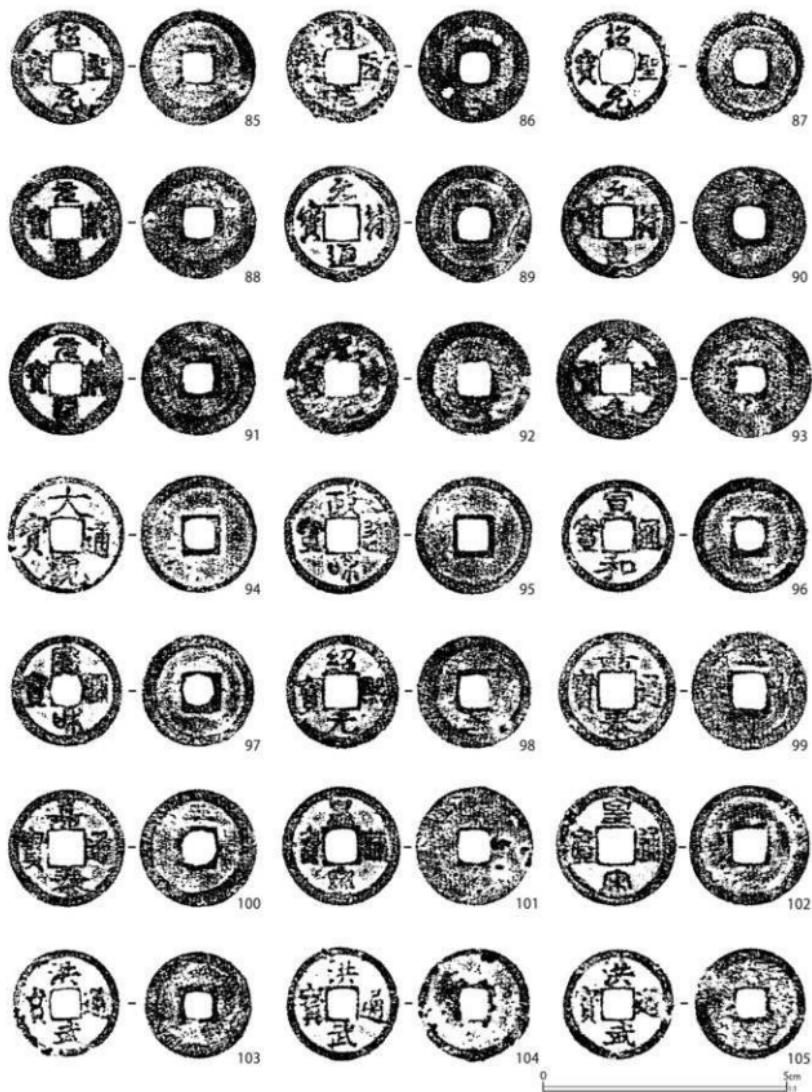
第96図 第3号埋藏銭二面出土銭貨（3）

第3号埋藏銭二面出土錢貨



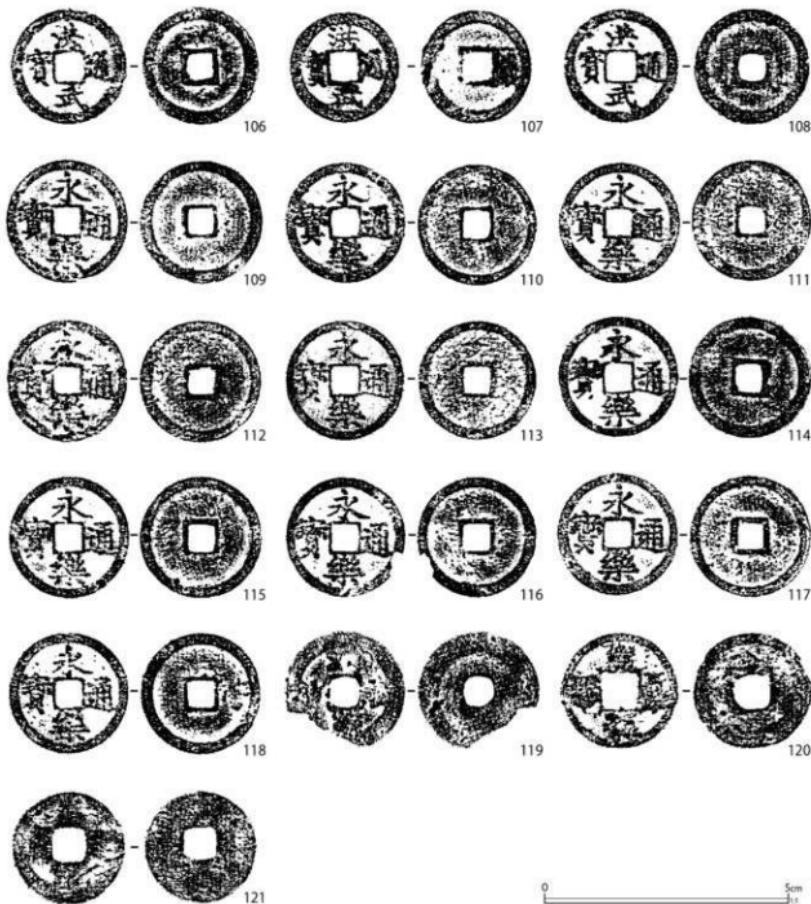
第97図 第3号埋藏銭二面出土錢貨（4）

第3号埋藏錢二面出土錢貨



第98図 第3号埋藏錢二面出土錢貨（5）

第3号埋藏錢二面出土錢貨



第99図 第3号埋藏錢二面出土錢貨（6）

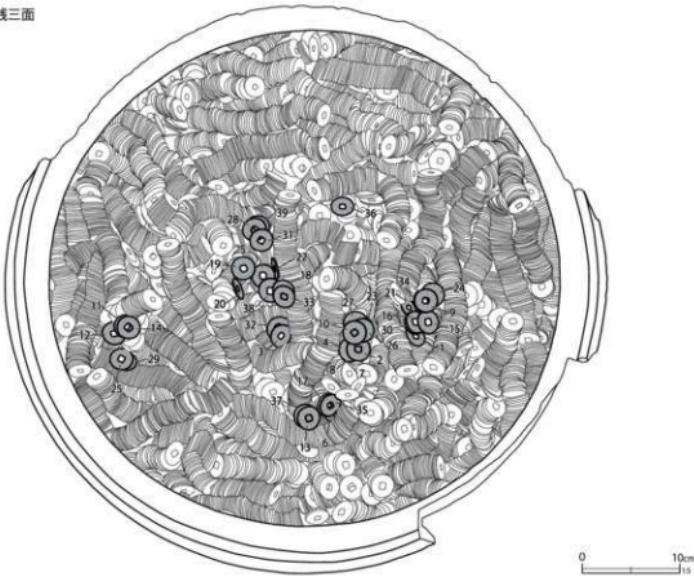
第32表 第3号埋藏錢二面出土錢貨觀察表

拂団番号	銭貨名	背面	錢径 (mm)		重量 (g)	書体	残存	初鑄年・国	備考	図版
			縱	横						
第94図1	開元通寶		24.52	24.38	1.36	3.6	真書	完形	621 唐	40-2
第94図2	開元通寶		23.14	23.56	1.70	3.0	真書	完形	621 唐	40-2
第94図3	開元通寶		24.33	24.65	1.12	2.6	真書	完形	621 唐	40-2
第94図4	開元通寶	上：—	24.49	24.43	1.68	3.5	真書	完形	621 唐	40-2
第94図5	開元通寶		25.18	24.98	1.31	2.9	真書	注注完形	621 唐	40-2

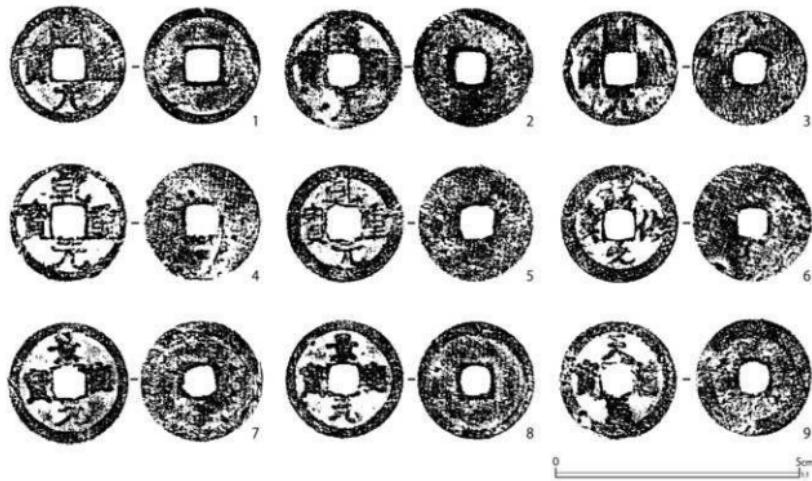
拂國番号	錢貨名	背面	錢徑 (mm)		錢厚 (mm)	重量 (g)	書体	殘存	初鑄年・国	備考	図版
			縱	横							
第94國6	開元通寶		24.08	23.69	1.70	3.6	真書	完形	621 唐		40-2
第94國7	開元通寶		23.20	23.47	1.26	2.7	真書	完形	621 唐		40-2
第94國8	乾元重寶		24.21	23.60	1.89	4.2	真書	完形	758 唐		40-2
第94國9	至道元寶	下：月	24.91	[24.19]	1.55	3.1	行書	完形	995 北宋		40-2
第94國10	至道元寶		24.62	24.58	1.43	3.6	行書	はげて完形	995 北宋		40-2
第94國11	至道元寶		24.92	[21.42]	1.58	2.9	真書	4/5 残	995 北宋		40-2
第94國12	咸平元寶		25.14	25.13	1.57	3.7	真書	完形	998 北宋		40-2
第94國13	咸平元寶		24.83	24.90	1.68	3.9	真書	完形	998 北宋		40-2
第94國14	咸平元寶		24.32	24.38	1.57	3.6	真書	完形	998 北宋		40-2
第94國15	景德元寶		24.36	24.36	1.89	4.1	真書	完形	1004 北宋		40-2
第94國16	景德元寶		24.74	24.86	1.42	3.5	真書	完形	1004 北宋		40-2
第94國17	景德元寶		24.71	24.93	1.42	3.5	真書	完形	1004 北宋		40-2
第94國18	景德元寶		25.05	24.92	1.65	4.3	真書	完形	1004 北宋		40-2
第94國19	景德元寶		24.50	24.70	1.59	3.7	真書	完形	1004 北宋		40-2
第94國20	景德元寶		25.10	25.13	1.35	3.6	真書	完形	1004 北宋		40-2
第94國21	景德元寶		24.37	24.25	1.39	3.5	真書	完形	1004 北宋		40-2
第95國22	祥符元寶		24.44	24.46	1.60	3.6	真書	完形	1009 北宋		40-2
第95國23	祥符通寶		25.23	25.29	1.37	3.4	真書	完形	1009 北宋		40-2
第95國24	天聖元寶		24.87	25.07	1.63	3.9	篆書	完形	1023 北宋		40-2
第95國25	天聖元寶		24.84	24.80	1.83	3.8	真書	完形	1023 北宋		40-2
第95國26	景祐元寶		23.56	23.57	1.65	3.8	真書	完形	1034 北宋		40-2
第95國27	景祐元寶		24.35	24.54	1.22	3.2	真書	完形	1034 北宋		40-2
第95國28	嘉祐通寶		24.58	24.69	1.61	3.9	真書	完形	1034 北宋		40-2
第95國29	皇宋通寶		24.66	24.80	1.48	3.7	真書	完形	1038 北宋		40-2
第95國30	皇宋通寶		25.16	25.12	1.65	3.8	真書	完形	1038 北宋		40-2
第95國31	皇宋通寶		24.45	24.48	1.28	2.9	真書	完形	1038 北宋		40-2
第95國32	皇宋通寶		24.32	24.50	1.26	3.0	篆書	完形	1038 北宋		40-2
第95國33	皇宋通寶		24.35	24.50	1.37	3.8	篆書	完形	1038 北宋		40-2
第95國34	皇宋通寶		25.01	24.85	1.44	3.5	篆書	完形	1038 北宋		40-2
第95國35	皇宋通寶		25.06	25.22	1.56	3.8	篆書	完形	1038 北宋		40-2
第95國36	皇宋通寶		24.97	24.87	1.46	3.5	真書	完形	1038 北宋		40-2
第95國37	皇宋通寶		23.90	23.78	1.06	2.2	真書	完形	1038 北宋		40-2
第95國38	皇宋通寶		23.53	23.55	1.69	3.5	篆書	完形	1038 北宋		40-2
第95國39	皇宋通寶		24.55	24.60	1.48	3.3	篆書	完形	1038 北宋		40-2
第95國40	皇宋通寶		24.81	24.89	1.79	3.6	篆書	完形	1038 北宋		40-2
第95國41	皇宋通寶		24.80	24.74	1.50	3.5	真書	完形	1038 北宋		40-2
第95國42	嘉祐元寶		23.81	23.72	1.46	3.0	真書	完形	1056 北宋	星形孔	40-2
第96國43	嘉祐通寶		24.86	24.64	1.39	3.2	篆書	完形	1056 北宋		41-1
第96國44	嘉祐通寶		23.59	23.45	1.42	3.2	篆書	完形	1056 北宋		41-1
第96國45	治平通寶		24.52	24.61	1.60	3.5	真書	完形	1064 北宋		41-1
第96國46	治平元寶		23.18	23.34	1.58	3.4	真書	完形	1064 北宋		41-1
第96國47	治平元寶		24.27	24.13	1.26	3.3	篆書	完形	1064 北宋		41-1
第96國48	熙寧元寶		23.78	23.89	1.54	3.7	真書	完形	1068 北宋		41-1
第96國49	熙寧元寶		24.93	24.92	1.31	3.4	篆書	完形	1068 北宋		41-1
第96國50	熙寧元寶		24.88	24.91	1.34	3.2	真書	完形	1068 北宋		41-1
第96國51	熙寧元寶		24.37	24.30	1.46	3.5	真書	完形	1068 北宋		41-1
第96國52	熙寧元寶		24.66	24.56	1.66	4.6	篆書	完形	1068 北宋		41-1
第96國53	熙寧元寶		24.97	24.99	2.00	4.6	篆書	完形	1068 北宋		41-1
第96國54	熙寧元寶		25.20	24.69	1.35	3.5	真書	完形	1068 北宋	分析	41-1
第96國55	熙寧元寶		23.72	23.73	1.71	3.3	真書	はげて完形	1068 北宋		41-1
第96國56	熙寧元寶		25.16	25.15	1.46	4.4	篆書	完形	1068 北宋		41-1
第96國57	熙寧元寶		24.00	24.04	1.65	4.0	篆書	完形	1068 北宋		41-1
第96國58	熙寧元寶		24.33	24.44	1.45	3.7	真書	完形	1068 北宋	星形孔	41-1
第96國59	元豐通寶		24.18	24.16	1.58	3.6	篆書	完形	1078 北宋		41-1
第96國60	元豐通寶		24.73	24.81	1.30	3.2	篆書	完形	1078 北宋		41-1
第96國61	元豐通寶		24.71	24.82	1.44	3.2	行書	完形	1078 北宋		41-1
第96國62	元豐通寶		24.77	24.48	1.42	3.5	行書	完形	1078 北宋		41-1
第96國63	元豐通寶		24.50	24.37	1.47	3.7	篆書	完形	1078 北宋		41-1

辨認番号	錢貨名	背面	錢徑 (mm)		錢厚 (mm)	重量 (g)	書体	殘存	初鑄年・國	備考	國版
			縱	橫							
第 97 國 64	元豐通寶		24.18	24.23	1.49	3.5	行書	完形	1078 北宋	分析	41-1
第 97 國 65	元豐通寶		24.00	24.15	1.51	3.7	篆書	完形	1078 北宋		41-1
第 97 國 66	元豐通寶		24.18	24.30	1.58	3.6	行書	完形	1078 北宋		41-1
第 97 國 67	元豐通寶		24.40	24.53	1.99	4.2	行書	完形	1078 北宋		41-1
第 97 國 68	元豐通寶		23.79	23.75	1.71	3.9	行書	完形	1078 北宋		41-1
第 97 國 69	元豐通寶		23.32	23.33	1.39	2.6	篆書	完形	1078 北宋		41-1
第 97 國 70	元豐通寶		24.98	25.00	1.46	3.4	篆書	完形	1078 北宋		41-1
第 97 國 71	元豐通寶		24.07	24.21	1.71	3.8	篆書	完形	1078 北宋		41-1
第 97 國 72	元豐通寶		23.56	23.42	1.23	2.7	篆書	完形	1078 北宋		41-1
第 97 國 73	元豐通寶		24.98	24.70	1.70	3.9	篆書	完形	1078 北宋	分析	41-1
第 97 國 74	元豐通寶		24.80	24.76	1.27	3.6	篆書	完形	1078 北宋		41-1
第 97 國 75	元豐通寶		23.87	23.86	1.74	4.1	篆書	完形	1078 北宋		41-1
第 97 國 76	元豐通寶		24.20	24.29	1.38	3.8	篆書	完形	1078 北宋		41-1
第 97 國 77	元豐通寶		24.74	24.67	1.66	4.3	篆書	完形	1078 北宋		41-1
第 97 國 78	元祐通寶		24.08	24.31	1.36	3.0	篆書	完形	1086 北宋		41-1
第 97 國 79	元祐通寶		24.43	24.60	1.31	3.1	篆書	完形	1086 北宋		41-1
第 97 國 80	元祐通寶		24.63	24.60	1.53	3.7	篆書	完形	1086 北宋		41-1
第 97 國 81	元祐通寶		24.10	24.20	1.46	2.8	行書	完形	1086 北宋		41-1
第 97 國 82	元祐通寶		25.02	24.78	1.41	3.4	行書	完形	1086 北宋		41-1
第 97 國 83	元祐通寶		24.19	24.30	1.51	3.3	篆書	完形	1093 北宋		41-1
第 97 國 84	紹聖元寶		24.41	24.48	1.49	3.7	行書	完形	1094 北宋	星形孔	41-1
第 98 國 85	紹聖元寶		24.05	23.92	1.58	3.9	行書	完形	1094 北宋		41-1
第 98 國 86	紹聖元寶		23.55	23.49	1.53	3.7	篆書	完形	1094 北宋	小孔 2	41-1
第 98 國 87	紹聖元寶		23.08	22.73	1.55	2.8	行書	完形	1094 北宋		41-1
第 98 國 88	元符通寶		23.75	23.88	1.51	4.0	篆書	完形	1098 北宋		41-1
第 98 國 89	元符通寶		24.45	24.23	1.23	3.1	行書	完形	1098 北宋	錯范	41-1
第 98 國 90	元符通寶		23.62	23.66	1.48	3.7	行書	完形	1098 北宋		41-1
第 98 國 91	元符通寶		23.82	23.99	1.66	4.0	篆書	はぼ完形	1098 北宋		41-1
第 98 國 92	聖宋元寶		23.78	23.90	1.24	2.6	行書	はぼ完形	1101 北宋	小半孔	41-1
第 98 國 93	聖宋元寶		25.05	25.12	1.43	4.3	行書	完形	1101 北宋		41-1
第 98 國 94	大觀通寶		24.48	24.41	1.69	3.8	真書	完形	1107 北宋		41-1
第 98 國 95	政和通寶		24.54	24.73	1.57	4.2	篆書	完形	1111 北宋		41-1
第 98 國 96	宣和通寶		23.77	23.88	1.62	3.3	分楷	完形	1119 北宋	分析	41-1
第 98 國 97	宜和通寶		23.25	23.41	1.34	2.6	篆書	完形	1119 北宋	星形孔	41-1
第 98 國 98	紹熙元寶	下：二	23.74	23.93	1.57	3.2	真書	完形	1190 南宋		41-1
第 98 國 99	嘉泰通寶	上：二	24.53	24.42	1.26	3.1	真書	完形	1201 南宋		42-1
第 98 國 100	嘉泰通寶	上：三	24.68	24.66	1.37	3.7	真書	完形	1201 南宋		42-1
第 98 國 101	皇宋通寶		24.79	24.77	1.55	3.8	篆書	完形	1253 南宋		42-1
第 98 國 102	皇宋通寶		24.99	25.28	1.48	3.7	篆書	完形	1253 南宋		42-1
第 98 國 103	洪武通寶		22.35	22.15	2.29	4.1	真書	完形	1368 明	マ頭通・単点通	42-1
第 98 國 104	洪武通寶		23.53	23.35	2.12	3.7	真書	完形	1368 明	コ頭通・単点通	42-1
第 98 國 105	洪武通寶		23.10	23.04	1.74	3.0	真書	完形	1368 明	マ頭通・単点通	42-1
第 99 國 106	洪武通寶		24.16	24.37	1.66	4.0	真書	完形	1368 明	マ頭通・単点通	42-1
第 99 國 107	洪武通寶		23.29	23.04	2.06	4.8	真書	完形	1368 明	マ頭通・単点通	42-1
第 99 國 108	洪武通寶		24.08	24.03	1.70	4.1	真書	完形	1368 明	マ頭通・単点通	42-1
第 99 國 109	永樂通寶		25.55	25.45	1.59	3.8	真書	完形	1408 明		42-1
第 99 國 110	永樂通寶		25.05	24.93	1.59	3.9	真書	完形	1408 明		42-1
第 99 國 111	永樂通寶		25.08	25.38	1.83	5.0	真書	完形	1408 明		42-1
第 99 國 112	永樂通寶		25.30	25.19	1.43	3.4	真書	完形	1408 明		42-1
第 99 國 113	永樂通寶		24.72	24.56	1.73	4.2	真書	完形	1408 明		42-1
第 99 國 114	永樂通寶		25.10	25.05	1.49	3.7	真書	完形	1408 明		42-1
第 99 國 115	永樂通寶		25.20	25.12	1.58	3.7	真書	完形	1408 明		42-1
第 99 國 116	永樂通寶		24.95	24.79	1.62	3.9	真書	はぼ完形	1408 明		42-1
第 99 國 117	永樂通寶		25.26	25.21	1.73	4.1	真書	完形	1408 明		42-1
第 99 國 118	永樂通寶		25.09	24.92	1.97	4.4	真書	完形	1408 明		42-1
第 99 國 119	□□□實	[21.38]	25.13	1.41	2.4			4/5 残			42-1
第 99 國 120	□□□實		24.94	24.07	1.64	3.7	完形				42-1
第 99 國 121	□□□□		23.63	23.67	1.66	3.7	完形				42-1

第3号埋藏錢三面

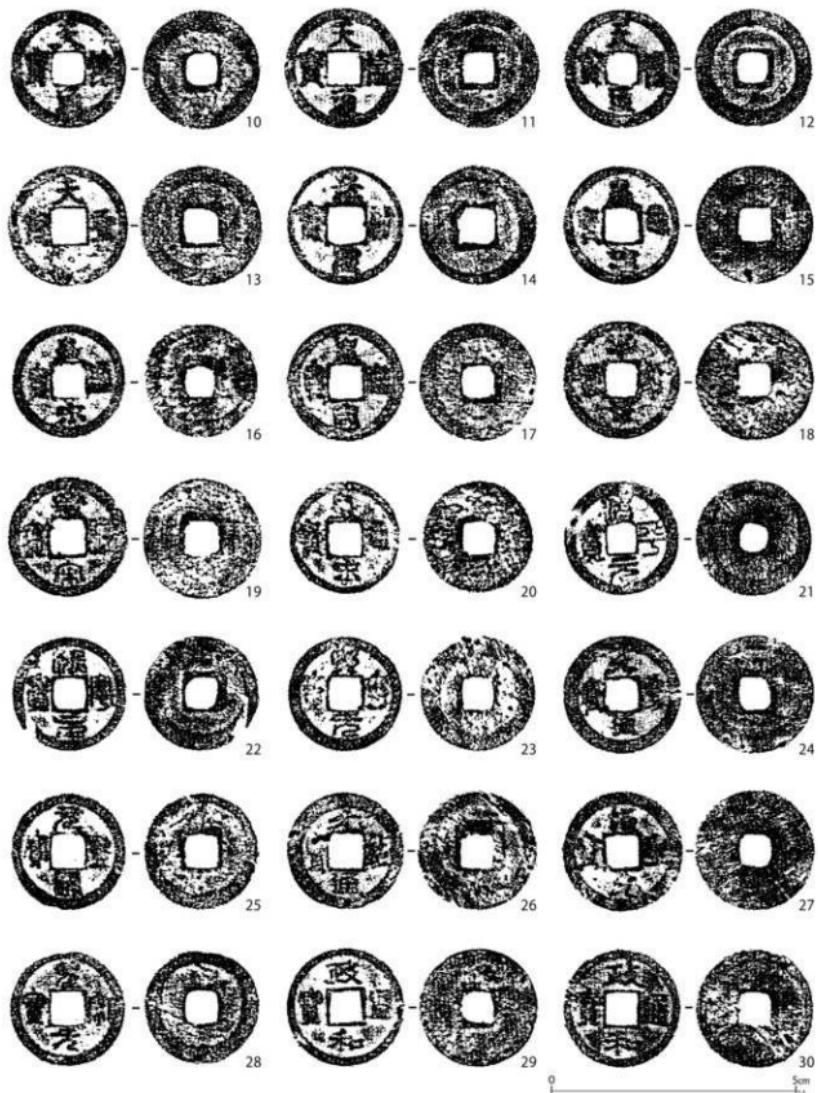


第3号埋藏錢三面出土錢貨



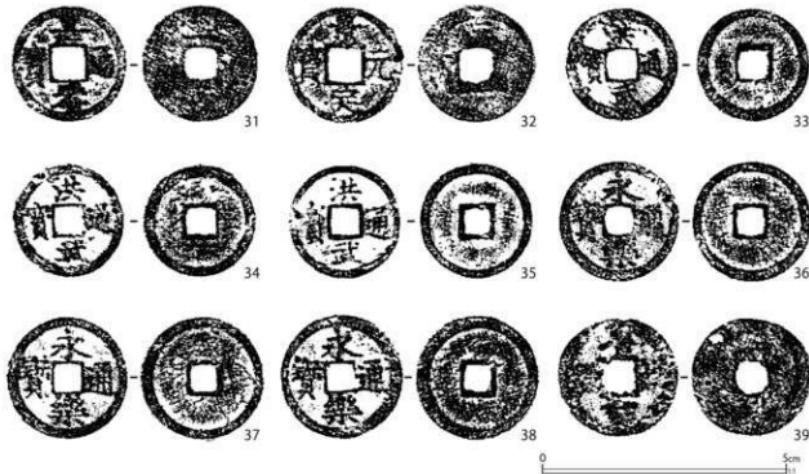
第100図 第3号埋藏錢三面出土狀況・第3号埋藏錢三面出土錢貨（1）

第3号埋藏銭三面出土銭貨



第101図 第3号埋藏銭三面出土銭貨（2）

第3号埋藏錢三面出土錢貨



第102圖 第3号埋藏錢三面出土錢貨（3）

第33表 第3号埋藏錢三面出土錢貨觀察表

辨証番號	錢貨名	背面 羅	錢徑 (mm) 橫	錢厚 (mm)	重量 (g)	書體	殘存	初鑄年・國	備考	國版
第100國1	開元通寶		24.22	24.26	1.38	3.2	真書	完形	621 唐	42-2
第100國2	開元通寶		24.76	24.97	1.50	3.2	真書	完形	621 唐	42-2
第100國3	開元通寶		24.07	24.09	1.46	3.5	真書	完形	621 唐	42-2
第100國4	開元通寶	上：同	24.41	24.22	1.53	3.0	真書	完形	758 唐	分析
第100國5	乾元重寶		24.36	24.09	1.42	3.1	真書	完形	758 唐	星形孔
第100國6	淳化元寶		24.65	24.66	1.45	3.2	草書	完形	990 北宋	42-2
第100國7	景德元寶		25.12	25.21	1.28	3.1	真書	完形	1004 北宋	42-2
第100國8	景德元寶		24.48	24.59	1.47	3.6	真書	完形	1004 北宋	42-2
第100國9	天祐通寶		24.47	24.65	1.48	3.7	真書	完形	1017 北宋	42-2
第100國10	天祐通寶		24.54	24.28	1.39	3.4	真書	完形	1017 北宋	42-2
第100國11	天祐通寶		24.95	24.98	1.42	3.6	真書	完形	1017 北宋	42-2
第100國12	天祐通寶		24.49	24.54	1.31	3.6	真書	完形	1017 北宋	42-2
第100國13	天聖元寶		24.90	25.05	1.40	3.8	真書	完形	1023 北宋	42-2
第100國14	景祐元寶		24.70	24.52	1.64	3.6	篆書	完形	1034 北宋	42-2
第100國15	皇宋通寶		24.51	24.49	1.44	3.7	真書	完形	1038 北宋	42-2
第100國16	皇宋通寶		23.49	23.66	1.35	2.5	真書	完形	1038 北宋	42-2
第100國17	皇宋通寶		24.54	24.43	1.34	3.5	篆書	完形	1038 北宋	42-2
第100國18	皇宋通寶		24.65	24.57	1.54	3.5	真書	完形	1038 北宋	42-2
第100國19	皇宋通寶		24.62	24.66	1.45	3.2	篆書	完形	1038 北宋	42-2
第100國20	皇宋通寶		23.17	23.15	1.55	2.6	真書	完形	1038 北宋	42-2
第100國21	治平元寶		23.80	23.92	1.51	3.4	篆書	完形	1064 北宋	42-2
第100國22	熙寧元寶		23.79	23.87	1.31	2.9	篆書	ほぼ完形	1068 北宋	42-2
第100國23	熙寧元寶		23.86	23.75	1.72	3.7	篆書	完形	1068 北宋	42-2
第100國24	元豐通寶		24.83	24.84	1.64	3.9	行書	完形	1078 北宋	42-2
第100國25	元豐通寶		24.25	24.15	1.52	3.4	篆書	完形	1078 北宋	42-2
第100國26	元祐通寶		24.26	24.48	1.76	4.3	行書	完形	1086 北宋	42-2
第100國27	紹聖元寶		24.77	24.86	1.08	3.0	行書	完形	1094 北宋	42-2
第100國28	聖宋元寶		23.62	23.86	1.46	3.9	篆書	完形	1101 北宋	42-2
第100國29	政和通寶		24.39	24.49	1.49	3.1	分母	完形	1111 北宋	43-1

辨団番号	銭貨名	背面	銭径 (mm)		銭厚 (mm)	重量 (g)	書体	残存	初跨年・国	備考	国版
			縦	横							
第102図30	政和通寶		24.47	24.35	1.38	3.4	分楷	完形	1111 北宋		43-1
第102図31	嘉泰通寶	上:二	24.26	24.17	1.56	3.6	真書	完形	1201 南宋		43-1
第102図32	景定元寶	上:三	24.11	24.20	1.23	2.6	真書	完形	1260 南宋		43-1
第102図33	洪武通寶		23.35	23.46	1.64	3.6	真書	完形	1368 明 マ頭通・単点通		43-1
第102図34	洪武通寶		23.51	23.26	1.84	4.3	真書	完形	1368 明 モ頭通・単点通		43-1
第102図35	洪武通寶		23.71	23.22	1.91	3.6	真書	完形	1368 明 モ頭通・単点通		43-1
第102図36	永樂通寶		24.90	24.77	1.62	3.7	真書	完形	1408 明		43-1
第102図37	永樂通寶		25.12	25.29	1.46	3.4	真書	完形	1408 明		43-1
第102図38	永樂通寶		25.58	25.42	1.50	3.2	真書	完形	1408 明		43-1
第102図39	□□□□		25.07	24.77	1.38	2.9			星形孔		43-1

京都府中市武藏國府関連遺跡群の埋蔵銭に伴って2例ある（府中市教育委員会2001）ほか、東京都小金井市の堀塙墓に伴い1例（小金井市誌編纂委員会1970）、埼玉県久喜市小草原遺跡の堀塙墓に伴い1例（栗橋町教育委員会2008）、東松山市大正寺遺跡から1例（栗原1995）がある。

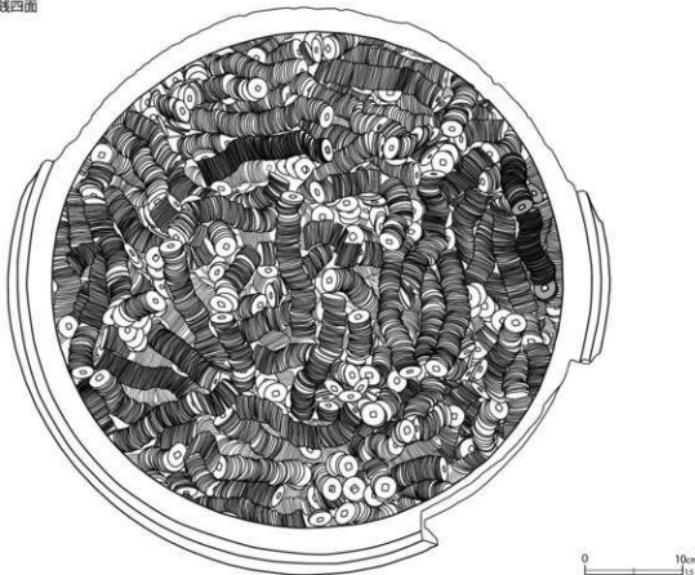
3は木簡で、ほとんど厚みの無い板状である。樹種については、非破壊での分析ができないため

第3号埋蔵銭四面

不明であるが、目視では針葉樹であると推定される。縦75mm、幅79mm、厚さ1mmのほぼ方形で、下端の繊維がやや腐食するが、全体の形状を留める。表面の墨書きは「三月□□（日カ）／いのとし／二百六十／くわん□□」（原文縦書き）と判読される。

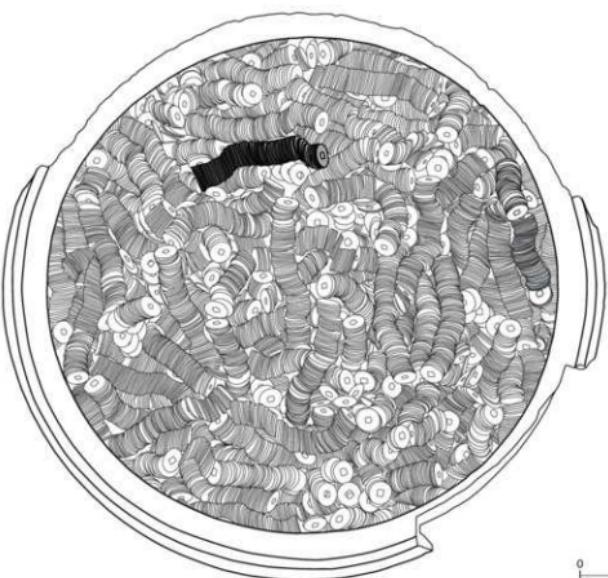
埋蔵銭の銭貨の取り上げ（第82図）

第3号埋蔵銭内の銭貨については、繩から分離



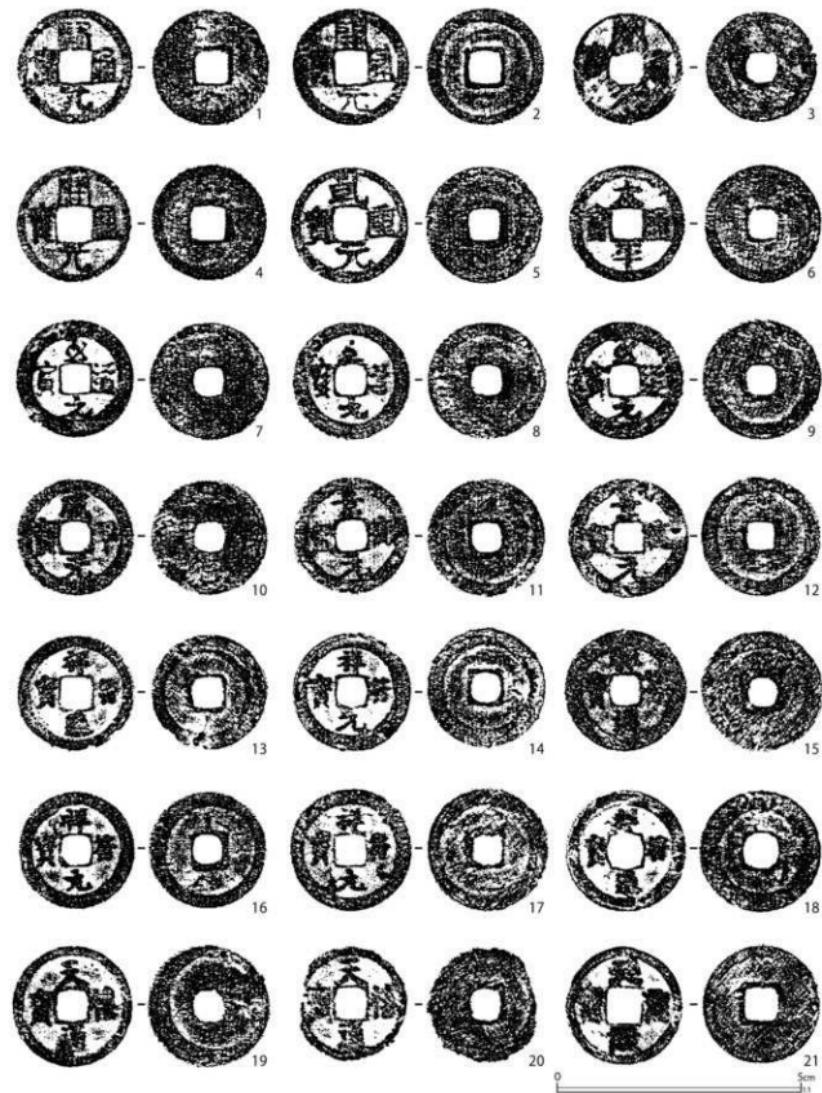
第103図 第3号埋蔵銭四面出土状況

第3号埋藏錢第1号縉錢



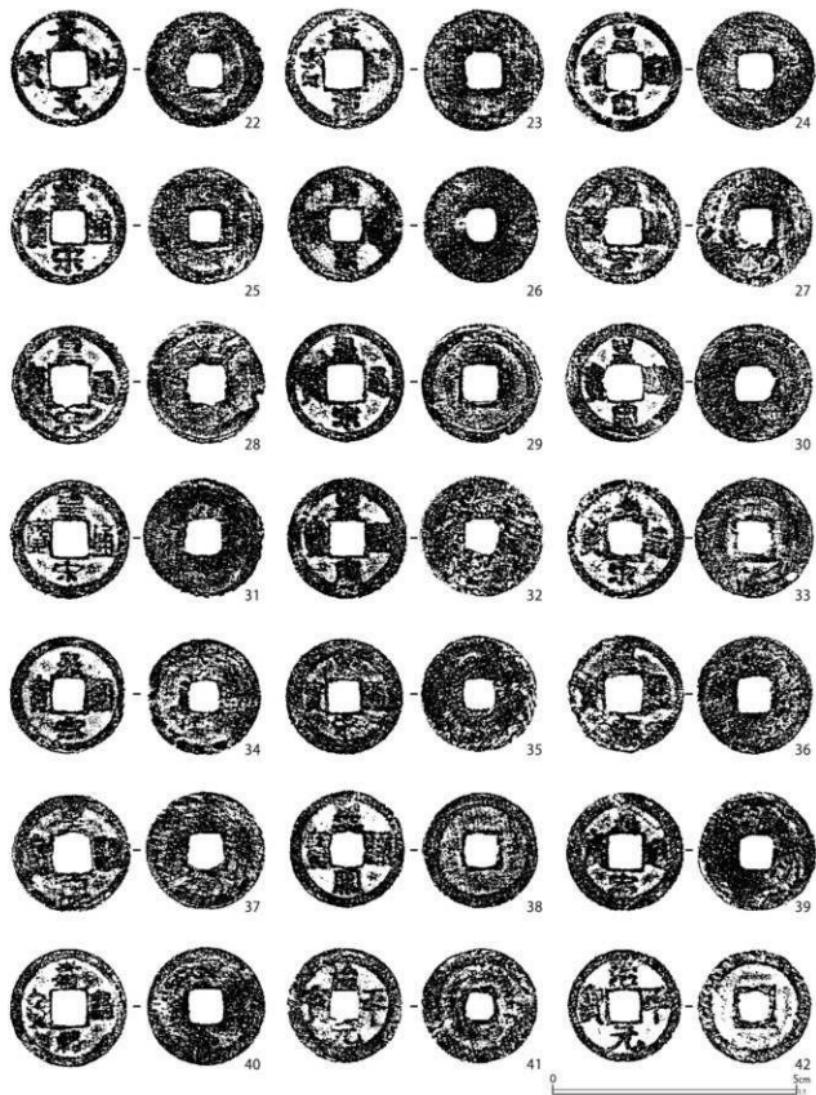
第104図 第3号埋藏錢第1号縉錢出土状況

第3号埋藏銭第1号縁銭



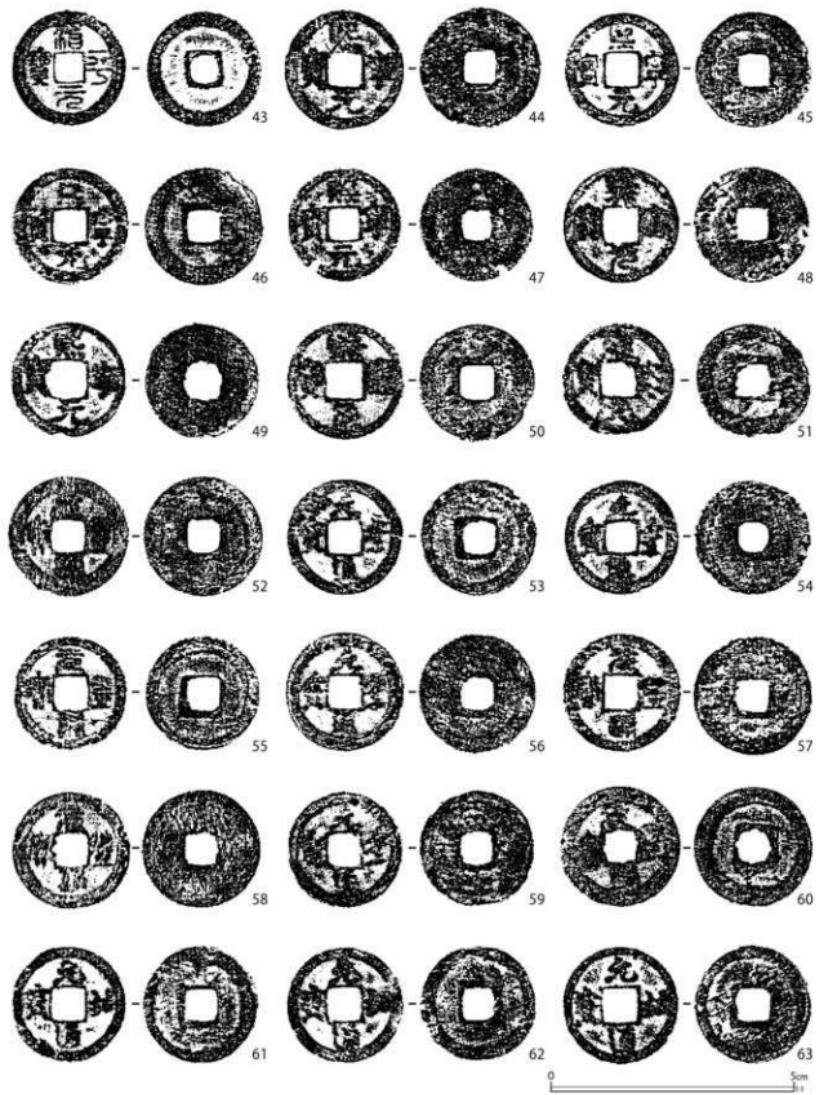
第105図 第3号埋藏銭第1号縁銭（1）

第3号埋蔵銭第1号縁銭



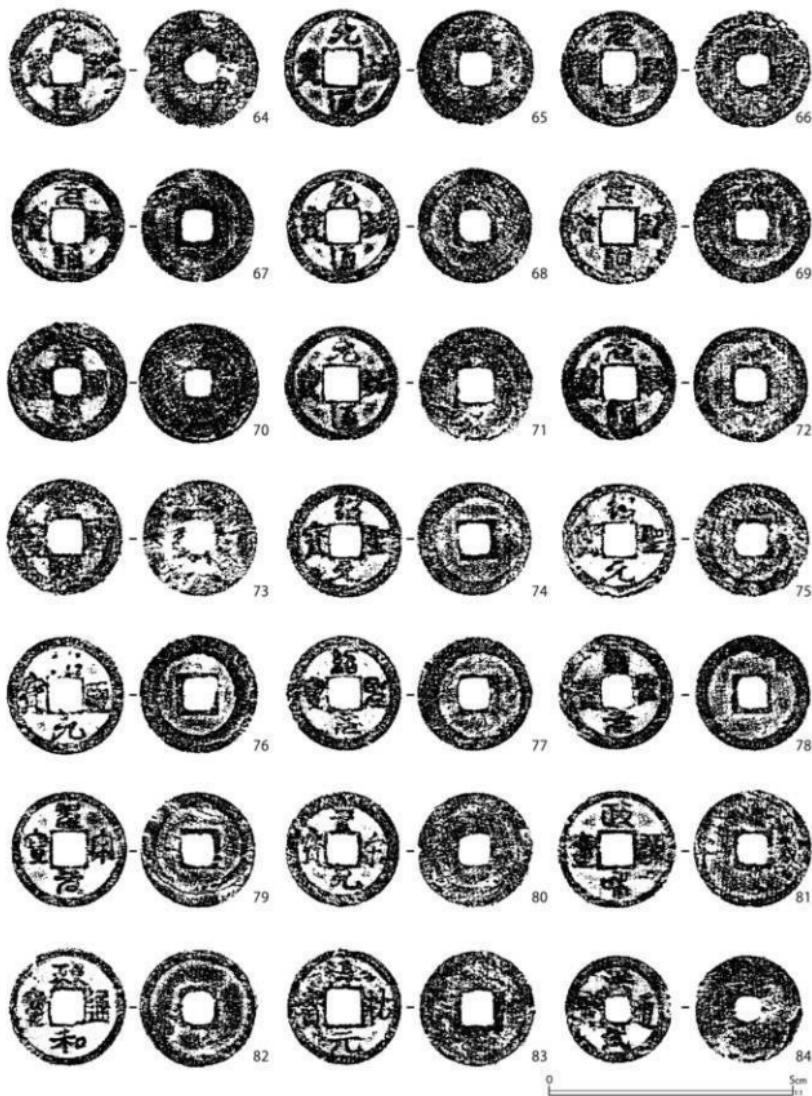
第106図 第3号埋蔵銭第1号縁銭（2）

第3号埋蔵銭第1号縁銭



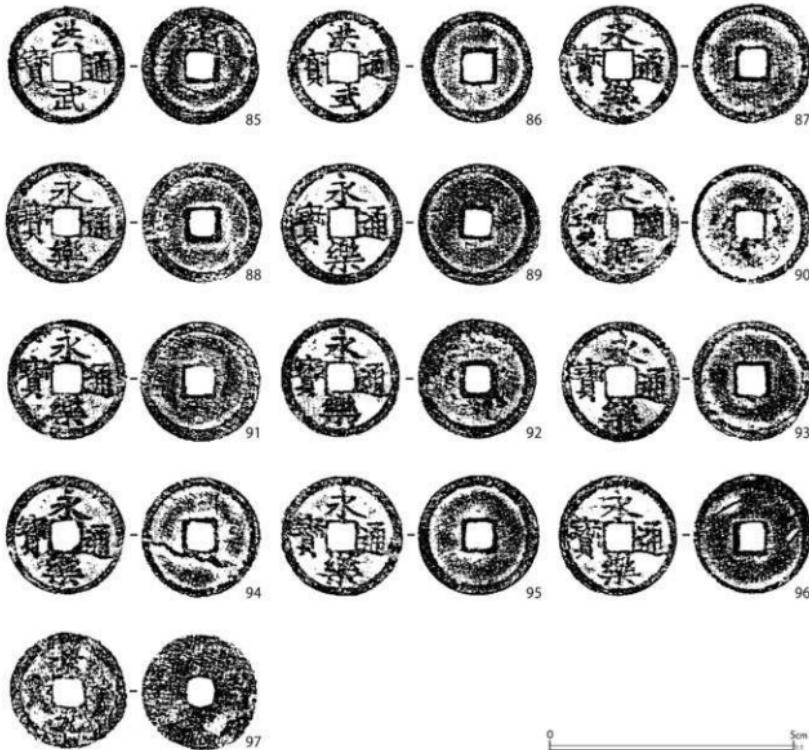
第107図 第3号埋蔵銭第1号縁銭（3）

第3号埋蔵錢第1号緞錢



第108図 第3号埋蔵錢第1号緞錢（4）

第3号埋藏銭第1号網錢



第109図 第3号埋藏銭第1号網錢（5）

第34表 第3号埋藏銭出土第1号網錢觀察表

拂因番号	錢貨名	錢徑 (mm)		重量 (g)	書体	殘存	初跨年・国	備考	國版
		縱	橫						
第105図1	開元通寶	23.98	24.36	1.81	3.6	真書	完形	621 唐	43-2
第105図2	開元通寶	24.39	24.39	1.06	2.5	真書	完形	621 唐	43-2
第105図3	開元通寶	23.36	23.01	1.44	2.7	真書	完形	621 唐	43-2
第105図4	開元通寶	24.04	24.27	1.05	2.4	真書	完形	621 唐	43-2
第105図5	乾元重寶	24.46	24.65	1.38	3.5	真書	完形	758 唐	43-2
第105図6	太平通寶	24.47	24.32	1.60	4.0	真書	完形	976 北宋	43-2
第105図7	至道元宝	24.68	24.81	1.32	3.8	行書	完形	995 北宋	43-2
第105図8	至道元宝	24.42	24.56	1.43	3.6	草書	完形	995 北宋	43-2
第105図9	至道元宝	24.65	24.90	1.41	3.8	行書	完形	995 北宋	43-2
第105図10	咸平元宝	24.22	24.26	1.16	2.7	真書	完形	998 北宋	43-2
第105図11	景德元宝	24.53	24.34	1.41	2.7	真書	完形	1004 北宋	43-2
第105図12	景德元宝	25.08	25.08	1.42	4.0	真書	完形	1004 北宋	43-2
第105図13	祥符元宝	23.90	24.08	1.55	3.0	真書	完形	1009 北宋	43-2

辨认番号	錢貨名	背面	钱径 (mm)		厚度 (mm)	重量 (g)	書体	残存	初鑄年・国	備考	図版
			縦	横							
第105国 14	祥符元寶		24.83	24.82	1.33	3.4	真書	完形	1009 北宋		43-2
第105国 15	祥符元寶		25.52	25.70	1.32	3.5	真書	完形	1009 北宋		43-2
第105国 16	祥符元寶		24.58	24.39	1.19	2.9	真書	完形	1009 北宋		43-2
第105国 17	祥符元寶		25.43	25.53	1.59	4.2	真書	完形	1009 北宋		43-2
第105国 18	祥符通寶		25.38	25.36	1.45	3.5	真書	完形	1009 北宋		43-2
第105国 19	天禧通寶		25.35	25.44	1.37	3.8	真書	完形	1017 北宋		43-2
第105国 20	天禧通寶		23.81	[22.47]	1.23	2.6	真書	はぼ完形	1017 北宋		43-2
第105国 21	天聖元寶		24.69	24.67	1.33	3.7	篆書	完形	1023 北宋		43-2
第106国 22	景祐元寶		24.41	24.43	1.48	3.2	真書	完形	1034 北宋		43-2
第106国 23	景祐元寶		25.34	25.04	1.31	3.2	篆書	完形	1034 北宋		43-2
第106国 24	皇宋通寶		24.76	24.69	1.25	2.9	篆書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 25	皇宋通寶		24.38	24.16	1.61	3.8	真書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 26	皇宋通寶		24.42	24.23	1.65	4.4	真書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 27	皇宋通寶		24.47	24.48	1.33	3.2	真書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 28	皇宋通寶		24.72	24.62	1.25	2.8	真書	完形	1038 北宋	星形孔	43-2
第106国 29	皇宋通寶		24.77	24.83	1.24	3.4	真書	完形	1038 北宋	鉛范	43-2
第106国 30	皇宋通寶		24.77	24.98	1.26	3.1	篆書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 31	皇宋通寶		25.08	25.11	1.54	3.7	真書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 32	皇宋通寶		25.32	25.27	1.49	4.5	篆書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 33	皇宋通寶		24.98	24.87	1.50	3.8	真書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 34	皇宋通寶		24.33	23.57	1.54	3.7	真書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 35	皇宋通寶		24.34	24.44	1.38	3.9	真書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 36	皇宋通寶		25.21	24.39	1.49	3.6	真書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 37	皇宋通寶		24.99	24.90	1.49	3.6	篆書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 38	皇宋通寶		24.15	24.02	1.40	3.2	篆書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 39	皇宋通寶		24.75	24.68	1.31	4.0	真書	完形	1038 北宋		43-2
第106国 40	嘉祐通寶		24.75	24.74	1.52	4.2	篆書	完形	1056 北宋		43-2
第106国 41	治平元寶		24.08	24.35	1.79	4.0	真書	完形	1064 北宋		43-2
第106国 42	治平元寶		23.60	23.74	1.66	2.9	真書	完形	1064 北宋		43-2
第107国 43	治平元寶		23.83	23.95	1.57	3.8	篆書	完形	1064 北宋		44-1
第107国 44	熙寧元寶		25.08	25.14	1.58	4.3	真書	完形	1068 北宋		44-1
第107国 45	熙寧元寶		23.89	24.23	1.83	4.1	真書	完形	1068 北宋		44-1
第107国 46	熙寧元寶		24.34	24.37	1.47	3.1	真書	完形	1068 北宋		44-1
第107国 47	熙寧元寶		23.85	23.82	1.67	3.7	真書	完形	1068 北宋	小半孔	44-1
第107国 48	熙寧元寶		24.49	24.43	1.91	5.3	篆書	完形	1068 北宋		44-1
第107国 49	熙寧元寶		23.88	23.86	1.31	2.9	真書	完形	1068 北宋	星形孔	44-1
第107国 50	熙寧元寶		24.67	24.40	1.83	4.2	篆書	完形	1068 北宋		44-1
第107国 51	熙寧元寶		23.94	23.60	1.57	3.4	真書	完形	1068 北宋		44-1
第107国 52	元豐通寶		25.02	25.12	1.39	3.5	篆書	完形	1078 北宋	鉛范	44-1
第107国 53	元豐通寶		24.18	24.32	1.66	3.8	行書	完形	1078 北宋		44-1
第107国 54	元豐通寶		23.82	23.95	1.37	3.4	行書	完形	1078 北宋		44-1
第107国 55	元豐通寶		23.86	23.66	1.46	3.4	篆書	完形	1078 北宋		44-1
第107国 56	元豐通寶		24.97	24.66	1.67	4.0	行書	完形	1078 北宋		44-1
第107国 57	元豐通寶		24.83	24.89	1.44	4.3	篆書	完形	1078 北宋		44-1
第107国 58	元豐通寶		24.51	24.82	1.47	3.9	篆書	完形	1078 北宋		44-1
第107国 59	元祐通寶		24.26	24.02	1.69	4.1	行書	完形	1078 北宋		44-1
第107国 60	元豐通寶		24.17	25.09	1.44	4.0	篆書	完形	1078 北宋	星形孔	44-1
第107国 61	元祐通寶		24.28	24.27	1.72	4.3	行書	完形	1086 北宋		44-1
第107国 62	元祐通寶		24.25	24.45	1.62	3.6	行書	完形	1086 北宋		44-1
第107国 63	元祐通寶		24.47	24.30	1.31	3.5	行書	完形	1086 北宋		44-1
第108国 64	元祐通寶		24.74	24.57	1.39	2.6	行書	はぼ完形	1086 北宋	星形孔	44-1
第108国 65	元祐通寶		24.28	24.36	1.59	3.8	行書	完形	1086 北宋		44-1
第108国 66	元祐通寶		24.19	24.35	1.63	4.2	篆書	完形	1086 北宋		44-1
第108国 67	元祐通寶		23.69	23.83	1.82	4.4	篆書	完形	1086 北宋		44-1
第108国 68	元祐通寶		23.74	23.63	1.61	4.1	行書	完形	1086 北宋		44-1
第108国 69	元祐通寶		24.12	24.68	1.74	4.3	篆書	完形	1086 北宋		44-1
第108国 70	元祐通寶		25.05	25.30	1.57	4.4	篆書	完形	1086 北宋		44-1
第108国 71	元祐通寶		23.95	23.96	1.59	3.7	行書	完形	1086 北宋		44-1
第108国 72	元祐通寶		24.02	24.22	1.60	3.2	篆書	完形	1086 北宋		44-1

辨団番号	銭貨名	背面	錢径 (mm)		錢厚 (mm)	重量 (g)	書体	残存	初説年・国	備考	図版
			縦	横							
第108図73	元祐通寶		24.18	23.91	1.55	3.6	篆書	完形	1086 北宋		44-1
第108図74	紹聖元寶		23.78	24.10	1.65	3.9	行書	完形	1094 北宋		44-1
第108図75	紹聖元寶		23.97	24.08	1.49	3.1	行書	完形	1094 北宋	加工縫	44-1
第108図76	紹聖元寶		24.61	24.54	1.44	3.6	行書	完形	1094 北宋		44-1
第108図77	紹聖元寶		23.94	23.87	1.44	3.8	篆書	完形	1094 北宋		44-1
第108図78	紹聖元寶		24.33	24.24	1.70	4.1	篆書	完形	1094 北宋		44-1
第108図79	聖宋元寶		24.36	24.19	1.49	3.3	篆書	完形	1101 北宋		44-1
第108図80	聖宋元寶		23.96	23.85	1.39	3.5	行書	完形	1101 北宋		44-1
第108図81	政和通寶		24.41	24.58	1.47	3.4	篆書	完形	1111 北宋		44-1
第108図82	政和通寶		24.65	24.43	1.47	3.3	分楷	完形	1111 北宋		44-1
第108図83	淳祐元寶		24.00	23.98	1.27	2.8	真書	完形	1241 南宋		44-1
第108図84	洪武通寶		22.44	22.64	1.47	3.4	真書	完形	1368 明	マ頭通・単点通	44-1
第109図85	洪武通寶		24.60	24.49	1.53	3.1	真書	完形	1368 明	マ頭通・重点通	44-1
第109図86	洪武通寶		23.36	23.31	1.56	3.1	真書	完形	1368 明	マ頭通・単点通	44-1
第109図87	永楽通寶		24.92	24.69	1.74	4.2	真書	完形	1408 明		44-1
第109図88	永楽通寶		24.98	25.14	1.47	3.3	真書	完形	1408 明		44-1
第109図89	永楽通寶		25.33	25.35	1.49	3.8	真書	完形	1408 明		44-1
第109図90	永楽通寶		24.69	24.70	1.78	3.4	真書	完形	1408 明		44-1
第109図91	永楽通寶		24.98	25.01	1.59	3.7	真書	完形	1408 明		44-1
第109図92	永楽通寶		24.73	24.70	1.66	4.4	真書	完形	1408 明		44-1
第109図93	永楽通寶		24.96	24.80	1.36	3.3	真書	完形	1408 明		44-1
第109図94	永楽通寶		25.05	24.70	1.69	3.7	真書	完形	1408 明		44-1
第109図95	永楽通寶		24.88	25.18	1.56	3.6	真書	完形	1408 明		44-1
第109図96	永楽通寶		24.96	24.83	1.51	3.9	真書	完形	1408 明		44-1
第109図97	景祐元寶		24.28	24.38	1.30	3.7	真書	完形		景祐元寶?	44-1

している銭貨及び縫の1連ないし2連を対象に取り上げると定められ、それに従い、分離している銭貨および縫を取り上げた。第82図は、銭貨取り上げ前の状態である。

分離している銭貨（第83～102図）

銭貨は重なっているものが多く、元の状態に戻すことができるよう、3次元測量を行なうながら三面に分けて取り上げ作業を行った。取り上げた銭貨の位置と、銭貨は第82～102図に示した。

銭貨は一面が180枚、二面が121枚、三面が39枚で、石蓋に付着していた第117図2を含めると、341枚が縫から外れた状態であった銭貨である。縫から外れた銭貨は、銭貨面が水平のものが多く、蓋に銭貨が付着していたことからも、縫の状態では蓋が閉まらなかったため、縫から外し均して蓋を閉めた可能性が高い。4縫であるとすれば、388枚であり47枚足りないが、均す際に甕の肩部分に落ち込んだためとも考えられる。

銭貨の種類は、判読できたもので35種類があり、最も多いものが元豊通寶で41枚、次に豐宋

通寶で38枚、永楽通寶が30枚と続く。

縫銭（第103～117図）

三面に分けて取り上げた後の状況が第103図である。このうち、2縫を取り上げることとした。はっきり1縫と判別でき、取り上げることが可能な縫を選定した。

第104～109図は第1号縫銭である。甕のやや中央上側部分で、縫紐の一部が認められた。

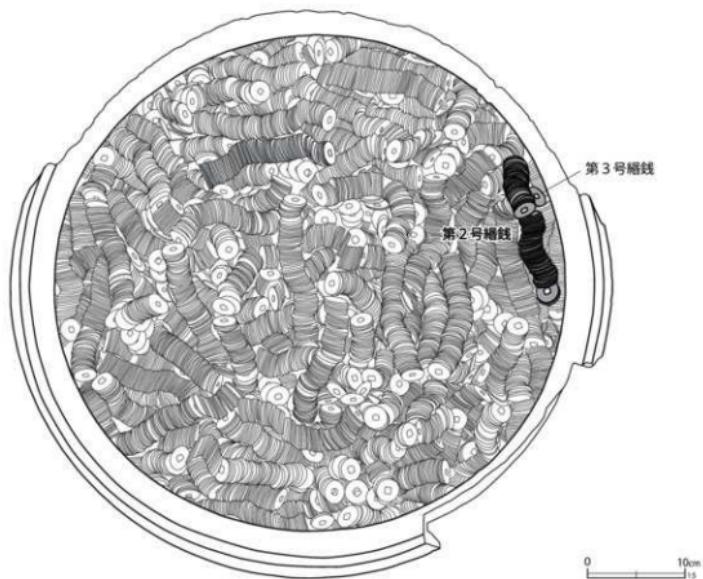
第1号縫銭の銭貨は、97枚を数えた。銭貨の種類が判読できたものは24種類で、最も多いものが皇宋通寶で16枚、次が元祐通寶で12枚、次が永楽通寶で10枚であった。他は10枚未満であった。

縫紐は脆く、細かな観察は出来なかった。

第110～117図は第2・3号縫銭である。2番目の縫として、甕の右端の縫を取り上げたがその際、他の縫銭が付着していた。そのまま第3号縫銭として取り上げた。

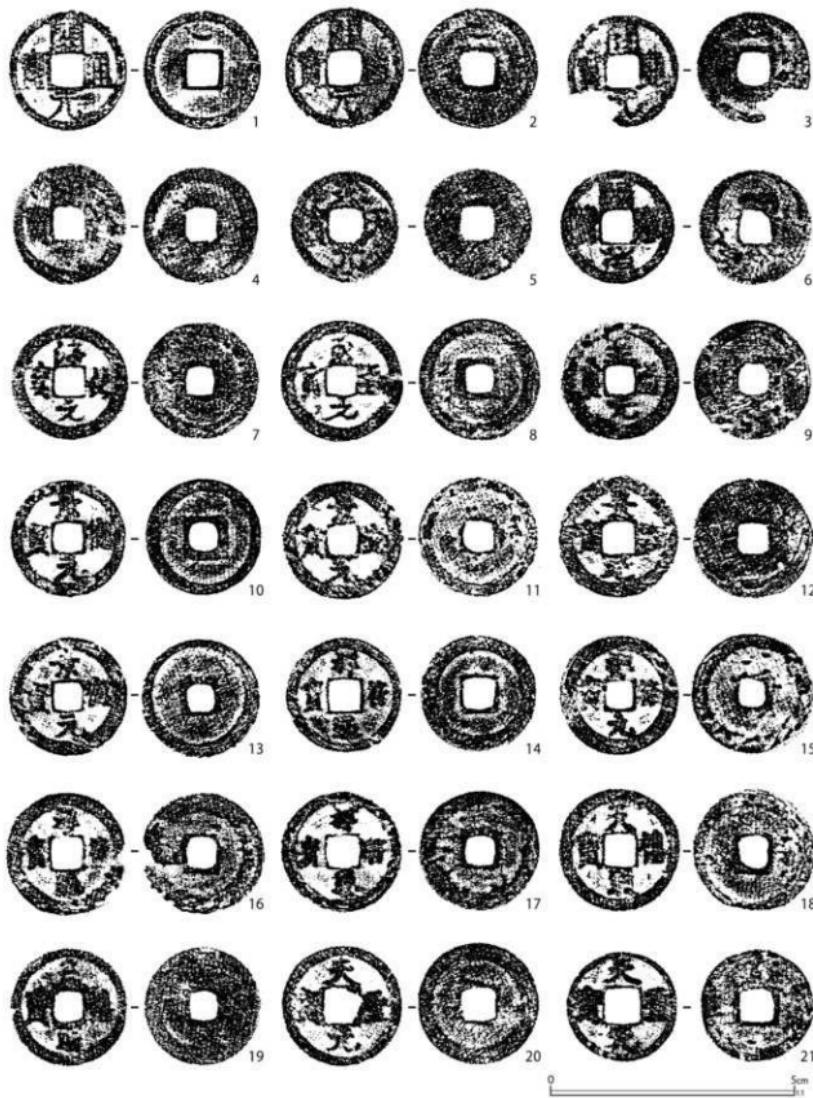
第2号縫銭の銭貨は、第1号同様97枚を数えた。銭貨の種類が判読できたものは26種類で、最も多いものが熙寧元寶で12枚、次が皇宋通寶で

第3号埋藏錢第2・3号繕錢



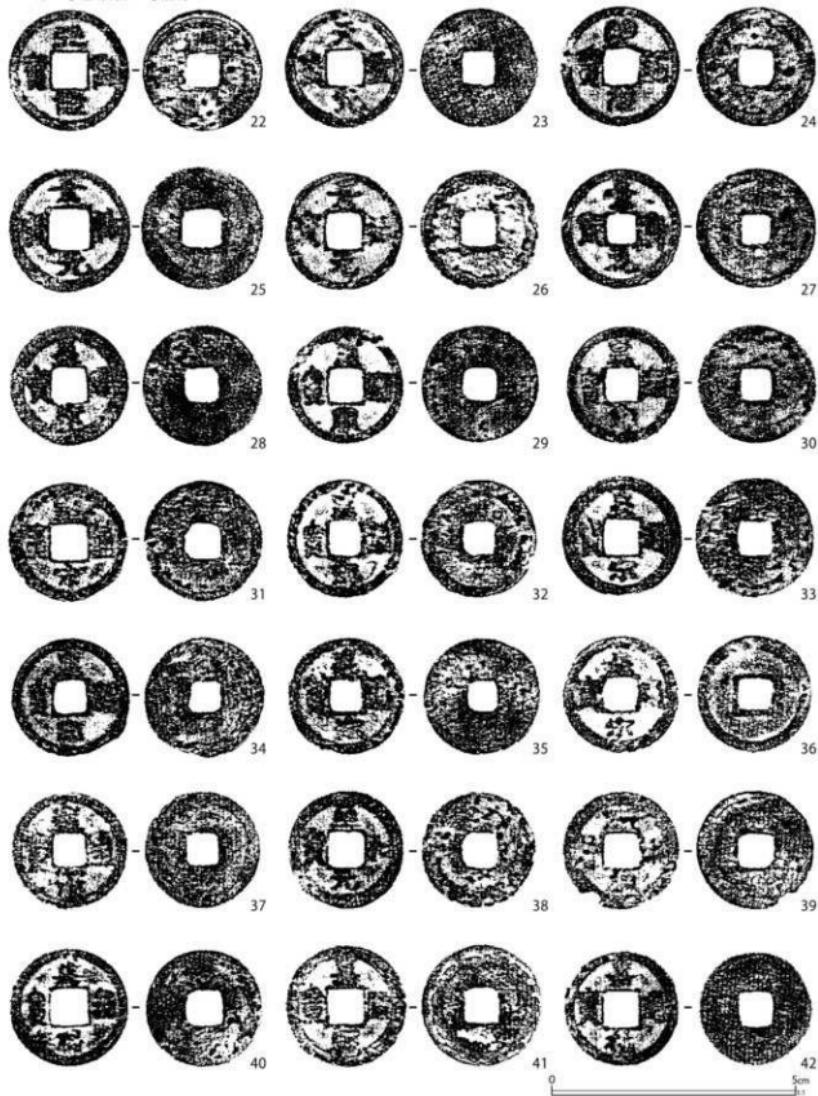
第110図 第3号埋藏錢第2・3号繕錢出土状況

第3号埋藏銭第2号縁銭



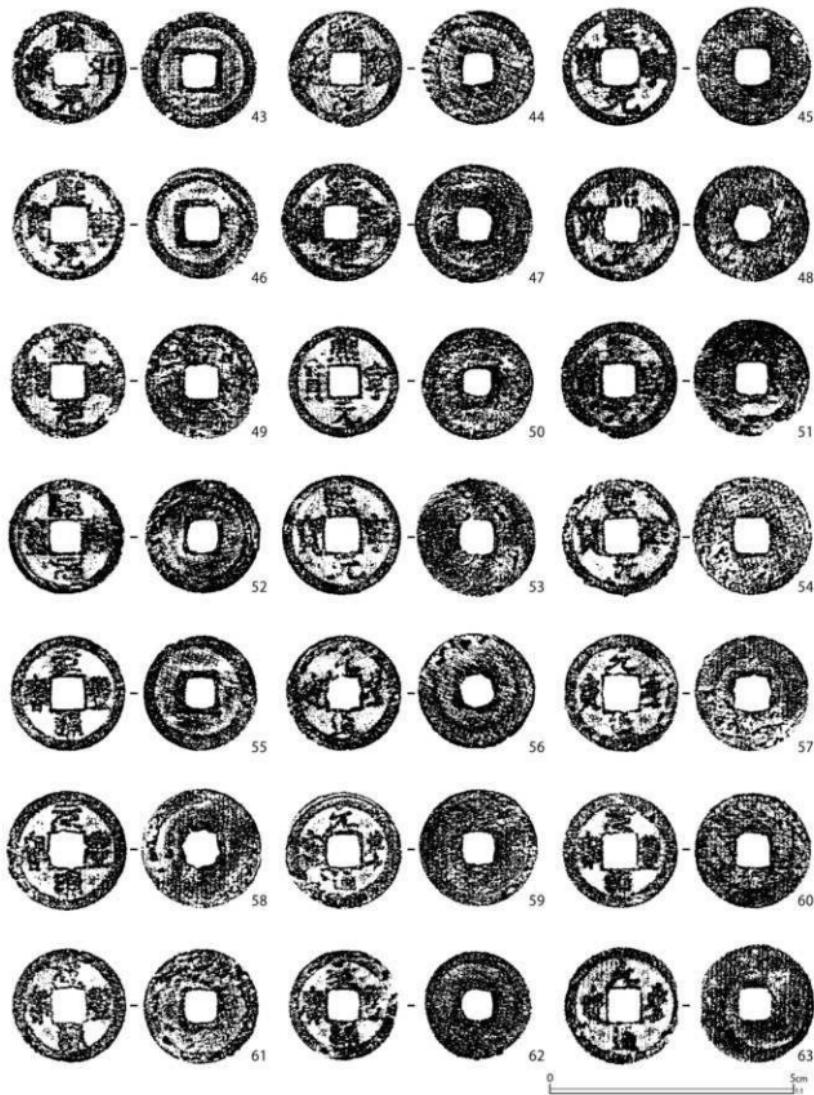
第111図 第3号埋藏銭第2号縁銭（1）

第3号埋蔵銭第2号緞銭



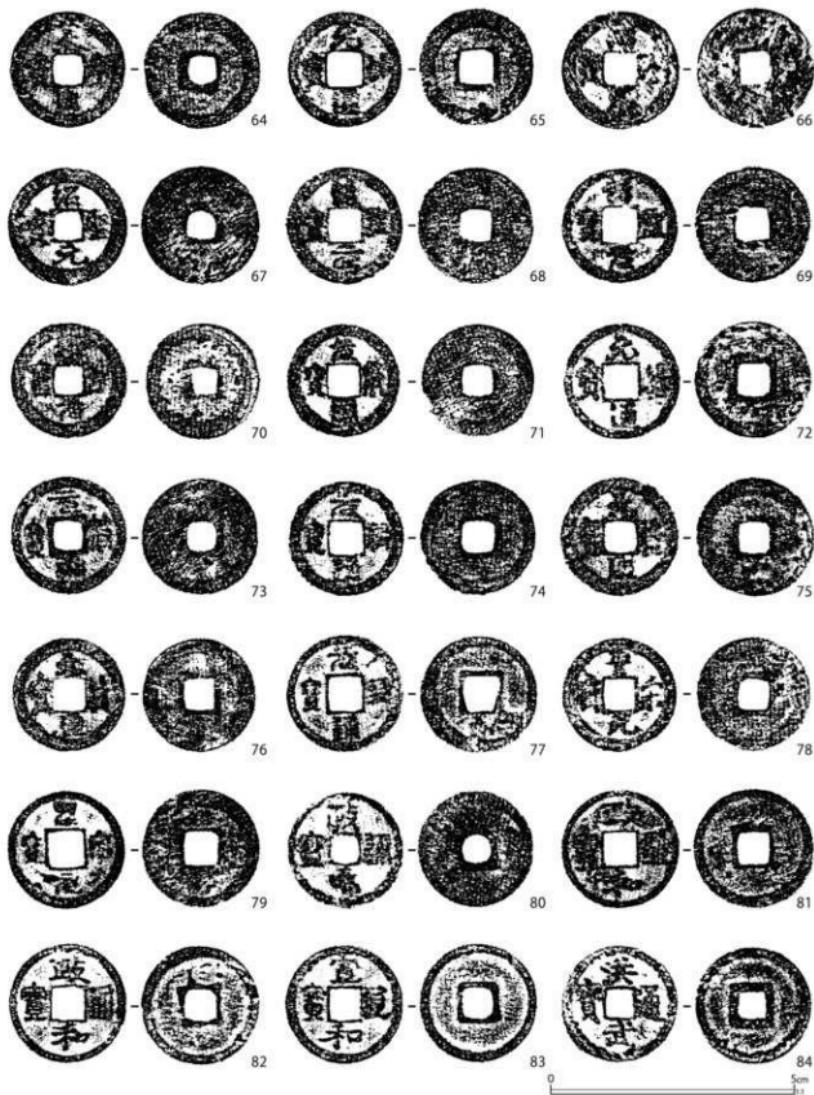
第112図 第3号埋蔵銭第2号緞銭（2）

第3号埋蔵銭第2号繩銭



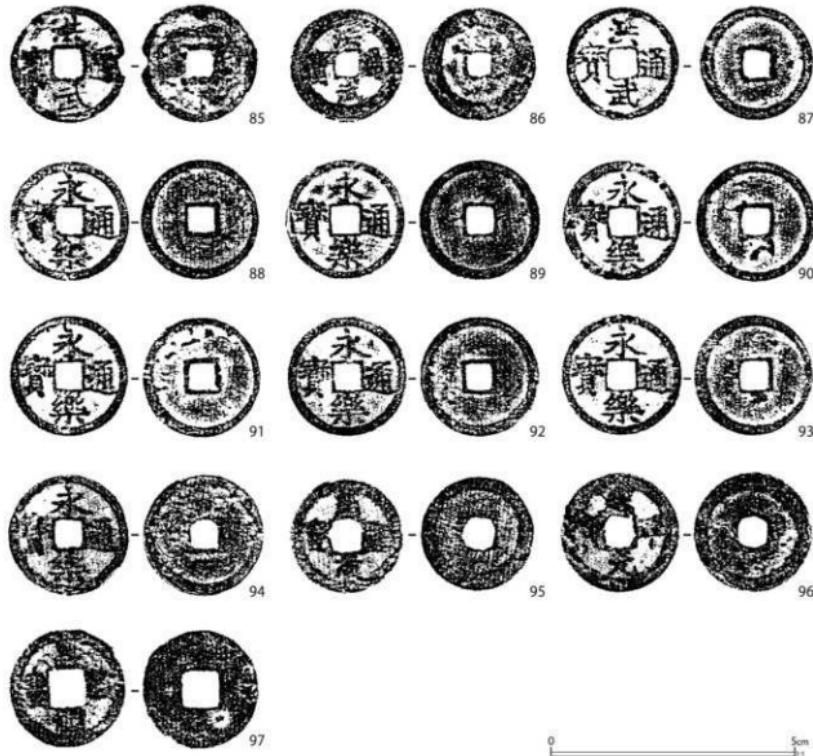
第113図 第3号埋蔵銭第2号繩銭（3）

第3号埋蔵錢第2号緞錢



第114図 第3号埋蔵錢第2号緞錢（4）

第3号埋藏銭第2号縁銭



第115図 第3号埋藏銭第2号縁銭（5）

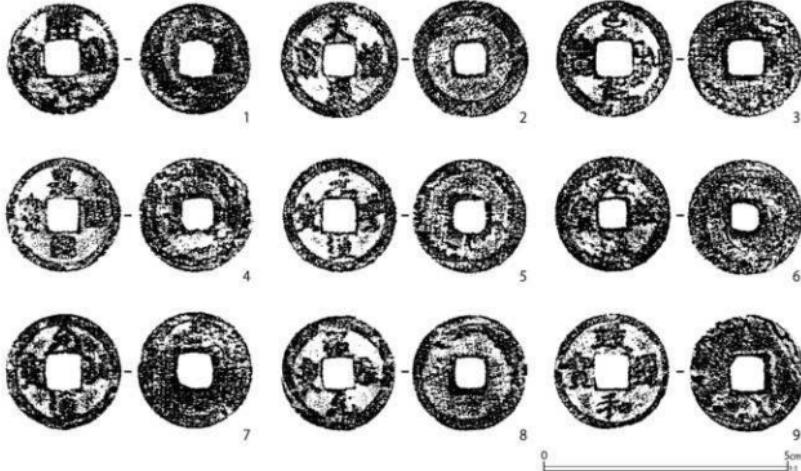
第35表 第3号埋藏銭出土第2号縁銭観察表

拂岡番号	銭貨名	背面	錢徑 (mm)		重量 (g)	書体	殘存	初鑄年・國	備考	国版
			縱	横						
第111図1	開元通寶	上：月	25.04	24.79	1.37	真書	完形	621 唐		45-1
第111図2	開元通寶	上：月	24.94	25.01	1.52	2.9	真書	完形	621 唐	45-1
第111図3	開元通寶		23.42	23.33	1.14	1.9	真書	4/5残	621 唐	45-1
第111図4	開元通寶		24.75	23.90	1.62	3.4	真書	完形	621 唐	45-1
第111図5	光天元寶		23.18	22.65	1.06	1.9	真書	完形	918 前蜀	45-1
第111図6	開元通寶		23.65	23.75	1.56	3.1	篆書	完形	960 南唐	45-1
第111図7	淳化元寶		24.51	24.45	1.20	3.3	草書	完形	990 北宋	45-1
第111図8	聖道元寶		25.22	25.52	1.50	4.3	行書	完形	995 北宋	45-1
第111図9	至道元寶		24.81	24.57	1.47	3.5	真書	完形	995 北宋	45-1
第111図10	景德元寶		24.31	24.20	1.58	4.1	真書	完形	1004 北宋	45-1
第111図11	景德元寶		24.91	25.07	1.66	3.9	真書	完形	1004 北宋	45-1
第111図12	景德元寶		25.23	25.24	1.29	2.9	真書	完形	1004 北宋	45-1

拂國番号	錢貨名	背面	錢徑 (mm)		錢厚 (mm)	重量 (g)	書体	殘存	初鑄年・国	備考	図版
			縦	横							
第111國13	景德元寶		24.59	24.64	1.69	3.5	真書	完形	1004 北宋		45-1
第111國14	祥符通寶		24.04	24.08	1.64	3.0	真書	完形	1009 北宋		45-1
第111國15	祥符元寶		25.03	25.10	1.44	3.8	真書	完形	1009 北宋		45-1
第111國16	祥符通寶		25.54	25.15	1.48	3.8	真書	はぼ完形	1009 北宋		45-1
第111國17	祥符通寶		24.97	24.96	1.64	4.2	真書	完形	1009 北宋		45-1
第111國18	天禧通寶		25.44	25.51	1.41	3.7	真書	完形	1017 北宋		45-1
第111國19	天禧通寶		24.67	24.46	1.36	3.2	真書	完形	1017 北宋		45-1
第111國20	天聖元寶		25.20	25.32	1.68	4.4	真書	完形	1023 北宋		45-1
第111國21	天聖元寶		23.00	23.37	1.57	2.9	真書	完形	1023 北宋		45-1
第112國22	天聖元寶		25.10	25.13	1.72	4.2	篆書	完形	1023 北宋	鉛范	45-1
第112國23	天聖元寶		24.94	25.02	1.78	4.2	真書	完形	1023 北宋		45-1
第112國24	明道元寶		24.90	24.80	1.59	3.8	篆書	完形	1032 北宋		45-1
第112國25	景祐元寶		25.66	25.67	1.35	3.4	真書	完形	1034 北宋		45-1
第112國26	景祐元寶		24.94	24.55	1.52	3.6	真書	完形	1034 北宋		45-1
第112國27	景祐元寶		25.15	25.21	1.45	3.8	真書	完形	1034 北宋		45-1
第112國28	皇宋通寶		25.21	24.94	1.44	3.9	真書	完形	1038 北宋		45-1
第112國29	皇宋通寶		24.28	24.35	1.34	3.0	篆書	完形	1038 北宋		45-1
第112國30	皇宋通寶		24.48	24.47	1.40	2.9	真書	完形	1038 北宋		45-1
第112國31	皇宋通寶		24.90	24.69	1.57	3.5	真書	完形	1038 北宋		45-1
第112國32	皇宋通寶		24.35	24.13	1.54	3.8	篆書	完形	1038 北宋		45-1
第112國33	皇宋通寶		24.85	24.97	1.51	3.7	真書	完形	1038 北宋		45-1
第112國34	皇宋通寶		25.03	24.91	1.52	3.8	真書	完形	1038 北宋		45-1
第112國35	皇宋通寶		24.24	24.39	1.39	3.4	真書	完形	1038 北宋		45-1
第112國36	皇宋通寶		24.43	24.00	1.33	3.1	真書	完形	1038 北宋		45-1
第112國37	皇宋通寶		24.33	24.21	1.38	3.3	真書	完形	1038 北宋		45-1
第112國38	至和元寶		24.45	24.17	1.44	3.3	真書	完形	1054 北宋		45-1
第112國39	至和通寶		24.53	24.52	1.38	2.7	真書	はぼ完形	1054 北宋		45-1
第112國40	嘉祐通寶		24.41	24.51	1.29	3.3	篆書	完形	1056 北宋		45-1
第112國41	嘉祐通寶		25.36	25.14	1.26	3.1	篆書	完形	1056 北宋		45-1
第112國42	嘉祐通寶		23.73	23.61	1.33	3.0	真書	完形	1056 北宋		45-1
第113國43	治平元寶		24.42	24.16	1.41	3.3	真書	完形	1064 北宋		45-1
第113國44	熙寧元寶		24.08	23.88	1.74	4.2	篆書	完形	1068 北宋		45-1
第113國45	熙寧元寶		24.59	24.11	1.32	3.2	真書	完形	1068 北宋		45-1
第113國46	熙寧元寶		23.38	23.36	1.47	3.0	真書	完形	1068 北宋	鉛范	45-1
第113國47	熙寧元寶		24.85	24.79	1.29	3.4	真書	完形	1068 北宋		45-1
第113國48	熙寧元寶		24.22	24.09	1.73	3.7	真書	完形	1068 北宋	星形孔	45-1
第113國49	熙寧元寶		24.15	24.11	1.19	2.4	篆書	完形	1068 北宋		45-1
第113國50	熙寧元寶		23.22	23.62	1.38	3.4	真書	完形	1068 北宋		45-1
第113國51	熙寧元寶		24.42	24.44	1.34	3.1	真書	はぼ完形	1068 北宋		45-1
第113國52	熙寧元寶		23.76	23.73	1.48	3.2	篆書	完形	1068 北宋		45-1
第113國53	熙寧元寶		25.06	25.03	1.47	3.6	真書	完形	1068 北宋		45-1
第113國54	熙寧元寶		24.56	24.85	1.29	2.7	真書	完形	1068 北宋		45-1
第113國55	元豐通寶		24.10	24.03	1.72	4.1	篆書	完形	1078 北宋		45-1
第113國56	元豐通寶		24.27	24.62	1.79	3.9	行書	完形	1078 北宋	星形孔	45-1
第113國57	元豐通寶		24.22	23.91	1.33	3.3	行書	完形	1078 北宋		46-1
第113國58	元豐通寶		25.01	25.12	1.32	3.5	篆書	完形	1078 北宋	星形孔	46-1
第113國59	元豐通寶		24.58	24.59	1.34	3.5	行書	完形	1078 北宋		46-1
第113國60	元豐通寶		24.04	23.99	1.41	3.6	篆書	完形	1078 北宋		46-1
第113國61	元豐通寶		24.05	24.04	1.62	4.0	篆書	完形	1078 北宋		46-1
第113國62	元豐通寶		22.97	22.57	1.29	2.8	篆書	完形	1078 北宋		46-1
第113國63	元豐通寶		24.66	[24.01]	1.39	3.2	行書	完形	1078 北宋		46-1
第114國64	元祐通寶		24.14	24.24	1.57	3.8	行書	完形	1078 北宋		46-1
第114國65	元祐通寶		24.18	24.03	1.46	3.4	行書	完形	1086 北宋		46-1
第114國66	紹聖元寶		24.69	24.58	1.44	3.7	行書	完形	1094 北宋		45-1
第114國67	紹聖元寶		24.72	24.31	1.37	3.5	行書	完形	1094 北宋		46-1
第114國68	紹聖元寶		24.23	24.39	1.53	3.8	篆書	完形	1094 北宋		46-1
第114國69	紹聖元寶		24.19	24.14	1.60	4.1	篆書	完形	1094 北宋		46-1

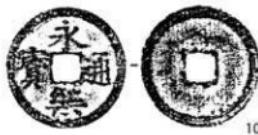
辨認番号	錢貨名	背面	銭径 (mm)		銭厚 (mm)	重量 (g)	書体	残存	初鑄年・国	備考	國版
			幅	横							
第114国70	紹聖元寶		24.27	24.02	1.60	4.3	篆書	完形	1094 北宋		46-1
第114国71	元符通寶		23.55	23.64	1.46	3.7	篆書	完形	1098 北宋		46-1
第114国72	元符通寶		24.36	24.54	1.55	3.8	行書	完形	1098 北宋		46-1
第114国73	元符通寶		24.39	24.18	1.26	3.4	篆書	完形	1098 北宋		46-1
第114国74	元符通寶		23.85	23.87	1.66	4.2	篆書	完形	1098 北宋		46-1
第114国75	元符通寶		24.70	27.73	1.69	3.5	行書	完形	1098 北宋		46-1
第114国76	元符通寶		23.79	23.83	1.64	3.6	行書	完形	1098 北宋		46-1
第114国77	元符通寶		24.48	24.54	1.83	3.8	篆書	完形	1098 北宋		46-1
第114国78	聖宋元寶		23.87	23.90	1.40	3.5	行書	完形	1101 北宋		46-1
第114国79	聖宋元寶		24.50	24.61	1.41	3.5	篆書	完形	1101 北宋		46-1
第114国80	政和通寶		24.04	24.03	1.38	3.0	篆書	完形	1111 北宋		46-1
第114国81	政和通寶		24.73	24.62	1.50	3.6	分楷	完形	1111 北宋		46-1
第114国82	政和通寶		24.87	24.65	1.65	3.8	分楷	完形	1111 北宋		46-1
第114国83	宣和通寶		24.63	24.64	1.45	3.1	分楷	完形	1119 北宋		46-1
第114国84	洪武通寶		24.22	24.10	1.49	3.6	真書	完形	1368 明	マ頭通・単点通	46-1
第115国85	洪武通寶		24.48	24.03	1.99	4.4	真書	1111完形	1368 明	マ頭通	46-1
第115国86	洪武通寶		23.74	23.72	2.10	5.3	真書	完形	1368 明	マ頭通・単点通	46-1
第115国87	洪武通寶		23.46	23.61	2.21	4.1	真書	完形	1368 明	マ頭通・重点通	46-1
第115国88	永樂通寶		24.87	24.64	1.70	4.0	真書	完形	1408 明		46-1
第115国89	永樂通寶		24.83	24.78	1.28	2.9	真書	完形	1408 明		46-1
第115国90	永樂通寶		25.05	24.84	1.75	3.7	真書	完形	1408 明		46-1
第115国91	永樂通寶		24.75	24.61	1.78	3.7	真書	完形	1408 明		46-1
第115国92	永樂通寶		24.77	24.80	1.76	4.5	真書	完形	1408 明		46-1
第115国93	永樂通寶		24.91	24.76	1.27	2.9	真書	完形	1408 明		46-1
第115国94	永樂通寶		25.16	25.11	1.97	6.0	真書	完形	1408 明		46-1
第115国95	□口元寶		23.89	23.56	1.66	3.6	篆書	完形			46-1
第115国96	□平元寶		24.94	24.92	1.43	3.7	真書	完形			46-1
第115国97	□□□寶		24.45	24.21	1.53	3.3	真書	完形		成平（北宋 998）か	46-1

第3号埋藏銭第3号緞銭

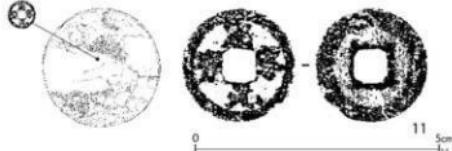


第116図 第3号埋藏銭第3号緞銭（1）

第3号埋蔵銭第3号縁銭



第3号埋蔵銭石蓋出土銭貨



第117図 第3号埋蔵銭第3号縁銭（2）・石蓋出土銭貨

第36表 第3号埋蔵銭出土第3号縁銭観察表

拂団番号	裁貨名	背面	裁径 (mm)		裁厚 (mm)	重量 (g)	書体	残存	初説年・国	備考	図版
			縦	横							
第116図1	開元通寶		23.31	23.20	1.47	2.8	真書	完形	621 唐		46-2
第116図2	天祐通寶		24.44	24.45	1.26	3.1	真書	完形	1017 北宋		46-2
第116図3	至和元寶		24.38	24.46	1.54	3.5	篆書	完形	1054 北宋		46-2
第116図4	嘉祐通寶		23.66	23.86	1.65	3.7	篆書	完形	1056 北宋		46-2
第116図5	元豐通寶		23.72	23.81	1.53	3.6	行書	完形	1078 北宋		46-2
第116図6	元祐通寶		24.13	24.11	1.35	3.5	行書	完形	1086 北宋		46-2
第116図7	元祐通寶		24.08	24.07	1.47	3.5	行書	完形	1086 北宋		46-2
第116図8	紹聖元宝		24.28	24.03	1.39	3.7	行書	完形	1094 北宋		46-2
第116図9	政和通寶		24.57	24.44	1.63	3.9	分摺	完形	1111 北宋		46-2
第117図10	永泰通寶		25.08	24.96	1.93	4.7	真書	完形	1408 明		46-2
第117図11	熙寧元寶		23.71	23.61	1.60	2.9	真書	完形	1068 北宋	出土位置埋蔵銭石蓋裏付着	46-3

第37表 埋蔵銭間連遺構計測表

遺構番号	位置	平面形	長径方向	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	重複遺構
第1号埋蔵銭	F-23	方形	N-1° -W	3.40	2.64	2.00	
第2号埋蔵銭	F+G-22	不整形	N-0°	2.48	1.33	0.68	
第3号埋蔵銭	E-23	不整形	N-7° -W	(3.20)	2.83	0.56	SK4・5・6
第4号埋蔵銭	F-22・23	不整形	N-88° -E	(5.00)	0.60	0.46	SK3・5
SK54	E・F-23	不整形	N-88° -E	(1.40)	1.50	0.75	SK3・4・6・7
SK57	E・F-23	不整形	N-88° -E	(1.00)	(0.50)	0.46	SK3・5・7

11枚、他は10枚未満であった。

縄紐は脆く、細かな観察は出来なかった。

第3号縁銭の枚数は、10枚であった。他の縁の内10枚分が第2号縁銭に付着していた。

銭貨の種類は9種類で、数の偏りはなかった。

縄紐は認められなかった。

縄紐は劣化が激しく、取り上げた中に残りが良いものはなかった。甕の内部に残された縄紐のうち、分析に耐えうるものを選定して分析を行った。紐はイネ科の草本と推定され、それぞれ時期は違っていたが、古いもので14世紀前半、次が14世紀末から15世紀中頃、新しいもので15世紀前半から15世紀中頃の暦年代を示した。甕に貼られていた漆の暦年代は15世紀前半から後半を示

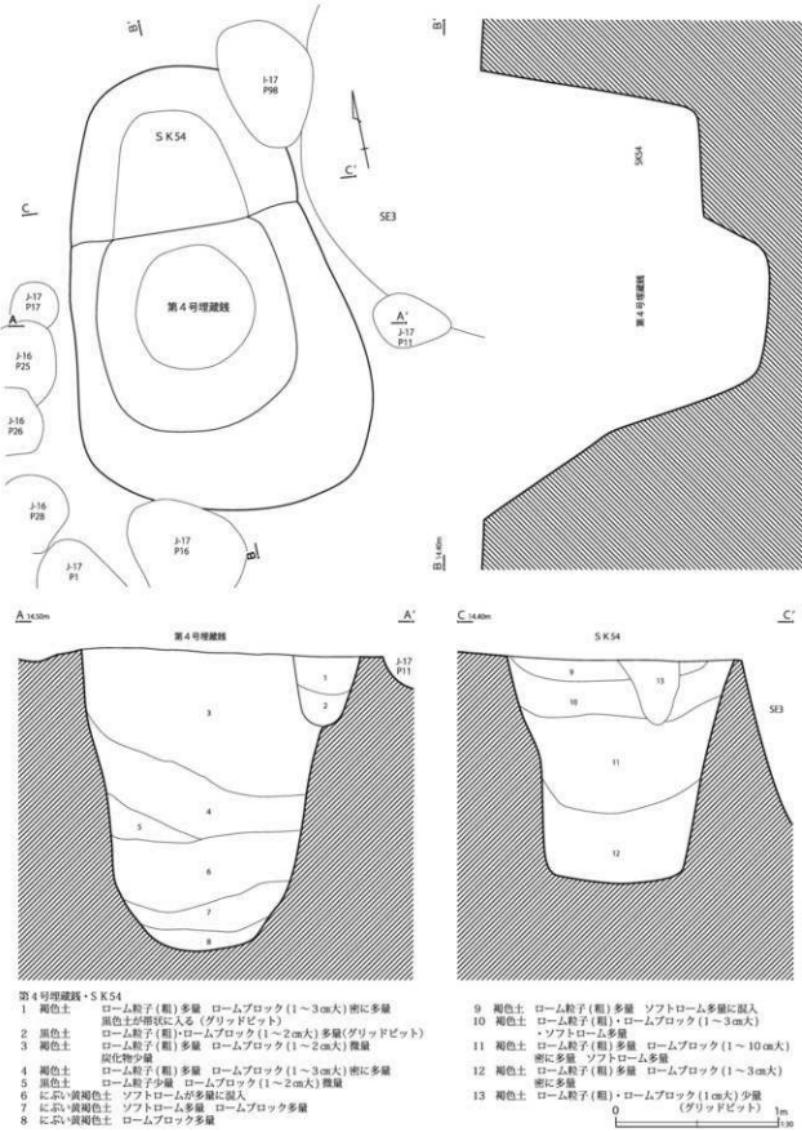
していた。

第4号埋蔵銭（第118、119図）

第4号埋蔵銭は、J-17 グリッドから検出された。すぐ東側に第3号井戸跡が隣接している。

第2号掘立柱建物跡の内側に位置している。当初は井戸跡と考えていたが、残された穴の形状と、それに連結する第54号土壙の形状が、第2号埋蔵銭と酷似していることがわかり、第4号埋蔵銭とすることとした。全体に短期間に埋め戻されたと考えられ、下層にはロームブロックが多量に含まれていた。

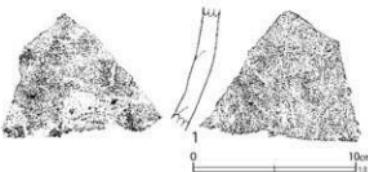
第119図1は出土した常滑産の甕の破片である。全体が酸化焼成ぎみである。外面の一部にヘラナデが認められる。他に遺物は出土していない。



第118図 第4号埋蔵室・第54号土壤

第54号土壤（第118図）

第54号土壤は、I、J-17グリッドから検出された。第4号埋蔵鉄に連結している。第4号埋蔵鉄の甕を見つけるために掘削された堅坑と考えられる。その形状は第57号土壤とよく似ている。土層にはピットが、土壤が埋め戻された後に掘り込まれている様子から、第4号埋蔵鉄は中世の段階で掘り出されたものと考えられる。



第119図 第4号埋蔵鉄出土遺物

第38表 第4号埋蔵鉄出土遺物観察表（第119図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	船土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	甕	—	[7.4]	—	DEG	5	SB6	常滑 全体酸化実焼成ぎみ 外面一部ヘナナデ		

（5）地下式坑

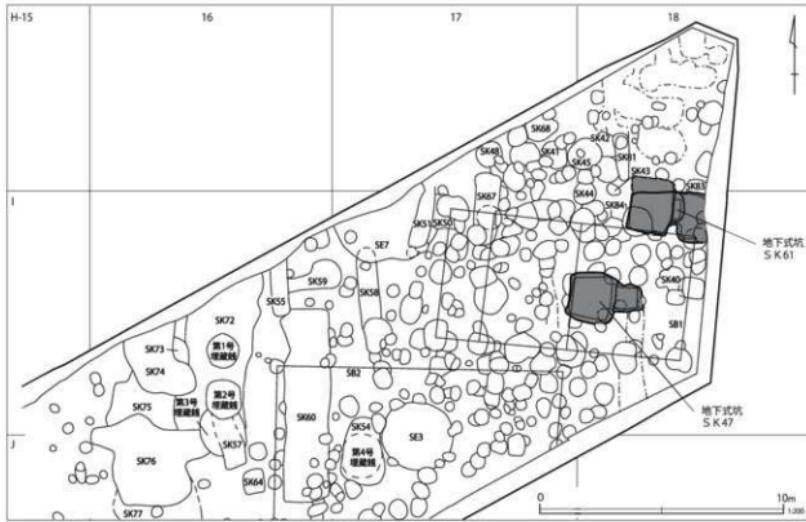
地下式坑は、3区の東端から2基が、主軸方向も似通っており、南北に並ぶように検出された（第120図）。

遺構は、掘立柱建物跡の柱穴や、多くのグリッドピットによって壊されており、掘立柱建物が作られる前に使用されていたと考えられる。

第47号土壤（第121、122図）

第47号土壤は、I-17、18グリッドから検出された。北側に、地下式坑である第61号土壤が位置している。グリッドピットのほとんどは、遺構の廃絶後に掘り込まれていた。

遺構は、方形の入口部と台形状の主体部で構成される。入口部と主体部の形状から、主軸方向は、



第120図 地下式坑位置図

N-85° Wである。

規模は、全長3.00mである。入口部の主軸方向1.08m、直交方向1.14m、深さ0.54mである。主体部の主軸方向1.92m、直交方向2.10m、深さ1.92mである。入口部の壁面は段差が付けられ、主体部までの床面は、やや斜めとなっている。主体部上層には、天井の崩落土が認められた。

出土遺物は少なく、かわらけ3点、陶器（常滑焼甕）2点である。第122図1～4は、図示した出土遺物である。

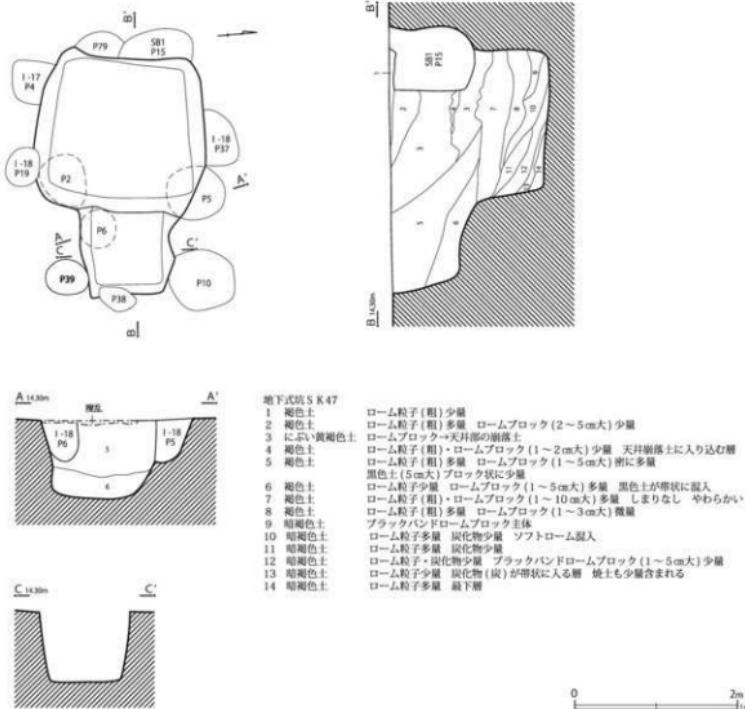
1はかわらけの口縁部である。小破片から反転復元したため、口径は若干前後する可能性がある。

体部は薄手で直線的に開いて立ち上がる。色調は白色味が強い。胎土はやや砂っぽいが、硬質である。角閃石は含まれない。2はかわらけの底部である。色調は白色味が強い。胎土は砂っぽく、角閃石が多量に含まれる。

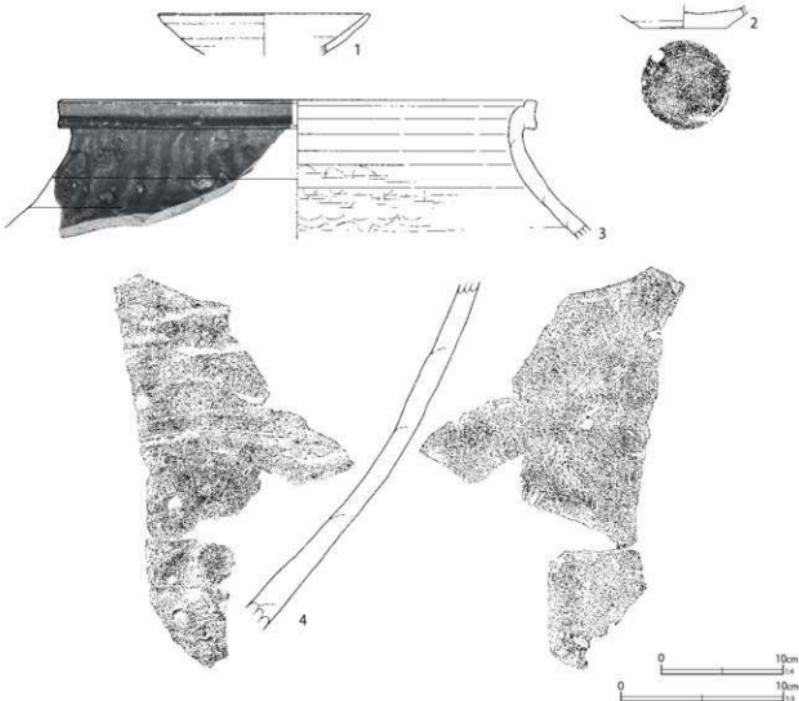
3、4は常滑焼の甕である。3は口縁部から頸部の破片で、外面全体に自然釉が掛かる。常滑編年6 b型式、13世紀末頃の所産である。4は胴部下位の破片である。

第61号土壌 (第123～125図)

第61号土壌は、H、I-18グリッドから検出された。南側に、地下式坑である第47号土壌が位置



第121図 地下式坑第47号土壌



第122図 地下式坑第47号土壤出土遺物

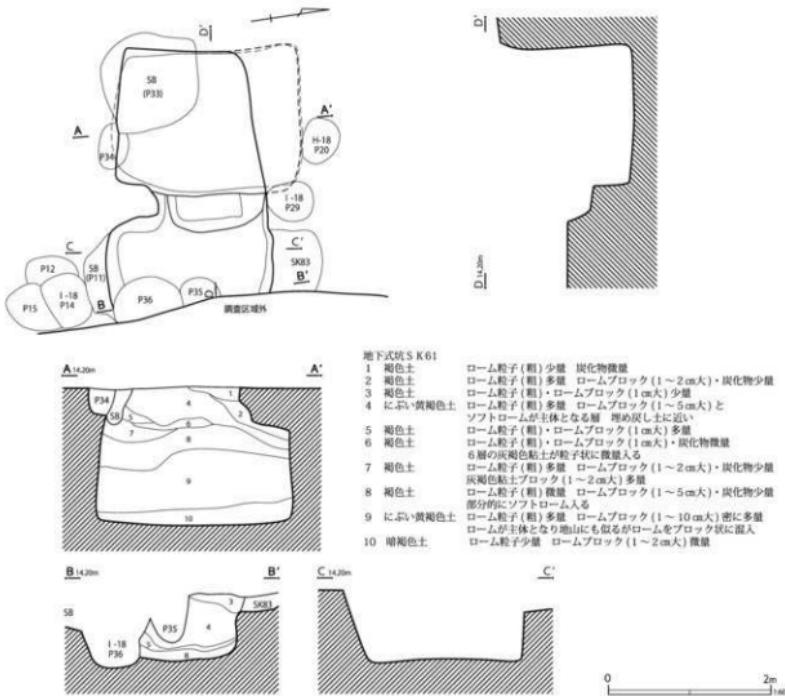
第39表 地下式坑第47号土壤出土遺物観察表（第122図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考		図版
											小破片からの反転実測 口径若干前後する可能性あり	No1 底部糸切痕（右） 内面煤付着 脂土砂質	
1	かわらけ	小皿	—	[1.4]	5.5	CHI	20	普通	灰白	SK47	No2 常滑 外面降灰多く自然縫かかる・押切文の一部 6 b型式	31-4	
2	かわらけ	小皿	—	[11.4]	—	DIK	10	良好	灰	SK47	常滑 外面ヘラナデ	31-5	
3	陶器	甕	(38.4)	[11.4]	—	DEG	5	褐色	褐灰	SK63		31-6	
4	陶器	甕	—	[21.3]	—	DEG	5	褐色	褐灰	SK63		31-6	

置している。掘立柱建物跡の柱穴やグリッドピットは、遺構の廃絶後に掘り込まれていた。

遺構は、方形の入口部と主体部で構成される。入口部の東壁は、調査区外のため検出することができなかった。入口部と主体部の形状から、主軸方向は、N-83°-Wである。

残存する規模は、全長(3.06)mで、入口部の主軸方向(1.26)m、直交方向2.04m、深さ上段0.84m、下段1.14mである。主体部の主軸方向1.80m、直交方向2.22m、深さ1.74mである。入口部と主体部の段差は階段状となっている。主体部の一部には天井部が残存していた。



第123図 地下式坑第61号土壤

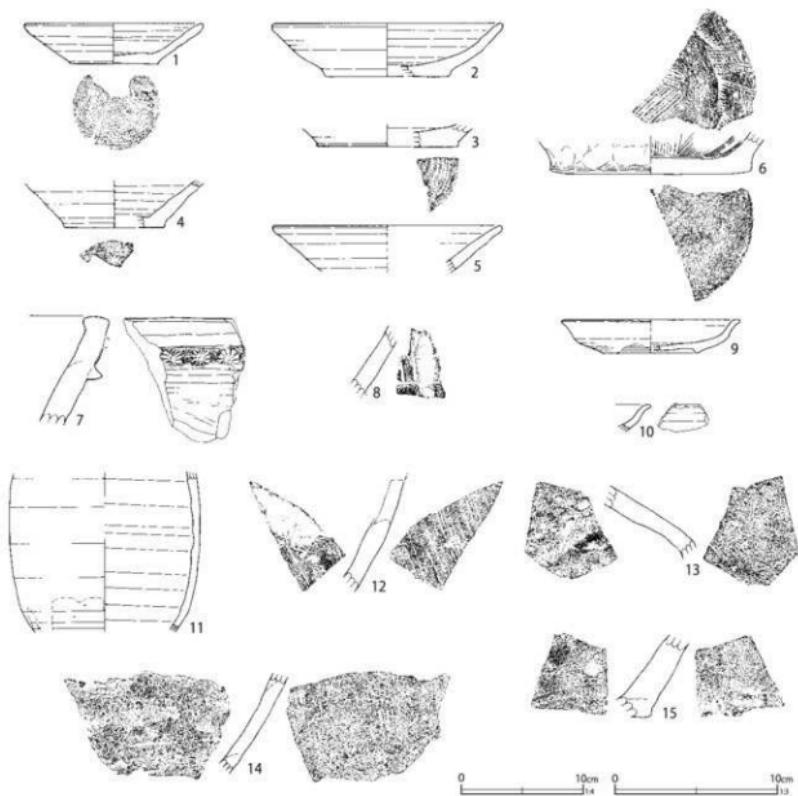
出土遺物は、かわらけ11点、土師質土器擂鉢1点、瓦質土器火鉢2点、陶器9点（うち常滑焼6）、錢貨37枚である。第124図1～15、第125図16～37は図示した出土遺物である。

1～5はかわらけである。1は底部に左回転の糸切痕を残す。内底面には弱く回転ナデが施され、中心が僅かに窪む。砂粒子が多く含まれ胎土は粗い。葛飾区葛西城、松戸市小金城等、下總地域のかわらけと類似点多いものである。2は復元口径13.8cmとやや大形のかわらけで、胎土は極めて軟質で粉っぽい印象である。3は小破片から転回復元して図示したもので、胎土は粉っぽく、雲母細粒が含まれる。4は白色味を帯びた硬質のか

わらけで、内面のロクロナデ痕が強く残る。僅かに微細な金運母が含まれるが、角閃石は含まれない。5は小破片から反転復元した口縁部破片で、口径は若干前後する可能性がある。胎土は粉っぽく、雲母細粒のほか、微量の角閃石が含まれる。

6は土師質土器の擂鉢で、外面には刷毛目状のヘラナデ痕が残る。第43号土壤から同一個体と考えられる破片が出土している（第144図2）。

7、8は瓦質土器の火鉢である。7は口縁部に沿った二条の突帯間に菊花文スタンプが施される。口唇上端部には細かいミガキ状のヘラナデが認められる。8は雲母を含む常陸系の火鉢で、第3号溝跡（第135図23）やグリッド（第146図25）か



第124図 地下式坑第61号土壙出土遺物（1）

ら同一個体と考えられる火鉢が出土している。

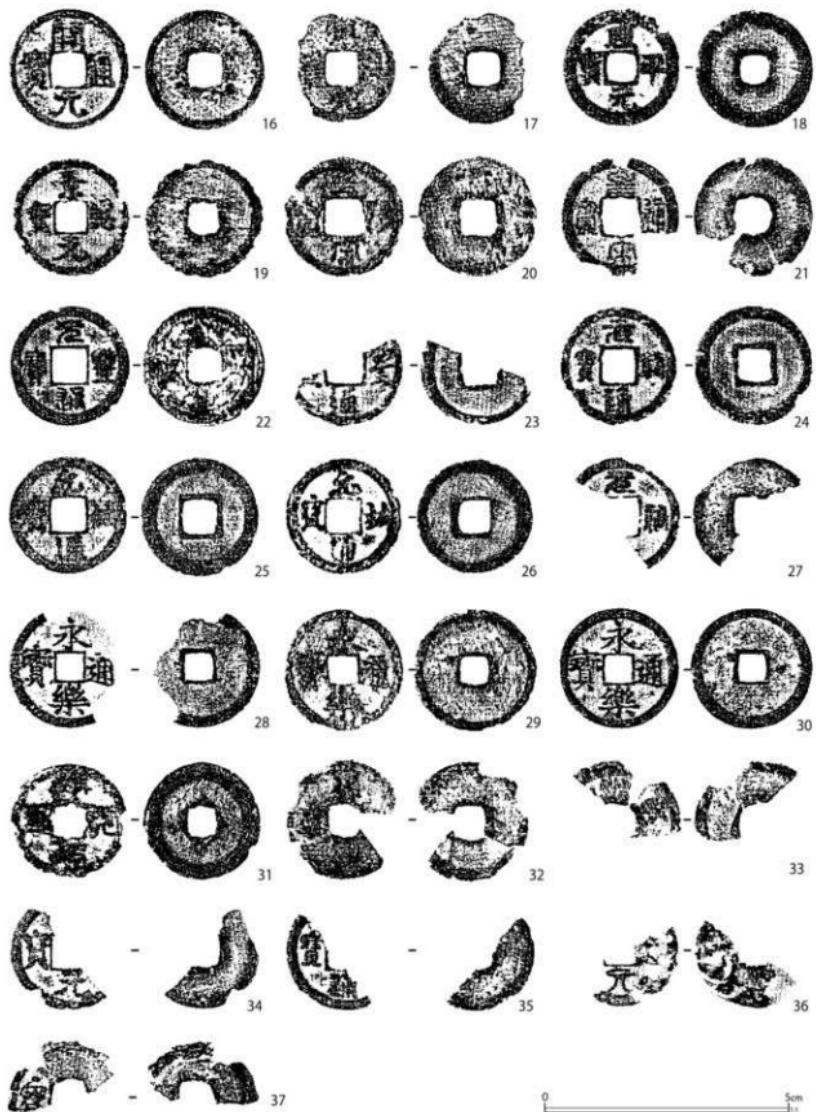
9は瀬戸美濃系陶器の稜皿で、鉄軸が掛けられるが、内底面はほとんど軸が掛けられず、鉄化粧のみ施される。器壁は全体的に薄い。大窯第4段階の所産である。10は瀬戸美濃系陶器の端反皿で、薄手の器壁に黄色味を帯びた灰釉が施される。大窯第1段階の所産である。

11は近世の瀬戸美濃系陶器である。所謂尾呂徳利で、18世紀前半頃の所産である。天井の崩

落時期を示すものとも考えられる。

12～15は常滑焼で、13は甕の肩部、12、14は甕の胴部、15は片口鉢の体部下端の破片である。

16～37は出土した銭貨である。判明した銭種は7種類で、最も古い銭貨は初鋤年960年の開元通寶で、新しい銭貨は初鋤年1408年の永楽通寶であった。銭種が不明であるが、31は星形孔に作り出されている。最も多かったのは、元祐通寶で4枚出土した。



第125図 地下式坑第61号土壤出土遺物（2）

第40表 地下式坑第61号土壤出土遺物観察表（第124図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	かわらけ	小皿	(10.8)	2.5	5.3	CEGH	45	普通	褐	SK61	底部糸切痕（左） 胎土砂質	31-7
2	かわらけ	小皿	(13.8)	3.2	(7.3)	H	25	普通	にぶい黄橙	SK61	外面は体部下半～底部摩耗激しい 体部	31-8
3	かわらけ	小皿	—	[1.4]	(8.6)	AH	5	普通	にぶい黄橙	SK61	底部糸切痕	
4	かわらけ	小皿	—	[2.8]	(6.1)	AEGH	10	良好	浅黄橙	SK61	底部糸切痕	31-9
5	かわらけ	小皿	(13.9)	[2.9]	—	ACEHH	5	普通	橙	SK61	胎土粉質 小破片からの反転復元	
6	土師質土器	擂鉢	—	[2.7]	(12.3)	AEGI	10	普通	にぶい黄橙	SK61	底部ヘラナデ調整 外面ハケメ状ヘラナデ 内面擡目	31-10
7	瓦質土器	火鉢	—	[6.6]	—	CEHH	5	普通	灰白	SK61	外表面タシブ文 壊す	31-11
8	瓦質土器	火鉢	—	[4.6]	—	ADE	5	普通	灰黄	SK61	常滑系 外面施文 内外面鐵寸	31-12
9	陶器	稜皿	(10.8)	2.1	(5.8)	DK	40	普通	にぶい黄橙	SK61	瀬戸美濃系 内外面鉄化粧・鉄釉 大窓 第4段階	31-13
10	陶器	端反皿	—	[1.7]	—	I	5	普通	灰白	SK61	瀬戸美濃系 内外面灰釉 大窓第1段階	31-14
11	陶器	便利	—	[9.8]	—	HII	15	良好	黄灰	SK61	瀬戸美濃系 外面灰釉	31-15
12	陶器	甕	—	[6.6]	—	IK	5	普通	黄黄	SK61	常滑 外面ヘラナデ	
13	陶器	甕	—	[4.5]	—	DE	5	灰	SK61	常滑 外面降灰		
14	陶器	甕	—	[6.2]	—	DEG	5	褐灰	SK61	常滑 外面ヘラナデ		
15	陶器	片口鉢	—	[5.1]	—	DEK	5	にぶい黄	SK61	常滑		

第41表 地下式坑第61号土壤出土錢貨観察表（第125図）

拂因 番号	錢貨名	背面	銘文 (mm)		重量 (g)	書体	殘存	初跡年・国	備考	図版
			羅	漢						
16	開元通寶		25.04	25.07	1.49	1.7	真書	完形	621 唐	47-5
17	開元通寶		23.09	[20.71]	1.62	2.0	真書	3/4 残	621 唐	47-5
18	咸平元寶		24.83	24.51	1.51	3.0	真書	完形	998 北宋	47-5
19	景德元寶		24.68	24.46	1.83	1.9	真書	[注] 完形	1004 北宋	47-5
20	皇宋通寶		25.13	25.10	1.52	1.8	篆書	完形	1038 北宋	47-5
21	皇宋通寶		25.41	25.19	1.58	1.5	篆書	4/5 残	1038 北宋	47-5
22	元豐通寶		24.76	24.84	1.39	2.2	篆書	完形	1078 北宋	47-5
23	元豐通寶		24.67	[11.53]	1.30	1.2	行書	1/2 残	1078 北宋	47-5
24	祐祐通寶		24.76	24.78	1.82	3.4	篆書	完形	1086 北宋	47-5
25	祐祐通寶		24.74	24.47	1.55	2.9	行書	完形	1086 北宋	47-5
26	祐祐通寶		24.07	24.22	1.41	2.2	行書	完形	1086 北宋	47-5
27	祐祐通寶		24.96	[8.23]	1.29	0.9	篆書	1/2 残	1086 北宋	47-5
28	永樂通寶		25.34	[21.67]	1.42	1.7	真書	3/4 残	1408 明	47-5
29	永樂通寶		25.40	25.33	1.76	2.6	真書	完形	1408 明	47-5
30	永樂通寶		25.00	25.18	1.57	2.2	真書	完形	1408 明	47-5
31	□□□□		24.34	24.33	1.69	2.8			星形孔	47-5
32	□□□□		25.27	24.96	1.90	1.7				47-5
33	□□□通		[23.83]	[11.88]	1.20	0.7	真書	1/3 残		47-5
34	□□元寶		23.97	[9.98]	1.37	1.0	真書	1/2 残		47-5
35	□□通寶		23.61	[8.80]	1.33	0.9	篆書	1/3 残		47-5
36	□□元□		21.75	[9.16]	1.43	0.7	真書	1/3 残		47-5
37	□□□寶		23.82	[13.53]	1.43	0.7	行書	1/3 残		47-5

(6) 堀跡

堀跡は、3区の西側から第1号溝跡と第3号溝跡の2条が検出された。2条の堀の間や、第3号溝跡の東側に土壠が作られていたと考えられたが、その痕跡を確認することはできなかった。

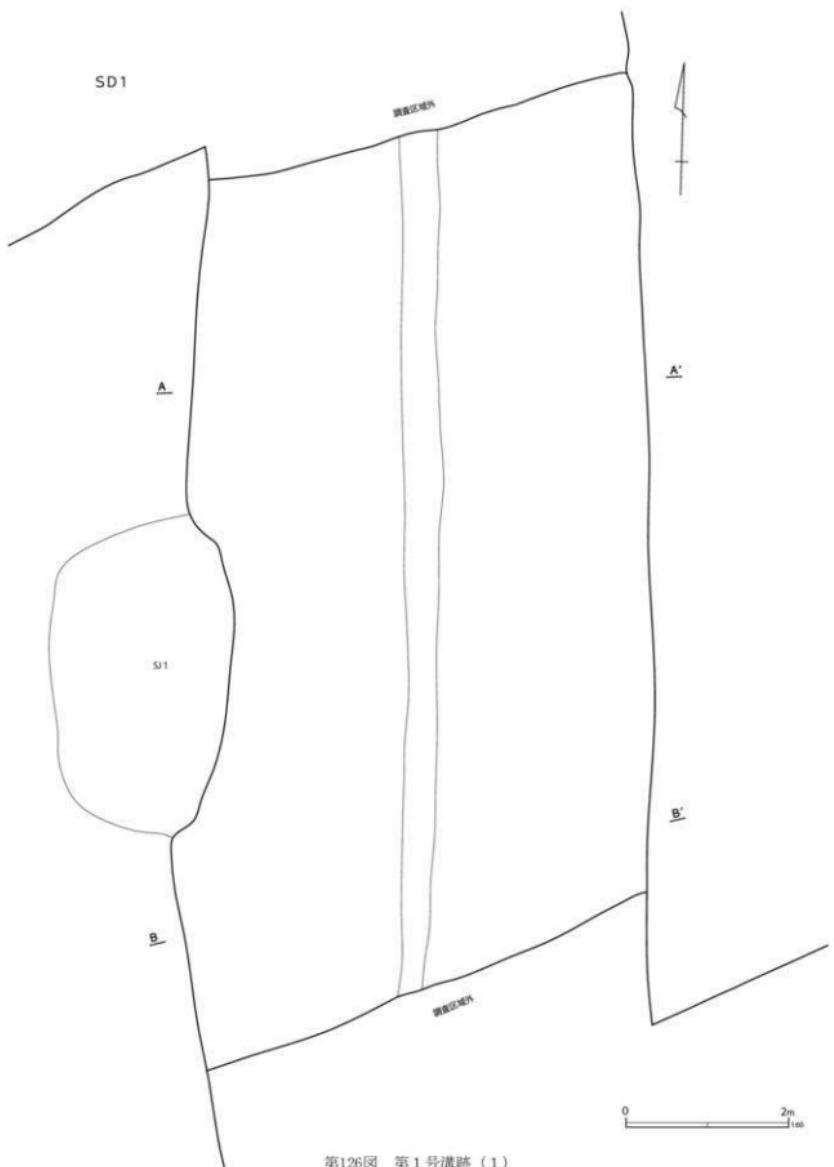
第1号溝跡（第126～129図）

第1号溝跡は、J～L-13、14グリッドから検出された。断面形状は薬研場で、上辺の幅5.76m、下辺の幅0.54m、深さ2.16mである。方向は、

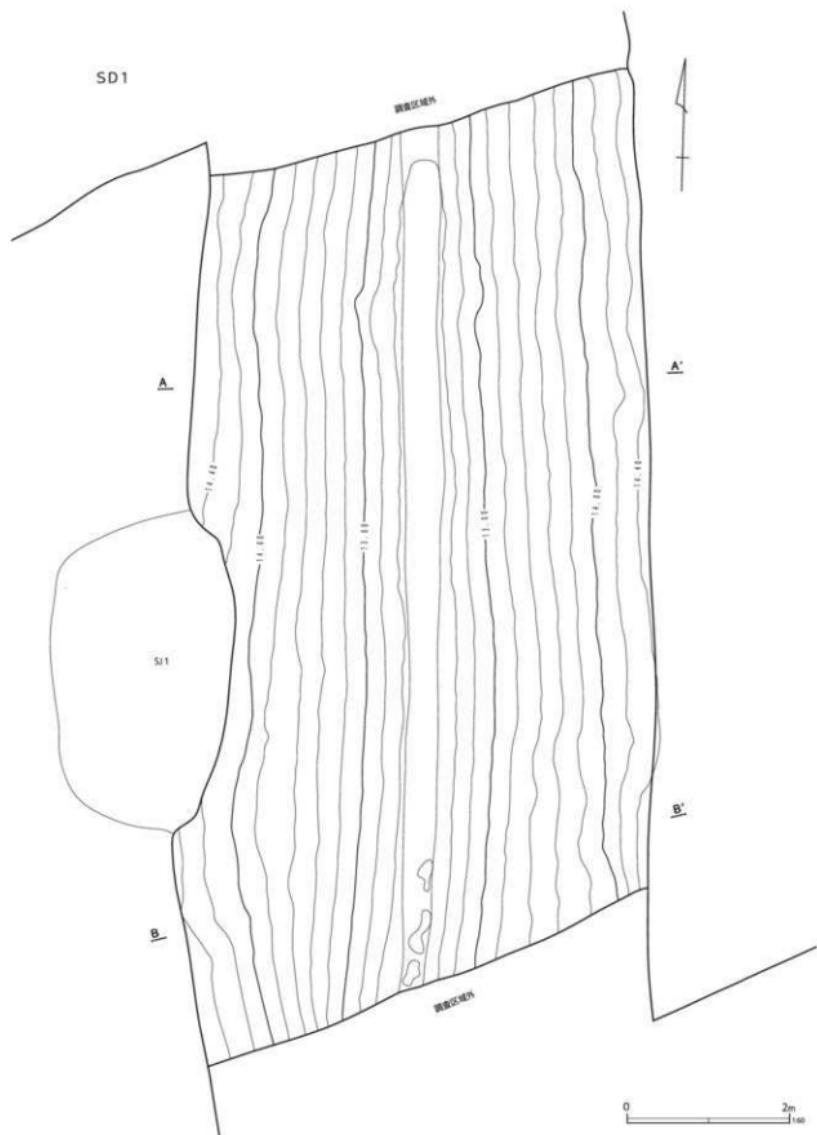
N-1° -Wである。堀は、埋まる過程で規模を小さくしながらも使用されていたと考えられる。

出土遺物は、かわらけ7点（底部5、口縁部2）、瓦質土器焼成4点、磁器5点（中国産1、肥前系4）、陶器8点（常滑6、肥前系2）、土師器2点、石製品1点である。第129図1～14は図示した出土遺物である。

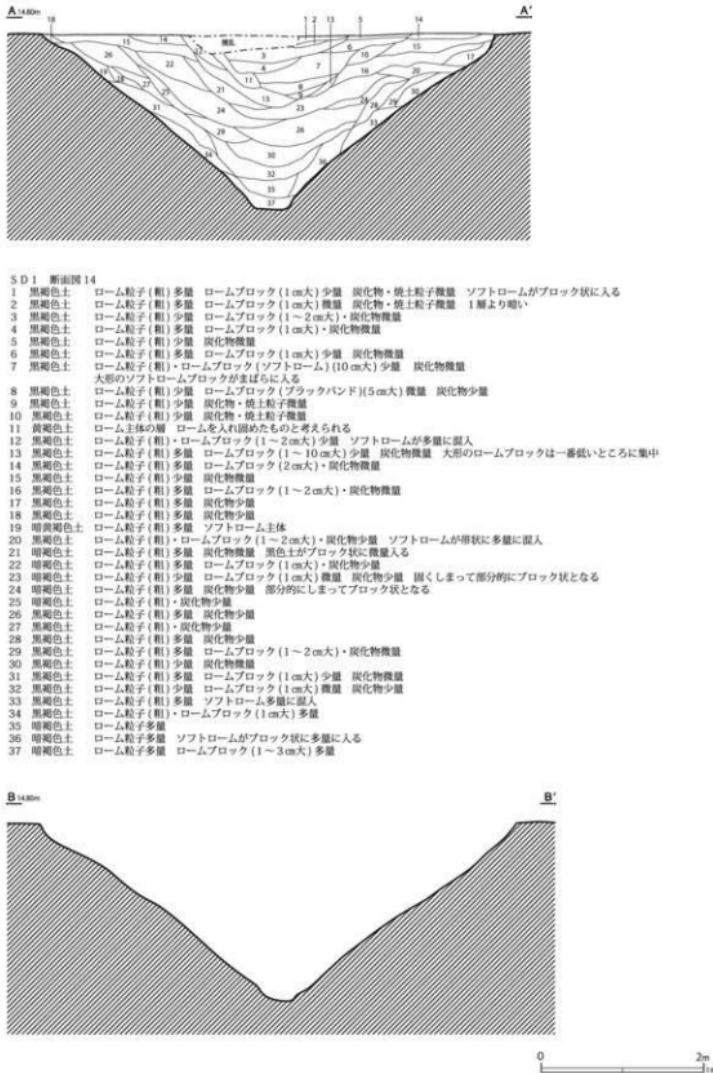
1、9はかわらけである。1は底部破片で、胎土は粉っぽく摩耗が激しい。9は口縁部破片で、



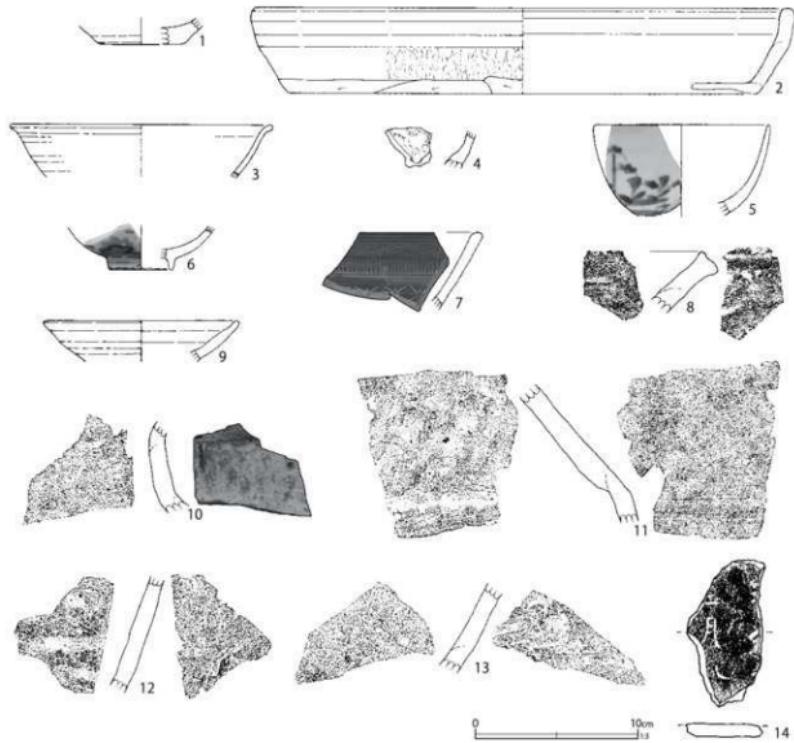
第126図 第1号溝跡（1）



第127図 第1号溝跡（2）



第128図 第1号溝跡（3）



第129図 第1号溝跡出土遺物

第42表 第1号溝跡出土遺物観察表 (第129図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	かわらけ	小皿	—	[1.6]	5.3	CGB	10	普通	褐	SD1	胎土粉質 全体磨滅	32-1
2	瓦質土器	培塿	(32.6)	5.3	(28.6)	CEF	10	普通	灰白	SD1	内外面焼付 外面焼多量に付着	
3	磁器 (白磁)	碗	(15.8)	[3.3]	—	I	5	良好	灰	SD1	中国産 内外面施釉	32-2
4	土製品	埴輪	—	[2.3]	—	—	5	不明	灰黄	SD1	内面焼付着 赤褐色に変色・発泡 外面溶解 かわらけ転用	32-3
5	磁器	碗	(10.7)	[5.5]	—	—	15	普通	白	SD1	肥前系 内外面施釉 外面染付 18 c	32-4
6	磁器	碗	—	[2.7]	(3.8)	—	20	普通	灰白	SD1	肥前系 内外面施釉 外面染付 18 c	32-5
7	陶器	鉢	—	[4.7]	—	HII	5	良好	褐灰	SD1	肥前系 内外面施釉 内面三鳥手文様 17 c 後～18 c 前	32-6
8	陶器	片口鉢	—	[3.7]	—	EG	5	普通	浅黄褐	SD1	常滑 8～9型式	32-7
9	かわらけ	小皿	(11.8)	[2.5]	—	CEI	25	普通	浅黄褐	SD1	SD3接合 胎土砂質	32-8
10	陶器	甕	—	[5.4]	—	DEIK	5	—	灰白	SD1	常滑 外面自然釉	
11	陶器	甕	—	[8.4]	—	DGIK	5	—	褐	SD1	常滑 外面ヘラナデ 全体酸化灰化成ぎみ	
12	陶器	甕	—	[7.2]	—	DE	5	—	灰	SD1	常滑 外面ヘラナデ	
13	陶器	甕	—	[5.4]	—	DEG	5	—	褐灰	SD1	常滑 外面ヘラナデ	
14	石製品	板碑	長さ [8.9]cm 幅 [4.7]cm 厚さ [0.9]cm 重さ 55.4 g 緑泥片岩	—	—	—	—	—	—	SD1	〔 〕二月八口 裏面剥落 一部残存 黒色化	32-10

白色味が強い色調を呈する。胎土は粗く角閃石が多量に含まれる。

2は瓦質土器の焙烙である。口縁部上端は丸みを帯びる。体部下端にはケズリが施される。形態と調整から18世紀前半頃の所産と推定される。

3是中国産の白磁碗である。体部は弱い曲線を描きながら立ち上がる。器壁は薄い。釉は少し緑色味を帯びたオーリーブ灰色で強い光沢がある。

4は埴堀の小破片で、かわらけを転用している可能性が高い。内面に銅の付着が認められる。

5、6は肥前系磁器の碗である。6の高台はやや薄手に作られる。いずれも所謂「波佐見系」の碗で、18世紀前半頃の所産と思われる。7は肥前系陶器の口縁部である。所謂「三島手鉢」である。

8は常滑焼の片口鉢で口縁部の破片である。酸化炎焼成に近く、胎土は浅黄褐色だが、表裏面はより赤味が強く、橙色を呈する。常滑焼片口鉢II類、8～9型式に相当すると考えられる。

10～13は常滑焼甕の破片である。

14は緑泥片岩製の武藏型板碑の破片である。裏面全体が剥離し、遺存するのは表面の一部のみで、銘文の一部が認められる。

出土遺物には、中世陶磁器、土器に加え、18世紀前半までの陶磁器が含まれ、本跡の最終埋没は18世紀前～中葉頃と推測される。

第2・3号溝跡（第130～136図）

第2・3号溝跡は、J、K-14、15グリッドから検出された。堀跡である第3号溝跡は、第1号溝跡とほぼ同規模であった。第2号溝跡は、第3号溝跡を壊して掘削された近世の溝跡であるが、第3号溝跡に沿って掘削されており、ここで報告することとした。

第2号溝跡の断面形状は薬研堀で、上辺の幅2.70m、下辺の幅0.54m（上）、0.30m（下）深さ1.20mである。方向は、N-6°～Wである。第3号溝跡埋没後に、新たに掘削されている。

第3号溝跡の断面形状は薬研堀で、西側の壁面

は第2号溝跡によって壊されている。上辺の幅[4.20]m、下辺の幅0.66m、深さ2.22mである。方向は、N-3°～Wである。埋まる過程で規模を小さくしながら使用されていたと考えられる。

第2号溝跡の出土遺物は、かわらけ6点（口縁部4、底部2）、瓦質土器焙烙1点、磁器1点、陶器7点（うち常滑焼5）、土製品（輪羽口）2点である。このうち磁器1点は瀬戸美濃系磁器碗の口縁部破片で、近代の混在である。第133図1～9は図示した出土遺物である。

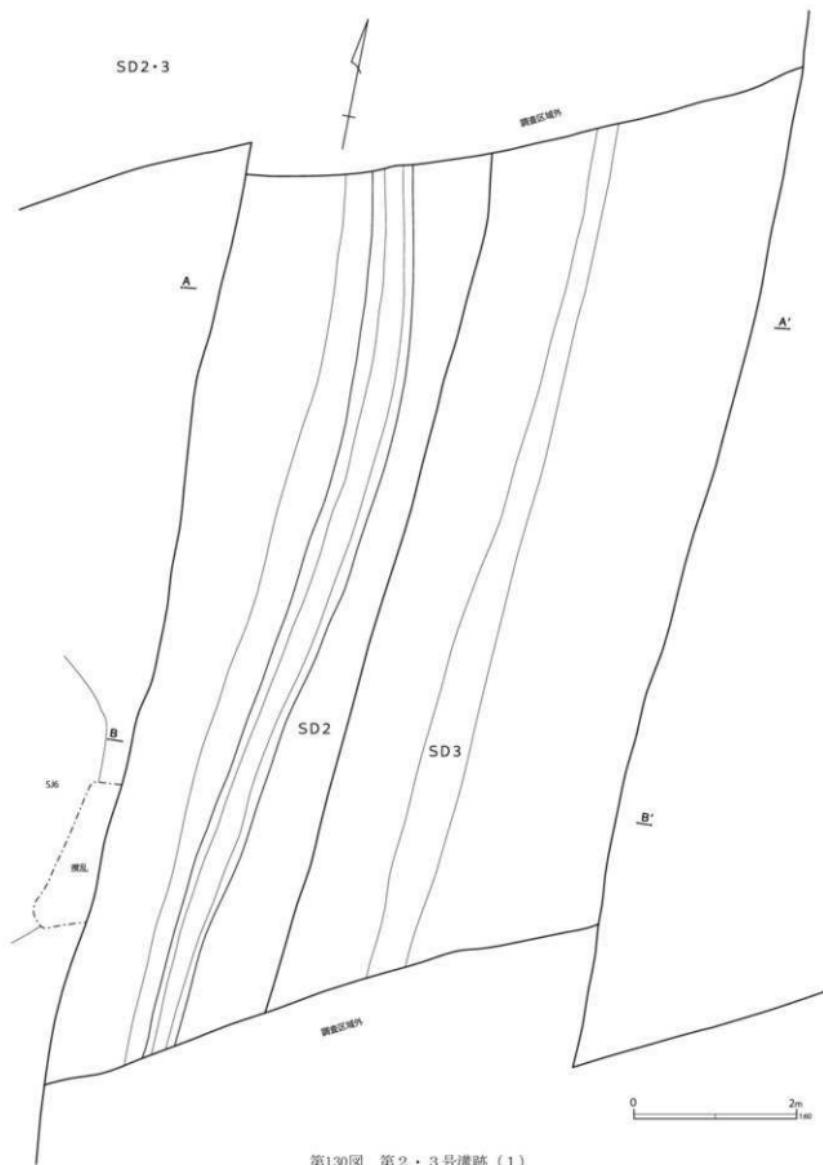
1はかわらけの底部破片である。底部は厚手で、内底面は同心円状のナデで調整される。胎土は粉っぽいが硬質である。2は瓦質土器焙烙の口縁部で、外面体部下位は、指頭圧痕をヨコナデで消している。16世紀代の所産と推定される。

3は瀬戸美濃系陶器の擂鉢で、内外面とも錆釉が施される。大窯第2段階後半の製品に類似し、16世紀中葉頃に位置づけられる。4は丹波系陶器の擂鉢である。単口縁だが、内面の口縁部下に弱い沈線状の凹線が巡る。17世紀前葉に位置づけられる。5～9は常滑焼の甕である。8は破断面を砥具に二次利用している。

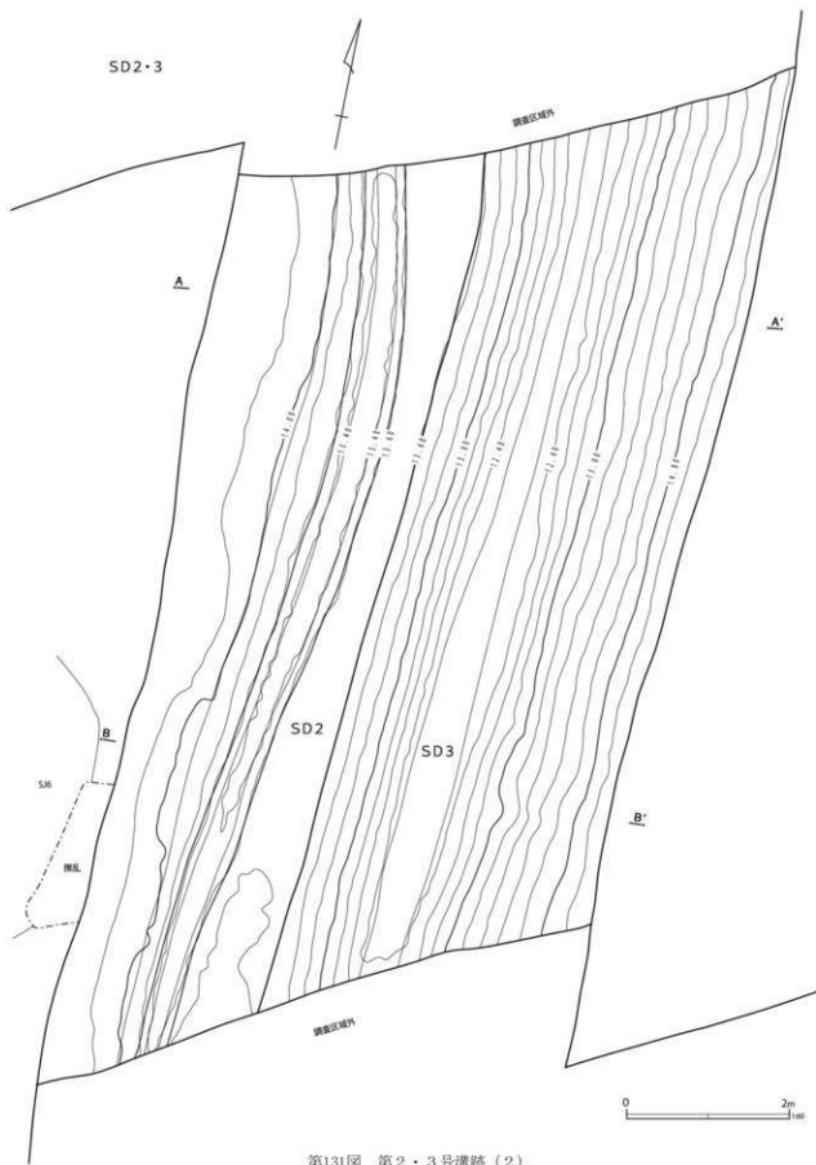
第2・3号溝跡の重複部分から一括で取り上げられた遺物は、かわらけ1点、瓦質土器焙烙1点、常陸系の土師質土器焙烙2点、肥前系磁器2点（碗1、杯1）、陶器4点（うち常滑焼1）、石製品2点である。第133図10～15は図示した出土遺物である。

10は土師質土器焙烙で、胎土に金運母を多量に含む、常陸系の焙烙である。11は瓦質土器焙烙の体部破片で、外面全体がヨコナデ調整されるが、下端に僅かにシワ状痕が残る。12は陶器の折縁深皿である。古瀬戸中期様式（中IV期）の所産である。13は瀬戸美濃系陶器の香炉とみられる。外面に白く濁った灰釉が施される。

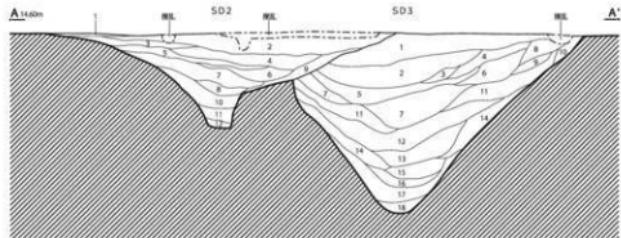
14、15は石製品で、14は角閃石安山岩製の磨石である。15は擦痕のある緑泥片岩である。



第130図 第2・3号溝跡(1)

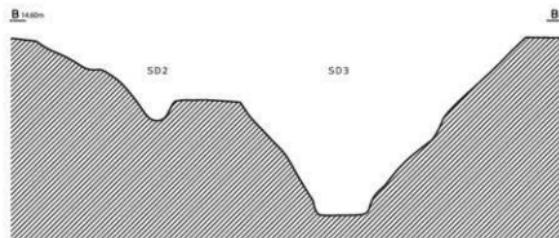


第131図 第2・3号溝跡（2）



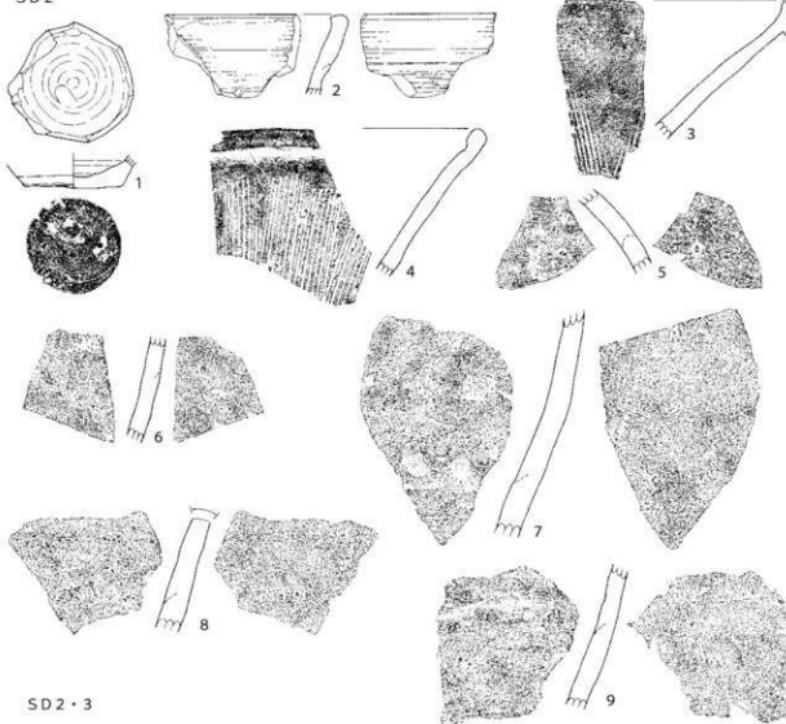
SD 2	
1	黒色土 ローム粒子(粗)少量
2	褐色土 ローム粒子(粗)少量
3	褐色土 ローム粒子(粗)多量
4	褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大)多量 黒色土ブロック状(1~2cm大)少量含む
5	褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大)少量 黒色土ブロック状(1~2cm大)少量含む
6	黒褐色土 ローム粒子(粗)微量
7	褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大)多量 10cmの大型のものも微量含む 黒色土粒子状に少量含む
8	褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロックと黒色土が帶状(2cm幅)の交互に入れる
9	褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1cm大)少量 ソフトローム多量に混入
10	ぶどう葉褐色土 ロームブロック主体の層 埋め戻し土か
11	褐色土 ローム粒子(粗)少量 自然に堆積
12	褐色土 ローム粒子(粗)多量 自然に堆積

SD 3	
1	褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1cm大)微量 黒色土ブロック状に少量 2層より色調暗い
2	褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大)少量 黒色土ブロック状に微量
3	褐色土 ローム粒子(粗)少量
4	褐色土 ローム粒子(粗)少量
5	褐色土 ローム粒子(粗)少量 ロームブロック(1cm大)微量
6	褐色土 ローム粒子(粗)少量
7	褐色土 ローム粒子(粗)少量 ロームブロック(1~2cm大)微量 働が微量入る
8	褐色土 ローム粒子(粗)多量 ソフトローム混入
9	褐色土 ローム粒子(粗)少量 8層より色調暗い
10	褐色土 ソフトローム主体
11	褐色土 ローム粒子(粗)多量
12	褐色土 ローム粒子(粗)少量
13	褐色土 ローム粒子(粗)少量 ロームブロック(1~2cm大)微量
14	褐色土 ローム粒子(粗)少量 ソフトローム混入 1~12層より明るい
15	褐色土 ローム粒子(粗)少量 ロームブロックが微量混入 13層と同じ
16	褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1~2cm大)微量 14層と同じ
17	褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1~2cm大)多量 ソフトローム多量に混入 14層と同じ
18	黒色土 ローム粒子(粗)多量

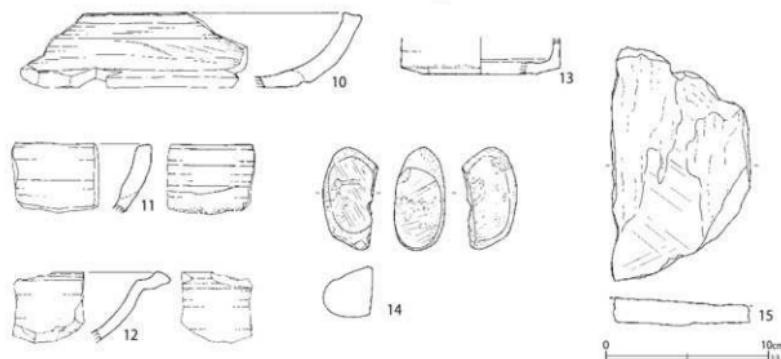


第132図 第2・3号溝跡(3)

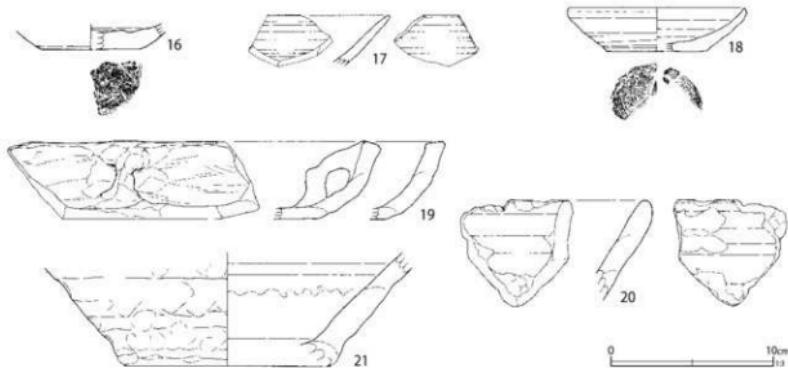
SD 2



SD 2 + 3



第133図 第2・3号溝跡出土遺物



第134図 第3号溝跡出土遺物（1）

第2・3号溝跡一括の取り上げ遺物には、肥前系磁器の梅樹文碗や所謂「波佐見系」の坏等、18世紀までの遺物が含まれている。これらは土層断面から後出と確認される第2号溝跡の上層に伴う可能性が高い。従って、第2号溝跡の最終埋没時期は18世紀前～中葉と推定される。

第3号溝跡の出土遺物は、かわらけ4点（底部1、口縁部2、口縁～底部1）、常陸系の土師質土器培烙1点、瓦質土器5点（鉢3、火鉢2）、磁器2点（中国産1、肥前系1）、陶器15点（うち常滑焼11点）、石製品3点、金属製品2点である。第134図16～21、第135図22～34、第136図35～41は図示した出土遺物である。

16～18はかわらけである。16は底部破片で、胎土は粗く、角閃石を多く含む。内底面に一方向からのナデが施される。17は口縁部で体部から直線的に立ち上がる。胎土は粉っぽく、径2mm程の赤色粒子が多く含まれる。18は体部が緩く内湾しながら立ち上がるもので、内底面中心が窪む。胎土は粉っぽく径1mm程の赤色粒子を多く含む。

20、21は瓦質土器の鉢である。20の胎土は砂っぽく粗悪で、多量の石英、長石と径2～4mm程の片岩が含まれる。21はより硬質であり、石英や

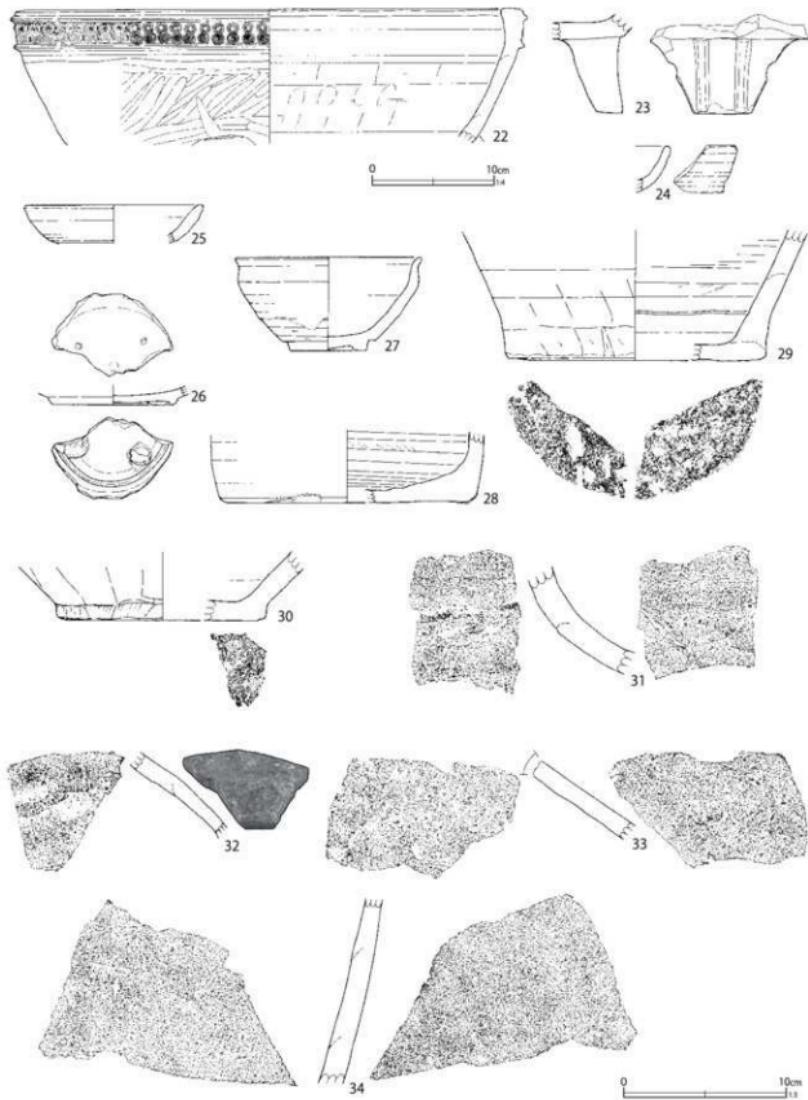
片岩が含まれる。内底面は使用による剥離が著しい。

22、23は瓦質土器の火鉢である。焼成は硬質、胎土に少量の白色針状物質が含まれる。外面上位の突帯区画内にスタンプ文が施され、下位はヘラナデ調整される。外面から突出する脚の痕跡が僅かに残る。23は脚の破片で、外面に縱の凹線が二条入る。胎土に雲母を含む常陸系のものである。24は船載磁器の青磁と考えられるが、全体の器形は不詳である。内外面とも渦った青磁釉が施され、外面の口縁部下に弱い凹線が巡る。

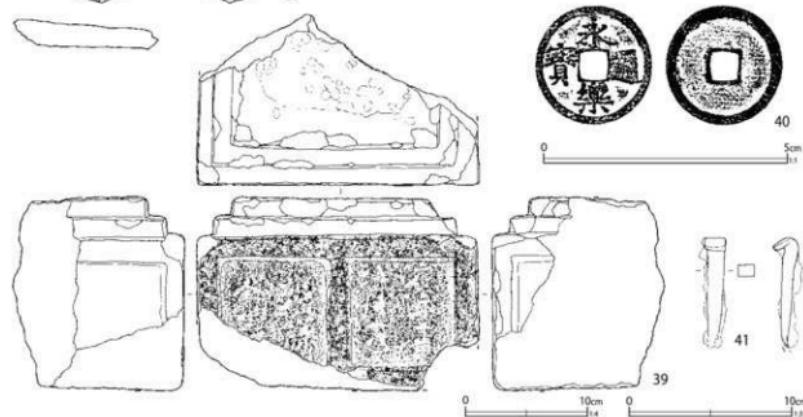
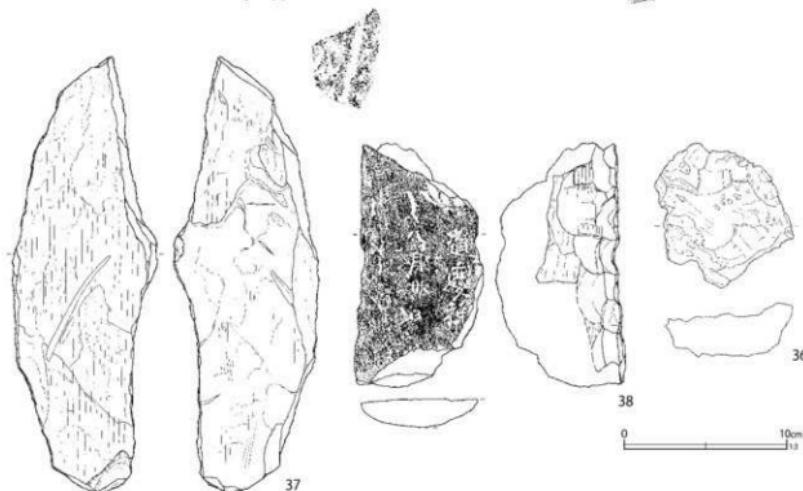
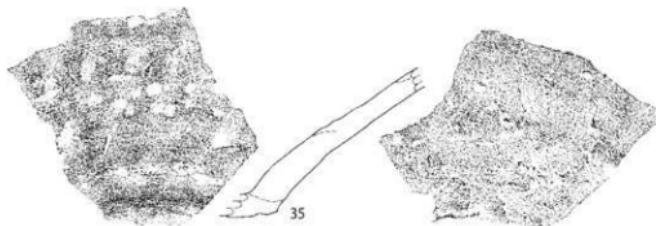
25、26は長石釉が施される瀬戸美濃系陶器の皿で、所謂「志野丸皿」である。27は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。ケズリ出し高台で、高台端部幅は広い。鉄釉は黒褐色で茶色の斑が入る。大窯3～4段階の所産で、16世紀後葉に帰属する。

28は瀬戸美濃系陶器の徳利で、外面には光沢の強い鉄釉が掛けられる。底部には窓道具痕が残り、回転ケズリ痕、釉薬の拭き取りが観察される。29～35は常滑焼で、このうち30は片口鉢、他は甕の破片である。

本跡からは肥前系磁器体部破片1点が出土しているが、遺物全体の様相から混入と判断される。



第135図 第3号溝跡出土遺物（2）



第136図 第3号溝跡出土遺物（3）

第43表 第2・3号溝跡出土遺物観察表（第133～136図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	動土	残存	焼成	色調	構造	備考	図版
1	かわらけ	小皿	—	[2.1]	6.0	HII	20	普通	にぶい橙	SD2	底部系切痕（右） 勉土粉質	32-9
2	瓦質土器	焰培	—	[4.9]	—	OII	5	普通	にぶい橙	SD2	やや酸化焼成 外面煤付着	32-11
3	陶器	盤鉢	—	[8.3]	—	EHI	10	普通	淡黄	SD2	瀬戸美濃系 内外面銷釉 内面播目 口唇部二次の利用（破片） 大室第2段階	32-12
4	陶器	盤鉢	—	[9.0]	—	DEG	5	良好	橙	SD2	丹波系 内面播目 17c前～中	32-13
5	陶器	甕	—	[4.6]	—	DEH	5	灰白	SD2	常滑 外面降灰		
6	陶器	甕	—	[6.6]	—	DEK	5	褐灰	SD2	常滑 外面ヘラナデ・降灰		
7	陶器	甕	—	[14.0]	—	DEG	5	にぶい黄橙	SD2	常滑 外面ヘラナデ		
8	陶器	甕	—	[7.0]	—	DEG	5	灰灰	SD2	常滑 外面ヘラナデ 断面の一辺を二次使用（研磨）		
9	陶器	甕	—	[8.8]	—	DEGI	5	灰褐	SD2	常滑 外面ヘラナデ		
10	土師質土器	焰培	—	[4.5]	—	ADE	5	普通	橙	SD2・3	常陸系 外面煤付着	32-14
11	瓦質土器	焰培	—	[4.2]	—	CI	5	普通	灰白	SD2・3	燃す 外面煤付着	
12	陶器	折縁深皿	—	[4.3]	—	I	5	普通	灰白	SD2・3	古瀬戸 内外面灰釉 中IV期	33-1
13	陶器	香炉	—	[2.3]	(7.1)	IK	5	良好	灰白	SD2・3	瀬戸美濃系 外面灰釉	33-2
14	石製品	磨石	長さ 6.2cm 幅 [3.5]cm 厚さ [3.1]cm	重さ 29.8g	角閃石安山岩							32-3
15	石製品	砥石	長さ [14.2]cm 幅 [8.6]cm 厚さ [1.9]cm	重さ 314.3g	角閃石安山岩				SD2・3	砥面あり 一部残存		33-4
16	かわらけ	小皿	—	[1.6]	(6.0)	CIGHI	15	普通	浅黄橙	SD3	底部系切痕（右）	33-5
17	かわらけ	小皿	—	[3.1]	—	AEH	5	普通	橙	SD3	土師粉質 薄手	33-6
18	かわらけ	小皿	(10.8)	2.6	6.1	H	40	普通	にぶい黄橙	SD3	底部系切痕（右） 土師粉質	33-7
19	土師質土器	焰培	—	4.8	—	ADE	10	普通	橙	SD3	真理系 外面上位煤付着	33-8
20	瓦質土器	鉢	—	[6.1]	—	EHE	5	不良	にぶい黄	SD3	外面部 総体に後世の傷多い	33-9
21	瓦質土器	鉢	—	[6.9]	(12.5)	EDE	10	普通	淡黄	SD3	内外面燃す 内下面下位磨耗（使用痕）	33-10
22	瓦質土器	火鉢	(41.2)	[11.0]	(33.2)	EIKJ	10	良好	にぶい黄橙	SD3	常陸系 外面旋文 内外面燃す	33-11
23	瓦質土器	火鉢	—	[6.1]	—	ADE	5	普通	灰黄	SD3	中国産 内外面青磁釉（白く渦る）	33-12
24	陶器	皿	—	2.9	—	I	5	良好	灰白	SD3		33-13
25	陶器	皿	(10.7)	[2.3]	—	DK	5	普通	灰白	SD3	瀬戸美濃系 内外面長石釉 17c前（志野丸皿）	33-14
26	陶器	皿	—	[1.2]	(7.3)	DK	20	普通	灰白	SD3	瀬戸美濃系 内外面長石釉 内面ピン斑・外面部目路 16c末～17c前（志野丸皿）	33-15
27	陶器	天目茶碗	(11.2)	5.7	(4.6)	HK	40	普通	淡黄	SD3	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 大室第3～4段階	34-1
28	陶器	徳利	—	[3.4]	(14.7)	IK	5	良好	灰白	SD3	瀬戸美濃系 外面鉄釉・底部ふきとり・蓋道具瓶	34-2
29	陶器	甕	—	[8.0]	(15.3)	DEG	15	普通	橙	SD3	常滑 砂目瓶	34-3
30	陶器	片口鉢	—	[4.2]	(12.5)	DE	10	普通	灰褐	SD3	常滑 砂目瓶 内面使用により磨耗 断面の一部に黒色付着物（漆織か）	34-4
31	陶器	甕	—	[6.8]	—	DEK	5	灰黄	SD3	常滑 外面自然釉	34-5	
32	陶器	甕	—	[5.4]	—	DE	5	灰白	SD3	常滑 外面降灰 断面二次使用（研磨）	34-6	
33	陶器	甕	—	[4.8]	—	DE	5	黄灰	SD3	常滑 外面ヘラナデ		
34	陶器	甕	—	[11.3]	—	DEG	5	にぶい橙	SD3	常滑 砂目瓶 外面ヘラナデ 内面降灰		
35	陶器	甕	—	[9.0]	—	DK	5	褐灰	SD3	楕円形 一部に羽口の先端が付着 刃物痕 一部弱く被熱	34-7	
36	鉄滓	楕形鐵治滓	直径 7.8 cm 厚さ 2.6 cm 重さ 210.3g	—	—	—	—	—	—	SD3		34-8
37	石製品	砥石	長さ [26.7]cm 幅 [8.9]cm 厚さ 2.2cm	重さ 563.2 g	緑泥片岩					SD3	わざかに押削痕 運座 道慶澤〔門〕九月廿日 表面ケガキ線あり	34-9
38	石製品	板碑	長さ [19.8]cm 幅 [10.7]cm 厚さ 2.4cm	重さ 707.1 g	緑泥片岩					SD3	1/3 残存	34-10
39	石製品	宝篋印塔	長さ [15.9]cm 幅 23.1cm 厚さ [14.0]cm	重さ 6000.0 g	角閃石安山岩					SD3		48-7
40	鉄製品	釘	長さ [6.7]cm 幅 1.0cm 厚さ 0.7cm 重さ 15.9g	—	—	—	—	—	SD3			

第44表 第3号溝跡出土銭貨観察表（第136図）

番号	錢貨名	背面	銭径 (mm)		銭厚 (mm)	重量 (g)	書体	残存	初納年・国	出土位置	備考	図版
			縦	横								
40	永楽通寶	—	24.65	24.61	1.35	2.3	真書	完形	1408 明	SD3		48-1

最終埋没は17世紀前葉と思われる。

37～39は石製品で、37は擦痕のある緑泥片岩、38は板碑、39は宝篋印塔の基礎である。38の板碑は法名「道慶澤〔門カ〕」が中心に刻まれる。

15世紀の所産と考えられる。39の宝篋印塔は安山岩製で、基礎は二区に分ける。応永十年（1403年）の紀年銘が認められる。40、41は銭貨の永楽通寶と鉄釘である。

(7) 土壙

中世の土壙は、30基が検出された。いずれも3区で堀の東側から検出されている。3区から検出されているビットは、規模も大きく深いものが多い。そのため、当初土壙として調査したものうち、ビットに変更したものがある。

土壙のうち、不定形で規模の大きなものは、堀とビット群の間、埋蔵線の周辺に分布していた。埋蔵線に関連があるかは、明確にすることはできなかった。土壙の形状や規模については、第45表に示した。

第40号土壙（第137、144図）

第40号土壙は、I-18グリッドに位置する。南壁と東壁の一部が、グリッドビットに壊されている。掘り込みが深く、方形に近い形状であることから、ビットであった可能性がある。

第144図3は出土したかわらけで、口縁部直下に稜が形成されるタイプである。胎土は粉っぽく精良で、混入物はあまりみられない。外面には強い筋状のロクロナデ痕が認められる。

第41号土壙（第137、143図）

第41号土壙は、H-17グリッドに位置する。壁の一部がグリッドビットによって壊されている。掘り込みはごく浅かった。

第143図1は出土した銭貨で、銭種は皇宋通寶である。

第42号土壙（第137、143図）

第42号土壙は、H-18グリッドに位置し、土壙南壁の一部が第43号土壙に壊されている。

第143図2は出土した銭貨で、銭種は元豊通寶である。

第43号土壙（第137、144図）

第43号土壙は、H-18グリッドに位置する。第42号土壙の壁の一部を壊している。

第144図1、2は出土した遺物である。1はかわらけで、内底面には指頭ナデが施される。器形が歪んでいるが、坏形を呈するものと思われる。

外面全体に煤が付着する。2は土師質土器擂鉢である。胎土は緻密だが、径1mm程の丸まった砂礫を多く含む。内面の上位に丁寧なヨコナデが施され、下位に一単位14本の擂目が認められる。外面上位に刷毛目状のヘラナデが施されており、下総地域の資料と共通性が窺われる。地下式坑（第61号土壙）の出土遺物と同一個体と考えられる（第124図6）。このほか、焰烙の底部片が出土しており、土壙は16世紀後半頃に帰属する可能性が高い。
第44号土壙（第137図）

第44号土壙は、H、I-18グリッドに位置する。グリッドビットH-18P1に壊され、I-18P23を壊している。

遺物は出土しなかった。

第45号土壙（第137図）

第45号土壙は、H-18グリッドに位置する。グリッドビットを壊している。

遺物はかわらけが1点出土したが、小片のため図示しなかった。

第48号土壙（第137図）

第48号土壙は、H-17グリッドに位置する。擂鉢状に浅く掘り込まれていた。

遺物はかわらけ2点が出土したが、いずれも細片で図示し得なかった。

第50号土壙（第138図）

第50号土壙は、I-17グリッドに位置する。第51号土壙に壊されている。

遺物は出土しなかった。

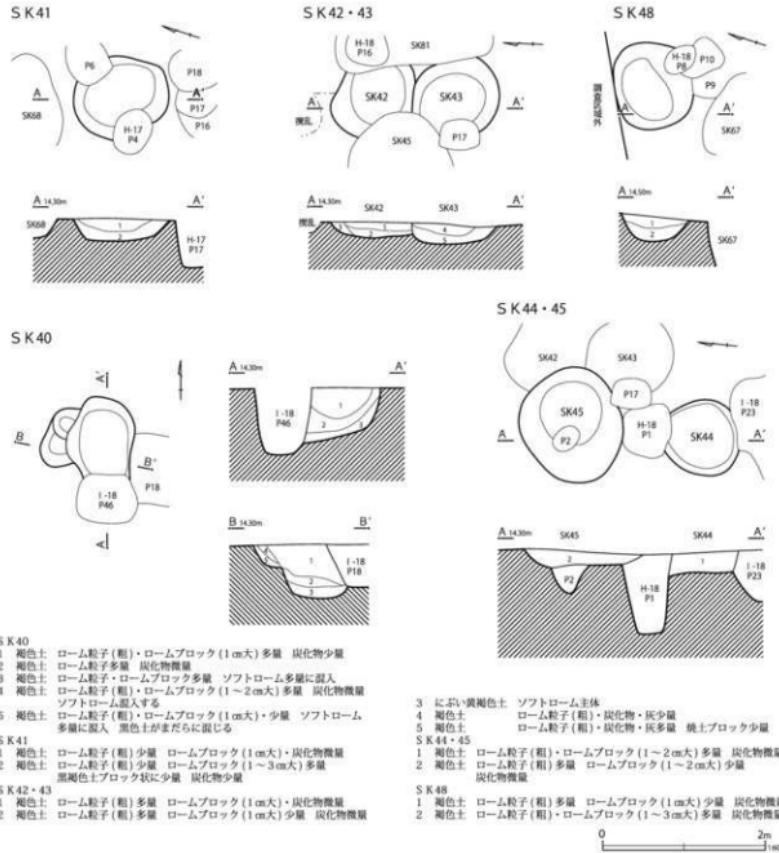
第51号土壙（第138図）

第51号土壙は、I-17グリッドに位置する。第7号井戸跡、第50号土壙を壊している。細長い方形の形状で、溝状に深く掘り込まれていた。北側が調査区域外のため、全体の規模は不明である。

遺物は出土しなかった。

第52号土壙（第138、144図）

第52号土壙は、J-16グリッドに位置する。土層断面の1層と2層の境に、炭化物、焼土粒子が



第137図 土壌 (1)

集中して検出された。

第144図4は出土したかわらけで、内底面は指頭ナデで強く窪ませる。体部はやや内湾して立ち上がり、器壁は厚手である。胎土には径3mm程度の赤色粒子や角閃石が多く含まれる。

第55号土壌 (第138図)

第55号土壌は、I-16グリッドに位置する。新旧関係は不明だが、第59、60号土壌と重複している。第51号土壌と同様に、溝状に深く掘り込まれ

ていた。北側は調査区域外のため、検出することができなかつた。

遺物は出土しなかつた。

第58号土壌 (第138図)

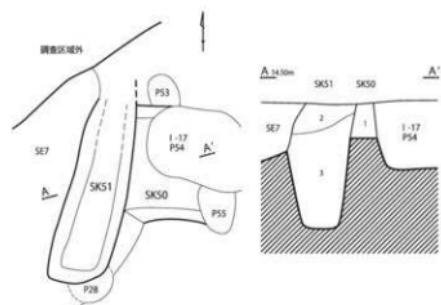
第58号土壌は、I-17グリッドに位置する。第7号井戸跡の壁の一部を壊している。

遺物は出土しなかつた。

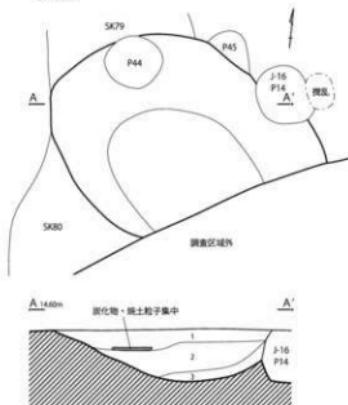
第59号土壌 (第138図)

第59号土壌は、I-16グリッドに位置する。新

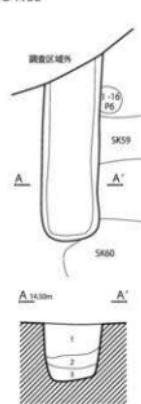
S K50・51



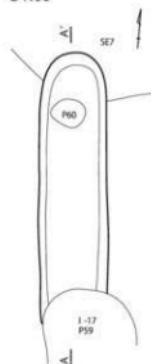
S K52



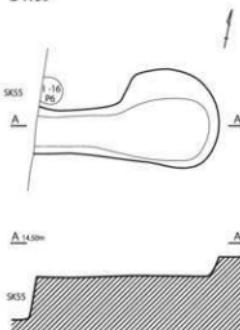
S K55



S K58



S K59



S K50・51

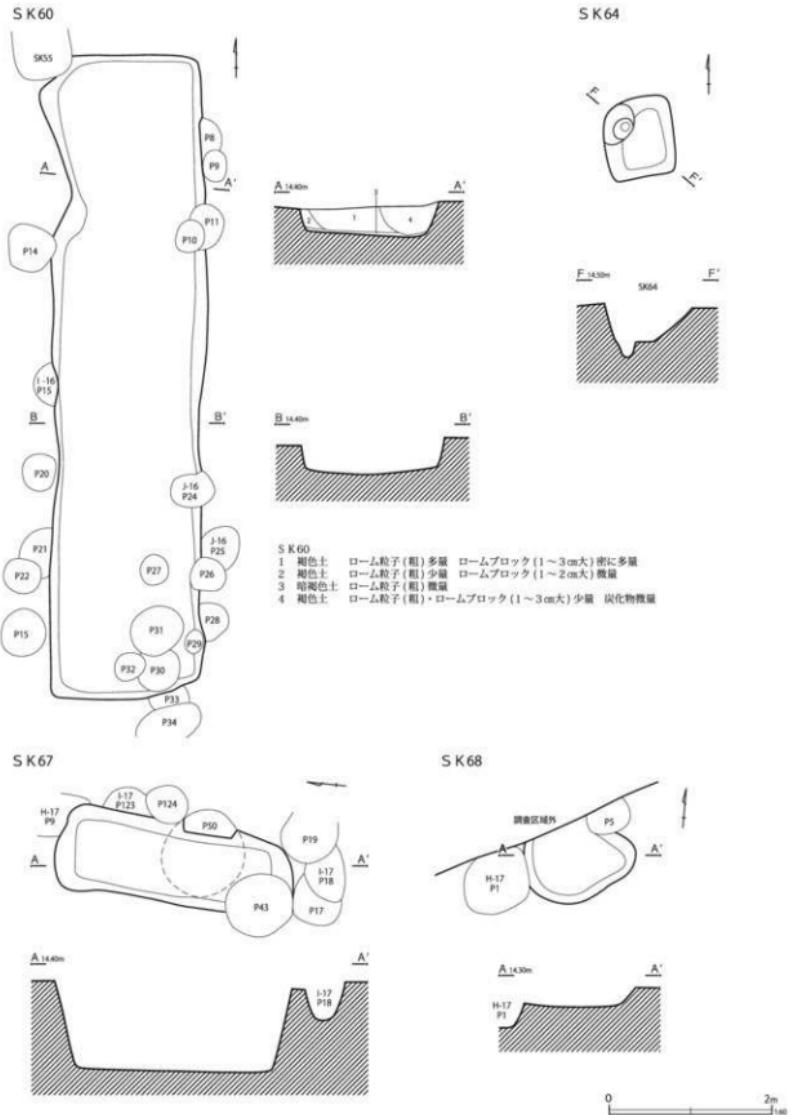
- | | | |
|--------|-------------|------------------------|
| 1 褐色土 | ローム粒子(粗) 少量 | ロームブロック(1cm大)・炭化物微量 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子(粗) 多量 | ロームブロック(1cm大)・微量 炭化物少量 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒子(粗) 多量 | ロームブロック(1~3cm大) 密に多量 |
- S K52
- | | | |
|--------|-------------|------------------------------------|
| 1 褐色土 | ローム粒子(粗) 少量 | ロームブロック(1cm大)・微量 炭化物少量
(部分的に集中) |
| 2 褐色土 | ローム粒子(粗) 多量 | ロームブロック(1cm大)・微量 |
| 3 黑褐色土 | ローム粒子(粗) 少量 | ロームブロック(1~3cm大) 密に多量
炭化物少量 |

S K55

- | | | |
|--------|-------------|-----------------------------------|
| 1 褐色土 | ローム粒子(粗) 多量 | ロームブロック(1~5cm大) 密に多量
ソフトローム・泥炭 |
| 2 黑褐色土 | ローム粒子(粗) 少量 | ロームブロック(1cm大) 少量 しまりなし |
| 3 黒褐色土 | ローム粒子(粗) 少量 | ロームブロック(1cm大) 微量 しまりなし |
- S K58
- | | | |
|--------|-------------|--------------------|
| 1 黑褐色土 | ローム粒子(粗) 多量 | ロームブロック(1cm大) 少量 |
| 2 黑褐色土 | ローム粒子(粗) 少量 | ロームブロック(1~2cm大) 多量 |

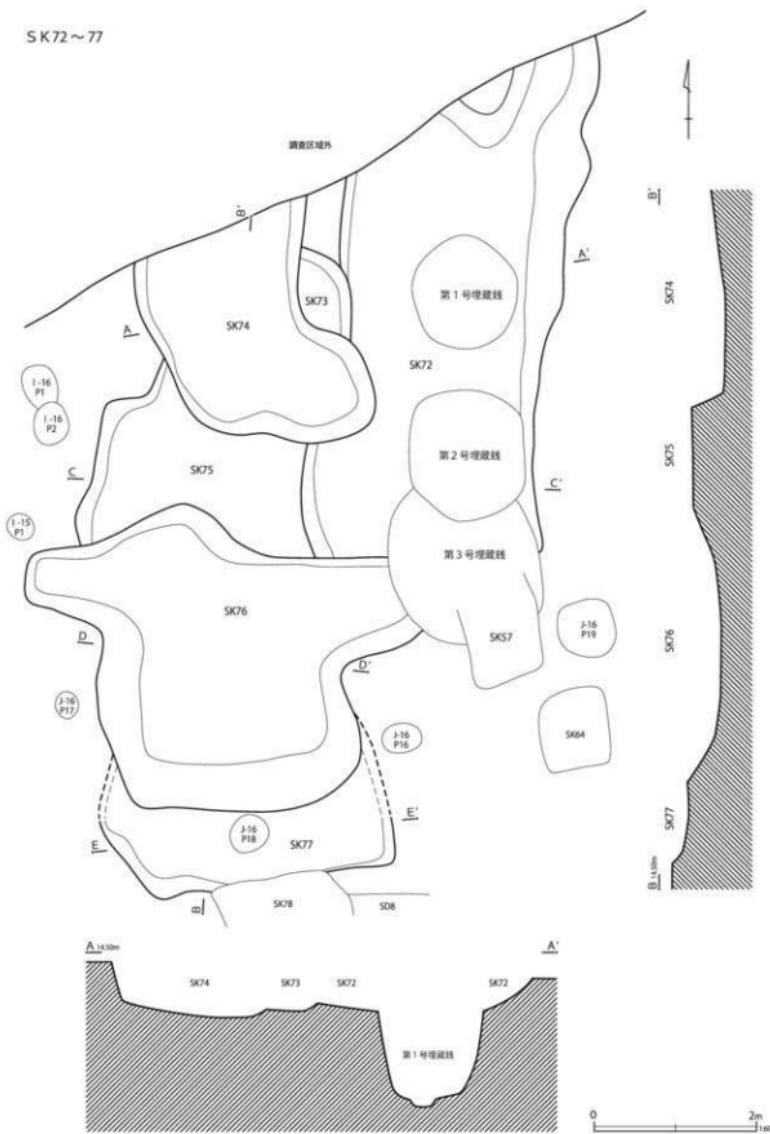


第138図 土壌 (2)

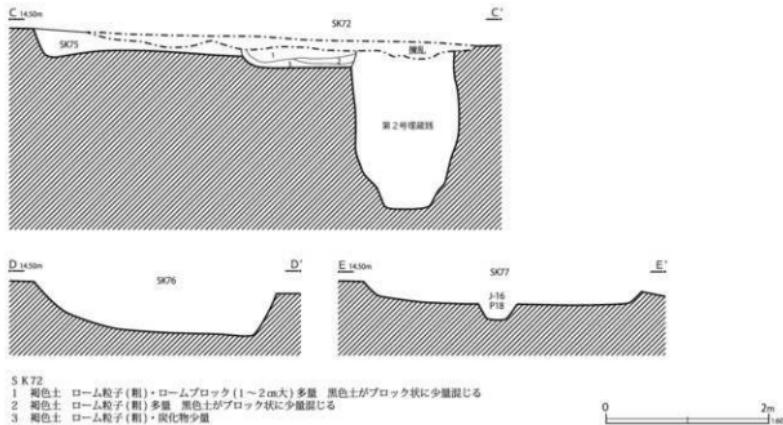


第139図 土壌 (3)

SK72～77



第140図 土壌 (4)



第141図 土壇（5）

旧関係は不明だが、第55号土壇と重複している。

遺物は出土しなかった。

第60号土壇（第139、144図）

第60号土壇は、I、J-16グリッドに位置する。第1～3号埋蔵銭の東側に位置している。造構は床面を平らにして掘削されたもので、埋蔵銭とは平行している。

第144図5は出土した陶器折縁深皿で、古瀬戸中期様式（中III期）に比定される。

第64号土壇（第139図）

第64号土壇は、J-16グリッドに位置する。形状は方形に近いが、断面擂鉢状に掘り込まれていた。北西隅にはピット状の掘り込みが認められた。遺物は出土しなかった。

第67号土壇（第139図）

第67号土壇は、H、I-17グリッドに位置する。深く掘り込まれており、底面は平坦に掘られていた。遺物は出土しなかった。

第68号土壇（第139図）

第68号土壇は、H-17グリッドに位置する。掘り込みはごく浅かった。

遺物は出土しなかった。

第72号土壇（第140図）

第72号土壇は、I-16グリッドに位置する。第72～77号土壇は重複し、埋蔵銭の周辺から検出された土壇群である。土壇内には、第1～3号埋蔵銭が重複するが、第2号埋蔵銭を壊している。土壇の形状は定形的ではなく、用途も不明である。遺物は出土しなかった。

第73号土壇（第140図）

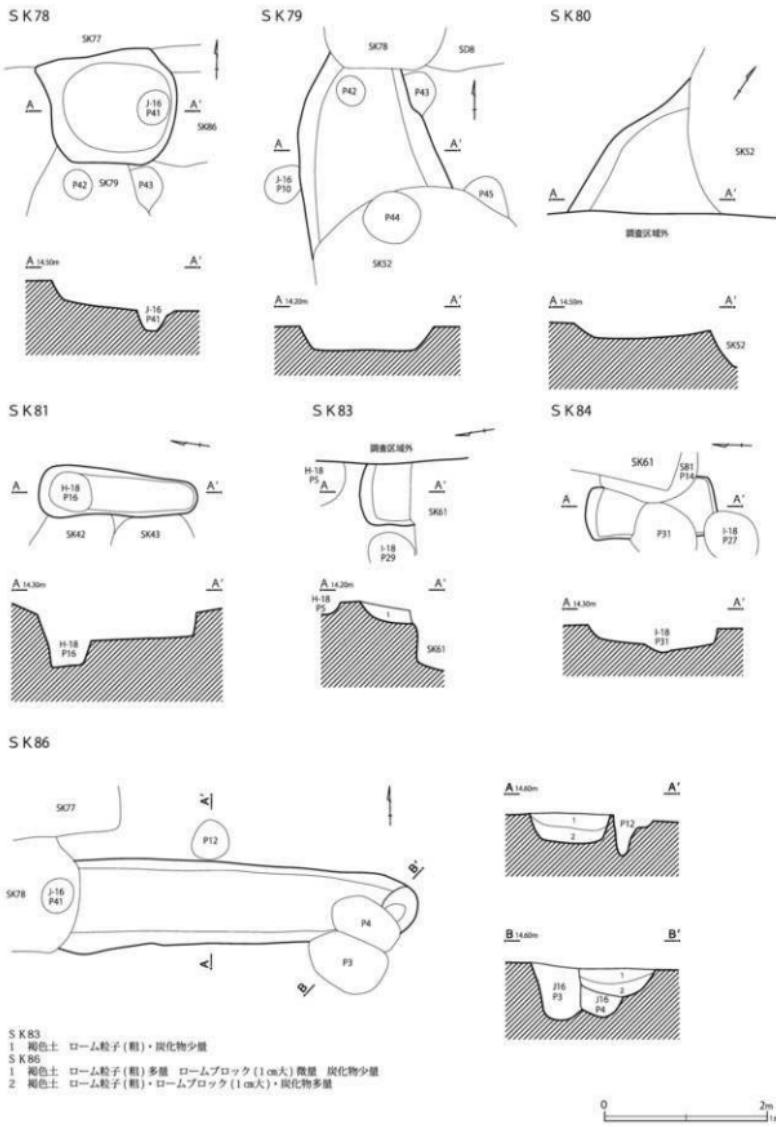
第73号土壇は、I-16グリッドに位置する。第72～77号土壇は重複し、埋蔵銭の周辺から検出された土壇群である。第75号土壇の北壁とも考えられたが、明確ではないため別の土壇とした。土壇の形状は定形的ではなく、用途も不明である。遺物は出土しなかった。

第74号土壇（第140図）

第74号土壇は、I-16グリッドに位置する。第72～77号土壇は重複し、埋蔵銭の周辺から検出された土壇群である。土壇の形状は定形的ではなく、用途も不明である。遺物は出土しなかった。

第75号土壇（第140図）

第75号土壇は、I-16グリッドに位置する。第72～77号土壇は重複し、埋蔵銭の周辺から検出

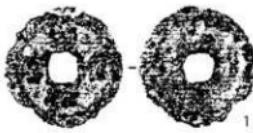


第142図 土壌 (6)

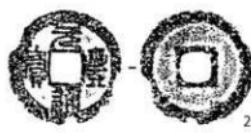
第45表 中世土壤計測表

遺構番号	位置	平面形	長径方向	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	重複遺構	
							SBP5 ~	SK46 I-18GP18
SK39	欠番		N-0°	(0.95)	(1.10)	0.64		
SK40	I-18	不整形	N-25° -W	1.17	(0.70)	0.26	H-17GP4 + 6	
SK41	H-17	円形	N-25° -W	1.17	(0.58)	0.18	SK43 + 45 + 81 H-18GP16	
SK42	H-18	不整形	N-70° -W	0.97			SK42 + 45 + 81 H-18GP17	
SK43	H-18	稍円形	N-60° -W	1.10	(0.93)	0.20	H-18GP1 I-18GP1	
SK44	H + I-18	椭円形	N-0°	(0.80)	0.93	0.28		
SK45	H-18	稍円形	N-64° -E	1.40	1.20	0.42	SK42 + 43 H-18GP1 + 2 + 17	
SK46	欠番						I-18GP46 ~	
SK48	H-17	稍円形	N-50° -E	1.08	0.95	0.37	H-17GP8 ~ 10	
SK49	欠番						I-17GP134 ~	
SK50	I-17	不明	N-0°	1.40	(0.90)	0.42	SE7 SK51 I-17GP53 ~ 55	
SK51	I-17	圓丸長方形	N-12° -E	(2.50)	0.70	1.49	SE7 SK50 I-17GP28	
SK52	J-16	不明	N-43° -W	(2.33)	2.50	0.61		
SK53	欠番						I-17GP135 ~	
SK55	I-16	長方形	N-6° -W	(2.05)	0.68	0.69	SK59 + 60 I-16GP6	
SK58	I-17	不明	N-6° -W	(2.30)	0.85	0.10	SE7 I-17GP59 + 60	
SK59	I-16	不整形	N-80° -E	(2.23)	0.65	0.20	SK55	
SK60	I + J-16	長方形	N-0°	7.86	1.75	0.45	SK55 I-16GP8 ~ 11 + 14 + 15 J-16GP20 ~ 22 + 24 ~ 33	
SK62	欠番						I-17GP133 ~	
SK63	欠番							
SK64	J-16	方形	N-0°	0.98	0.85	0.65		
SK67	H + I-17	長方形	N-5° -E	2.60	1.00	1.09	H-17GP9 I-17GP43 + 50 + 123 + 124	
SK68	H-17	不明	N-65° -E	(1.32)	(0.91)	0.25	H-17GP2 + 5	
SK70	欠番							
SK72	I-16	不整形	N-8° -E	(4.95)	2.75	0.33	埋藏線 SK1 ~ 3 SK73 ~ 76	
SK73	I-16	不整形	N-10° -E	(0.92)	(0.62)	0.07	SK72 + 74	
SK74	I-16	不整形	N-15° -W	(2.70)	2.00	0.59	SK72 + 73 + 75	
SK75	I-16	不整形	N-75° -W	(2.50)	(1.60)	0.31	SK72 + 74 + 76	
SK76	I + J-16	不整形	N-83° -W	(4.70)	3.80	0.61	SK75 + 77 埋藏線 SK3	
SK77	J-16	不整形	N-90°	3.25	(1.00)	0.23	SK76 + 78 J-16GP18	
SK78	J-16	稍円形	N-90°	1.50	(1.43)	0.30	SK77 + 79 + 86 J-16GP41	
SK79	J-16	不明	N-4° -W	(1.55)	1.56	0.28	SK62 + 78 J-16GP10 + 42 + 43	
SK80	J-16	不明	N-0°	(1.85)	(1.55)	0.21	SK52 + 78 J-16GP10 + 42 + 43	
SK81	H-18	圓丸長方形	N-7° -W	1.92	0.52	0.40	SK42 + 43 H-18GP16	
SK82	欠番						H-18GP21 ~	
SK83	H + I-18	不明	N-75° -W	(0.75)	(0.62)	0.27	SK61	
SK84	I-18	長方形	N-0°	1.60	(0.68)	0.23	I-18GP27 + 31 + 33	
SK86	J-16	圓丸長方形	N-90°	(4.08)	1.01	0.35	SD8 より変更 SK78 J-16GP3 + 4 + 12	

SK41



SK42

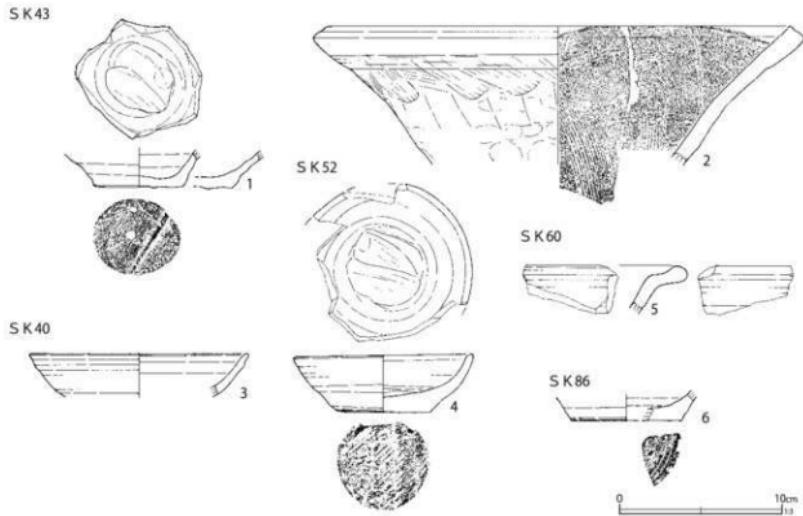


0 5cm

第143図 土壤出土遺物 (1)

第46表 中世土壤出土錢貨觀察表 (第143図)

標団番号	錢貨名	背面	直径(mm)		銅厚(mm)	重量(g)	書体	残存	初鋤年・国		出土位置	備考	図版
			縦	横					初鋤年	国			
1	皇宋通寶		24.73	24.72	1.63	2.0	篆書	4/5 残	1038	北宋	SK41		48-2
2	元豐通寶		24.04	23.98	1.52	2.5	篆書	4/5 残	1078	北宋	SK42		48-2



第144図 土壌出土遺物（2）

第47表 中世土壌出土遺物観察表（第144図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	かわらけ	小皿	—	[2.4]	5.5	HII	30	普通	にぶい橙	SK43	底部板目状圧痕 外面煤付着	34-11
2	土師質土器	擂鉢	(28.3)	[8.5]	—	EHH	20	普通	にぶい黄橙	SK43	内面櫛目 外面上位刷毛目状のヘラナデ	34-13
3	かわらけ	小皿	(13.3)	[2.6]	—	AGI	5	普通	橙	SK40	胎土粉質 小破片からの反転復元 口径若干前後する可能性あり	34-12
4	かわらけ	小皿	(10.9)	3.6	5.8	CGH	60	普通	浅黄橙	SK52	P14 底部糸切痕（右）、板目状圧痕 胎土砂質	35-1
5	陶器	折縁深皿	—	[3.0]	—	EK	5	良好	灰白	SK60	吉瀬戸 内外面灰釉 中二期	35-2
6	かわらけ	小皿	—	[1.9]	(6.8)	EH	10	普通	にぶい黄橙	SK86	底部糸切痕 胎土粉質	

された土壌群である。土壌の形状は定形的ではなく、用途も不明である。

遺物は出土しなかった。

第76号土壌（第140、141図）

第76号土壌は、I-16グリッドに位置する。第72～77号土壌は重複し、埋蔵銭の周辺から検出された土壌群である。土壌の形状は定形的ではなく、東端は第3号埋蔵銭と重複している。

遺物は出土しなかった。

第77号土壌（第140、141図）

第77号土壌は、I-16グリッドに位置する。第72～77号土壌は重複し、埋蔵銭の周辺から検出された土壌群である。新旧関係は不明だが、土壌の南側は第78号土壌と重複している。土壌の形状は定形的ではなく、用途も不明である。

遺物は出土しなかった。

第78号土壌（第142図）

第78号土壌は、J-16グリッドに位置する。新旧関係は不明だが、第77、79、86号土壌と重複している。

遺物は出土しなかった。

第79号土壙（第142図）

第79号土壙は、J-16グリッドに位置する。新旧関係は不明だが、第52、78号土壙と重複している。

遺物は出土しなかった。

第80号土壙（第142図）

第80号土壙は、J-16グリッドに位置する。新旧関係は不明だが、第52号土壙と重複している。

遺物は出土しなかった。

第81号土壙（第142図）

第81号土壙は、H-18グリッドに位置する。新旧関係は不明だが、第42、43号土壙と重複している。土壙は幅が狭く、溝状にやや深く掘り込まれていた。

遺物は出土しなかった。

第83号土壙（第142図）

第83号土壙は、H、I-18グリッドに位置する。第61号土壙に壊されている。ごく一部が検出されたのみで全体の規模は不明である。

遺物は出土しなかった。

第84号土壙（第142図）

第84号土壙は、I-18グリッドに位置する。浅く方形状に掘り込まれていた。

遺物は出土しなかった。

第86号土壙（第142、144図）

第86号土壙は、J-16グリッドに位置する。新旧関係は不明だが、第78号土壙と重複している。また、グリッドピットのJ-16P 3、J-16P 4を壊している。幅は狭く、溝状に掘り込まれていた。

第144図6は出土したかわらけである。胎土は粉っぽく、径2mm程の赤色粒子が多く含まれる。土壙からはこれ以外にかわらけ1点と常滑焼甕1点が出土した。

（8）グリッド出土遺物（第145、146図）

第145、146図には遺構に伴わず出土した遺物を掲げた。全体的にはかわらけや土器の熔融が多く、

若干の常滑焼が認められた。なお、I-17グリッドから古瀬戸小皿類の底部が出土しているが、細片で図化し得なかった。それ以外の中世の施釉陶磁器は全て掲載した。

1は土師質の鉢である。

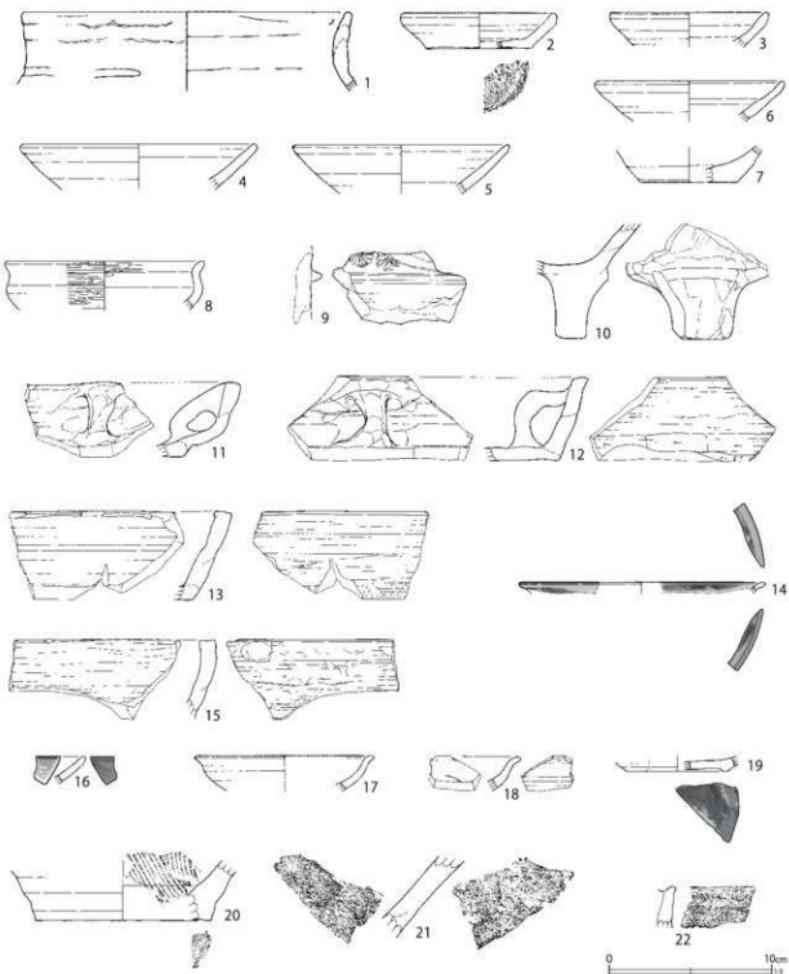
2～7はかわらけである。2は底部に左回転の糸切痕を残すもので、胎土は粗い。口縁部は少し肥厚し、内底面には指頭で幅広の回転ナデが施されている。17世紀前半に位置付けられる。3は被熱により口縁部の一部が黒化している。同じように被熱したかわらけが、第1号掘立柱建物跡（第40図2、4）、第2号掘立柱建物跡（第40図15）、I-17P34（第58図4）からも出土しており、器形や胎土の特徴もほぼ一致する。灯明皿の使用痕跡としては熟変が激しく、これらは一括して火を受けたかわらけと考えるべきであろう。

4、5は体部が直線的に開くタイプである。胎土は緻密で細かい石英粒を含む。6も体部が直線的に開くが、僅かに内湾する。胎土が粗く角閃石を多く含む。7は底部破片で、胎土は粉っぽく摩耗が激しい。

8は瓦質土器の香炉で、口縁部から体部外面にミガキが施される。胎土は良好で混入物は少ない。

9、10は瓦質土器の火鉢である。9は突出する横帯区画内にスタンプ文を施すものと考えられる。内面は剥離して遺存していない。胎土は酸化炎焼成ぎみだが、外表面は焼されて灰色を呈する。10は脚部破片で、胎土に多量の長石・石英と少量の片岩が認められる。表裏面は焼され、灰色を呈する。

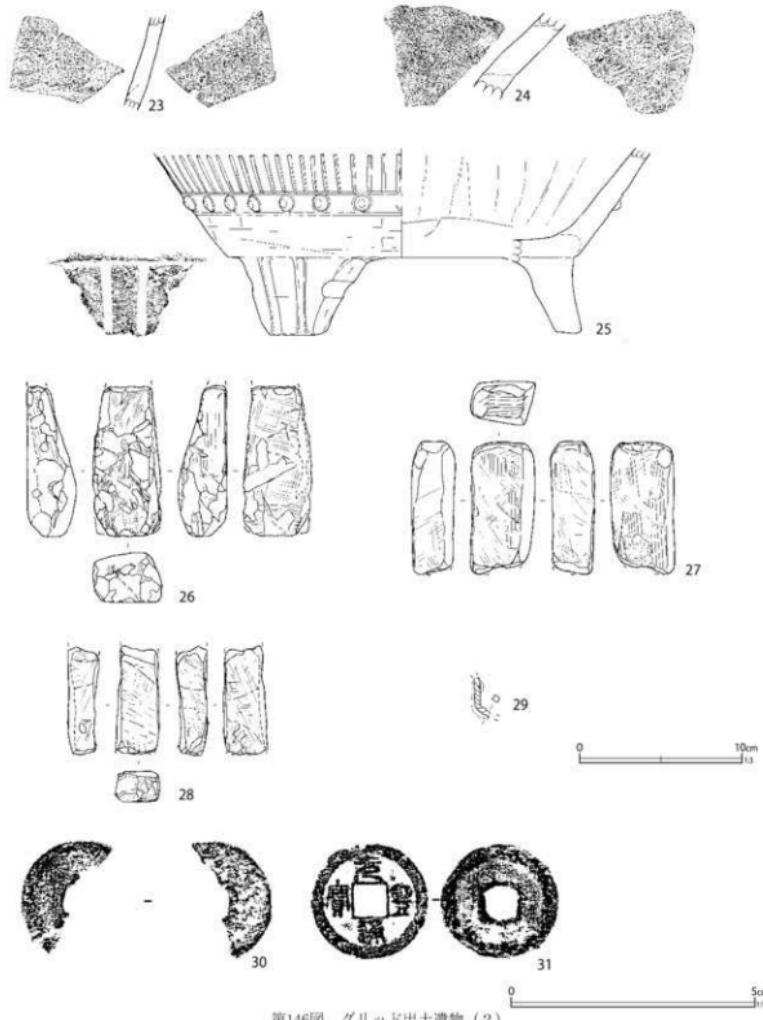
11は雲母を多量に含む土師質土器の熔融で、常陸系（真壁系）のものである。17世紀中葉～後葉頃に比定される。12、13、15は瓦質土器の熔融である。12は外下面に強いケズリが、その直上は幅広くヘラナデが施される。概ね17世紀後半～18世紀前半のものと考えられる。13、15は外下面のシワ状痕をナデ消す。概ね16世紀後半～17世紀前半のものと考えられる。



第145図 グリッド出土遺物（1）

14、16は中国産磁器の青花盤である。14は器壁が薄手で、口縁部が端反りになる。15世紀後半頃の所産である。16はやや厚手で、釉薬は灰色味を帯びる。

17、18は瀬戸美濃系陶器の端反皿で、大窯第1段階、16世紀前葉に比定される。端反皿は地下式坑である第61号土壙からも出土しているが、全て別個体である。



第146図 グリッド出土遺物（2）

19は瀬戸美濃系陶器の稜皿で、暗赤褐色の鉄釉が施される。大窯第3段階、16世紀中頃～後半の所産である。

20は瀬戸美濃系陶器の擂鉢で、やや赤味を帯び

た鉛釉が掛けられる。

21～24は常滑焼である。21は片口鉢で、内面は使用により平滑になっている。22は壺の縁帶部が剥離したもの、23は壺の胴部破片である。24は

第48表 グリッド出土遺物観察表（第145・146図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	土師質土器	鉢	[20.0]	[4.8]	—	AHK	15	普通	褐	J-16	口縁部ナデ 肩部ヘラケズリ 口縁部に粘土斑の輪積痕	35-3
2	かわらけ	小皿	(9.2)	2.3	(6.4)	CEI	20	普通	褐	3区表採	底部系切痕（左） 胎土砂質	
3	かわらけ	小皿	(9.6)	[2.2]	—	EI	5	良好	褐	J-17	一部被熱	
4	かわらけ	小皿	(14.2)	[2.8]	—	EI	5	良好	褐	H-17	小破片からの復元化 因径若干前後する可能性あり	
5	かわらけ	小皿	(13.0)	[3.1]	—	EHI	10	普通	褐	H・I-17		
6	かわらけ	小皿	(11.4)	[2.4]	—	CEH	15	普通	にぶい黄褐	H-17	胎土砂質	
7	かわらけ	小皿	—	[2.2]	(5.9)	AH	10	普通	褐	SJ4擾乱	胎土粉質 全体磨耗	35-4
8	瓦質土器	香炉	(12.0)	[3.0]	—	I	15	普通	灰	I-17	内面上位～外側ミガキ 燐す	35-5
9	瓦質土器	火鉢	—	[4.3]	—	CEHJK	5	普通	にぶい黄褐	H-17	外側スタンプ文 燐す SK61に同一個体	
10	瓦質土器	火鉢	—	[7.0]	—	BDEH	5	普通	灰白	H-17	脚部破片 燐す	35-6
11	土師質土器	燔壺	—	4.5	—	ADE	5	普通	明褐	L-13	真壁系	35-7
12	瓦質土器	燔壺	—	[5.1]	—	CDFH	5	普通	にぶい黄褐	2区一括	底部シワ状底 燐す	35-8
13	瓦質土器	燔壺	—	[5.4]	—	CI	5	普通	にぶい黄褐	J-16	底部シワ状底 羽く燐す	
14	磁器（青花）	皿	(15.1)	[0.7]	—	—	5	良好	白	I-18	中国景徳鎮窯系 内外面施釉・染付	35-9
15	瓦質土器	燔壺	—	[4.8]	—	CHI	10	良好	灰白	J-16	燐す	
16	磁器（青花）	皿	—	[1.7]	—	—	5	良好	白	H-18	中国景徳鎮窯系 内外面施釉・染付	35-10
17	陶器	端反皿	(10.7)	[2.2]	—	GH	10	普通	灰白	I-18	瀬戸美濃系 内外面灰釉 大窯第1段階	35-11
18	陶器	端反皿	—	[2.1]	—	K	5	普通	灰白	I-17	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面施文 大窯第1段階	35-12
19	陶器	棱皿	—	[1.0]	(6.1)	HI	10	普通	灰白	I-17	瀬戸美濃系 内外面鉄化粧・鉄釉 大窯第3段階	35-13
20	陶器	擂鉢	—	[3.7]	(10.7)	DE	5	普通	灰白	K-12	瀬戸美濃系 内外面鉄釉	36-1
21	陶器	片口鉢	—	[4.9]	—	DEG	5	普通	浅黄褐	SJ2	常滑 内面使用により平滑 外面ヘラナデ	
22	陶器	甕	—	[2.6]	—	DE	5	—	灰白	H-17	常滑 刺繡した口縁部 緑帯部	
23	陶器	甕	—	[5.9]	—	DE	5	—	灰黄	I-17	常滑 外面ヘラナデ	
24	陶器	甕	—	[5.2]	—	DE	5	—	黄灰	I-17	破損部煤付着 内面破損後に二次使用	
25	瓦質土器	火鉢	—	[11.3]	(21.3)	ADE	15	普通	灰黄	I-16	常陸產 外面施文 内外面燐す	36-2
26	石製品	砥石	長さ [9.2]cm 幅 4.2cm 厚さ 3.0cm 重さ 147.0 g 流紋岩				J-16			刃物痕 上端部欠損 一部黒色化		36-3
27	石製品	砥石	長さ 8.1cm 幅 3.9cm 厚さ 2.7cm 重さ 129.0 g 流紋岩				J-14			櫛歯状工具痕 刃物痕		36-4
28	石製品	砥石	長さ [6.6]cm 幅 [2.7]cm 厚さ 1.9cm 重さ 48.1 g 流紋岩				トレンチ1					36-5
29	鉄製品	不明	長さ [2.5]cm 幅 0.3cm 厚さ 0.3cm 重さ 1.8g				J-16					48-7

第49表 グリッド出土鉄貨観察表（第146図）

括図番号	銭貨名	背面	銭径 (mm)	錢厚 (mm)	重量 (g)	書体	残存	初鋳年・国	出土位置	備考	図版
30	不明		25.95	[11.17]	1.99	1.4	1/3残 篆書		I17		48-3
31	元豊通寶		24.16	24.63	1.74	3.1	完形	1078 北宋	119		48-3

甕の胴部下位破片だが、内面が平滑になっており、破損後に使用されたものと思われる。

25は瓦質土器の火鉢で、第3号溝跡（第135図22）と地下式坑である第61号土壙から、同一個体の破片が出土している。胎土に雲母を含む常陸系の土器で、体部は上部に向かい大きく開く。下位の沈線区画間に珠文を配し、その上には断面V字状の沈線を連子に刻む。類例が、茨城県の三村山

極楽寺跡にみられ、筑波山南麓で生産された可能性が高い。14世紀代の所産と推定する。

26～28は石製品の砥石で、いずれも流紋岩製である。26は全面に後世の傷が多く付いている。27には櫛歯状工具痕が残る。

29は鉄製品で、器種は不明である。

30、31は銭貨で、30は元豊通寶である。

3 近世の遺構と遺物

近世の遺構は、調査区の1、2区を中心に検出された。3区では、堀と堀の間の平場から検出されている。検出された遺構は、土壙37基、溝跡3条、ピット48基である。

(1) 土壙

各土壙の、位置や形状、規模については第55表に示した。

1区土壙 (第147～151図)

1区からは、第1～8号土壙の8基が検出された。調査区の東側から検出され、他は搅乱のため検出されなかった。第1、3、8号土壙は東端から検出された。南北方向にならんて遺構が確認されたため、当初は館の東側を区切る堀と考えられていた。調査の結果、土壙群であることがわかつた。そのうち第1、8号土壙は、方形でムロ状に掘り込まれたものであった。

第1号土壙からは、多量の陶磁器・土器類と瓦類が出土した。廃絶は近代と思われるため、第149図1～16の中世に遡る遺物と、特徴的な近世の遺物を図示するに留めた。

1、5～7は常滑焼の甕で、1は頸部から肩部に至る破片、5～7は胴部の破片と思われる。いずれも中世の所産と考えられる。

2は施釉土器のカンテラで、江戸在地系土器と考えられる。3、4も江戸在地系と考えられる施釉土器の灯火具である。同一個体の可能性もあるが、接合点は確認できなかつた。

8は陶器の甕で、胴部下位がやや膨らみを持つて立ち上がる。器面に光沢のある湧出物が多く見られる。施釉は認められないが、内面には自然降灰が多い。丹波系ないし信楽系の可能性がある。

陶磁器には、近世後期～近代のものが多量に含まれていた。最新期の磁器は、銅板転写染付の平碗や杯、燭台等であるが、全体としては、より古い段階の型紙模様染付の製品が多かつた。遺物の取り上げは、下層、最下層のものを分けて実

施したが、出土した陶磁器に時期差は認められなかつた。遺構の廃絶後、比較的短期間で埋没したものと考えられる。

9～11は石製品である。9は粘板岩製砥石である。砥面は2面が遺存し、端面には刃物傷とともに成形時の加工痕が残る。加工痕は刃幅の広い工具を用いたものと推定される。10は流紋岩製砥石で、全面使用面としている。裏面に工具による深い傷があり、再加工痕と思われる。11は武藏型板碑の破片である。蓮座と銘文の一部が確認される。銘文は右側に「文明十[六年カ]」と刻まれ、文明10年（1478）以降、改元の文明19年（1487）頃までの所産と考えられる。蓮座下の銘文は判読できないが、配列から法名が刻まれていた可能性が高い。

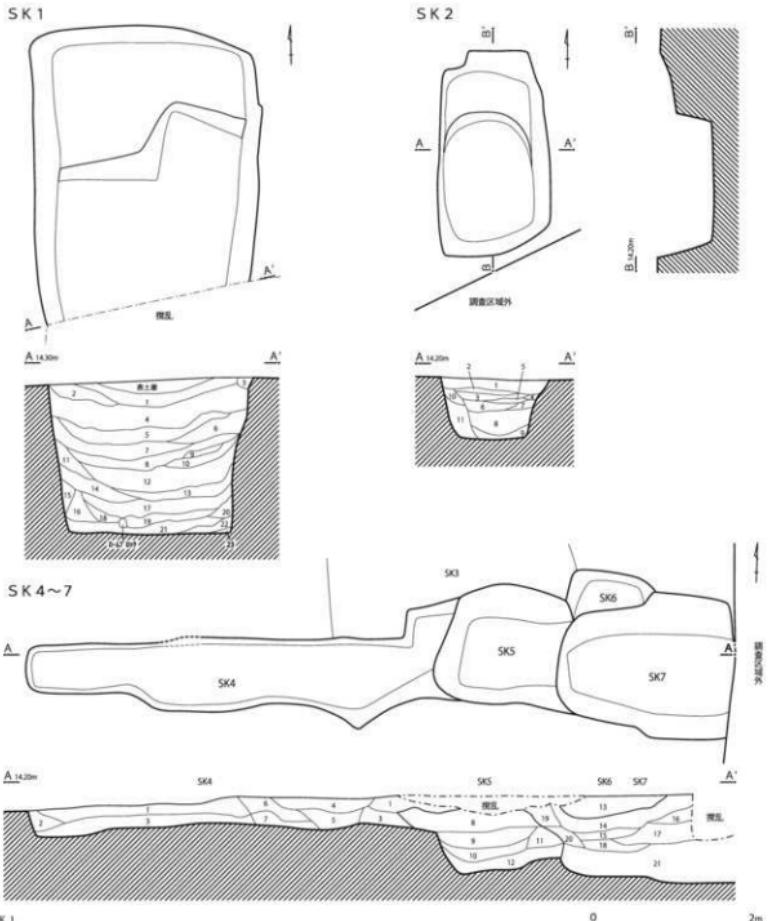
12～16は金属製品で、12、13は環金具、14は包丁、15は小刀、16は寛永通寶である。このうち12、14、15は、最下層からの出土である。

瓦類の出土量も多く、軒桟瓦（瓦当面）10点、棟瓦ないし平瓦260点、丸瓦2点、道具瓦（伏間瓦等）8点が含まれていた。この中には刻印瓦3点が含まれており、「埼玉縣北足／（入に「瓦」）三州屋／立郡小室村」と読み取れる。伊奈町大字小室に該当し、明治期の瓦生産を示すものと理解される。

陶磁器・瓦以外にはコンクリート塊が含まれていた。陶磁器の年代から第1号土壙の最終的な廃絶は明治末年前後と推定される。

第8号土壙からは、近世後期～近代の陶磁器が多く出土した。このうち、第150図18～22の中世の陶器4点、瓦質土器熔融1点、第151図23～29の錢貨7枚を図示した。

18は瓦質土器の熔融で、体部は全体をヨコナデで調整するが、外面上端のみシワ状痕が残る。16世紀末～17世紀前葉の所産と推定される。19～22は常滑焼で、中世の所産である。19は擂鉢で、



SK1

表土層
1 褐色土 ローム粒子（粗）少量 ロームブロック（5cm大）微量
2 褐色土 ローム粒子（粗）・ロームブロック少量
3 褐色土 ローム粒子（粗）多量 炭化物微量
4 褐色土 ローム粒子（粗）多量
5 褐色土 ローム粒子（粗）多量 ロームブロック（2～3cm大）少量
6 褐色土 ローム粒子（粗）多量
7 褐色土 ローム粒子（粗）多量 ロームブロック（1～2cm大）少量
8 褐色土 ローム粒子（粗）・ロームブロック（2～3cm大）多量
9 黑褐色土 ローム粒子（粗）少量

10 褐色土 ローム粒子（粗）・ロームブロック（3～5cm）少量

11 黑褐色土 ローム粒子（粗）多量

12 黑褐色土 ローム粒子（粗）少量

13 黑褐色土 ローム粒子（粗）多量 ロームブロック（1cm大）微量

14 黑褐色土 ローム粒子（粗）多量 ロームブロック（1cm大）微量

15 黑褐色土 ローム粒子（粗）・ロームブロック（2～3cm大）多量

16 黑褐色土 ローム粒子（粗）少量
17 黑褐色土 ローム粒子（粗）・炭化物少量
18 褐色土 ローム粒子（粗）多量 炭化物微量
19 褐色土 ローム粒子（粗）少量 多量 ロームブロック微量
20 褐色土 ローム粒子（粗）・ソフトローム微量
21 黑褐色土 ローム粒子（粗）・ロームブロック（1～2cm大）・炭化物少量
22 黑褐色土 ローム粒子（粗）少量
23 にじ、黒褐色土 ローム主体

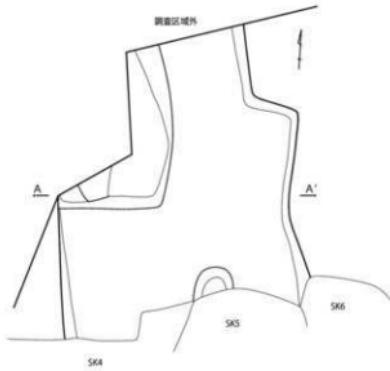
SK2

1～7 表土層がブロック状に侵入する新しい層
8 褐色土 ローム粒子（粗）少量 黑褐色土混入
9 黑褐色土 ローム粒子（粗）多量
10 褐色土 ローム粒子（粗）多量 ソフトローム微量
11 褐色土 ローム粒子（粗）多量

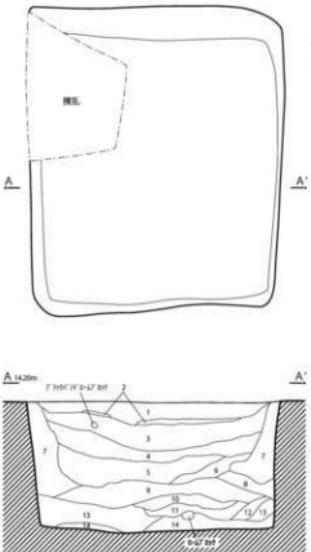
第147図 土壌（1）

S K 4			S K 6		
1 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1~2cm大)・炭化物微量	13 褐色土	ローム粒子(粗)・炭化物少量	
2 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	炭化物微量	14 褐色土	S K 7	
3 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1~2cm大)・炭化物少量	15 褐色土	ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大)微量	
4 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1~2cm大)微量	16 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1cm大)・炭化物微量
5 褐色土	ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~2cm大) 多量	炭化物少量	17 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1cm大)・炭化物少量
6 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1~2cm大)・炭化物少量	18 褐色土	ローム粒子(粗) 少量	ソートローム混入
7 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1~2cm大)・炭化物少量	19 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	炭化物少量
S K 5	炭化物微量		20 褐色土	ローム粒子(粗)・ロームブロック(2~3cm大) 少量	炭化物微量
8 褐色土	ローム粒子(粗) 少量	ロームブロック(1~2cm大) 微量	21 に赤い黄褐色土	ローム主体となる解	
9 褐色土	ローム粒子 多量				
10 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(3~5cm大)・炭化物微量			
11 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1~2cm大) 少量			
12 褐色土	ローム粒子(粗) 少量	ロームブロック(1~2cm大) 微量			
13 褐色土	ローム主体	黒色土がまじる			

SK 3



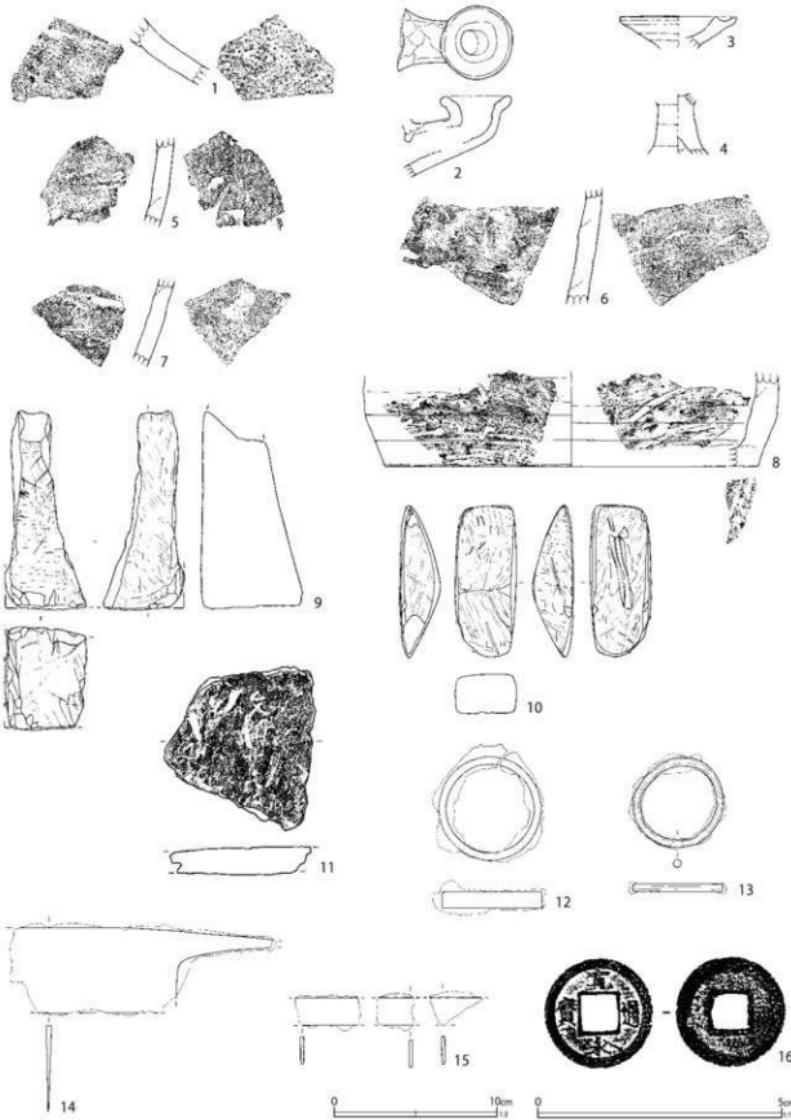
SK 8



S K 8					
1 褐色土	ローム粒子(粗) 少量	ロームブロック(1cm大) 微量	9 黑色土	ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~3cm大) 微量	
2 褐色土	炭化物少量		10 褐色土	炭化物微量	
3 褐色土	ローム粒子(粗) 少量	ロームブロック密に多量 炭化物微量	11 黑色土	ローム粒子(粗) 微量	炭化物少量
4 褐色土	ローム粒子(粗) 微量	炭化物少量	12 褐色土	ローム粒子(粗) 少量	ロームブロック(1cm大) 微量
5 褐色土	ローム粒子(粗)・炭化物少量		13 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1cm大)・炭化物微量
6 褐色土	ローム粒子(粗) 多量	ロームブロック(1cm大)・炭化物少量	7 に赤い黄褐色土	ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~3cm大) 多量	
7 に赤い黄褐色土	ローム粒子(粗)・炭化物少量	炭化物微量 ソートロームが多量に入れる	8 褐色土	天井や壁の崩落土	
8 褐色土	ローム粒子(粗)	ロームブロック(1cm大)・炭化物微量	9 褐色土	ローム粒子(粗)・ロームブロック(1cm大) 微量	



第148図 土壌 (2)



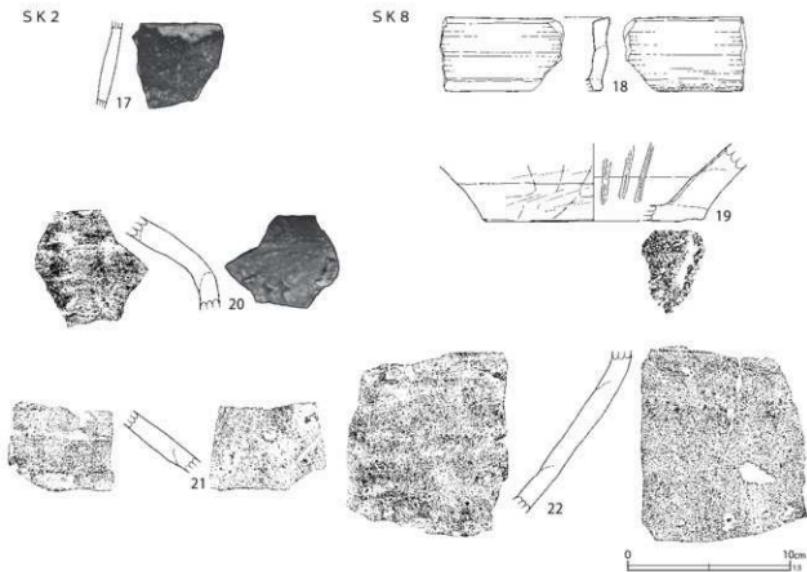
第149図 土壤出土遺物（1）

第50表 第1号土壤出土遺物観察表（第149図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	陶器	甕	—	[4.1]	—	DIK	5	良好	黄灰	SK1	常滑 外面降灰	36-6
2	施釉土器	カンテラ	3.9	[5.0]	—	AGHI	15	普通	棕	SK1	内外面透明釉 双口部口縫に焼付着	19 c
3	施釉土器	火道具	(4.6)	[2.0]	—	A1	10	普通	棕	SK1	内外面透明釉（油受皿）	
4	施釉土器	火道具	—	[3.7]	—	IK	10	普通	棕	SK1	内外面透明釉（油受皿）	
5	陶器	甕	—	[5.6]	—	DEG	5	良好	黄褐 にふい	SK1	常滑 外面ヘラナデ	
6	陶器	甕	—	[7.0]	—	DEK	5	良好	棕	SK1	常滑 外面ヘラナデ	
7	陶器	甕	—	[5.4]	—	DEK	5	良好	灰	SK1	常滑 外面ヘラナデ	
8	陶器	甕	—	[5.8]	(22.7)	EGI	5	良好	黄灰	SK1	下層 信楽か 外面下位ケズリ 内面降灰	36-7
9	石製品	砥石	長さ [12.2]cm	幅 5.0cm	厚さ 6.3cm					SK1	常滑 外面ヘラナデ	
			重さ 352.9 g	粘板岩						SK1	砥面二面遺存	
10	石製品	砥石	長さ 9.3cm	幅 3.7cm	厚さ 2.5cm	重さ 116.1 g				SK1	ほぼ完形 刀物痕 4面使用	36-9
11	石製品	板碑	長さ [10.0]cm	幅 [9.2]cm	厚さ 1.7cm					SK1	蓮座 文明十六年か	36-10
			重さ 238.6 g	緑泥片岩						SK1	幅広工具痕 刀物痕	
12	鉄製品	環金具	径 0.3cm	横 1.0cm	厚さ 0.5cm	重さ 48.2g				SK1	常滑 外面ヘラナデ	48-7
13	鉄製品	環金具	径 5.5cm	横 5.7cm	厚さ 0.5cm	重さ 17.7g				SK1	常滑 外面ヘラナデ	48-7
14	鉄製品	包丁	長さ [16.2]cm	刃長 [10.2]cm	刃幅 5.3cm					SK1	常滑 外面ヘラナデ	48-7
15	鉄製品	不明	—	1.7cm	横 [4.0]cm	厚さ 0.2cm	重さ 14.8g			SK1	常滑 外面ヘラナデ	48-7

第51表 第1号土壤出土銭貨観察表（第149図）

標印番号	銭貨名	背面	銭径 (mm)		銭厚 (mm)	重量 (g)	書体	残存	初鑄年・国	出土位置	備考	図版
			徑	横								
16	寛永通寶 (新)		22.82	22.97	1.05	1.4	真書	完形	1668 江戸	SK1		48-4

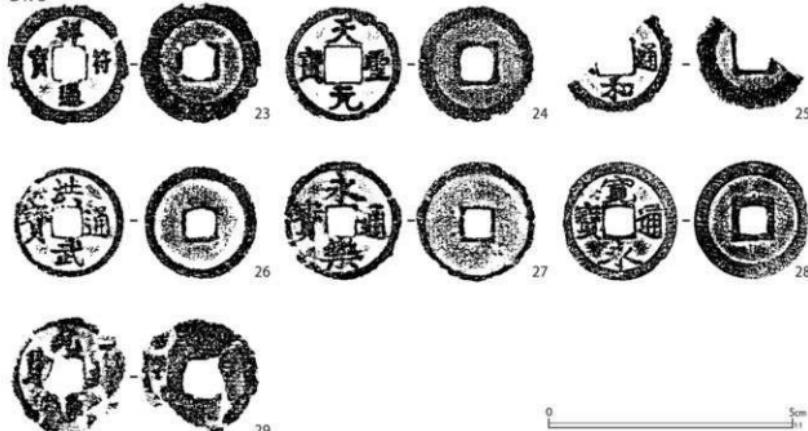


第150図 土壤出土遺物 (2)

第52表 第2・8号土壤出土遺物観察表（第150図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
17	陶器	壺形類	—	[5.3]	—	HIK	5	良好	灰黄	SK2	中国産か 外面鉄軸	36-11
18	瓦質土器	焰塔	—	4.5	—	OII	5	普通	黄灰	SK8	底部シワ状痕 外面煤付着	
19	陶器	片口鉢	—	[4.7]	(13.6)	DE	5	良好	黄灰	SK8	常滑 砂目板 内面に一単位3本の擗目	36-12
20	陶器	甕	—	[5.8]	—	D	5	良好	灰白	SK8	常滑 外面自然釉	
21	陶器	甕	—	[3.9]	—	D	5	良好	灰	SK8	常滑 外面ヘラナデ・降灰	
22	陶器	甕	—	[10.0]	—	DE	5	良好	褐灰	SK8	常滑	

SK8



第151図 土壤出土遺物（3）

第53表 近世土壤出土銭貨観察表（第151図）

擇図 番号	銭貨名	背面	銭径 (mm)		銭厚 (mm)	重量 (g)	書体	残存	初鋳年・国	出土位置	備考	図版
			縦	横								
23	祥符通寶		24.97	25.14	1.58	2.0	真書	完形	1009 北宋	SK8		48-4
24	天聖元寶		24.02	24.41	1.26	2.1	真書	完形	1023 北宋	SK8		48-4
25	□和通寶		24.05	[13.04]	1.20	1.0	真書	1/2 残	北宋	SK8		48-4
26	洪武通寶		23.23	23.37	1.65	2.3	真書	完形	1368 明	SK8	マ頭通・重点通	48-4
27	永樂通寶		25.07	25.00	1.53	2.5	真書	完形	1408 明	SK8		48-4
28	寛永通寶（古）		24.60	[24.17]	1.11	2.1	真書	ほぼ完形	1636 江戸	SK8		48-4
29	寛永通寶（古）		25.00	[24.23]	1.30	1.3	真書	3/4 残	1636 江戸	SK8		48-4

内面に深い3条の擗目が認められる。20～22は甕の破片で、20、21は肩部、22は胴部の破片である。23～29は銭貨で、中世に流通した銭貨と近世の寛永通寶が混在して検出された。

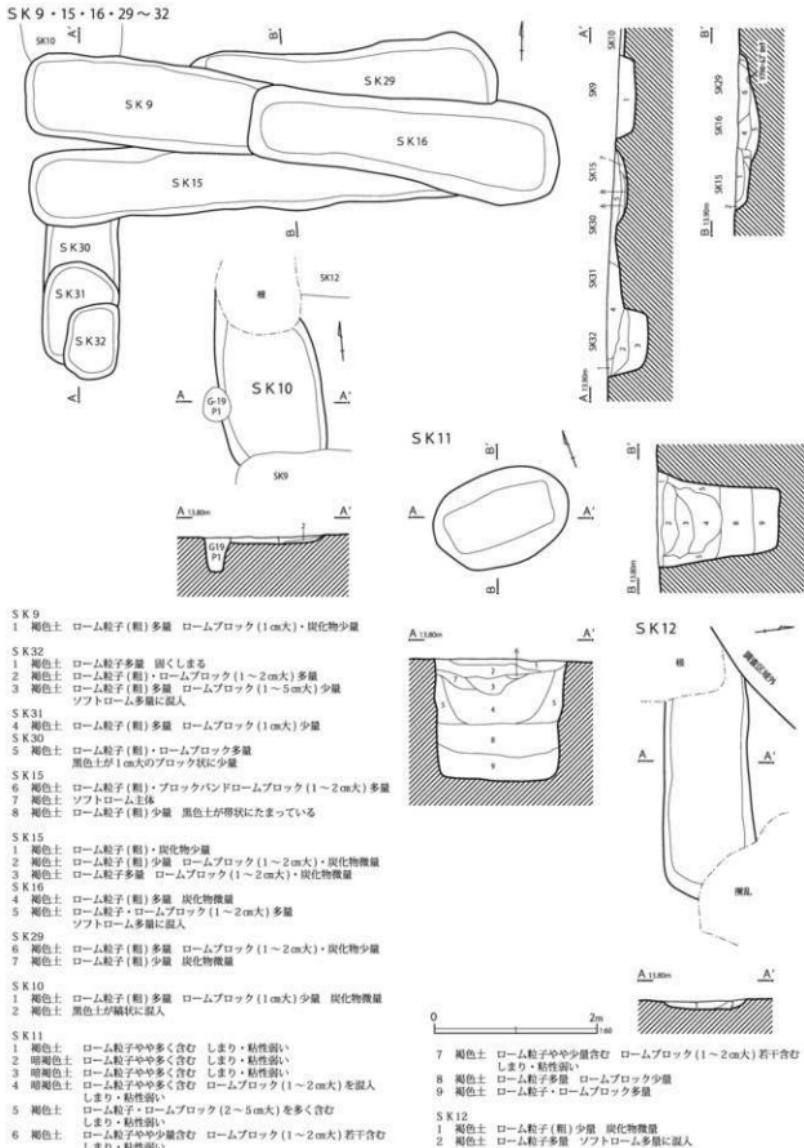
このほか、瓦10点（軒桟瓦1、道具瓦1、桟瓦ないし平瓦8）や硝子製ランプ類が出土しており、廃絶は第1号土壤とほぼ同時期と考えられる。

第2号土壤は単独で検出された土壤で、出土した遺物は陶器1点、瓦2点である。第150図17は

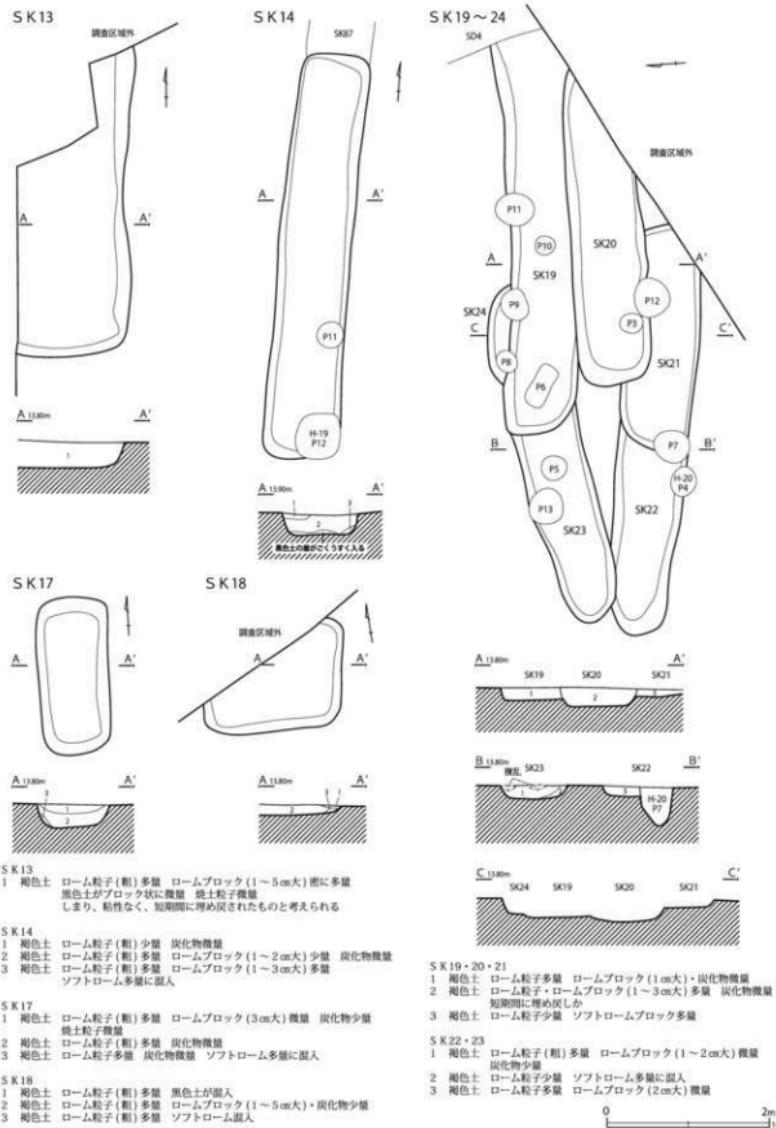
陶器甕類の胴部破片で、外面に褐色の鉄軸が掛けられる。胎土は炻器質で白色粒子の混入が極めて多い。

第3～7号土壤の5基は、重複して検出された。最も新しい土壤が第6号土壤で、第7号土壤、第5号土壤、第4号土壤、第3号土壤へと古くなっている。

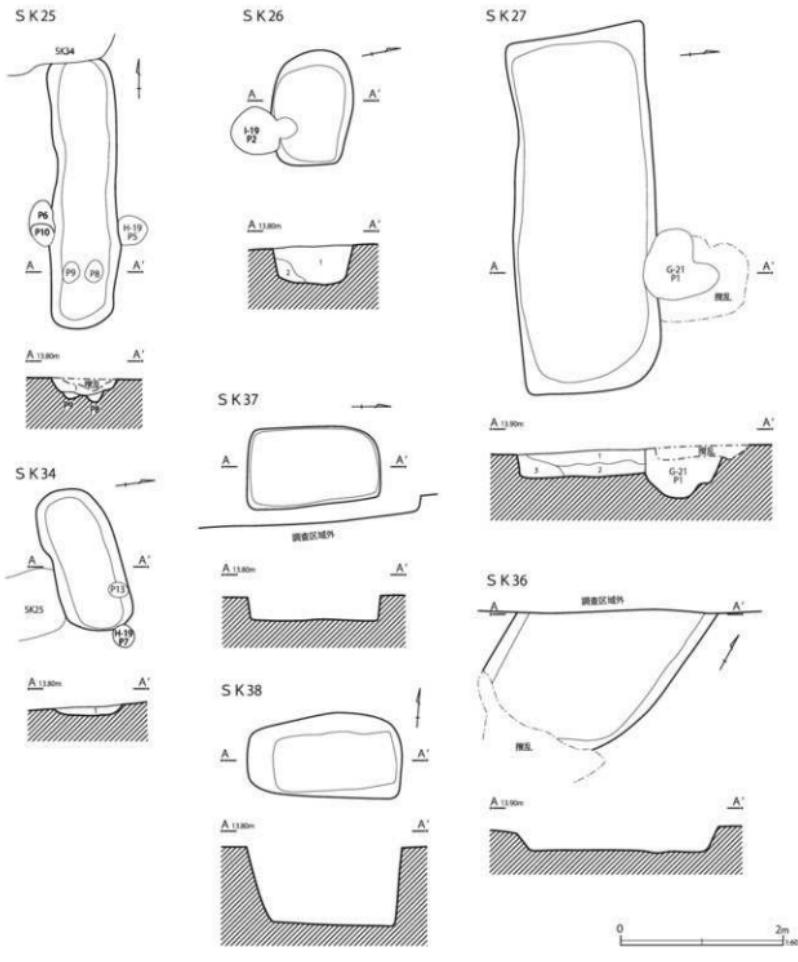
第4号土壤は、土層では他の遺構と重複しているが、平面上では確認できなかった。



第152図 土壌 (3)



第153図 土壌 (4)



第154図 土壌 (5)

2区土壤 (第152～156図)

2区からは、第9～27、29、30、34、36～38、87号土壤の26基が検出された。土壤は2区の西側に分布が集中していた。土壤には、中世に使用されたものも含まれる可能性があるが、覆土の状況などから近世として扱った。

第9、10、15、16、29～32号土壤の8基は重複して検出された。土壤から、第16号土壤は、第SK9

15、29号土壤に壊されている。第15号土壤は、第30号土壤に壊され、第30号土壤は第31号土壤に壊される。第31号土壤は第32号土壤を壊している。第155図30～32は第9号土壤から出土した、かわらけ3点である。30の内面には沈線状の強いナデ痕跡が同心円に残る。胎土は粉っぽく、摩耗が激しい。

第11号土壤は、深く掘り込まれた土壤で、検

SK11

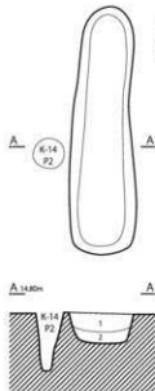


第155図 土壤出土遺物 (4)

第54表 第9・11号土壤出土遺物観察表 (第155図)

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
30	かわらけ	小皿	—	[1.7]	(7.2)	AHK	10	普通	にぶい橙	SK9 内面強い渦巻状ナデ 胎土粉質	36-13	
31	かわらけ	小皿	—	[1.4]	(5.5)	AHK	10	普通	にぶい橙	SK9 胎土粉質 全体磨滅度高い		
33	かわらけ	小皿	—	[1.3]	(6.4)	EHI	5	普通	橙	SK9 底部系切瓶(左) 内面黒化		
34	白磁	皿	—	[0.4]	—	—	5	良好	白	SK11 中国景德鎮窯系か 内外面施釉 底部細片	36-14	
	かわらけ	小皿	(12.2)	2.9	(7.1)	AOHI	40	普通	にぶい橙	SK11 上層 底部系切瓶(右) 胎土粉質	36-15	

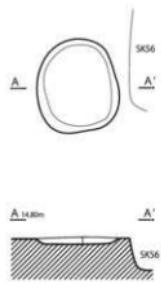
SK6



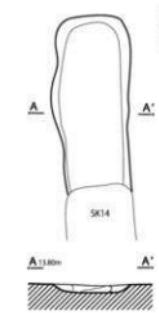
SK69



SK85



SK87



SK56
1 棕色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1cm大)微量
2 棕色土 黒色土ブロック状に雜質入る

SK85
1 棕色土 灰褐色土・黒色土ブロック多量

SK87
1 棕色土 ローム粒子(粗)少量 ロームブロック(1～2cm大)・炭化物微量
2 棕色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1cm大)・炭化物微量

第156図 土壤 (6)

第55表 近世土壙計測表

遺構番号	位置	平面形	長径方向	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	重複遺構	
SK1	F-23	方形	N-1° -W	3.40	2.64	2.00		
SK2	F-G-22	不整形	N-0°	2.48	1.33	0.68		
SK3	E-23	不整形	N-7° -W	(3.20)	2.83	0.56	SK4・5・6	
SK4	F-22・23	不整形	N-88° -E	(5.00)	0.60	0.46	SK3・5	
SK5	E・F-23	不整形	N-88° -E	(1.40)	1.50	0.75	SK3・4・6・7	
SK6	E・F-23	不整形	N-88° -E	(1.00)	(0.50)	0.46	SK3・5・7	
SK7	E・F-23	不整形	N-88° -E	(2.13)	1.75	1.01	SK5・6	
SK8	F-23	方形	N-0°	3.70	3.04	1.62		
SK9	G-H-19	長方形	N-85° -W	(2.78)	1.05	0.23	SK10・15・16・29	
SK10	G-19	不明	N-4° -W	(1.46)	1.24	0.11	SK10 G-19GP1	
SK11	H-20	椭円形	N-88° -E	1.71	1.14	1.50		
SK12	G-19	隅丸長方形	N-82° -W	(2.50)	1.00	0.13		
SK13	G-H-19	不明	N-0°	(2.58)	(1.32)	0.35		
SK14	H-19	隅丸長方形	N-4° -E	4.95	0.90	0.27	H-19GP1・2	
SK15	H-19	隅丸長方形	N-83° -W	(4.50)	0.83	0.22	SK9・16・30	
SK16	H-19・20	隅丸長方形	N-84° -W	3.81	1.20	0.28	SK9・15・29	
SK17	H-20	隅丸長方形	N-0°	1.91	0.87	0.28		
SK18	G-19	方形	N-87° -W	1.67	1.32	0.12		
SK19	H-20	隅丸長方形	N-88° -W	(4.90)	0.88	0.17	SD4 SK20・23・24 H-20GP6・8～11	
SK20	H-20	隅丸長方形	N-90°	(3.35)	0.90	0.28	SK19・20 H-20GP3・12	
SK21	H-20	隅丸長方形	N-80° -W	2.75	0.90	0.14	SK20・22 H-20GP7・12	
SK22	H-19・20	隅丸長方形	N-80° -W	(2.25)	0.82	0.14	SK21・23 H-20GP4・7	
SK23	H-19・20	隅丸長方形	N-77° -E	(2.40)	0.80	0.18	SK19・22 H-20GP5・13	
SK24	H-20	不明	N-80° -W	(1.20)	(0.25)	0.20	SK19 H-20GP8・9	
SK25	H19	隅丸長方形	N-0°	(3.23)	0.73	0.11	SK34 H-19GP5・6・8・9・10	
SK26	H-I-19	不整形	N-72° -W	1.40	0.97	0.46		
SK27	G-20・21	隅丸長方形	N-86° -W	4.37	1.63	0.33	G-21GP1	
SK28	欠番							
SK29	G-H-19・20	隅丸長方形	N-89° -E	3.72	(0.70)	0.19	SK9・16	
SK30	H-19	不明	N-0°	(0.43)	0.90	0.09	SK15・30	
SK31	欠番							
SK32	H-19	椭円形	N-80° -E	1.80	0.80	0.14	SK25 H-19GP7・13	
SK33	欠番							
SK34	G-19・20	不明	N-0°	(1.95)	1.92	0.22		
SK35	G-21	隅丸長方形	N-0°	1.63	0.94	0.32		
SK36	G-20・21	隅丸長方形	N-86° -E	1.80	0.98	0.96		
SK37	J-K-14	隅丸長方形	N-0°	3.02	0.75	0.35		
SK38	K-14	椭円形	N-18° -W	1.32	0.60	0.39	K-14GPS	
SK39	K-14	円形	N-15° -W	1.14	0.98	0.10	K-14GP1 より変更	
SK40	H-19	隅丸長方形	N-5° -E	(2.08)	0.80	0.11	SD5 より変更 SK14	

出された平面形は椭円形であるが、底面は方形となっている。出土した遺物はかわらけ2点、磁器1点である。第155図33、34は図示した遺物である。33は細片だが、中国産の白磁と思われる。34はかわらけで、内底面中心は僅かに窪む。胎土は粉っぽく、少量の角閃石が含まれる。

第19～24号土壙は、重複して検出された。第20号土壙は、第19、21号土壙を壊していた。他の新旧関係は不明である。

3区土壙（第152～156図）

3区から検出された土壙は第56、69、85号土壙の3基である。中世の堀である第1号溝跡と近世

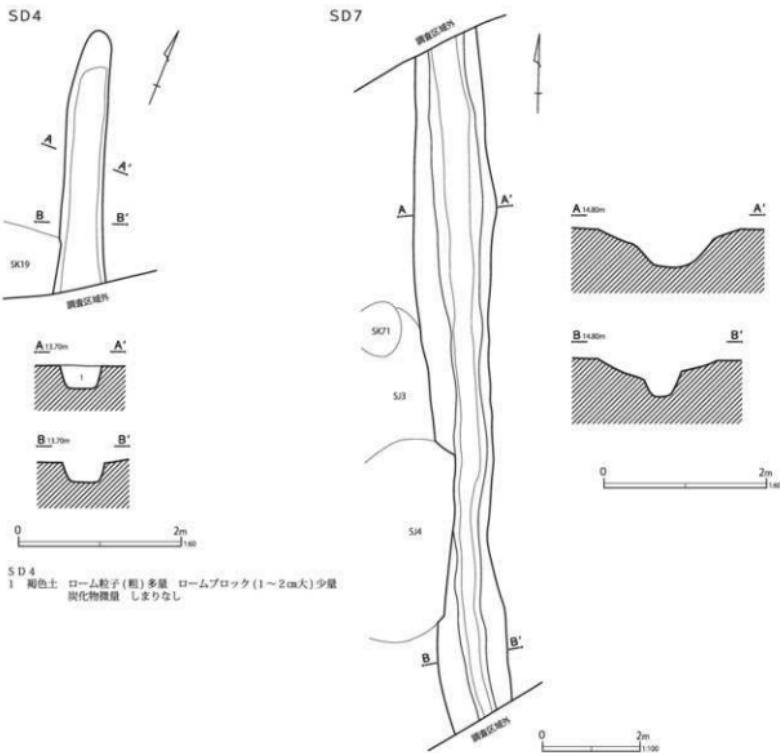
の第2号溝跡の間から検出された。遺物は検出されなかった。

（2）溝跡

近世の溝跡は、第2、4、7号溝跡の3条が検出された。第2号溝跡については、中世の堀跡で記した。

第4号溝跡（第157図）

第4号溝跡は、J～L-13、14グリッドから検出された。上辺の幅0.48m、下辺の幅0.33m、深さ0.30mである。方向は、N-15° -Wである。図示できる遺物は検出されなかつた。



第157図 溝跡

第7号溝跡（第157図）

第7号溝跡は、J～L-13、14グリッドから検出された。上辺の最大幅0.96m、下辺の幅0.36m、深さ0.48mである。方向は、N-3°-Wである。堀の方向とほぼ同じであるため、当初は中世と考えられたが、図示はしなかったが壁面で観察された土層から近世と判断した。図示できる遺物は検出されなかった。

(3) ピット（第158～160図）

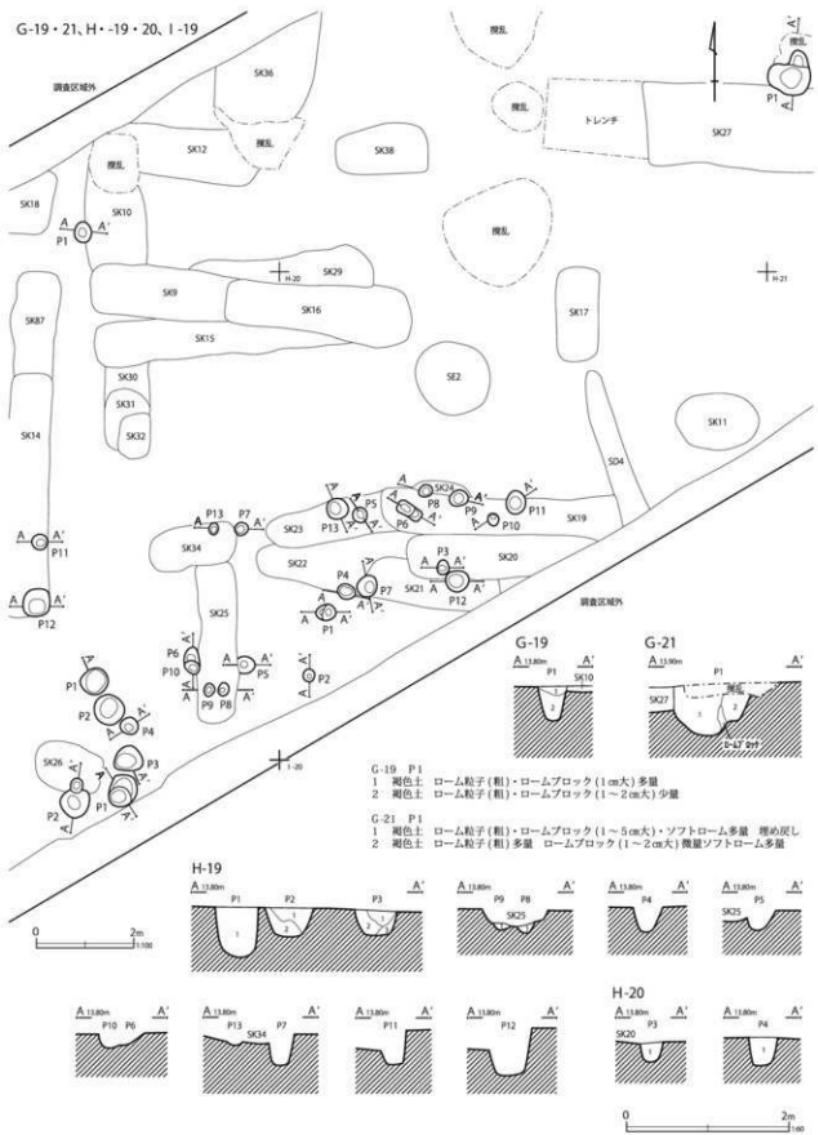
近世のピットは、2区から28基、3区から20基

が検出された。覆土や出土位置から、近世と判断した。2区のピットは、土壤と同じ分布範囲から検出された。3区のピットは、堀跡周辺から検出された。ピットの出土位置、規模については第54表に示した。

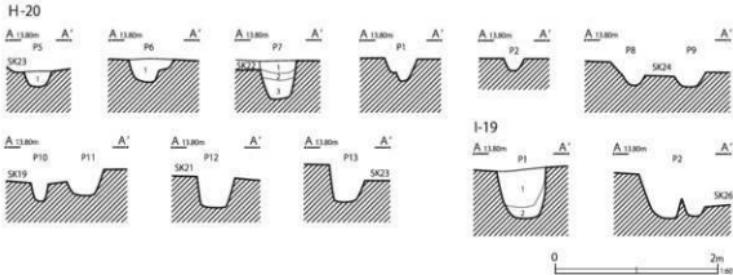
(4) グリッド出土遺物（第161図）

第161図1、2はグリッドから出土した金属製品である。いずれも1区から検出されている。近世以降の所産と考えられる。

1は包丁の刃部分で、2は蹄鉄である。



第158図 ピット (1)



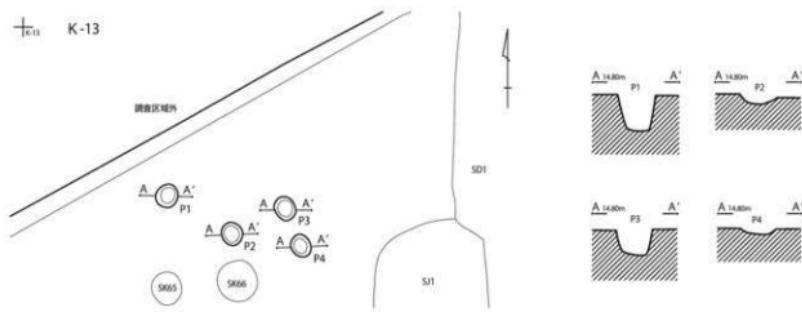
- H-20 P 1**
1 喬褐色土 ローム粒子(0.5cm大)含む 黏性ややあり しまりなし
- P 2**
1 喬褐色土 ローム粒子(0.5cm大)多量 黏性ややあり しまりなし
2 関色土 ローム主体(喬褐色土混じる) 黏性ややあり しまりあり
- P 3**
1 喬褐色土 ローム粒子(0.5cm大)含む 黏性ややあり しまりなし
2 喬褐色土 ロームブロック(1cm大)多量 黏性ややあり しまりなし
3 喬褐色土 ロームブロック(2cm大)含む 黏性ややあり しまりあり
- P 8・9**
1 黒色土 ローム粒子少量 ソフトロームブロック微量
- I-19 P 1**
1 喬褐色土 ローム粒子(1cm大)少量 ローム粒子(0.5cm大)含む 黏性ややあり しまりなし
2 喬褐色土 ロームブロック(1cm大)含む 黏性ややあり しまりなし
- P 4**
1 喬褐色土 ローム粒子(粗)多量 炭化物微量
- P 5**
1 喬褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1~2cm大)・炭化物微量
- P 6**
1 喬褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~10cm大)多量 上層に搅乱
- P 7**
1 喬褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1~3cm大)少量 しまり・粘性なし
2 喬褐色土 ローム粒子(粗)多量 ロームブロック(1cm大)少量 しまり・粘性なし
3 喬褐色土 ローム粒子(粗)・ロームブロック(1~5cm大)多量 しまり・粘性なし

第159図 ピット(2)

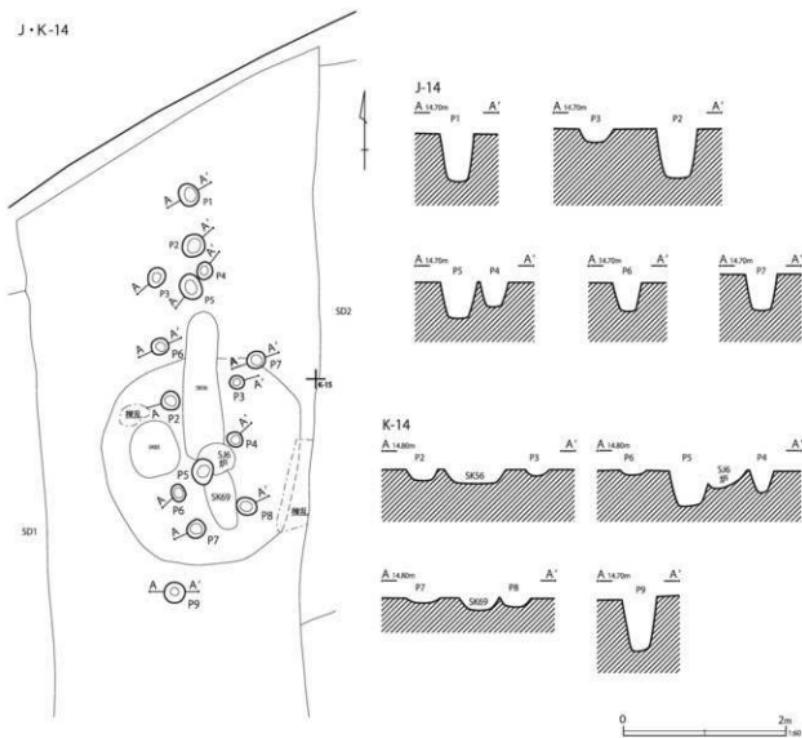
第56表 ピット計測表

グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
H-20	P 1	55.0	54.0	63.0	H-20	P 4	37.0	30.0	33.3	J-14	P 1	47.0	38.0	57.3
	P 2	60.0	57.0	37.4		P 5	32.0	29.0	20.4		P 2	48.0	43.0	58.2
	P 3	56.0	48.0	36.0		P 6	52.0	25.0	27.0		P 3	42.0	33.0	15.0
	P 4	38.0	35.0	31.0		P 7	43.0	39.0	45.3		P 4	35.0	30.0	28.0
	P 5	[36.0]	34.0	25.2		P 8	30.0	25.0	14.2		P 5	53.0	41.0	43.5
	P 6	[28.0]	28.0	17.2		P 9	40.0	33.0	18.2		P 6	33.0	31.0	33.0
I-19	P 7	30.0	26.0	30.6	K-13	P 10	25.0	23.0	21.2	K-14	P 7	38.0	33.0	43.3
	P 8	28.0	21.0	15.0		P 11	46.0	40.0	32.9		P 1	欠番		
	P 9	25.0	20.0	9.6		P 12	46.0	45.0	38.1		P 2	37.0	37.0	26.0
	P 10	32.0	25.0	18.6		P 13	43.0	40.0	29.0		P 3	30.0	26.0	23.8
	P 11	32.0	30.0	42.0		P 1	42.0	33.0	41.0		P 4	34.0	30.0	53.0
	P 12	54.0	54.0	58.0		P 1	93.0	80.0	65.4		P 5	51.0	43.0	45.2
H-20	P 13	24.0	19.0	15.2	K-13	P 1	48.0	46.0	46.6	K-14	P 6	37.0	28.0	26.8
	P 1	40.0	32.0	27.8		P 2	45.0	43.0	8.5		P 7	38.0	36.0	26.2
	P 2	24.0	23.0	15.5		P 3	48.0	43.0	32.8		P 8	43.0	35.0	31.3
	P 3	30.0	24.0	26.5		P 4	46.0	39.0	7.1		P 9	45.0	42.0	66.8

+c11 K-13

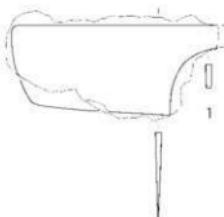


J・K-14

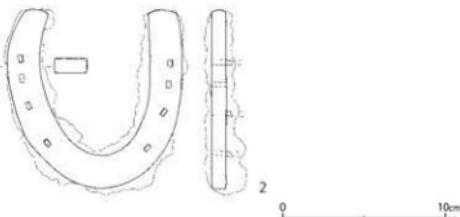


第160図 ピット (3)

1区トレンチ



1区一括



第161図 グリッド出土遺物

第57表 グリッド出土金属製品観察表（第161図）

番号	出土位置	種別	器種	法量	備考	図版
1	1区トレンチ	鉄製品	包丁	長さ [12.8]cm 刃長 [9.7]cm 刃幅 5.5cm 背幅 0.4cm 重さ 119.2g		48-7
2	1区一括	鉄製品	踏鉄	縦 [11.0]cm 横 10.8cm 厚さ 0.9cm 重さ 256.7g		48-7

第58表 遺構名新旧対照表

新	旧	新	旧
SB1P1	I-186r P 11	SB2P5	J-166r P 38
SB1P2	I-186r P 18	SB2P6	J-166r P 15
SB1P3	I-186r P 9	SB2P7	J-166r P 20
SB1P4	I-186r P 8	SB2P8	I-166r P 14
SB1P5	第39号土壤	SB2P9	I-166r P 10
SB1P6	I-176r P 39	SB2P10	I-176r P 93
SB1P7	I-176r P 71	SB2P11	I-176r P 78
SB1P8	I-176r P 84	SB2P12	I-176r P 45
SB1P9	I-176r P 35	H-18 P 21	第82号土壤
SB1P10	I-176r P 54	I-17 P 133	第62号土壤
SB1P11	I-176r P 50	I-17 P 134	第49号土壤
SB1P12	I-176r P 128	I-17 P 135	第53号土壤
SB1P13	I-186r P 24	I-18 P 46	第46号土壤
SB1P14	I-186r P 33	第1号埋蔵鉄	第8号井戸跡
SB1P15	I-176r P 70	第2号埋蔵鉄	第4号井戸跡
SB1P16	I-176r P 63	第4号埋蔵鉄	第6号井戸跡
SB2P1	I-176r P 15	第16号土壤	第6号溝跡
SB2P2	J-176r P 9	第85号土壤	K-146r P 1
SB2P3	J-176r P 21	第86号土壤	第8号溝跡
SB2P4	J-166r P 50	第87号土壤	第5号溝跡

V 自然化学分析

新井堀の内遺跡から出土した埋蔵銭からは、大量の銭貨と綱紐が検出された。容器である甕には、漆緞ぎが行われていた。他の埋蔵銭の甕内面

からは、布片が検出された。そこで、それらについて下記の自然科学分析を行った。木簡については破壊分析となるため、行わなかった。

1 新井堀の内遺跡出土銭貨の蛍光X線分析

1はじめに

蓮田市黒浜地内に所在する新井堀の内遺跡では、15世紀前半の常滑焼の大甕に納められた大量の埋蔵銭が出土している。ここでは、大甕中の銭貨について、蛍光X線分析を行い、その材質を検討した。

2 試料と方法

第59表 分析対象一覧（第162図）

分析No	拂団番号	銭種	初鑄年・国	備考
1	第100図4	乾元重寶	758 唐	
2	第94図4	開元通寶	612 唐	
3	第84図21	太平通寶	976 北宋	
4	第85図34	景德元寶	1004 北宋	
5	第85図49	天聖元寶	1023 北宋	
6	第86図57	景祐元寶	1034 北宋	
7	第96図54	熙寧元寶	1068 北宋	
8	第97図64	元豐通寶	1078 北宋	
9	第97図73	元祐通寶	1078 北宋 築喜	
10	第89図122	元祐通寶	1096 北宋	
11	第89図124	紹聖元寶	1094 北宋	
12	第90図146	大觀通寶	1107 北宋	
13	第90図147	政和通寶	1111 北宋	
14	第90図156	淳祐元寶	1241 南宋	
15	第86図62	皇宋通寶	1038 北宋	
16	第91図157	景定元寶	1260 南宋	
17	第99図108	洪武通寶	1368 明	
18	第91図166	永樂通寶	1408 明	
19	第86図55	明道元寶	1032 北宋	
20	第98図96	宣和通寶	1119 北宋	

分析対象は、第3号埋蔵銭の大甕内より出土した銭貨20点である（第59表、第162図）。分析は、非破壊で錆の上から測定した。測定位置を第162図に示す。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計 SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000 μAのロジウム（Rh）ターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器である。また、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することでS/N比の改善が図れる。測定条件は、管電圧50kV、一次フィルタ・測定時間（s）の組み合わせがPb測定用・500s、Cd測定用・1000sの2条件、管電流自動設定、照射径8mm、試料室内雰囲気大気に設定した。定量分析は、MBH Analytical社の32X LB14 (batch A) を用いて補正したファンダメンタル・パラメータ法 (FP法) による半定量分析を装置付属ソフトを用いて行った。

なお、今回行った分析は、錆の上から非破壊で測定している。銅合金製品の腐食は均一には進行せず、化学組成も大きく変化し得るため、今回得られた結果は厳密な値として比較検討すべきではなく、おおよまかに、定性的な結果としてとらえる必要がある。

3 結果および考察

第60表にFP法による半定量分析の結果を示す。アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、鉄（Fe）といった、表面の汚れに大きく影響される元素を除くと、ニッケル（Ni）、銅（Cu）、ヒ素（As）、銀（Ag）、スズ（Sn）、アンチモン（Sb）、鉛（Pb）、ビスマス（Bi）が検出された。

いずれも銅 (Cu)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) が主に検出され、Cu-Sn-Pb系の青銅製と考えられる。全体的に鉛 (Pb) の方がスズ (Sn) よりも多い傾向がみられたが、上述の通り非破壊分析であるため、これらの傾向が、錢貨本来の化学組成によるものか、腐食の影響によるものかは不明である。

銅 (Cu)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) 以外の元素では、ニッケル (Ni)、ヒ素 (As)、銀 (Ag)、アンチモン (Sb)、ビスマス (Bi) が検出された。分析No. 2の開元通寶は、ニッケル (Ni) がやや多く検出

された。分析No.7の熙寧元寶はヒ素 (As) がやや多く検出された。しかし、これら元素が明らかに多いといえるほど含まれる遺物はなかった。20点いずれも、ほとんど銅 (Cu)、スズ (Sn)、鉛 (Pb)のみから成る化学組成と推定される。

4 おわりに

新井堀の内遺跡より出土した大甕中の錢貨20点の材質を分析した結果、いずれもCu-Sn-Pb系の青銅製と考えられた。

参考文献

- 中井 泉編 (2005) 蛍光X線分析の実際. 242p, 朝倉書店。
西本右子・佐々木稔 (2002) 公鑄錢・模鑄錢の化学分析. ぶんせき, 10, 585-586.

第60表 半定量分析結果 (mass%)

分析No.	錢種	初鑄年・国	Cu	Sn	Pb	Ni	As	Ag	Sb	Bi
1	乾元重寶	758 唐	62.85	15.09	21.91	0.06	tr	0.04	0.04	—
2	開元通寶	612 唐	49.28	14.07	36.16	0.34	tr	0.03	0.02	0.10
3	太平通寶	976 北宋	47.51	18.12	34.10	0.05	—	0.09	0.03	0.09
4	景德元寶	1004 北宋	64.38	12.69	22.87	—	—	0.04	0.02	—
5	天聖元寶	1023 北宋	67.55	10.88	21.32	0.03	tr	0.07	0.07	0.09
6	景祐元寶	1034 北宋	61.96	13.92	23.60	0.03	0.18	0.19	0.03	0.08
7	熙寧元寶	1068 北宋	69.04	14.39	15.54	—	0.67	0.13	0.08	0.15
8	元豐通寶	1078 北宋	68.85	11.09	20.03	—	—	0.02	0.01	—
9	元豐通寶	1078 北宋	62.36	12.84	24.78	—	—	0.01	0.01	—
10	祐祐通寶	1086 北宋	61.92	14.87	22.95	—	tr	0.07	0.19	—
11	紹聖元寶	1094 北宋	67.07	8.81	23.65	—	tr	0.08	0.11	0.29
12	大觀通寶	1107 北宋	72.61	7.58	19.55	0.02	tr	0.05	0.08	0.11
13	政和通寶	1111 北宋	53.96	9.42	36.26	—	tr	0.09	0.18	0.08
14	淳祐元寶	1241 南宋	68.38	8.76	22.44	0.03	0.22	0.01	0.04	0.14
15	皇宋通寶	1038 北宋	66.77	8.89	24.25	—	tr	0.02	0.06	—
16	景定元寶	1260 南宋	44.14	3.39	52.09	0.03	tr	0.05	0.14	0.16
17	洪武通寶	1368 明	64.05	9.24	26.38	0.02	tr	0.07	0.15	0.10
18	永樂通寶	1408 明	62.00	8.86	28.67	0.03	tr	0.07	0.21	0.15
19	明道元寶	1032 北宋	67.78	11.04	20.94	0.03	—	0.12	0.03	0.07
20	宣和通寶	1119 北宋	65.07	10.26	24.46	0.02	tr	0.02	0.08	0.09

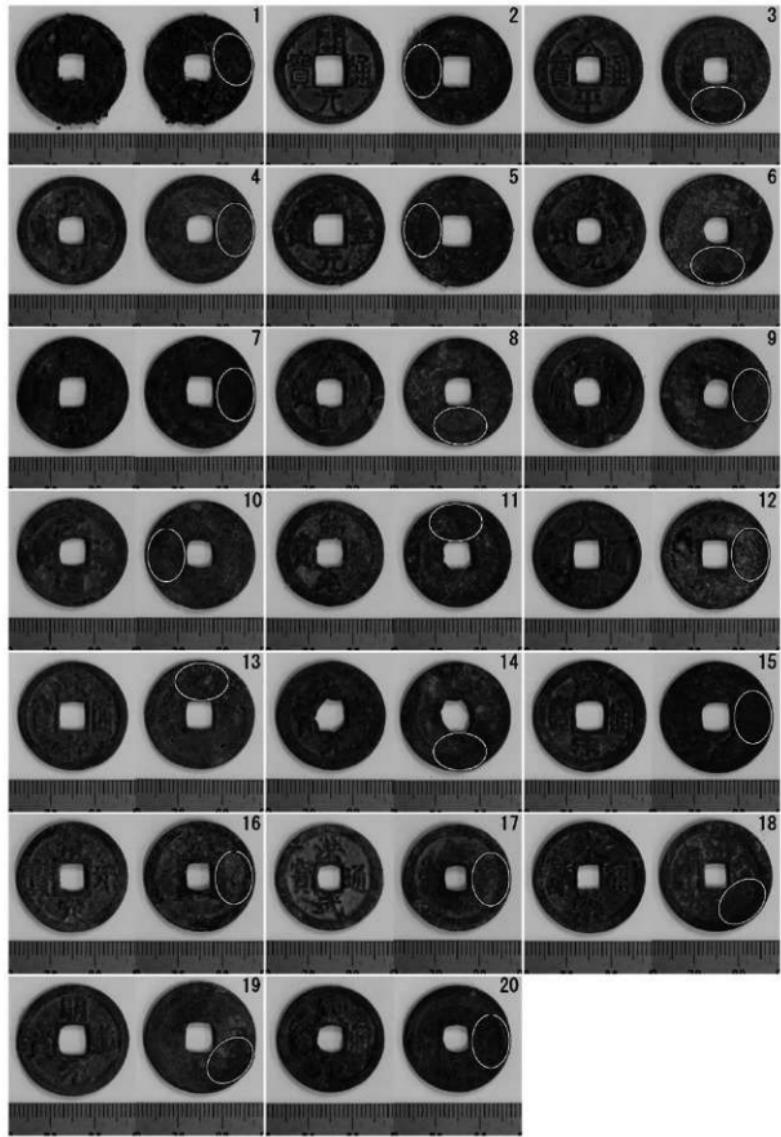
* tr :痕跡量

2 新井堀の内遺跡出土の縁紐の材料について

1 はじめに

埼玉県蓮田市の新井堀の内遺跡から出土した縁紐の材料の同定を試みた。なお、試料の採取は竹原が、同定および報告書作成は小林が行った。

また、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。



第162図 分析対象遺物と測定位置（右上数字は分析No.）

2 試料と方法

試料は、新井堀の内遺跡の第3号埋蔵鉄から出土した常滑焼大甕の内部に納められていた縫綱の紐10点である。発掘調査所見による推定時期は、15世紀前半と考えられている。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3 結果

同定の結果、単子葉のイネ科？が9点、同定不可が1点であった。同定結果を第61表に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、第163図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) イネ科？ Gramineae ? 第163図 1a (No.

1)、2a (No.3)、3a (No.4)、4a (No.5)、5a (No.6)、6a (No.7)、7a (No.9)、8a (No.10)

向軸側の原生木部、その左右の2個の後生木部、背軸側の箇部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の構造であるが、材の収縮が激しく、維管束が明瞭に確認できなかった。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束箇の細胞は比較的の薄い。

イネ科はタケ亜科やキビ亜科など7亜科がみられる単子葉植物であるが、対照標本が少なく、同定には至っていない。

(2) 同定不可 Un-known 第163図 9a (No.2)

試料の収縮が激しいため、材組織が壊れてしまい、同定が行えなかった。

4 考察

同定ができた縫紐9点は、いずれもイネ科？であった。イネ科植物の構造を基づいて縫紐を作り、縫綱に使用していたと考えられる。

第61表 新井堀の内遺跡出土縫紐の同定結果

試料No.	遺物No.	出土位置	器種	樹種	時期	備考	年代測定番号
1	紐No.1	第3号埋蔵鉄内	縫紐	イネ科？	15世紀前半	説明試料	
2	紐No.2	第3号埋蔵鉄内	縫紐	同定不可	15世紀前半	生試料	
3	紐No.3	第3号埋蔵鉄内	縫紐	イネ科？	15世紀前半	説明試料	PLD-39614
4	紐No.4	第3号埋蔵鉄内	縫紐	イネ科？	15世紀前半	説明試料	PLD-39615
5	紐No.5	第3号埋蔵鉄内	縫紐	イネ科？	15世紀前半	説明試料	
6	紐No.6	第3号埋蔵鉄内	縫紐	イネ科？	15世紀前半	説明試料	PLD-39616
7	紐No.7	第3号埋蔵鉄内	縫紐	イネ科？	15世紀前半	説明試料	PLD-39617
8	紐No.8	第3号埋蔵鉄内	縫紐	イネ科？	15世紀前半	説明試料	
9	紐No.9	第3号埋蔵鉄内	縫紐	イネ科？	15世紀前半	説明試料	
10	紐No.10	第3号埋蔵鉄内	縫紐	イネ科？	15世紀前半	説明試料	

3 新井堀の内遺跡出土の布片の同定

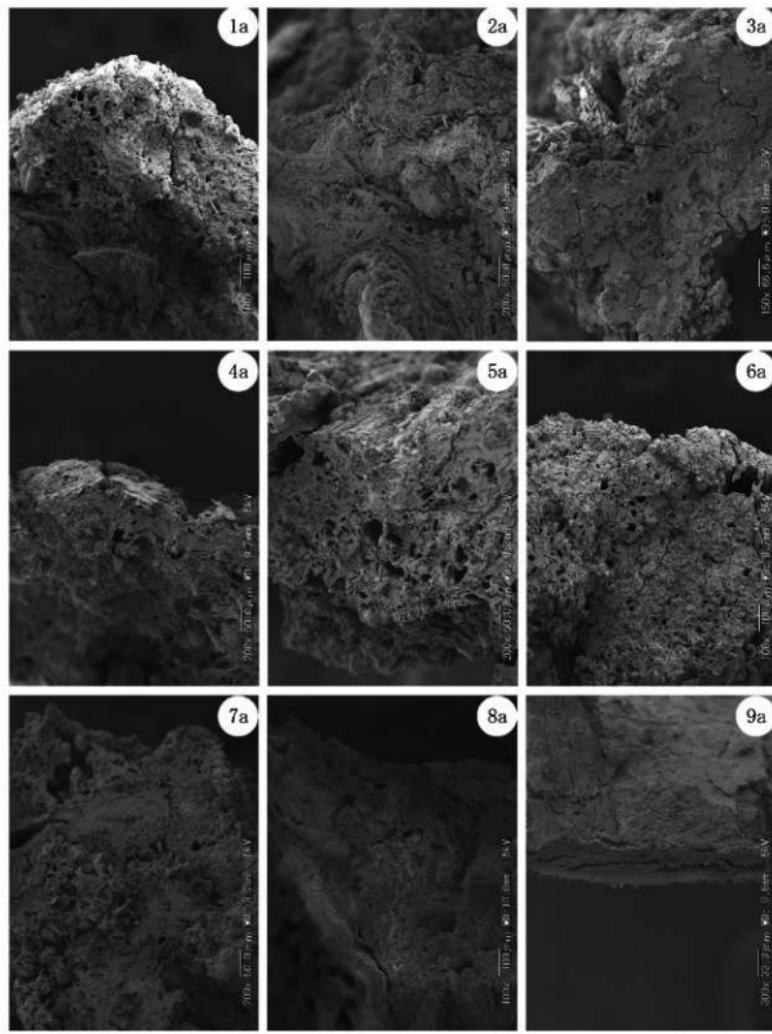
1 はじめに

蓮田市の新井堀の内遺跡から出土した布片について、素材の同定を行った。同定に際しては、東北大学の鈴木三男氏にご教示をいただいた。なお、同じ試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている。

2 試料と方法

試料は、縫綱が入った大甕が出土した埋蔵鉄第3号土壌付近の、第1号埋蔵鉄より出土した大甕破片の底部に残存していた布片である。

試料写真を撮影した後、試料の一部を切り取り、マイクロスコープで観察した。その後、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、イオンス



第163図 新井堀の内遺跡出土の縄紐の走査型電子顕微鏡写真

1a. イネ科? (No. 1)、2a. イネ科? (No. 3)、3a. イネ科? (No. 4)、4a. イネ科? (No. 5)、5a. イネ科? (No. 6)、
6a. イネ科? (No. 7)、7a. イネ科? (No. 9)、8a. イネ科? (No. 10)、9a. 同定不可 (No. 2)。
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

バッタで金コーティングを施して、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）を用いて観察と計測を行った。

3 結果

布片の織り方は平織で、織維は約0.5mm幅である。織維の本体は残存しておらず、織維の痕跡が圧痕の状態で観察できた。布の糸を構成している織維は細長く、断面はほぼ楕円形である。また、側面には壁孔などの文様はみられない。横断面で見ると、多くの織維細胞は一本一本独立している。1か所のみ、5～8本程度の織維細胞が結合した織維細胞塊のように見える部分がある（第164図-3の矢印）。

4 考察

観察結果から、織維細胞が多数密集した状態で使われるシナノキ、ニレ属（オヒヨウなど）、フジ、クズなどの可能性は除外できる。ワタ（木綿）は織維細胞が一本一本完全に独立しているので候補

になり得るが、乾燥した綿の織維は多くの場合、柔らかいゴムまりをへこませたように断面がU字型になる。今回の資料ではそのような形態は見られないため、ワタの可能性も除外できる。したがって、候補として残るのはカラムシなどのイラクサ科とアサであるが、イラクサ科の織維細胞は多くは一本一本独立し、それに何本かが結合した織維細胞塊が少数混じるのに対し、アサでは多くは何本かが結合した織維細胞塊で少数が独立した織維細胞である。織維細胞塊の細胞数はアサの方が多く、イラクサ科では少数（10本以下）が多い。ただし、アサでも布などで使っているうちに織維細胞塊が壊れてバラバラになって布が柔軟になるのが普通であり、使い込んだ布などでは織維細胞塊が小さく、また数も少なくなる傾向がある。

本試料では、第164図の矢印の位置で5～8本程度の織維細胞塊と思われる部分がみられたため、カラムシなどのイラクサ科の織維か、アサである可能性が高い。

4 新井堀の内遺跡出土大甕に貼られた漆の分析

1 はじめに

蓮田市黒浜地内に所在する新井堀の内遺跡では、大量の埋蔵銭が納められた15世紀前半の常滑焼の大甕が出土している。ここでは、大甕に貼り付けられていた漆とみられる物質について、塗膜薄片を作製し、構造と材質について検討した。なお、一部試料は放射性炭素年代測定が行われている。

2 試料と方法

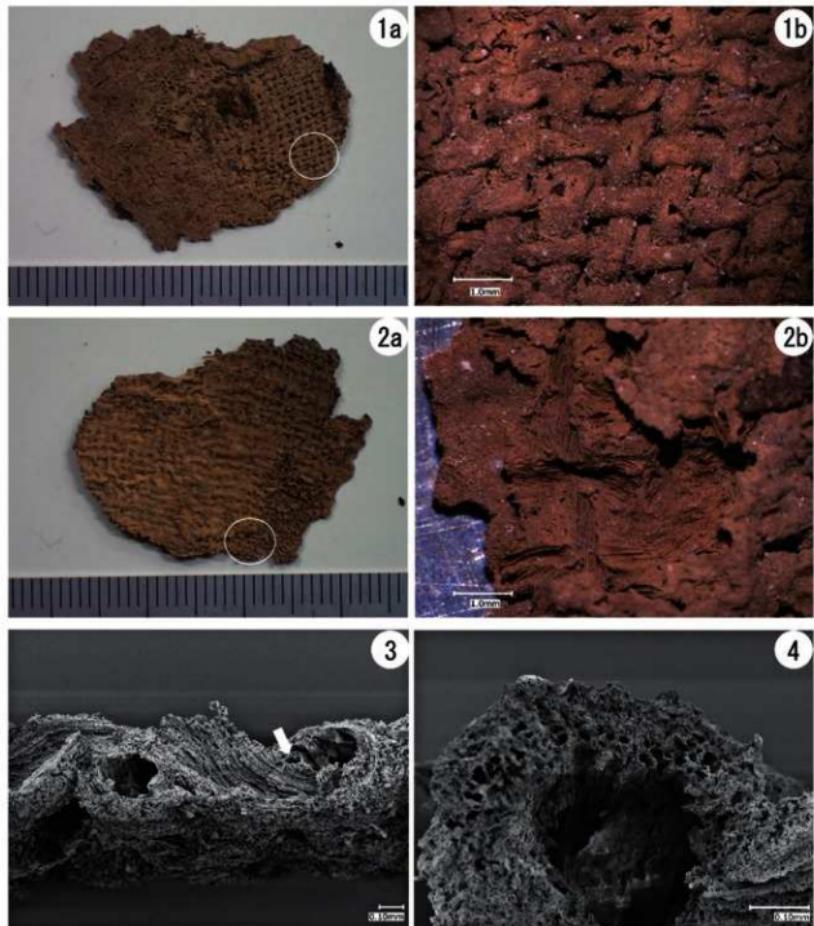
分析対象は、第3号埋蔵銭より出土した常滑焼大甕の内外に貼られた漆6点である。大甕は、亀裂が入っており、その亀裂部分を補強するように内外に布を漆で貼り付けられていると考えられ

る。大甕より採取した試料（第62表、第167図）から、必要量を分取し、分析試料とした。分析にあたっては、竹原が試料採取、藤根が赤外分光分析、米田・竹原が薄片作製、竹原が顕微鏡観察を行い、竹原が報告をまとめた。

第62表 分析対象一覧

分析No.	採取位置	備考
1	口縁部内面	年代測定を実施 (PLD-39618)
2	口縁部内面	
3	口縁部内面	
4	胴下部外面	
5	胴下部外面	
6	胴下部外面	

分析は、漆成分を調べるために、表面塗膜について、赤外分光分析を行った。また、断面構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査



第164図 新井塚の内遺跡出土の布片の試料写真と走査型電子顕微鏡写真
1.試料表の写真、2.試料裏の写真、3-4.横断面の走査型電子顕微鏡写真
(a : 試料全体、b : ○印箇所の拡大)

型電子顕微鏡による観察を行った。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて少量採取した試料を、押し潰して厚さ1mm程度に裁断した。臭化カリウム(KBr)結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は、日本分光株式会社製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計FT/IR-410、IRT-30-16を使用して、透過法により赤外吸収スペクトルを測定し、生漆の吸収スペクトルと比較・検討した。

構造観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム(#1000)を用いて厚さ約50μm前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡(日本電子株式会社製JSM-5900LV)による反射電子像観察を行った。その後、再度精密研磨フィルム(#1000)を用いて厚さ約20μm前後に調整した後、コーティング剤を塗布し、生物顕微鏡を用いて断面構造の観察を行った。

第63表 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

3 結果および考察

第168、169図に、塗膜薄片の生物顕微鏡写真と、走査型電子顕微鏡反射電子像を示す。第165、166図に、赤外吸収スペクトルを示す。図の縦軸は透過率(%)、横軸は波数(Wavenumber(cm⁻¹)；カイザー)を示す。各スペクトルはノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す(第63表)。

以下に、塗膜の分析結果について述べる。

[分析No.1]

塗膜薄片では、布と透明漆からなるb層が観察された(第168図-1a、1b)。布自体は残存していないが、漆塗膜中に多数の繊維を携った絹糸と緯糸の痕跡が観察された。大甕(胎土a層、なお土器胎土は採取していない)への接着面には、一部やや大きな空洞が観察された。

赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収(吸収No.7とNo.8)が明瞭に認められ、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致し、漆と同定された(第165図-1)。

[分析No.2]

塗膜薄片では、透明漆からなるb層が観察された(第168図-2a、2b)。分析No.2は、明瞭な布(糸)の痕跡は観察されなかったが、繊維の痕跡の可能性がある細かな空洞は多く観察された。

赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収(吸収No.7とNo.8)が明瞭に認められ、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致し、漆と同定された(第165図-2)。

[分析No.3]

塗膜薄片では、布と透明漆からなるb層が観察された(第168図-3a、3b)。布自体は残存していないが、漆塗膜中に多数の繊維を携った絹糸と緯糸の痕跡が観察された。大甕(胎土a層)への接着面には、大きな空洞が多数観察された。漆と布を大甕に貼り付ける際、それほど密着していないかったと考えられる。

赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収(吸収No.7とNo.8)が明瞭に認められ、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致し、漆と同定された(第165図-3)。

[分析No.4]

塗膜薄片では、布と透明漆からなるb層が観察された（第168図-4a、4b）。布自身は残存していないが、塗膜中に多数の繊維を含った絹糸または縫糸の痕跡が観察された。なお、反射電子像（第168図-4b）の表層のやや輝度の高い物質は、試料表面に付着した土砂と考えられる。

赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収No.7とNo.8）が明瞭に認められ、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致し、漆と同定された（第166図-1）。

[分析No.5]

塗膜薄片では、糸と透明漆からなるb層が観察された（第169図-1a、1b）。分析No.5は、明瞭な布の痕跡は観察されなかつたが、多数の繊維を含つた1本の糸の痕跡と、繊維の痕跡の可能性がある細かな空洞は多く観察された。接着面には、砂粒がやや多く含まれており、分析No.5周辺の接着時の胎土表面は、それほど清潔ではなかつたと考えられる。

赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収No.7とNo.8）が明瞭に認められ、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致し、漆と同定された（第166図-2）。

5 放射性炭素年代測定

1 はじめに

蓮田市黒浜地内に所在する新井堀の内遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行つた。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第64表のとおりである。PLD-39614～39617は、埋蔵銭第3号土壙より出土した常滑焼大甕内の埋蔵銭の縫糸とし

[分析No.6]

塗膜薄片では、布と透明漆からなるb層が観察された（第169図-2a、2b）。布自身は残存していないが、塗膜中に多数の繊維を含った絹糸と縫糸の痕跡が観察された。なお、反射電子像（第169図-2b）の表層のやや輝度の高い物質は、試料表面に付着した土砂と考えられる。

赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収No.7とNo.8）が明瞭に認められ、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致し、漆と同定された（第166図-3）。

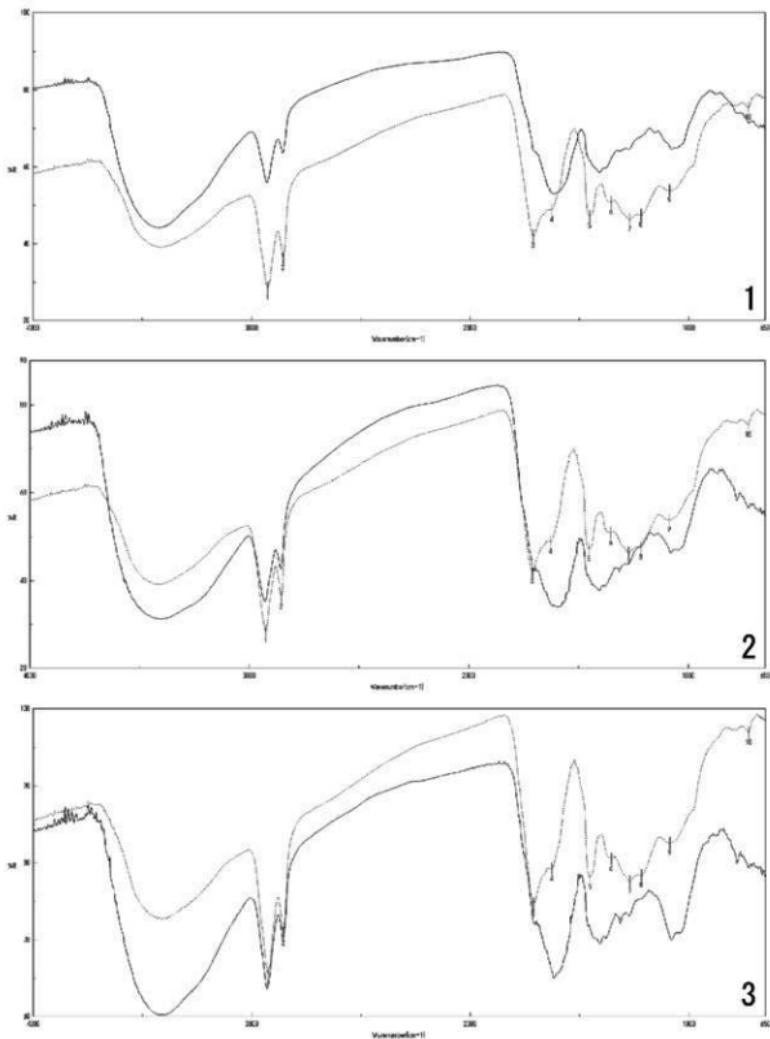
4 おわりに

大量の埋蔵銭が納められた15世紀前半の常滑焼の大甕に貼り付けられていた、漆とみられる物質について、構造と材質を検討した。

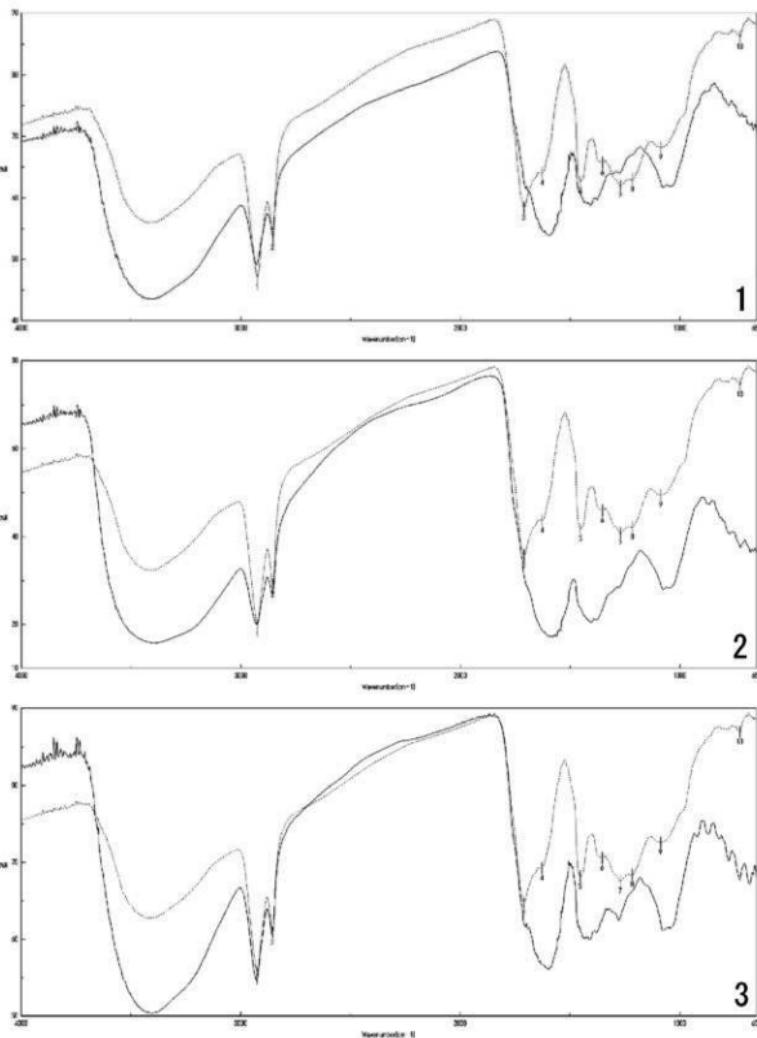
その結果、いずれも漆と同定された。大甕の亀裂の補強として、布を漆で貼り付けたと考えられるが、漆はいずれも1層であり、塗り重ねられた痕跡は確認されなかつた。大甕に、漆と布を使用して、一度に塗り付けて貼つたと考えられる。大量の縫糸を納めた大甕の補強としては心許なく思われ、土坑内に大甕を埋設する際の仮止め程度の役割だったのではないかと考えられる。

て使用されていたイネ科？の稈（組No.3、4、6、7）である。PLD-39618は、埋蔵銭第3号土壙より出土した常滑焼大甕の亀裂部分に貼り付けていた漆（漆No.1）である。なお、PLD-39618は、縫糸が1点測定不可であったため代替として測定した。PLD-39619は、第1号埋蔵銭から出土した大甕の内部にあつた布である。

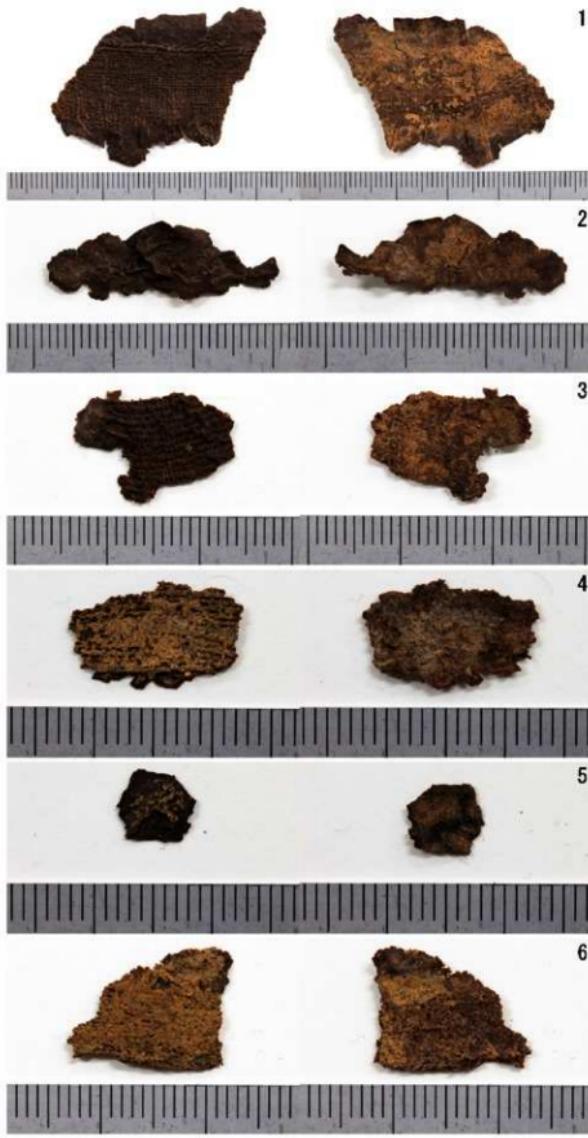
試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測



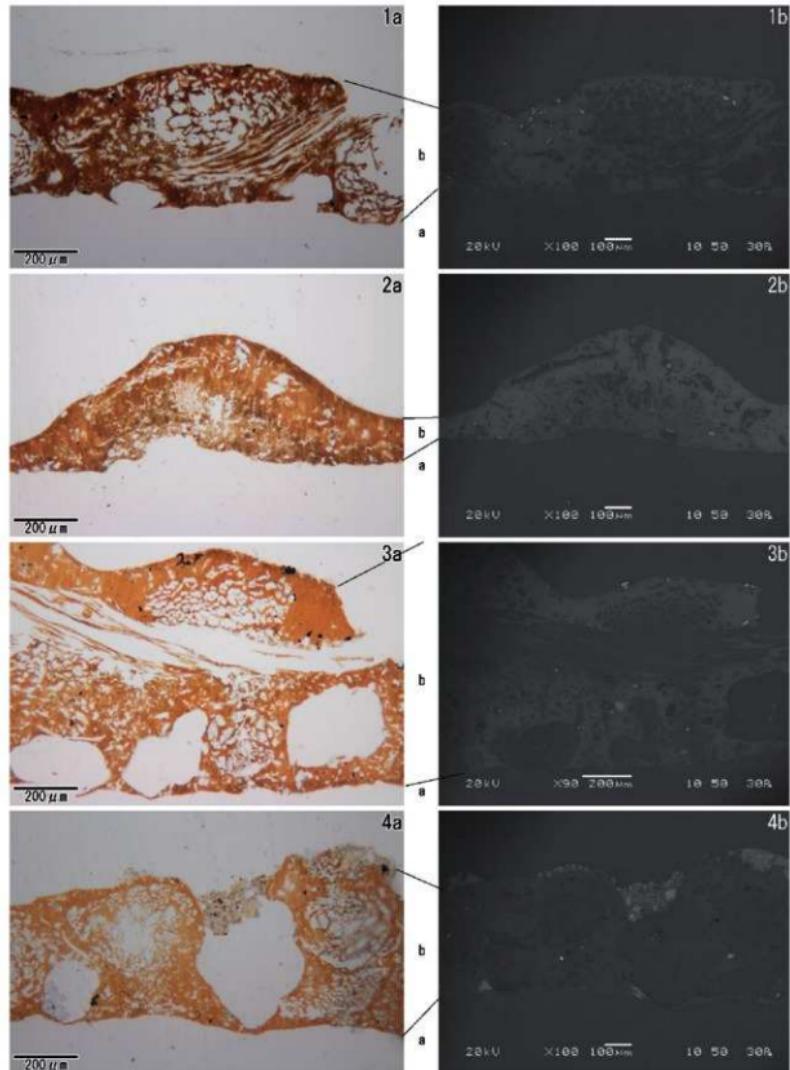
第165図 塗膜表面の赤外分光スペクトル（1）（実線：塗膜試料、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置）
1.分析No. 1 2.分析No. 2 3.分析No. 3



第166図 塗膜表面の赤外分光スペクトル（2）（実線：塗膜試料、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置）
1.分析No.4 2.分析No.5 3.分析No.6

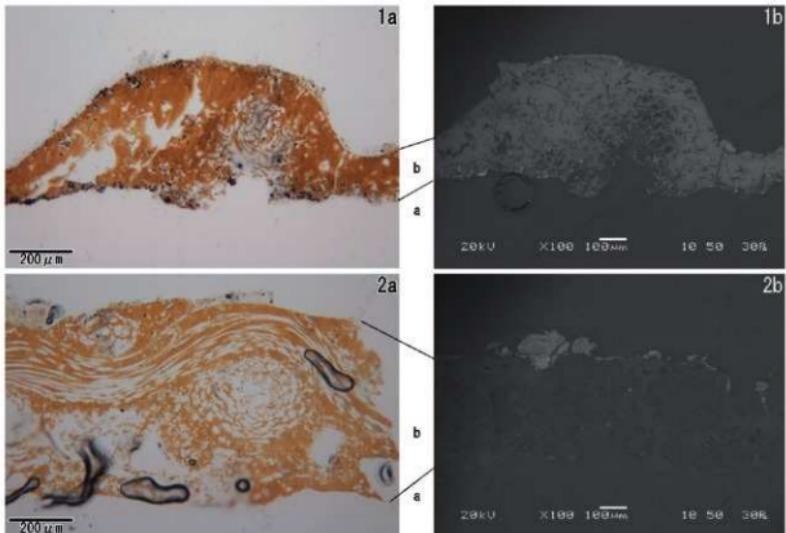


第167図 分析対象遺物（右上数字は分析No.）



第168図 塗膜構造(a)と反射電子像(b)(1)

1. 分析No.1 2. 分析No.2 3. 分析No.3 4. 分析No.4



第169図 塗膜構造(a)と反射電子像(b)(2)
1.分析No. 5 2.分析No. 6

定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

3 結果

第65表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、第170、171図に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測

定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68. 2%であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴Cの半減期5730 ± 40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の曆年較正には0xCal4. 3 (較正曲線データ : IntCal13) を使用した。なお、 1σ 曆年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68. 2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2σ 曆年代範囲は95. 4%信頼限界的曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラ

第64表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-39614	紐No. 3 遺構：第3号埋蔵鉄 常滑焼大甕内	種別：草本(イネ科?) 部位：稈 器種：繩紐 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：ヘキサン, 2-ブロバノール, アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 0.1 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-39615	紐No. 4 遺構：第3号埋蔵鉄 常滑焼大甕内	種別：草本(イネ科?) 部位：稈 器種：繩紐 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：ヘキサン, 2-ブロバノール, アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 0.1 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-39616	紐No. 6 遺構：第3号埋蔵鉄 常滑焼大甕内	種別：草本(イネ科?) 部位：稈 器種：繩紐 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：ヘキサン, 2-ブロバノール, アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 0.1 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-39617	紐No. 7 遺構：第3号埋蔵鉄 常滑焼大甕内	種別：草本(イネ科?) 部位：稈 器種：繩紐 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：ヘキサン, 2-ブロバノール, アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 0.1 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-39618	漆No. 1 遺構：第3号埋蔵鉄 常滑焼大甕内面付着	種別：漆塗膜 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-39619	遺構：第1号埋蔵鉄 常滑焼大甕内	種別：布 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：ヘキサン, 2-ブロバノール, アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

第65表 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
PLD-39614	-29.08 \pm 0.49	510 \pm 26	510 \pm 25	1410-1435 cal AD (68.2%)	1331-1338 cal AD (1.6%) 1397-1445 cal AD (93.8%)
PLD-39615	-26.43 \pm 0.17	479 \pm 23	480 \pm 25	1424-1442 cal AD (68.2%)	1414-1448 cal AD (95.4%)
PLD-39616	-27.50 \pm 0.20	452 \pm 22	450 \pm 20	1432-1450 cal AD (68.2%)	1420-1461 cal AD (95.4%)
PLD-39617	-24.66 \pm 0.33	480 \pm 23	480 \pm 25	1424-1441 cal AD (68.2%)	1414-1447 cal AD (95.4%)
PLD-39618	-26.48 \pm 0.28	433 \pm 23	435 \pm 25	1436-1460 cal AD (68.2%)	1427-1483 cal AD (95.4%)
PLD-39619	-26.52 \pm 0.39	478 \pm 23	480 \pm 25	1424-1442 cal AD (68.2%)	1414-1448 cal AD (95.4%)

フ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

4 考察

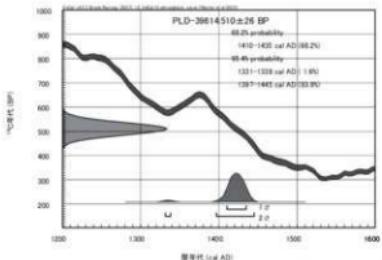
以下、 2σ 曆年代範囲（確率95.4%）に基づき、結果を整理する。

埋蔵銭第3号土壌出土常滑焼大甕内の埋蔵銭繙紐の紐No3 (PLD-39614) は、1331-1338 cal AD(1.6%)および1397-1445 cal AD(93.8%)で、14世紀前半および14世紀末から15世紀中頃の曆年代を示した。紐No4 (PLD-39615) は、1414-1448 cal AD(95.4%)で、15世紀前半から15世紀中頃の曆年代を示した。紐No6 (PLD-39616) は、1420-1461 cal AD(95.4%)で、15世紀前半から15世紀後半の曆年代を示した。紐No7 (PLD-39617) は、1414-1447 cal AD(95.4%)で、15世紀前半から15世紀中頃の曆年代を示した。

埋蔵銭第3号土壌出土常滑焼大甕に貼られ

参考文献

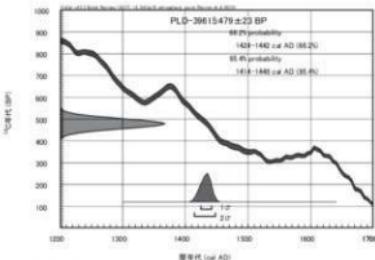
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本国第四紀学会.
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, L., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.



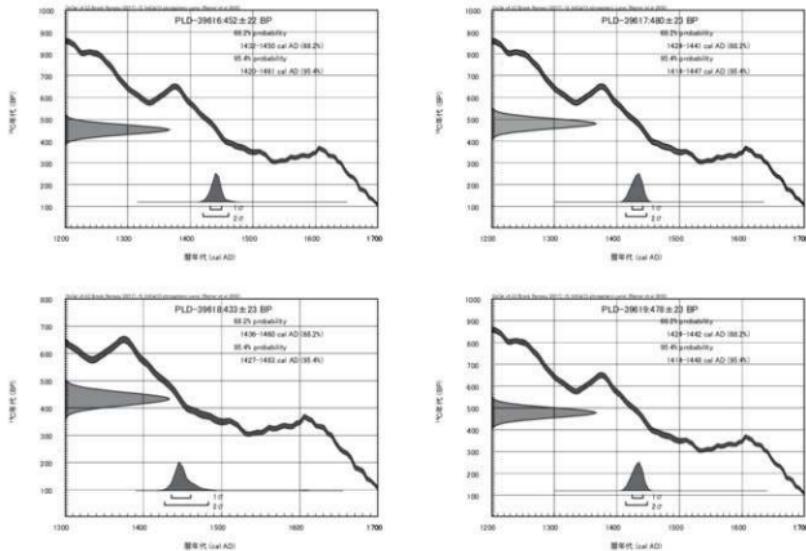
ていた漆No1 (PLD-39618) は、1427-1483 cal AD(95.4%)で、15世紀前半から15世紀後半の曆年代を示した。

埋蔵銭第2号土壌出土常滑焼大甕内部の布 (PLD-39619) は、1414-1448 cal AD(95.4%)で、15世紀前半から15世紀中頃の曆年代を示した。

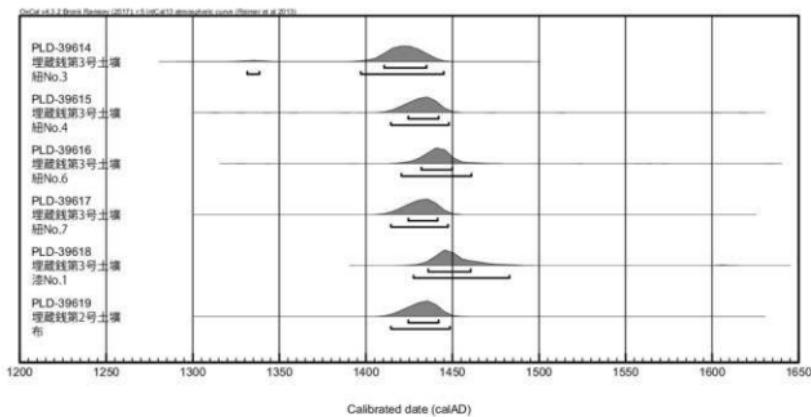
曆年較正結果のマルチプロット図を第172図に示す。第3号埋蔵銭および第2号埋蔵銭の常滑焼大甕は、いずれも15世紀前半とみられているが、年代測定の結果はすべて15世紀前半を含む結果であり、常滑焼大甕の予想年代と整合的であった。また、埋蔵銭第3号土壌の常滑焼大甕に貼られた漆による補強は、大甕が土壌に埋設されるよりも前に実施されたと考えられる。漆と繙紐の年代測定結果から、大甕の埋設と納められている埋蔵銭の時間差は、それほど大きくないといえよう。



第172図 曆年較正結果 (1)



第171図 历年較正結果（2）



第172図 マルチプロット図

VI 出土遺物の3次元記録

(1) 概要

第3号埋蔵銭から出土した埋蔵銭と石蓋、および第1号埋蔵銭から出土した大甕の記録にあたって、3次元モデルを作成した。

今回作成した3次元モデルは、SfM/MVS (Structure from Motion/Multi View Stereo) と呼ばれる手法によるものである。SfM/MVSとは、写真測量の一種で、対象物を撮影した写真から、3次元モデルを作成する手法である（内山他2014）。近年、レーザースキャナーを使用する3次元レーザー計測とともに、文化財の記録への利用も進んでいる（金田2017）。

SfM/MVSの基本的な作業手順は、対象をデジタルカメラで撮影し、撮影した写真を3次元モデル作成ソフトで処理し、3次元モデルから様々な2次元図を作成するといった流れである。撮影には手順や条件がいくらかあるものの、使用するデジタルカメラは、一眼レフカメラやコンパクトデジタルカメラ、スマートフォン、アクションカメラ等、様々な種類のカメラを利用することができる。ただし、一つの対象に、複数のカメラを用いることは望ましくない。

次に、本作業で使用した機材について説明する。

まず、対象の撮影にあたり、カメラはデジタル一眼レフカメラのNikon社D5600、レンズは望遠のAF-P DX NIKKOR18-55mm F3.5-5.6G VRを使用した。このカメラに、LEDライト(UTEBIT PT-30B PRO)を取り付けた。

次に、使用したPCの性能は、ノートパソコン(mouse computer G-TUNEシリーズ)で、OSはWindows10 Pro (64bit)、CPUはIntel Corei7-7700H (2.80GHz)、メモリは32GB、グラフィックボードはNVIDIA GeForce GTX 1070である。

撮影した写真的RAW現像には、Nikon社Capture NX-D Ver. 1.5.3を使用した。画像の処理（3次

元モデル化）には、Agisoft社「Metashape Professional (Ver. 1.5.2)」を使用した。

Metashapeで作成した3次元モデルの編集には、株式会社CUBIC「遺物くん」に加えて、フリーソフトウェア (GNU GPL) のCloudCompare (Ver. 2.10.2, Zephyrus, Win64bit)、QGIS (Ver. 2.18.27, Win64bit) を使用した。

これらを用いて作成した図版の製図には、Adobe社IllustratorCS6を使用した。

対象物と作成した3次元モデルの概要

以下に、各3次元モデルの概要を説明した後、実際に行った写真撮影の方法と3次元モデルの処理方法を解説した上で、各成果を示す。

① 埋蔵銭

埋蔵銭は、整理作業を開始した段階では、崩落防止のため、胴部中央から底部にかけて保護材で養生されていた。そのため、3次元モデルは整理作業に応じて複数の段階に分けて作成した。結果として作成した3次元モデルは、①作業開始前、②銭貨取り上げ1回目、③銭貨取り上げ2回目、④銭貨取り上げ3回目、⑤銭貨取り上げ4回目、⑥外面底部底面、⑦外形全体、⑧外形全体（実測用）の8種類である。

そのうち、①～④にかけては、口縁部から内部の銭貨の範囲を対象に行なった（第173図）。第173図⑤は、埋蔵銭を実測台に移動する際に、埋蔵銭を吊り上げた状況下で、外面底部の状況を撮影して作成したモデルである。第173図⑥は、実測台の上に設置された埋蔵銭を支える支持具を、細心の注意を払って部分的に着脱しつつ、外面全体の撮影を行い、作成した3次元モデルである。

② 石蓋

石蓋は、形状が円盤形であることから、はじめに平坦面に設置し、表面と裏面それぞれの撮影を行ない、個別に3次元モデルを作成した（第174図）。

次に、両面を合わせたモデルを作成するために、石蓋を立てた状態で、合計2回の撮影を行った（第174図）。これについては、それぞれのモデルを作成した上で、Metashape上でモデルを合成し、③石蓋全体のモデルを作成した。石蓋については合計3種類のモデルを作成した。

③ 第1号埋蔵銭出土斐

斐は、出土した破片類を接合し、器形を復元した状態で撮影を行った。この斐は、内面も撮影することができた。そのため、内外面の撮影を行い、外面底部を除いた全体の3次元モデルについて①外形全体、②実測用の2種類を作成した（第175図）。

（2）写真撮影の方法

SfM/MVSで作成する3次元モデルは、対象資料の状態、および撮影写真的品質が、成果に如実に反映されることから、はじめに対象物の清掃を行う。

その次に写真撮影を行う。

3次元モデルを作成するための写真撮影は、対象物に対して正対した姿勢で、なるべく光が満遍なく照射された条件下で行われることが望ましい。通常の写真撮影と異なり、特別な理由がない限り、ライティングで対象に陰影はつけない。なお、影で黒くなる部分や水やガラスで反射する部分は、処理できない。これらを踏まえ、今回は、デジタル一眼レフカメラのホットシューに前述のLEDライトを取り付け、カメラとともにライトも移動できるようにした。

カメラの設定は、絞り優先オート(F16)、ISO400（手持ち撮影時はISO3200）、レンズは35mm固定である。撮影画像はRAW+JPEGで記録し、RAWデータを現像ソフトで色調補正し、tiff8bitに変換した上で、3次元処理を利用した。色調補正是、撮影時に写したグレーカードから行った。

なお、埋蔵銭の銭貨部分の接写、外形、斐外形の撮影では、深度合成を行った。

深度合成とは、同一構図でピントの異なる写真を複数枚（今回は3～4枚）撮影し、それらを合成することで、各部にピントの合った写真を作る手法である。今回はAdobe社Photoshopcs6を使用した。

例えば埋蔵銭の外形の撮影では口縁部手前、口縁部奥、胸部最大径の3か所にピントを合わせた。

この深度合成を行わなくとも、3次元モデルを作成することはできるが、今回の埋蔵銭では大量の銭貨をはじめ、ミリ単位の微細な記録を必要としたため、より良い成果を上げるために試みた。

撮影には一脚や三脚、リモコンを利用した。また、ローランダルの撮影では、キャスターで移動できる低い台を準備し、その上で撮影するなど工夫した。

撮影にあたり、対象物の3次元モデルに、任意座標と縮尺を設定するために、対象物周辺にマーカーを数カ所（3箇所以上）設定した（第173～175図）。設定したマーカーは、Metashapeから作成したものである。これらを最低3箇所が互いに見通すことができ、距離を計測できるように配置した。設定したマーカーは、3点間の距離をコンベックスで計測し、その計測値から任意座標を計算し、Metashape上における座標値として利用した（後述）。

写真の構図は、対象物と極力正対し、一定の距離を保ちつつ、隣り合う写真同士が50%前後重複するように、撮影位置と間隔を決定した。撮影した写真の枚数は、対象物によって異なるが、おむね150枚～350枚である。

（3）3次元処理の方法

次に、Metashapeによる画像処理とその後の作業の工程は、大きく①～⑯に分かれる。第64表に作成した各3次元モデルの作業内容を示した。

各作業の内容は以下の通りである。そのうち、①～⑯は、Metashapeにおける作業である。

① 品質の概算

3次元モデルに使用する予定の撮影した写真的品質を計算する。概算値は0.5以上が良好な画像とされ、0.5未満（特に0.3以下）は、画像のブレや色調等に問題があるため、使用に適していないとされる。今回の3次元モデルの作成では、0.5以上を基本としつつも、処理に加えざるを得ない画像については、0.5未満の写真も採用した（採用枚数は第66表の通り）。

② マスク処理

撮影した写真には、対象物の周辺の建物なども写り込んでいるため、3次元モデルに必要ない部分に関しては、マスク処理を行って対象外とし、処理の高速・効率化と、3次元モデルの精細化を図った。マスク処理は、写真的アラインメント・高密度クラウドの構築・メッシュ構築を低品質で行い、ノイズや不要部分を除去した上で行った。

③ 写真的アラインメント

写真的アラインメントは、撮影写真的位置関係を計算し、その後の処理の基礎となるタイポイント（写真間の重複部分）を生成する項目である。

品質は、最低・低・中・高・最高の5段階を選ぶことができる。今回は最高を基本に、一部の処理には高も採用した。アラインメントの結果が良好であれば、次の工程に進んだ。

④ カメラの最適化

カメラの最適化は、アラインメントした画像のパラメータや点群座標を最適化するものである。項目は特に変更せず、既存の項目で行った。

⑤～⑦ 不要部分の削除・カメラの最適化

アラインメントした結果について、⑤不要部分を削除し、⑥領域を決定した後、改めて⑦カメラの最適化を行った。カメラの最適化は、④の段階から点群を削除したため、実施した。

⑧・⑨ マーカーの検出と位置修正

配置したマーカーは、⑧自動検出機能で検出し、各マーカーの位置と名称を確認の上、修正する必

要がある場合には、⑨修正作業を行った。

⑩～⑫ マーカーの座標計算と入力、スケールバーの作成

今回の対象物の場合、作成した3次元モデルに縮尺を与える、かつ、底部（あるいは口縁部）を水平面として設定する必要がある。この作業には、撮影時にマーカーを設置し、マーカー間の距離を計測しておくか、金尺など縮尺の基準となる道具と一緒に写すといった手法がある。

今回のように、マーカーを利用する場合、マーカーに任意座標を与えることとなる。マーカーに座標を与えるためには、撮影時に計測した3点間のマーカー（3点間のため、三角形となる）の距離を、三角関数を用いて各マーカーの座標を求める方法がある。今回は、Agisoft社から提供されていた座標計算ファイルを利用し、⑩任意座標の計算と⑪座標値の入力を行った（2019年現在、このファイルは公開されていないようである）。あわせて、入力した任意座標の数値の精度を確かめる意味も含め、⑫「スケールバーの作成」機能によってマーカー間の距離を手入力し、理論値との誤差を求めた。

以上の数値の入力作業を終えて、データを「更新」することで、理論値と実際に作成した3次元モデルとの誤差が計算される。今回は、誤差が1mm以下の場合、その後の作業工程に進んだ。いずれの3次元モデルも、誤差1mm以下の精度を得られた。

⑬ カメラの最適化

座標を入力したため、ここで再度、⑬カメラの最適化を行った。最適化を行うことで、誤差が小さくなる結果も得られた。

⑭ タイポイントの削減

⑯以降の作業に入る前に、データが重くなっている場合、タイポイントの削減を行った。

⑮ 高密度クラウドの構築

高密度クラウドは、深度情報をもつ点群を指す。

この作業では、作成する点群の品質を最低・低・中・高・最高の5段階を選ぶことができる。今回は最高か高を選択した。深度マップの設定は弱とした。

⑯ メッシュの構築

メッシュの構築では、写真のピクセル情報から、表面の3次元位置を計算し、ポリゴン等のメッシュを作成する。ここでは深度マップとポリゴンの品質を低・中・高・最高の4段階を選ぶことができる。今回はどちらも高を選択した（「最高」はPCの性能上、実施できなかった）。

⑰ テクスチャの構築

テクスチャの構築は、作成した3次元モデルの表面に、写真から生成したタイルを貼り付けることで、色情報を付加する作業である。今回は初期設定で行った。

ここまでが、Metashape上で行った作業である。これらの作業によって、撮影した写真から、点群やポリゴン、色情報を有した3次元モデルが作成される。

⑱ 3次元モデル作成後の作業

3次元モデルが完成した後の作業は、実測のための下図（外形線・断面線・調整等をした正射投影図）の作成、遺構図版掲載用の外形線の作成、図版掲載用の正射投影図の作成に大きく分けられる。

これに加えて、石蓋については、表面に残された加工痕を表現するために、標高段彩図や傾斜区分図を作成した（後述）。

下図の作成は、株式会社CUBIC「遺物くん」やCloudCompareを利用した。

図版掲載用の正射投影図の作成には、「遺物くん」とともに、QGISやCloudCompareを利用した。

標高段彩図や傾斜区分図は、Metashape上でDEM（Digital Elevation Model）を出力し、このデータをQGIS上で編集して作成した。

以上が3次元モデルの作成に関する、現地作業

から処理までの工程である。

（4）成果

① 埋蔵銭

埋蔵銭の3次元モデルからは、まず銭貨を取り上げる前の状態から、合計4回の取り上げに関する3次元モデルを作成した。それぞれ俯瞰方向の正射投影図（オルソ図）を作成し、同一縮尺で示すことで、銭貨の位置関係を視覚化した。本図とともに、銭貨の取り上げに関する実測図も作成した（第83図他実測図の掲載図版）。

次に甕の外形については、口縁部から底部付近までの3次元モデルと、底部の3次元モデルを別々に作成し、両者を合成した。

合成した3次元モデルは、両者でやや色調が異なり、かつ底部周辺のデータが少なく、欠落箇所がみられた。これは底部周辺の撮影が、甕を吊り上げた状況下で、時間と作業環境上の制約から、撮影写真に不足箇所があり、十分にアライメントしなかったためと考えられる。

しかし、器面に貼付したマーカーをもとに、両者を合成することによって、全体の3次元モデルを作成することができたことから、以下の図を作成することができた。まず、甕全体の俯瞰・正面・背面・左右側面・底面の展開図を作成した（図版26-1）。そして、石蓋の3次元モデルと検出状況時の位置関係で組み合わせた。

本図によって、埋蔵銭単体だけでなく、石蓋との位置関係、および両者の外観の状態を視覚的に確認することができる。特に底面の見上げ図は、実際には観察することができない視点であり、胴部最大径に対し、底部がずれている点や、漆の継ぎ目の全周を確認することができる。

また、3次元モデルを口縁部最大径で輪切りにした図では、甕と石蓋の外形、および内部の銭貨の断面を見通すことができる。

② 石蓋

石蓋の3次元モデルからは、外形をはじめ、表面に残された加工痕や剥離痕を確認することができる(図版26-2)。また、全体の形状をモデル化したことによって、任意の位置で断面図を作成することも可能となり、加工痕によって複雑な凹凸のある起伏について、より正確に図化することができた(第79図実測図の掲載番号)。

次に、石蓋に残された加工痕について、図化するだけではなく、加工痕と石材の厚みの関係、加工の方法を追究するために、3次元モデルから2種類の図面を作成した。一つ目は標高段彩図、二つ目は傾斜区分図である。どちらの図面もQGISを利用して作成した。

標高段彩図(第80図)は、地形図などで標高差に色付けする方法を応用したものである。本図の「標高」は、写真撮影時のマーカー設置面(台の上)を0mとして作成した。石蓋自体は、台上に支持具を設置し、その上に置くことで、やや浮かせた状態で撮影したため、表面の低い箇所(青色)が0.06mとなり、高い箇所(赤色)が0.08mとなっている。およそ2cmの起伏を5mm間隔で5色に分けて表示した。

本図では、石蓋の平面的な起伏を、視覚的に捉えることによって、加工が石材の厚い箇所に施された可能性が指摘できる(裏面にその傾向が強い)。

傾斜区分図(第80図)は、地形図などで山地や谷の傾斜度合いを色付けする方法を応用したものである。本図は、グラデーションカラーを赤色に設定し、傾斜度合いの強い箇所が、より濃い赤色になっている。凡例の数値は、マーカー設置面に対する傾斜角度を示す。ここでは2度間隔で13色に分けて表示した。

本図では、石蓋の各面に残る微細な傾斜を捉えることができる。特に、加工痕に注目すると、加工が一定の間隔と強さで施されたことを、より客観的に示すことができた。

このように、3次元モデルは単純に形態を3次

元的に記録するだけでなく、そこから様々なデータや視点に注目した図面を作成することができる。

③ 第1号埋蔵銭出土壺

第1号埋蔵銭出土壺の3次元モデルからは、埋蔵銭と同様に、壺の外形、および断面形を確認することができる(第175図)。また、外側調整と内側調整については、モデルの一部を削除することによって、同一視点から、両者が検討できる図版を作成し、実測図の素図とした(第175図)。なお、本例は、復元した箇所が多く、一視点のみでは各部の図化ができなかったため、複数視点(箇所)の図版を作成し、それらを合成することで、壺全体の特徴を図に反映した(第72図実測図の掲載図)。

上記のほか、内面の胴部と底部に残された布目圧痕については、それぞれ正射投影図を作成し、それを実測図に添付した。

本例の3次元モデルは、実測図の素図として利用することに重点を置いた。本例のような手実測の困難な大型品の作図において、3次元モデルは有効といえよう。

まとめ

今回は、埋蔵銭と石蓋、および大甕の3次元モデルを作成した。埋蔵銭という大甕に大量の銭貨が納められている状態は、大型で、かつ重量もあることから、実測などの通常の記録作業が難しい。その点、今回の3次元モデル化は、一定のルールに則った写真撮影と、データの処理によって、外形線や正射投影図といったこれまでと同様の図面や、標高段彩図、傾斜区分図など、新しい種類の図面も作成することができたことから、通常の記録作業を補完する以上の成果を得ることができたといえよう。

第66表 3次元モデル作成にかかる作業工程とモデルの品質

3次元モデルの種類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
対象資料										
第3号埋蔵鏡(焼と錢貨)										
名称	発掘調査 検出状況	取り上げ前			取り上げ 1回目後	取り上げ 2回目後	取り上げ 3回目後		取り上げ 4回目後	
部位	口縁部 (錢貨周 辺)	口縁部 (錢貨周 辺)	甕全体	甕全体(底 部付近一 部追加)	口縁部 (錢貨周 辺)	口縁部 (錢貨周 辺)	甕全体	口縁部 (錢貨周 辺)	口縁部 (錢貨周 辺)	
撮影日	2018.1.31	2019.6.26 2019.6.27	2019.6.26 2019.6.27	2019.6.26 2019.7.11	2019.7.25	2019.8.21	2019.9.6	2019.9.6	2019.9.13	
使用ソフト	Agisoft社Metashape Professional (Version1.5.2)									
写真ファイル形式	JPEG	RAW → TIFF8bit 現像								
写真的深度合成	—	3~4枚	3~4枚	3~4枚	3~4枚	3~4枚	3~4枚	3~4枚	3~4枚	
写真枚数 (アライン枚数)	20/20	285/287	218/218	264/267	398/398	296/286	426/426	74/74	331/331	
マーカー上の誤差 (mm)	—	0.334	0.485	0.512	1.055	2.177	0.673	0.656	0.454	
作業工程	① 品質の概算	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	
	② マスク処理 (低処理・マスク追加)	—	—	—	—	—	—	—	—	
	③ 写真的アライメント	最高	最高	最高	最高	最高	最高	最高	最高	
	④ カメラの最適化	○	○	○	○	○	○	○	○	
	⑤ 不要部分の削除	○	○	○	○	○	○	○	○	
	⑥ 領域の決定	○	○	○	○	○	○	○	○	
	⑦ カメラの最適化	○	○	○	○	○	○	○	○	
	⑧ マーカー検出	—	4	4	4	4	4	4	4	
	⑨ マーカーの位置修正	—	○	○	○	○	○	○	○	
	⑩ マーカーの座標計算	—	○	○	○	○	○	○	○	
	⑪ 座標の入力と更新	—	○	○	○	○	○	○	○	
	⑫ スケールバーの作成	—	6	6	6	6	6	6	6	
	⑬ カメラの最適化	—	○	○	○	○	○	○	○	
	⑭ タイポイントの削減	—	—	—	—	—	—	—	—	
	⑮ 高密度クラウドの構築	最高	高	高	高	高	高	高	高	
	※深度マップ設定	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	
	⑯ メッシュの構築 (ポリゴンの品質)	高	高	高	高	高	高	最高	高	
	※深度マップ品質	高	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	
	※ソースデータ	深度マッ プ	高密度 クラウド	高密度 クラウド	高密度 クラウド	深度マッ プ	深度マッ プ	深度マッ プ	深度マッ プ	
	⑰ テクスチャの作成	汎用	汎用	汎用	汎用	汎用	汎用	汎用	汎用	
	⑱ -1 オルゾ画像の 作成・編集	○	○	○	—	○	○	—	○	
	⑱ -2 DEMの作成・編集	—	—	—	—	—	—	—	—	
	⑱ -3 3Dデータの 書き出し・編集	ply,obj	ply,obj	ply,obj	ply,obj	ply,obj	ply,obj	ply,obj	ply,obj	

10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
第3号埋蔵鉄(甕と鉢)袋				石蓋					第1号埋蔵鉄	
実測台移動時	外形全体	実測用	外形全体	石蓋表面	石蓋裏面	石蓋両面		甕	実測用	
底部外面	甕全体 (底部底面以外)	甕外面	甕全体	表面	裏面	両面半分 (1カット目)	両面半分 (2カット目)	両面合成	甕内外面全体	甕内外面全体
2019.9.18	2019.11.27 2019.12.5	2019.12.19	2019.9.18 2019.11.27 2019.12.5	2019.12.4	2019.12.2	2019.12.5	2019.12.5	2019.12.5	2019.11.27 2019.11.28	2019.12.18
Agisoft社 Metashape Professional (Version1.5.2)										
RAW → TIFF8bit 現像										
—	3~4枚	—	3~4枚	—	—	—	—	—	3~4枚	—
78/143	220/226	172/172	298/369	244/244	159/215	234/235	252/357 (一部無効化)	486/487	343/343	375/375
—	0.117	0.179	底部 (2019.9.18 撮影) モデルと 甕全体 (2019.11.27/12.5 撮影) モデル の合成により作成	0.207	0.204	0.284	0.241	「両面 (1 カット 目)」モ デルと「両 面 (2カッ ト目)」モ デルの合 成により 作成	0.079	0.279
0.5	0.4	0.5		0.3	0.4	0.34	0.6		0.34	0.31
—	○	○		—	—	○	○		—	○
最高	最高	最高		最高	高	最高	最高		最高	最高
○	○	○		○	○	○	○		○	○
○	○	○		○	○	○	○		○	○
○	○	○		○	○	○	○		○	○
○	○	○		○	○	○	○		○	○
16	11	10		12	12	9か所	9		4	4
○	○	○		○	○	○	○		○	○
○	○	○		○	○	○	○		○	○
—	○	○		○	○	○	○		○	○
—	3	3		3	3	3	3		3	3
○	○	○		○	○	○	○		○	○
—	—	—		—	—	—	4000		—	—
最高	高	高		高	最高	高	高		高	高
弱	弱	弱		弱	弱	弱	弱		弱	弱
最高	高	高		高	高	高	高		高	高
弱	弱	弱		弱	弱	弱	弱		弱	弱
高密度クラウド	深度マップ	深度マップ		深度マップ	深度マップ	深度マップ	深度マップ		深度マップ	深度マップ
汎用	汎用	汎用	汎用	汎用	汎用	—	—	汎用	汎用	汎用
—	○	○	○	○	○	—	—	○	○	○
—	—	—	—	○	○	—	—	—	—	—
ply,obj	ply,obj	ply,obj	ply,obj	ply,obj	ply,obj	—	—	ply,obj	ply,obj	ply,obj



① 鉄賓取り上げ前～取り上げ4回目の撮影環境

② 壺移動における底部の撮影環境

③ 実測台設置後の撮影環境
(支持具を脱着しつつ撮影)



④ ①の撮影写真で作成した壺の3次元モデル



⑤ ②の写真で作成した底部の3次元モデル（縮尺任意）



⑥ ③の写真で作成した
壺胴部の3次元モデル



⑦ 別途作成した
石蓋の3次元モデル

⑧ 完成した石蓋と埋蔵鉄3次元モデルの
合成図（正面）

⑨ 完成した石蓋と埋蔵鉄3次元モデルの
合成図（頸部最大径付近で輪切りにして
斜めに表示）



第173図 第3号埋蔵鉄の3次元モデルの作成工程



① 石蓋表面の撮影



② 石蓋裏面の撮影



③ 石蓋両面の撮影 1カット目



④ 石蓋両面の撮影 2カット目
(1カット目に対して石蓋を反転)



⑤ 石蓋両面の撮影の様子



⑥ ①の撮影写真から作成した表面の3次元モデル



⑦ ②の撮影写真から作成した裏面の3次元モデル



⑧ ③・④の撮影写真から作成した両面の3次元モデル

0 20cm
10cm

第174図 第3号埋蔵銭石蓋3次元モデルの作成工程



① 撮影環境



④ ①の撮影写真から作成した内面底部
の3次元モデル（俯瞰）



② ①の撮影写真から作成した外面の3次元モデル



⑤ 外面モデルと内面モデルの
組み合わせ（実測図作成用）



③ ①から作成した内面の3次元モデル

0 ②～④ 20cm 0 ⑤ 1m

第175図 第1号埋蔵銅の3次元モデルの作成工程

VII 調査のまとめ

1 縄文時代

遺跡は、元荒川左岸の黒浜・白岡支台に立地している。黒浜貝塚群の範囲内にあり、西側には、国指定史跡である黒浜貝塚から宿下遺跡、宿下遺跡、天神前遺跡が連なっている。

縄文時代前期の遺構は、前期前半の関山式期の住居跡1軒が検出された。同時期の住居跡は、西側に隣接する宿下遺跡から14軒が検出され、集落を形成している。

遺跡周辺は現状ではわかりにくいが、小支谷があり込み複雑に入り組んだ地形であり、宿下遺跡と谷をはさみ、別な小支台上に集落が営まれていたと考えられる。住居跡内からは、少量だが貝の廃棄が認められ、ハイガイ、サルボウが主体を占めていた。住居跡を壊していた第1号溝跡からは、

アカニシ貝が検出されている。

縄文時代中期の遺構は、中期後半の加曾利E式期の住居跡5軒が検出された。加曾利E IIIからIV式の中期末葉の時期である。宿下遺跡からは、加曾利E III期の住居跡が1軒検出されている。調査区内からは、加曾利E III式以前の土器片の出土は少なく、菖蒲町の神ノ木2遺跡と同様、加曾利E III式期にピークを迎える集落跡で、後期初頭には集落が終わったと考えられる。

後期の遺構は検出されなかつたが、調査区内から後期後葉安行2式期の土器片が検出された。前期、中期の集落とともにその全体像は不明であるが、第3号溝跡から東側が全体に削平されており、東側に分布が広がっていた可能性もある。

2 中世

(1) 館跡について（第176、177図）

新井堀の内遺跡は、古くから周間に堀が巡らされていたと伝えられ、「堀の内」と呼ばれていたとされる。埼玉県教育委員会の中世城館跡調査においては、馬場堀の内館跡として報告されている（埼玉県教育委員会1988）。

しかし調査が行われたことはなく、今回の調査によって、その存在を確認することができた。

遺跡の範囲は、第4図に見られるように南北方向200m、東西方向125～150mの方形の範囲である。調査では、館跡に関連する遺構として幅約6m、深さ2mの平行する2条の堀跡や、掘立柱建物跡、井戸跡、地下式坑、埋蔵鉄が検出された。

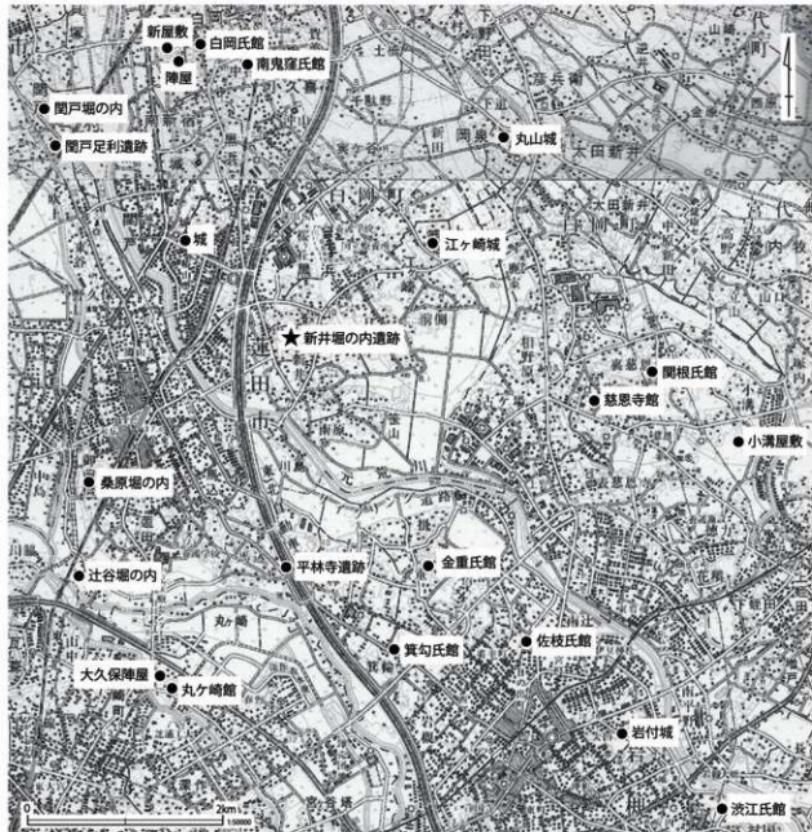
また、第1図で示したように、堀跡東側の遺構が密集している範囲は、全体に20～30cm程削平されており、整地されたと考えられる。このような例は千葉県内の城館跡でも見られており、中世の城館造成方法の一つであると考えられる。

第4図に見られる低地部分は遺跡の北半を方形状に取り囲み、その谷が天然の堀の役割を果たしていたと推測される。しかし、南側に明確な低地は見られていない。今回検出された2重の堀跡が、館の西側区画で、北と東側は谷で区画されたとすれば、平坦である南側には、区画する堀跡が検出される可能性がある。遺跡の南側に位置する黒浜耕地遺跡からは、堀跡が東西方向に検出されており、本遺跡と関連する可能性がある。

遺跡の北側には林地が残り、その中には土壘状の高まりや、溝状の凹みが部分的に見されることから、曲輪などが存在していた可能性がある。

周辺の中世に関連する遺構は、谷を挟んだ西側の宿下遺跡から堀跡など城館跡関連の遺構が検出され、当遺跡との関連が考えられる。

遺跡の周辺からは、城館跡が多く検出されている（第176図）。これは古くから、鎌倉街道中道が岩付から幸手、栗橋を通り古河へと北上して奥州



第176図 周辺の城館跡
(埼玉県教育委員会 1988より作成)

へ連なる交通の要衝に位置するためと考えられている(埼玉県教育委員会1988)。

また、古河公方と扇谷上杉氏の対立が起こると、本遺跡周辺もそれに関連する城館が築かれていく。遺跡から南東約5.2kmに位置する岩付城は、扇谷上杉氏が古河公方に対する主要な城の一つで、太田氏が築城したといわれている。太田氏は太田資長(道灌)が知られており、本遺跡周辺の江ヶ崎城や閑戸堀の内も岩付城の築城に関連する城館と

考えられている。太田資長が亡くなったあと、空白期間はあるものの、岩付城は岩付太田氏が入り周辺を統治している(第177図)。

調査区から検出された遺物の時期の中心は、15世紀代と16世紀後半の2つのピークがある。岩付城の築城が長禄元年(1457)とされることから、岩付城に関連した館の可能性がある。

館の主については、太田資正が永禄七年(1564年)に岩付城を太田氏資によって追われた後、館

の主である「野口多門」が当地に戻り帰農したと伝えられている。調査区から出土した遺物のピークのもう一つの時期が、16世紀後半である。「野口多門」が帰館した時期と重なっている。

この野口多門であるが、江戸後期に書かれた『岩槻巷談』にその名が記載されている。最初は吉野原合戦の事の項に、太田資高の足軽大将として記載がされ、その後は三楽斎（太田資正）の郎党として記され、卒去するまで仕えていたとされる。

（2）埋蔵銭について

常滑焼甕（第178図）

埋蔵銭では銭貨を入れる容器として、常滑焼甕が使用された。第178図1～6は多量の銭貨が入れられていた常滑焼甕を集成したものである。

1、2は本遺跡の第3号埋蔵銭、第1号埋蔵銭出土、3は鴻巣市舟塚出土、4、5は府中市武藏府中大量出土銭1・2出土、6は鎌倉市淨智寺下遺跡出土常滑焼甕である。銭貨の量は、3が発見届提出当時で約4万枚（栗原1987）、4が60,026枚、5が90,427枚、6が18万枚中ほどとされる。

甕の年代観は1～4が15世紀前半、5は4よりやや古い様相が見られ、6は14世紀前半と考えられかなり年代幅がある。しかし、甕は使用された痕跡があり、銭貨の容器として埋設された時期と甕の年代は必ずしも一致しないと考えられる。

出土した最も新しい銭貨は、1、2、6は永樂通寶（初鑄1408年）、3は咸淳元寶（初鑄1265年）、4、5は朝鮮通寶（初鑄1423年）である。3以外は、15世紀以降に容器に入れられたとわかる。3は甕の年代観から15世紀前半以降と考えられる。

2に関しては底部内面や胴部内面に残されていた布の圧痕が、15世紀前半から中頃の暦年代が測定されている。

いずれにしても多量の銭貨が埋設された時期は、15世紀以降と考えることができる。

緑泥片岩製石蓋（第179図）

第179図1～5は大甕に伴う緑泥片岩製石蓋を

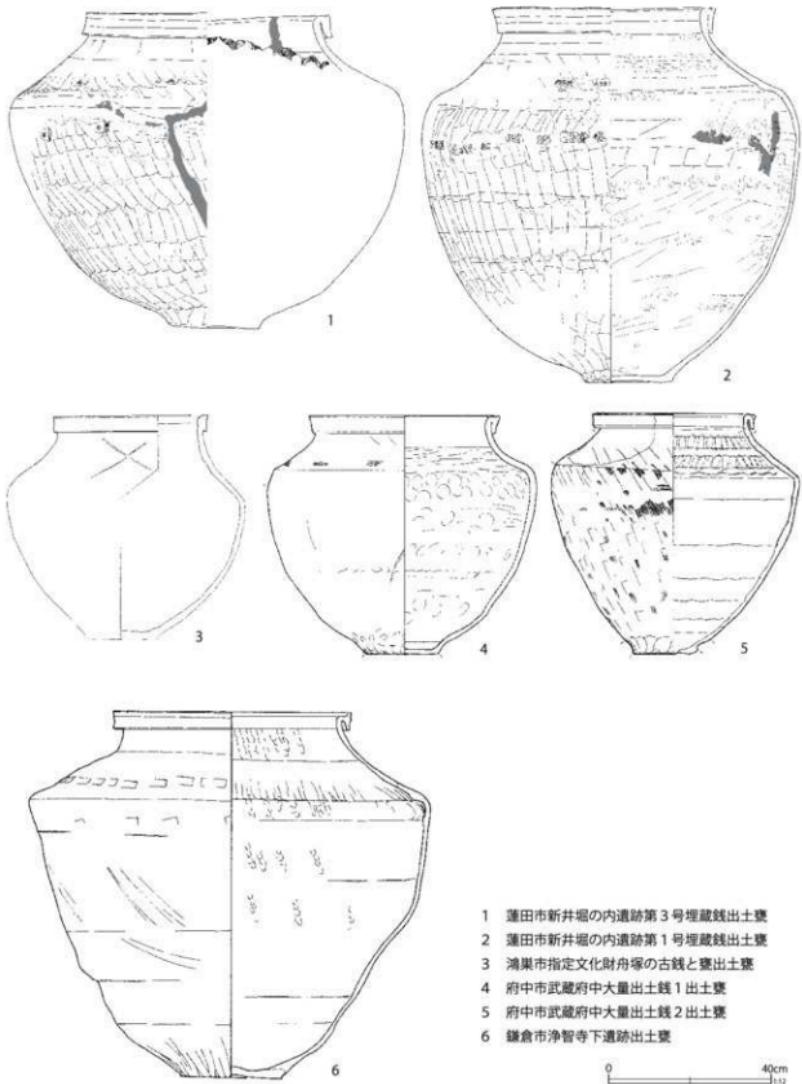


第177図 太田氏系略図
（「新編 埼玉県史 通史編」から引用）

集成したものである。1は第3号埋蔵銭出土、2は東松山市代正寺遺跡出土、3は久喜市佐間小草原遺跡出土、4、5は武藏府中大量出土銭1・2の石蓋である。また、第178図3は、現存しないが発見当時緑泥片岩製石で蓋がされていたという（栗原1987）。

2は代正寺遺跡から出土したものであるが、報告書に記載はされていない。直径約65cmであるが、現存部幅45cmで、2枚継に造られていたものである（栗原1995）。5の石蓋も二つに割れたものを重ねて使用しており、2も同様であったと考えられる。もう1枚の石蓋は発見されず、甕も検出されていないが、石蓋が出土したグリッド内の土壤からは、計27枚の渡来銭が出土しており、埋蔵銭が存在していた可能性がある。

石蓋の直径は、1が64.1～65.2cm、2が約65cm、3が推定57.2cm、4が47cm、5が57cmである。石

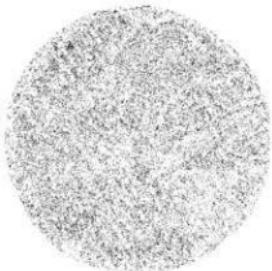


第178図 埋藏銭使用常滑焼壺

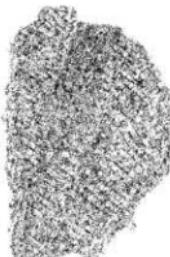
表



裏



表



裏



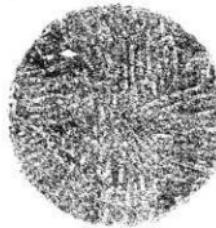
1

2

表



裏 裏



3

4

5



1 鎌田市新井塚の内遺跡第3号埋蔵銭出土石蓋

2 東松山市代正寺遺跡出土石蓋

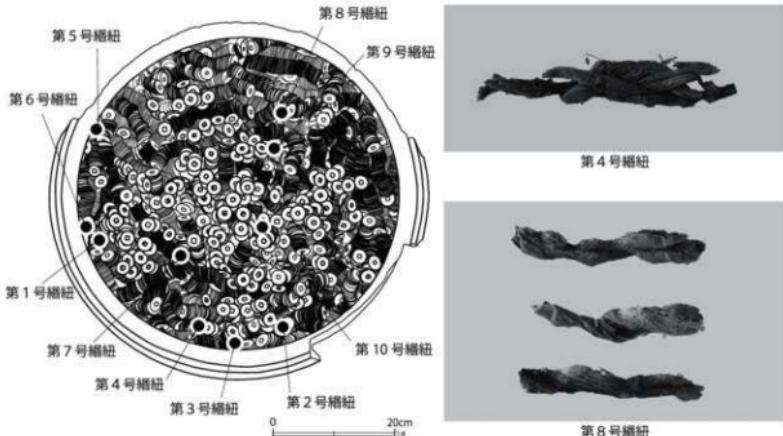
3 久喜市佐間小草原遺跡出土石蓋

4 府中市武藏府中大量出土銭1出土石蓋

5 府中市武藏府中大量出土銭2出土石蓋

0 40cm
10cm

第179図 緑泥片岩製石蓋



第180図 第3号埋蔵銭出土綱紐・綱紐分析採集位置

蓋は出土例が少なく、その都度甕の口径に合わせて個別に発注していたと考えられていた。

しかし、府中から出土した石蓋はどちらも甕の口径よりも大きく、5は割って重ねて小さくして使用していた。また、1の本遺跡の石蓋の直径と2の代正寺遺跡の石蓋の直径はほぼ同じで、3の佐間小草原遺跡出土石蓋と5の武藏府中大量出土銭の石蓋と直径がほぼ同じであった。

石蓋は甕の大きさに応じて規格の品があり、それを取り寄せていたとも考えられる。

綱紐（第180図・図版48-5）

綱紐は、分析のため表面に露出しているものをサンプルとして採取した。いずれも状態は悪く、ほとんどが破片や碎片となっていた。とりわけた綱錢に残されていた綱紐も、同様であった。

分析の結果、紐はイネ科植物とされており、綱紐は稻わらの芯部分を燃り合わせて作成されたと考えられる。

第180図は、分析のため取り上げた綱紐のうち燃りが残存していたものである。第4号綱紐は、燃り合わせた紐が3本残存しており、右燃りであ

る。第8号綱紐は紐がばらけた状態で、右燃りの状況が観察できる。結び目が残存している綱紐は取り上げることはできなかった。

第3号埋蔵銭出土銭貨（第67表）

第3号埋蔵銭は、木簡に260貫の記載があった。1縷は100文とされ、10縷で1貫すなわち1,000文とされることから、26万枚が入っている可能性が高い。当時は通常、1縷は97枚が纏られており、取り上げた第1、2号綱錢もそれぞれ97枚が纏られていた。それからすれば、実数は252,200枚と推定される。

第3号埋蔵銭からは、綱から分離している銭貨及び、第1～3号綱錢を取り上げた。

綱から分離していた銭貨は340枚を取り上げた。最も古い銭貨は開元通寶（初鑄年621・唐）で、最も新しい銭貨は永樂通寶（初鑄年1408・明）であった。最も多かった銭貨は元豐通寶（初鑄年1078・北宋）の43枚であった。北宋銭が3分の2を占めている。第1～3号綱錢についても、おおまかには同様の傾向を示していた。

第67表 第3号埋蔵錢出土銭貨一覧表

第3号埋蔵錢——三面

錢貨名	初鑄年・國	枚数
開元通寶	621 唐	27
乾元重寶	758 唐	4
唐國通寶	959 南唐	2
太平通寶	976 北宋	3
淳化元寶	990 北宋	1
景祐元寶	995 北宋	9
咸平元寶	998 北宋	6
景德元寶	1004 北宋	13
祥符元寶	1009 北宋	5
祥符通寶	1009 北宋	4
天禧通寶	1017 北宋	8
天聖元寶	1023 北宋	2
景祐元寶	1034 北宋	16
皇宋通寶	1038 北宋	15
嘉祐通寶	1056 北宋	1
治平元寶	1064 北宋	3
熙寧元寶	1068 北宋	8
元豐通寶	1078 北宋	9
元祐通寶	1086 北宋	13
紹聖元寶	1094 北宋	5
聖宋元宝	1101 北宋	2
政和通寶	1111 北宋	2
淳祐元寶	1241 南宋	1
洪武通寶	1368 明	3
永樂通寶	1408 明	10
景祐元寶		1
合計		340

第1号網錢

錢貨名	初鑄年・國	枚数
開元通寶	621 唐	4
乾元重寶	758 唐	1
太平通寶	976 北宋	1
至道元寶	995 北宋	3
咸平元寶	998 北宋	1
景德元寶	1004 北宋	2
祥符元寶	1009 北宋	5
祥符通寶	1009 北宋	1
天禧通寶	1017 北宋	2
天聖元寶	1023 北宋	1
景祐元寶	1034 北宋	2
皇宋通寶	1038 北宋	16
嘉祐通寶	1056 北宋	1
治平元寶	1064 北宋	3
熙寧元寶	1068 北宋	8
元豐通寶	1078 北宋	9
元祐通寶	1086 北宋	13
紹聖元寶	1094 北宋	5
聖宋元宝	1101 北宋	2
政和通寶	1111 北宋	2
淳祐元寶	1241 南宋	1
永樂通寶	1408 明	10
景祐元寶		1
合計		97

第2号網錢

錢貨名	初鑄年・國	枚数
開元通寶	621 唐	5
光天元寶	918 前蜀	1
淳化元寶	990 北宋	1
景德元寶	995 北宋	2
景祐元寶	1004 北宋	4
祥符通寶	1009 北宋	3
祥符元寶	1009 北宋	1
天禧通寶	1017 北宋	2
天聖元寶	1023 北宋	4
明道元寶	1032 北宋	1
景祐元寶	1034 北宋	3
皇宋通寶	1038 北宋	10
至和通寶	1054 北宋	1
聖和元寶	1054 北宋	1
嘉祐通寶	1056 北宋	3
治平元寶	1064 北宋	1
熙寧元寶	1068 北宋	11
元豐通寶	1078 北宋	10
元祐通寶	1086 北宋	1
紹聖元寶	1094 北宋	5
聖宋元宝	1101 北宋	2
政和通寶	1111 北宋	3
淳祐元寶	1241 南宋	1
洪武通寶	1368 明	4
永樂通寶	1408 明	7
□元寶		1
□□元寶		1
□□□元寶		1
合計		97

第3号網錢

錢貨名	初鑄年・國	枚数
開元通寶	621 唐	1
天禧通寶	1017 北宋	1
聖和元寶	1054 北宋	1
嘉祐通寶	1056 北宋	1
元豐通寶	1078 北宋	1
元祐通寶	1086 北宋	2
紹聖元寶	1094 北宋	1
政和通寶	1111 北宋	1
永樂通寶	1408 明	1
合計		10

埋蔵錢の性格とその後

埋蔵錢は、工事の途中などで発見されることが多く、発掘調査で出土する例はほとんどない。今回調査では、埋蔵錢の埋設位置や、埋設状態などを記録保存でき、確実に跡跡に属することが証明できた貴重な出土例となった。

第3号埋蔵錢は、当時の地面から2mを掘り下げ、そこに大甕を設置し短期間で錢貨を入れ石蓋で閉じ埋め戻している。掘り込みが地山と見分けがつかなくなるよう、地山の土で硬く絞めて埋め

ていた。武藏府中大量出土錢1、2も、容器である甕の周囲は地山と同じ土で埋められていた。容易に見つけられないよう隠す意図が見られ、埋蔵錢はすぐに取り出すのではなく、有事に備えられた備蓄錢の性格が強いと推測される。遺跡では、第1～4号埋蔵錢が掘立柱建物群の西側に位置していた。他から隠すという性格上、建物内の床下深くに埋められていた可能性も考えられる。そのため埋設されたタイミングは、調査区が削平され建物が築造されたと同時期である可能性が高い。

また、第3号埋蔵鉄には年月日と銭貨量を示した木簡が口縁に懸けられていた。示された銭貨量や、第4号埋蔵鉄まであったことから、ここに埋蔵鉄を埋めた人物は、相応の地位があった可能性が高い。

第1～4号埋蔵鉄は、第1号埋蔵鉄出土甕内の布片の年代や、第3号埋蔵鉄上面の縫紐の年代、また出土銭貨から15世紀中頃から後半の間に短期間で埋められたと考えられる。これは鈴木公雄の第4または5期にあたり、この時期は大量の埋蔵鉄が一括して埋められた時期に相当している（鈴木2002年）。

それは岩付城の築城時期と一致し、埋蔵鉄はこの地を治めていた太田資長（道灌）との関連が深いと推測される。太田資長は主君である扇谷上杉氏に暗殺され、岩付城は扇谷上杉家臣の渋江氏の拠点となり、その後太田資頼が奪い返すなど目ま

ぐるしく情勢は変化している。岩付城を守る太田氏も北条氏、扇谷上杉氏など帰属も複雑に変化していった。その中で本遺跡の館の主がどう主君に従っていったか、埋蔵鉄がどのように使われたかは不明である。15世紀代にこのような一括した多量の埋蔵鉄が多いのは、岩付城周辺に見られるように応仁の乱以降、国の根幹が乱れていく過程で、一つの自衛手段として行われたと言えるのではないだろうか。

第2、3号埋蔵鉄は徳川の時代になっても埋設されたままで、第2号埋蔵鉄は18世紀代に掘り出されたようである。しかし、17世紀後半には寛永通寶以外の銅錢の使用が禁止されており、その価値はほとんどなくなっていたと考えられる。そのため、第3号埋蔵鉄が掘り出されることなく、今日まで残っていたのではないかと推測される。

引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2012 『愛知県史 別編 窯業3』中世・近世常滑系
福村垣元編集 1970 「岩槻巷談」『新訂増補 埼玉叢書』第二卷
内田庄一郎・井上 公・鈴木比奈子 2014 「SMを用いた三次元モデルの生成と災害調査への活用可能性に関する研究」『防災科学技術研究所研究報告』81 pp.37-60 防災科学技術研究所
鎌倉市教育委員会 1983 『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』
金田明大 2017 「遺跡・遺構の三次元的研究」『季刊考古学』第140号 pp.46-49 雄山閣
栗橋町教育委員会 2008 『栗橋町史』第三巻 資料編一 原始・古代・中世
栗原文蔵 1987 「川里・船塚の備蓄古錢」『研究紀要 第9号』埼玉県立歴史資料館
栗原文蔵 1995 「壺の石蓋」『研究紀要 第17号』埼玉県立歴史資料館
小金井市誌編纂委員会1970 『小金井市誌』II歴史編
埼玉県教育委員会 1988 『埼玉の中世城館跡』
埼玉県教育委員会 1988 『新編埼玉県史』通史編2
白石祐司・村山卓2011「平塚市博物館所蔵の常滑焼大甕－甕として用いられた中世の常滑焼」『品川歴史館紀要』第26号
鈴木公雄 2002 「歴史文化ライブラリー 140」『銭の考古学』吉川弘文館
谷口榮1991「品川歴史館所蔵の常滑大甕」『品川歴史館紀要』第6号
蓮田市教育委員会 2005 『宿浦遺跡、宿上遺跡、天神前遺跡、宿下遺跡』－黒浜土地区画整理事業に伴う発掘調査2－
蓮田市教育委員会 1998 『蓮田市史』考古資料編I
蓮田市教育委員会 1999 『蓮田市史』考古資料編II 古代・中世資料編
蓮田市教育委員会 2002 『蓮田市史』通史編I
府中市遺跡調査会 2001 『武藏府中 大量出土銭の調査概法－東京都府中市宮西町1-2出土－』府中市教育委員会
村山卓2019「板碑の成形技法－武藏型板碑の背面加工痕－」『中世石工の考古学』高志書院
横浜市歴史博物館 2019 『横浜・上原家文書にみる中世“道灌以降”的戦国争乱】